

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科  
博士学位論文

ホームレスの高齢者における再発予防に資するソーシャルキャピタル  
-日本の山谷及び釜ヶ崎の事例からの分析 -

**Social Capital Contributes to preventing returns to homelessness among the Older People**  
**-Case Study of Sanya and Kamagasaki in Japan-**

4013S3055 岡本菜穂子

## 目 次

第1章	序論	1
	はじめに	1
第1節	背景：調査地域の歴史と特徴	3
第2節	研究の目的と研究上の問いかけ	11
第3節	本書の構成	12
第2章	文献レビュー	13
1.	なぜホームレス再発を予防することが重要なのか	13
2.	ホームレスの人間関係とコミュニティに関する視点	14
3.	ホームレスの特徴における欧米と日本の違い	15
4.	ホームレスの発生要因	18
5.	ホームレスの再発要因	22
6.	ホームレスへの対策	23
7.	ホームレス予防の理論的枠組み	26
8.	まとめ	27
9.	用語の定義	30
第3章	研究手法	41
第1節	研究手法	41
第2節	データ資料	41
第3節	データ分析	44
第4章	ホームレス再発予防の要素	47
第1節	ケースの概要	47
第2節	人間関係	49
第3節	コミュニティ	54
第4節	小考	57
第5節	まとめ	59
第5章	安定した住居生活を維持する要素—人間関係	61
第1節	ホームレス高齢者の生活実態調査	59
第2節	安定した住居へ移行した時期別の高齢者の生活	85
第3節	質的調査によるホームレス高齢者の人間関係	91
第4節	小考	98

第6章	安定した住居生活を維持する要素—コミュニティ	101
第1節	ホームレス高齢者の生活状況とコミュニティ	101
第2節	安定した住居へ移行した時期別の高齢者のコミュニティ	110
第3節	質的調査によるホームレス高齢者のコミュニティ	113
第4節	小考	121
第7章	総括	124
おわりに	研究への貢献と今後の課題	133
引用文献		136
参考文献		145
巻末資料		148

## 第1章 序論

### はじめに

世界的な景気後退の混乱は、常に社会の低レベルの人々に最も深刻な影響を与えている。新自由主義経済政策そのものが、以前から貧富の差を拡大させてきたが、2008年の世界的な経済・金融危機の結果、さらに貧しい人々が生まれた。市場経済のグローバル化は、かつてないスピードと規模で競争に勝ち負けする組織を再生する構造を生み出すと同時に、その過程で多くのホームレスを生み出す構造を内部化している(Wright, 2000)。もちろん、ホームレスの存在は21世紀以前から重要な社会問題として認識されてきたが、その人口規模、拡大速度、家族やコミュニティの弱体化の程度などを考慮すると、これまでとは異なった問題解決の方策が求められている(戸田, 2010)。

多くの国において、ホームレス対策が遂行されながらもホームレスからの脱却の失敗や再びホームレスになることの発生によりホームレスは一向になくならない。世界人口で推定1億人を超えるホームレスが存在しており、住居として不適切な家に住む人は10億人を超すと報告されている(UN-Habitat, 2005)。しかしながら、ホームレスは1箇所定住しているだけでなく、日々移動をしているため数字ではホームレスの数を正確に集計することが難しい(ギル, 2005; Crane, 1996)。

近年、50歳以上の高年齢層のホームレス人口は増大していること(Cohen, 1999; Hecht & Coyle, 2001)、その中で、50歳以上になり初めてホームレスになる者がいること(Brown, Goodman, Guzman, Tieu, Ponah, & Kushel, 2016)、高年齢層の再ホームレス化は、青年期や壮年期のホームレスに比べ多いこと(Rebecca, Goodman, David, Lina, & Claudia, 2016)が明らかとなっており、高年齢層のホームレス化防止が高齢化社会の課題の一つとなっている。

特に高年齢層のホームレスは、路上生活からアパート生活等へ安定した住居へ移行したにもかかわらず、社会的なつながりの少なさ、見知らぬ土地での生活への適応に時間がかかることに伴い、引きこもりや生活の自己管理の難しさなどの日常生活を営む上での問題が生じやすく再路上化しやすいという特徴がある。したがって、多面的な支援策の策定が緊急の課題となっている。

高年齢層のホームレスに関する研究では3つの主要なトピックについてフォーカスしている。いくつかの研究では高齢者特有のライフイベントや加齢、病気による発生要因を検討し個人的側面へ注目している(例えば, Susser, et. al., 1993)。他の研究ではホームレスになる前の予防対策あるいはホームレスから脱することへフォーカスしている。これらの研究ではコミュニティベースの予防プログラムとその介入を先導してきた(例えば, Meschede & Chaganti, 2015)。

高齢期の就労支援,住宅支援,家族統合を調査した研究は少なく,他の年齢層のホームレスからの回復・離脱に関する広範な調査とは明らかに対照的である.

高齢者のホームレスに関する現存する研究では,主にアウトカムと移行モデルにフォーカスした量的研究が用いられている.しかし,質的・量的分析の混合手法は当事者自身の言葉による詳細な視点,複数の観点からの複雑な分析,ホームレスに関する経験を形成するそれぞれの固有の社会的コンテクストをも提供する.さらに混合手法は当事者の声を生かすことができる.これは研究者の視点に偏らない当事者の意見の妥当性を高めることができるデータ収集法である.成功事例での社会的コンテクストを量的に検証し,さらに質的アプローチを統合することにより高齢者ホームレスの考えや望みについてより良く理解することができる.この理解とともに,研究者は高齢者ホームレス再発予防のより良い要素を特定し,再発予防モデルを開発することが可能になる.支援者ならびに当事者は,予防または安定した生活を維持するための介入プログラムを計画することができ,政策者はホームレス予防プログラムを援助することができる.

高齢者のホームレスに関する研究をしている研究者にとって興味深いのは,高齢者のホームレスの人間関係とコミュニティであった (Crane& Warners,2001).例えば,高齢者ホームレスが再びホームレスになるのは自分が帰属するコミュニティの欠如と人間関係の乏しさで発生する可能性がある (Crane & Warnes,2002) .

そこで本研究では,高年齢層ホームレスの再発予防モデルを検討するにあたり,その要素としてホームレス状態にあった人,ホームレス状態に現在もある人のソーシャルキャピタル(SC)に着目する.ソーシャルキャピタルについては,賛否を含めて様々な議論が展開されており,本研究でもソーシャルキャピタルの概念を使用することが適切かどうかという点については議論の余地があると考ええる.本研究においてはソーシャルキャピタルを主体間のつながりといった意味合いで使用している.それらは短期間に蓄積されるものではなく,また課題解決のためだけに蓄積されるのではなく,日常的な他者との交流,また労働・社会活動と関連しながら蓄積されていくものである.このような性格を持つつながりといったものは,現段階ではソーシャルキャピタルという概念で表現するしかないと考えている.日本の超高齢化社会の中で単身高齢者を支えるソーシャルキャピタルを構築していくためには拠り所となる社会の必要性をホームレス問題が投げかけている.このことから,本研究の目指す目標は,高齢者のホームレス再発予防に資するソーシャルキャピタルを探求することである.

高齢者のホームレス予防を検討するために社会的コンテクストに注目する研究は少ない.高齢期はそれまで形成してきた仕事を通じた人間関係や家族などの資源を喪失する.概して家族は,一般的に多大な社会的影響力があり高齢者のサポートに影響しうる.

全般的な狙いは,超高齢化社会における社会的孤立に伴う課題に,労働と福祉政策施策者たちにより関心を持ってもらうことにある.本研究は,日本における日雇い労働者が集積する寄

せ場,労働市場と,歴史的に簡易宿泊所が集中する街の機能を持った土地である東京の山谷地域及び大阪の釜ヶ崎地域を事例として調査した.研究プロジェクトは,ホームレス生活から地域の暮らしに移行した経験の複雑性をマッピングし,福祉制度があるだけでは高齢者個人のニーズには応えきれないところを模索し,伝統的機能の家族を持たない単身高齢者が今後急増する将来に備えようとするものである.

第1章は,研究の背景と研究上の問いかけを特定し,本書の構成を説明する.

## 第1節 背景：調査地域の歴史と特徴

調査地に選定した山谷及び釜ヶ崎は,歴史的に一貫して「ホームレス問題」を抱え続けてきた.そして日雇労働者の街という歴史と伝統のある地区で,歴史のある商業地と隣接している.高齢層の男性が集住する地区ということから,調査対象地として選択した.

以下,「山谷」地域と「釜ヶ崎」地域の歴史と特徴について紹介する.

### 「山谷」地域

「山谷」は東京都台東区北東部と荒川区の両区に跨って広がる,簡易宿所の密集地域で,その面積は約1.6km<sup>2</sup>.町名としての「山谷」は1966年の住居表示の施行によって消滅した.

現在の住居表示は,台東区清川1・2丁目,東浅草2丁目,日本堤1・2丁目及び橋場2丁目,荒川区南千住1・2・3・5・7丁目である(城北労働・福祉センター,2019).

江戸時代の山谷地域は,日光街道と奥州街道の江戸の入り口となる宿場であり,木賃宿が建ち並び行商人や旅芸人などが生活していた.明治に入り次第に市街化が進んだが,大正12年の関東大震災で木賃宿や長屋は大半が焼失した.しかし,まもなく復興して,約5,000人の労働者が宿泊するようになった.太平洋戦争後,戦災により焼け野原となった東京都内には被災者が溢れて,とりわけ上野周辺に集中した.治安への影響を重視したGHQ当局は,東京都に被災者の援護を要請し,山谷地域などに仮の宿泊施設(テント村)を作り,山谷地区旅館組合に委託した.テント村は間もなく本建築の簡易宿所になり,そして,日本経済の復興により労働需要が増加した.1953年には,約100軒の簡易宿所に約6,000人が宿泊していた.1950年代後半には,日本経済の高度成長に伴って,土木・建築作業や港湾荷役作業における労働需要が高まり,山谷地域は全国有数の「寄せ場」(日雇労働市場)に成長した.

1964年の東京オリンピック開催に向けて進められた都市基盤の建設・整備は山谷地域の日雇労働者無くしてはあり得なかった.

1963年10月には,222軒の簡易宿所に約15,000人が宿泊していた.しかし,1971年のドルショック及び1973年第一次石油危機の影響で日本経済が動揺すると,労働需要は減少した.

その後、1979年第二次石油危機を経て低成長時代を迎えた。1980年代には「バブル経済」の下、首都圏を中心に土地取引及びビル建設が活発化した。土木・建設作業における労働需要が急増し、人手不足の状況が発生した。1991年のバブル経済崩壊以降、労働需要は急減し、土木・建設現場では、長引く不況に対応して作業の機械化及び省力化が進み、また、労働者の高齢化が進んでいたこともあり、就労をはじめとする山谷地域の生活環境は極めて厳しいものとなった（城北労働・福祉センター，2019）。

山谷地域には、行政対策として「山谷対策」が行われてきたが、1990年代以降、日雇い労働者たちの失業と高齢化によって生じるとされてきた野宿状態が、量的にも質的にも変容した。彼らは労働者対策の対象としてではなく、福祉施策の対象となり、ホームレスと呼ばれるようになった。ここでいうホームレスとは、住居を喪失しただけでなく、一時避難所や簡易宿所で不安定な居住環境にある単身者や家族など、多様な極貧状態を包括的に指し示す用語である。

1990年代以降、ホームレスに対する行政支援は、厚生労働省や自治体によって行われてきた。これらのホームレス対策は、「人道的措置」といわれる法外援護（乾パンなど食品の配布、無料風呂券、数百円の交通費など）と公的扶助（簡易宿所を住居とした変則的な生活保護制度の適用）が中心であった（岩田，2000）。こうした公的支援を質的に補うかたちで、山谷地域で活動を行う支援団体による民間活動は、炊き出しと呼ばれる食事を提供するサービスを中心として、様々な活動を行ってきた歴史がある。民間活動は、炊き出しサービス、アウトリーチ、衣類配布、職業紹介、医療相談・医療処置、住居移転のサポートなどを中心に行なってきた。

2003年に施行された自立支援法以降になると、自立の意志がある者を労働市場に移行して自立を促すようになり、一時保護施設や通過施設にいるホームレスに対して就労や職業訓練の参加が強要されるようになった。しかし、一時保護施設や通過施設にいる長期間路上にいた元ホームレスが自立して通常の住宅に移行する比率は低い。そこで一時保護施設や自立支援センターを出た後、住み続けることのできる住宅として簡易宿所や無料低額宿泊所などをあてがい民間団体のサービスを提供するなどのケアの継続が取り込まれるようになった。

「山谷」地域は、少子高齢化が極端に進んでおり、また男性が多いのが特徴のひとつである（表5）。また、簡易宿所宿泊者は減少を続け、1963年222軒に15,000人いた宿泊者は2017年に約3分の1となっている。宿泊者の平均年齢は約66.1歳で、その9割以上が生活保護を受給している。簡易宿所は町名別にみると清川1丁目に5軒、清川2丁目に64軒、日本堤1丁目に37軒、日本堤2丁目に15軒がある（城北労働・福祉センター，2019）。

町別の年齢別・性別人口をみると（表1）、簡易宿所が多い丁目では、40歳代から70歳代の男性人口が女性に比べ圧倒的に多く、中でも最も簡易宿所の多い清川2丁目の60歳代・70歳代の男性人口の高さが特徴である。高齢男性住民が多いことによる独自の課題がここにはあることを示唆する統計値である。

表1 平成27年国勢調査年齢別人口数（台東区）

町名		人口 総数	人口 密度	年齢別（歳）・性別								
				0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80超
清川1	総数	1,997	15,361	94	129	170	195	288	227	351	357	75
	男			53	60	97	120	161	134	214	196	95
	女			41	69	73	75	127	93	137	161	208
清川2	総数	3,706	24,706	84	121	276	303	382	459	851	755	222
	男			40	59	155	187	259	350	731	581	171
	女			44	62	121	116	123	109	120	174	66
東浅草2	総数	1,582	17,577	78	95	138	182	214	212	251	235	105
	男			47	46	83	107	118	124	150	128	255
	女	2,832		31	49	55	75	96	88	101	107	123
日本堤1	総数		31,466	101	120	210	239	351	344	648	547	213
	男			53	64	119	133	235	250	526	418	81
	女	3,173		48	56	91	106	116	94	122	129	132
日本堤2	総数		28,845	144	168	392	477	449	388	526	404	396
	男			75	82	215	265	244	224	352	238	181
	女	2,246		69	86	177	212	205	164	174	166	215
橋場2	総数		17,276	108	123	176	171	265	258	429	396	1547
	男			61	71	99	84	130	125	203	181	887
	女	15,428		47	52	77	87	135	133	226	215	882
合計	総数	10,403	—	609	756	1362	1567	1949	1888	3056	2694	
	男	6,116		373	444	889	1012	1270	1316	2296	1916	
	女			280	374	594	671	802	681	880	952	

台東区「年齢、男女別人口、面積及び人口密度」を加工

このような歴史と住民層の特徴がある山谷地域で継続ケアに取り組んでいる民間非営利組織の2つの事例を以下にみる。

## 事例1 コスモス<sup>1</sup>

この組織は1999年に開設し、ホームレスの人々をはじめ保健・医療・福祉のニーズがあっても満たされてこなかった人々へそれらのサービスを届けるために山谷地域で初めて訪問看護ステーションを立ち上げた。居宅介護支援事業も開始し2000年にNPO法人格を取得した民間非営利組織である。

2001年には高齢者向けの健康相談事業の開始、2002年には横浜市寿町にサテライト訪問看護ステーションを開設した。2003年には山谷地域の一人暮らしの高齢者のふれあいの場、憩いの場としてデイサービスセンターを開設し運営している。2004年からは簡易宿所巡回相談を東京都から委託し実施している。2006年からは路上生活者を対象に誰でも自由に出入りできる喫茶室を月に2回ほど開設して、喫茶、お風呂、映画、カラオケなどの娯楽が楽しめたり、衣類の提供、健康相談などを実施している。

2009年には病気や障害を抱えていても、住み慣れた土地で最期まで安心して暮らせるように支援サービスのついたアフォードブルな永住できる住宅の供給もしている。

2011年には今まで快適な生活を送れなかった人たちが最後に落ち着く場所として支援付きアパートを2カ所開設、2011年に1カ所増え、3カ所で支援サービスを受けながら自分らしく安心して生活できることができる事業を開始している。

## 事例2 山友会<sup>2</sup>

この組織は1984年に路上生活を送らざるを得ない状況にある人々や生活困窮状態にある人々が病気になっても治療を受けられない課題を解決するために有志の宗教者や医師とともに、無料診療所を開設したことが活動の始まりである。2002年を目的にNPO法人格を取得した民間非営利団体である。

現在は生活・健康上の問題や地域生活をサポートする相談室、炊き出し、テントや路上生活をしている人たちへのアウトリーチと訪問相談、山友会に来る人への昼食提供、ケア付き宿泊施設（無料低額宿泊所）、ホームレスや元ホームレスを対象とする生きがい・居場所づくりという、主に6つの事業を行っている。

2018年には路上生活等から脱し生活保護を簡易宿所で受けている人や路上生活をしている人たちがアパート等地域生活へ円滑に移行することを目的に、対象者へのアウトリーチ、アパート移行後の定期的訪問、運営する居場所や対象者が主体となっていく定期的ミーティングへの参加につなげることなど、台東区との協働・委託を受けた居場所・生きがいづくり事業を運営している（山友会, 2019）。

---

<sup>1</sup> <http://www.s-cosmos.org>

<sup>2</sup> <https://www.sanyukai.or.jp>

## 「釜ヶ崎」地域

大阪市西成区北東部に位置する「釜ヶ崎」は、0.62平方キロメートルの地域で西日本の最大「寄せ場」として知られている。現在の住所表示は、萩之茶屋1・2・3丁目、花園北1・2丁目、太子1・2丁目、山王1・2丁目である（本間, 1993）。

「釜ヶ崎」の形成期は山谷に比して新しく明治時代といわれる。当時の「釜ヶ崎」の居住者は、力役型または雑業に従事する戸主、雑業に従事する主婦、マッチ工場で働く子供を中心とする家族で長屋に住んでおり、第一次大戦を契機として重工業化が進展したために必要となった大量の単身・男性たちは木賃宿に住む様相の地域であった。第一次大戦後は、約4000人が木賃宿に宿泊するようになった。1921年の調査では木賃宿居住者の単身者の占める割合は61.4%となっている。この時期の特質として、子供のいる世帯持ちたちが多数を占める木賃宿と、青壮年層を中心とした単身労働者が多数を占める木賃宿との分化がみられた。すなわち木賃宿が長期間滞在するための居所としての役割をも果たしていた。1926年に宿屋営業取締規制が制定され、木賃宿は簡易宿所へと名称が変更された。昭和恐慌による失業者の増大、1925年の国勢調査によれば、大阪市内の野宿者777名が1930年の野宿者はその3倍の2,241名に急増していた。都市内部の失業者・困窮者が釜ヶ崎に流入するようになった。1945年の大阪大空襲により、釜ヶ崎はほとんどが灰となり、その後の簡易宿所の復興については不明の点が多い。敗戦直後の闇市、バラックの乱立から釜ヶ崎の戦後は始まったと言われる（本間, 1993）。

戦後の「釜ヶ崎」は寄せ場および簡易宿所を核としながら、主として単身男性日雇労働者の集住地域として形成された。1970年に開催された大阪万国博覧会に向けての建設需要に応じて全国から「釜ヶ崎」に流入する単身男性日雇労働者が急増し、この「釜ヶ崎」において日雇労働者は、短期的な雇用と解雇を繰り返す不安定就労層に位置づけられ、また「あいりん体制」と呼ばれる特殊な制度のもとで一般的な制度から隔絶された状態にある。このような経済的・制度的な不備のなか、「釜ヶ崎」は失業と野宿という現実を抱え続け、とりわけ1990年代以降、日雇労働者の労働市場からの排除が深刻化してきた。1980年代のバブル経済期には2万人以上を抱えるほど人口が膨れ上がった。1990年代前半からの景気低迷、単純業務の減少、日雇労働者の高齢化など「山谷」と同じ現象が表出し、多くの日雇労働者がこれまで生活の拠点としていた簡易宿所に住むことが困難になり、野宿生活を余儀なくされるようになった。1990年半ば頃には、「釜ヶ崎」のみならず、大阪市内全域に野宿者が拡散するようになった。この頃の求人平均人数は、バブル経済期と比較すると、3分の1程度にまで減少している。このような求人現象と野宿者の増加によって、「釜ヶ崎」ではボランティアな福祉活動が盛んになり、炊き出しや夜回り、宿所提供などを行ってきた。また、2000年前後には布教活動を伴った教会系の食事提供が急増した。これら多数の福祉サービスの存在により、「釜ヶ崎」は収入源を持たないものでも生き抜くことができる場となった。こうした福祉サービスは、当初は既存のセーフティネットから零れ落ちる「釜ヶ崎」の日雇労働者の生存を支えるための取り組みとし

て行われてきた背景があるが、次第に他地域から流入する「生きづらさ」を抱える不安定生活者をも引き寄せる地域となった（白波瀬, 2010）。また「釜ヶ崎」における日雇労働者は、社会関係の側面で厳しい差別のもとにおかれ、物質的な側面での貧困と社会的な側面での差別が集中する地域である（原口, 2010）。

「釜ヶ崎」地域も「山谷」と同様に、少子高齢化が極端に進んでおり、また男性が多いのが特徴のひとつである（表 3）。1990 年代中頃から簡易宿所の稼働率が低下し、急増する生活保護受給者の住居として対応できるよう、簡易宿所をアパートに業態を変更していった。バブル経済期に約 200 軒あった簡易宿所は 2009 年時点で約 100 軒にまで減少している。一方で、簡易宿所から転用したアパートは約 80 軒となっており、簡易宿所を転用した福祉アパートは近い将来簡易宿所の数を上回ると予測されている（白波瀬, 2010）。簡易宿所から業態を変更したアパートは「山谷」地域には見られない業態であり、「釜ヶ崎」地域の特徴でもある。これらのアパートは野宿生活者が住まいを確保できる大きな糸口となった。

「釜ヶ崎」の簡易宿所が転用してアパートへと変化させて大きな要因は、大阪市の生活保護運用の仕方が関係する。生活保護を簡易宿所で受給できるか否かの判断は、自治体によって異なり、大阪市では簡易宿所での保護適用は認めていない。それに比べ「山谷」地域では、簡易宿所での保護適用が認められており、そのため簡易宿所のまま経営を続けられているという違いがある。このような差が建物の更新にも影響しており、「釜ヶ崎」と「山谷」では同じ簡易宿所でも地域の構造が異なる。簡易宿所を転用した福祉アパートは敷金・保証人なしで入居できることから、元日雇労働者のみならず社会的に排除された人々、例えば身寄りのない精神障害者、知的障害者、刑務所からの刑期を終えていく場所のない人などの受け皿にもなっている。

簡易宿所は町名別にみると萩之茶屋 1 丁目に 35 軒、2 丁目に 31 軒、3 丁目に 6 軒、太子 1 丁目に 31 軒、太子 2 丁目に 1 軒がある。簡易宿所を転用したアパートは、萩之茶屋 1 丁目に 21 軒、2 丁目に 24 軒、3 丁目に 9 軒、太子 1 丁目に 12 軒、太子 2 丁目に 2 軒がある（日本型 CAN 研究会, 2009）。

町別の年齢別・性別人口をみると（表 2）、簡易宿所や転用アパートが多い丁目では、40 歳代から 70 歳代の男性人口が女性に比べ圧倒的に多く、中でも最も簡易宿所の多い萩之茶屋 1 丁目の 60 歳代・70 歳代の男性人口の高さが特徴である。高齢男性住民が多いことによる独自の課題が山谷と同様にあることを示唆する統計値である。

表2 平成27年国勢調査年齢別人口数（西成区）

町名		人口 総数	年齢別（歳）・性別								
			0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80超
萩之茶屋1	総数	3816	6	17	54	121	383	611	1,272	1,040	312
	男	3511	3	8	45	114	346	577	1,217	944	257
	女	305	3	9	9	7	37	34	55	96	55
萩之茶屋2	総数	3196	3	36	75	99	331	521	1,077	836	218
	男	3031	1	18	54	93	319	508	1,049	799	190
	女	165	2	18	21	6	12	13	28	37	28
萩之茶屋3	総数	1305	12	4	23	38	92	144	390	452	150
	男	1133	5	3	14	31	77	124	349	410	120
	女	172	7	1	9	7	15	20	41	42	30
花園北1	総数	1761	19	29	181	154	224	240	463	350	101
	男	1352	10	17	103	107	172	196	392	288	67
	女	409	9	12	78	47	52	44	71	62	34
花園北2	総数	2273	43	63	141	158	265	321	556	513	213
	男	1615	23	30	85	96	207	227	445	381	121
	女	658	20	33	56	62	58	94	111	132	92
太子1	総数	1694	10	21	86	71	187	271	459	438	151
	男	1393	5	14	57	54	156	233	408	361	105
	女	301	5	7	29	17	31	38	51	77	46
太子2	総数	538	-	4	10	6	50	69	156	168	75
	男	428	-	-	6	5	36	57	139	138	47
	女	110	-	4	4	1	14	12	17	30	28
山王1	総数	1433	49	59	184	150	166	188	261	233	143
	男	829	24	30	104	93	103	117	166	132	60
	女	604	25	29	80	57	63	71	95	101	83
山王2	総数	1448	31	50	135	116	165	136	329	332	154
	男	963	17	28	90	75	116	90	249	231	67
	女	485	14	22	45	41	49	46	80	101	87
合計	総数	17,464	173	283	889	913	1863	2501	4963	4362	1517
	男	14,255	88	148	558	668	1532	2129	4414	3684	1034
	女	3,209	85	135	331	245	331	372	549	678	483

西成区「町別年齢, 男女別人口」を加工

山谷地域同様に釜ヶ崎地域にも多くの労働者・路上者支援団体が存在しているが、中でも継続ケアに取り組んでいる民間非営利組織の2つの事例を以下にみる。

### 事例1 釜ヶ崎支援機構<sup>3</sup>

釜ヶ崎の野宿生活者の社会的処遇の改善、「自立援助」、野宿状態に至る手前での「予防活動」を目的として、1999年にNPO法人格を取得した民間非営利団体である。

独自の事業としては、炊き出しによる食事支援、高齢者の働く場所の創出を目的とした自転車リサイクルシステム事業、公園管理就労体験事業を実施している。

巡回相談等のアウトリーチは基本的に行っていないが、路上生活者が非常に多い地域に窓口を開設しているため、相談者が日々訪れる状況にある。また路上生活者から他の路上生活者が困っているから助けてほしい、といった連絡があれば対応している。

大阪府からの受託事業として高齢日雇労働者就労自立支援事業を運営、釜ヶ崎地域外の清掃業務を実施している。大阪市からの受託事業は、日雇労働者等自立支援事業として高齢日雇労働者等社会的就労支援や地域密着型就労自立支援、夜間シェルターの運営による居場所支援等、行政から多数の業務の委託を受けて実施している。

2013年からは釜ヶ崎地域にて単身高齢で生活保護を受給している人の社会参加、及び生活支援のプログラムを行う事業（社会的つながり事業）を大阪市から委託を受けて運営している。

この事業を利用する事業対象は、以下の条件を満たす必要がある

- 1 西成区で生活保護を受給している
- 2 満65歳以上
- 3 あいりん地域内（釜ヶ崎地区）に居住している
- 4 単身で居住している

上記の条件を満たした利用者が集える「居場所」、生き生きとした生活を送れる「社会参加・生活支援プログラム」、地域ニーズと彼らを繋ぐ「社会的つながりづくり」を実施している（ひと花プロジェクト連合体、2015、2016）。

### 事例2 大阪自彊館<sup>4</sup>

大阪市西成区のあいりん地域の改善のため、宿泊保護、職業紹介、授産事業を行う施設として1911年に設立された。共同宿泊所、無料職業紹介所と出発した事業は、長年緊急的な援護が必要な

---

<sup>3</sup> <http://www.npokama.org>

<sup>4</sup> <http://www.ojk.or.jp>

困窮者への宿泊施設, 心身に障害のある人が暮らす救護施設を運営しながら, 大阪や滋賀県に更生施設, 救護施設, 身体障害者療護施設, 特別養護老人ホーム等を運営する事業へ拡大している。

生活保護法による救護施設を6カ所運営しており, 施設から地域へ居住を移行した後も, 生活指導等の保護施設通所事業を実施している。

高齢や病弱等により一時的に支援を必要とする人や, 路上生活者のうち一時的に支援が必要な人を対象とする無料低額宿泊所を運営している。

2005年に大阪市から野宿生活者対策事業が委託され, 野宿生活者巡回相談室を開設, アウトリーチ, 健康相談, 精神保健相談を中心に生活相談を実施している。

## 第2節 研究の目的と研究上の問いかけ (research question)

本事例研究の目的は, 次の2点である。目的の一つは, 日本のホームレスの高齢者における再発予防の実現に寄与する人間関係の解明である。目的の二つ目は, 日本のホームレスの高齢者における再発予防に寄与するコミュニティの解明である。

諸外国におけるホームレス人口は青年期や壮年期, ファミリー層が多く, 高齢者ホームレスの占める割合は少ない。日本ではホームレス人口の大半を単身中高年男性が占めている。さらに彼らの多くは, 単身中高年男性が多く集住する特定の地域において独特なコミュニティの中で生活をしている。高齢者ホームレスの特徴は, 加齢により脳や身体の機能低下, 病気や障害による健康の喪失, 高齢者特有のライフイベントによる影響から人間関係や帰属するコミュニティが異なる。また支援を受けて定住化を一旦果たしても再びホームレスへ戻る事例は減らない。なぜホームレスの高齢者はホームレス状況から脱したにもかかわらず, 再びホームレスになるのか。この疑問を解明するためには彼らが現状としてどのような中で生活しているのかという実態を把握することが必要である。焦点は, 伝統的な家族としての機能を持つ家族を持たない高齢者たちに当てた。

研究上の問いかけ (research question) は, 「ホームレスから脱した高齢者の生活の過程はどうであったか, 特に人間関係とコミュニティの視点から」と「再定住した高齢者たちの問題としてどのような課題が浮かび上がったのか-主体間のつながり-」である。

本事例研究はホームレスから脱した生活の過程を見つめた。この過程は同様のホームレス層においても観察されるかもしれないが, そのプロセスの一般化を試みるのではない。ホームレスに至る複雑性は, 共通の要素もたくさんあろうが, それぞれの年齢層に特徴的な点があることを意味する。

住居, 仕事, 家族を失ったホームレスが, ホームレスからの脱却には彼らが構築する人間関係と彼らが属するコミュニティが鍵になることを投げかけたことから, 本研究の目的のひとつは, 彼らを取り巻いている人間関係を記録することにある。ホームレスから脱した生活で関

わりがあるコミュニティにおいて、より効果的につながっていた当事者たちがいた。ふたつめの目的は、彼らが帰属しているコミュニティを詳細に記録することにある。

### 第3節 本書の構成

第1章は、研究の背景と、研究上の問いかけ（research question）を提示した。本事例研究の背景として、研究の副題目となる山谷と釜ヶ崎について簡単に紹介した。

第2章は、日本と、他の国々の関連文献を中心に文献レビューを行った。日本と、他の国のホームレスの違いも紹介する。第3章は、本事例研究で用いた研究手法の概要を説明する。

第4章は、資料調査として、既存文献で取り上げられているホームレスからの脱却後の生活に関する事例の分析からホームレス再発を予防する要素について提示する。

第5章は、高齢者ホームレスの人間関係に着目し山谷地域と釜ヶ崎地域で実施したアンケート調査と高齢者の話からホームレスたちの人間関係を様々な角度からの分析を行い、ホームレス再発の予防に貢献すると考えられる人間関係について提示する。

第6章は、高齢者ホームレスにとってのコミュニティに着目し、ホームレスから脱した時期による帰属するコミュニティについて量的な部分だけでは見えにくい実態を、ホームレスから脱却した高齢者からの話を通してどのように脱した後の生活が経過してきたのかをコミュニティとのつながりから紹介する。主に2ヶ所でのフィールドワークをもとにして、それぞれのコミュニティについて提示する。それぞれの当事者たち同士のつながりについても言及する。

続く第7章は、本論文の様々な結論を要約する。また、ソーシャルキャピタルという概念的枠組みを用い、主体間のつながりがホームレスから脱した高齢者の再入予防に資するかを考察し、さらなる研究上の問いかけを挙げる。

## 第2章 文献レビュー

### 1. なぜホームレス再発を予防することが重要なのか

ホームレスになる要因は、健康状態の悪さや家庭不和などの個人的要因の結果であるという考え方は、歴史的に長い間支持されてきた(Warnes&Crane,2010)。その後、不況や住宅価格の上昇といった個人ではコントロールできない社会全体の構造的要因(Shlay&Rossi,1991)に焦点が移っていった。ホームレスになる要因は、社会構造的なものか個人的なものかで議論されているが、複数の要因が相互作用しているという説は研究者によって支持されている(Susser,Moore,&Link,1993;Cohen,1999;Crane&Warnes,2001)。以上のようなホームレス化の要因への対応として、1990年代まではホームレス化した者のホームレスからの脱出を支援することを主な施策とし、住宅支援、経済的支援、労働的支援が主流であった。ホームレスのための様々な包括的措置が開発されてきたが、対応措置によって解決することが困難なホームレス問題の出現は、ホームレスの流入前あるいは早期介入によるホームレスの防止に重点を置く予防へと2000年代から転換がもたらされた(岡本,2012)。一方、ホームレスから脱出した者が再びホームレスになることを防止するための施策は、再びホームレスになった者を発見することが困難であるため、十分に実施されていない(Chamberlain & Mackenzie, 2006)。

日本のホームレスの実態が報告される中で、高齢者や障害をもつ人々は一旦定住化を果たしたにもかかわらず、社会的なつながりの薄さから見知らぬ土地でのアパート生活による引きこもりや生活費の自己管理ができないことから再路上化しやすく貧困状態から脱出が難しいことを明らかにしている(厚生労働省,2012;鈴木,2009)。これらの課題に対応する策として、厚生労働省は、2013年「ホームレスの自立の支援等に関する基本方針」を発表した。この基本方針の中で、新たにホームレスの自立を積極的に促すとともに、ホームレスとなることを防止し、ホームレスが自らの意思で安定した生活を営めるように支援していく必要性が述べられている(厚生労働省,2013)。ホームレスの再発を説明する論理的モデルはないが、最初にホームレスにつながった脆弱性を探求する理論的枠組みは、再発を説明する有用な視点を提供できる。上記の理論的枠組みの議論には、2つの主要な反対意見がある。個人対構造的欠陥に基づいてホームレスを説明する考え方の学派と、社会的不適応や社会的排除などの問題のある社会的関係課題に基づいてホームレスを説明する学派がある。後者の考え方を支持する研究には、社会的関係がホームレスからの退出とホームレスからの脱却に大きな影響を与えることを示す研究(Crane&Warnes,2002;堤 2006;山田 2020;Amanda,Tamara,Rachel,Valerie&David,2016)、他者との関係構築、同じ状況にある他者とのピアサポート、地域生活の自己管理を促進する他者からの情緒的サポートがホームレスからの社会復帰に強い影響を与えることを示す研究(Amanda,et. al.,2016)がある。ホームレスが諸制度を利用し路上生活から定住化を果たした末に、再びホームレスとなることを防止し、居宅生活を継続していく

ためには、ホームレスに陥った人々の直面する課題を自らの意思で解決する糸口を探ることが重要である。家族、友人、愛する人から受ける社会的支援が多ければ多いほど、ホームレスになる可能性は低くなり、ホームレスの人々が受ける経済的、感情的支援が多ければ多いほど、ホームレスから恒久的住居環境への移行に成功する可能性は高くなる (Duchesne & Rothwell, 2016)。したがって、ホームレスからの脱出を成功させるためには適切な社会的支援システムが不可欠である。一方、ホームレスからの社会復帰には、ホームレスであることによる社会的な差別や汚名による社会からの疎外感、またホームレスになったことのある者の多くがサービス提供者との間に大きな力のギャップを抱き、本来の力を十分に発揮できない状況にあると感じていることなど、いくつかの障壁がある (Abe, Dej, & Parsons, 2020; Gaetz & Dej, 2017)。

ホームレスの高齢者はホームレス状況から脱したにもかかわらず、なぜ再びホームレスになるのか。ホームレスを経験した高齢者の人々がどのように社会に復帰するかという複雑さを解明することは難しいが、安定した住居生活を維持するために何が必要かについての洞察を提供することはおそらく可能である。効果的な再発予防支援策を検討するためには、ホームレスから安定した住居生活を維持する人々に影響を与える要素を理解することが必要である。

日本を含む個別性を尊重する先進工業国では、豊かさや福祉制度が貧困層をカバーするため、家族や親族、地域の住民同士の社会的支援や社会ネットワークなどの社会制度は衰退する傾向にある (Bhalla & Lapeyre, 2004)。このように、地域社会における家族・親族関係や住民同士の相互扶助制度が弱体化する中で、極度の貧困状態にある人々にとって他者とのつながりを模索することは大きな課題である。ホームレスの高齢者の人間関係や彼らが帰属するコミュニティは脱ホームレス化とその維持にどのように貢献しているのかを具体的に探る必要がある。

ホームレスになった人々がどのようにしてホームレス状況から脱却していくかについての研究は、脱却ケースに関する個別事例の研究報告や NPO 報告書の中に散見される程度である。日本におけるホームレス脱却過程についての研究は未だ皆無に等しい。

実際ホームレス問題を解決していくためにはホームレスにならないための予防対策を図っていくための研究が重要であるが、同時に一旦ホームレスから脱却を果たした人々が、再びホームレスになることを予防するための方策を探ることはホームレス問題解決のための重要な対応策を検討する上で不可欠な作業であろう。

## 2. ホームレスの人間関係とコミュニティに関する視点

ホームレスに着目した従来の研究においては、ホームレスの不安定な就労状況や住居の喪失、諸権利の剥奪といった、いわば脆弱性に焦点を当てることが多かった。しかし近年、ホームレスによる主体的なコミュニティ形成や主体的営為といった、いわゆるホームレスのレジリエンスへの注目がされつつある (堀江, 渥美, 水内., 2015)。

ホームレスの人間関係やコミュニティについては、我が国に限らず、イギリス、アメリカ、オーストラリア、など様々な国においても議論がされており、ホームレス問題における普遍的な問題であると考えられる。

個人の生活の質は、家族関係、友人関係、仕事上の関係、地域での関係など様々な社会的関係によって保たれている。コミュニティをこれら様々な複合体と定義するならば、ホームレスから脱した後の問題は、新たなコミュニティをどうつくるか、既存のコミュニティをどのように維持・継続していくか、というコミュニティのあり方の問題にも深く関わってくる。

本論文が対象とする日本の東京の山谷と大阪の釜ヶ崎はホームレス問題を抱える地域である。白波瀬（2017）は大阪の釜ヶ崎で生活保護を受給する高齢者の抱える社会的課題について以下のように指摘している。「単身男性が皆、社会的孤立に陥るわけではない。日常的に仕事に従事しているときは、それを通じて一定程度の社会的関係の構築ができただろう。しかし、生活保護受給者となり、就労する機会がなくなってしまうと社会的役割の喪失や居場所の不在が新たな問題として浮上する」。

本論文では、ホームレスから脱した人の生活再建において当事者たちの人間関係と彼らの拠り所となるコミュニティの分析を通じて、再発を予防する要素について考察したい。

### 3. ホームレスの特徴における欧米と日本の違い

ホームレス問題は大半の先進国での社会問題であり、社会格差の実態を把握するための一つの指標でもある（Hoffman & Coffey, 2008）。

欧米のホームレス問題が社会問題化してきたのは 1980 年代初めであり、日本は 1990 年代半ばに日本社会の経済を象徴するかのよう問題として浮上してきた（Hayashi, 2014 ; 小玉, 中村, 都留, 平川, 2003）。

英国のホームレスは 1948 年国民扶助法（National Assistant Act）の元で福祉問題として扱われ、地方公共団体の福祉部局がホームレスに一時的な施設を提供してきた。しかし、家族が引き離されて施設に收容されるなどの問題が指摘され、1960 年代にホームレスは住宅問題に要因があるとの議論が上がり、1977 年ホームレス法（The Housing Act）が制定された。この法により、子供をもつ世帯などの優先的ニーズのあるホームレスに地方公共団体の住宅部局が住宅提供をするようになった。1977 年のホームレス法はその後、1985 年に住宅法に吸収されることとなり、ホームレスにも住居権が与えられた（海老塚, 2008）。

英国におけるホームレスの特徴は、全体の 83%が男性で、81%が 25 歳以上 55 歳までの年齢層、白人が大半を占める。7%は軍人である。首都ロンドン市内のホームレスは、1980 年代までは英国北部からきた肉体労働者がホームレスの主体であったが、1980 年代後半から若年者や精神障害のあるホームレスが増加した。1990 年代になると家賃高騰、失業率上昇、その他、精神疾患を持つ人々が病院から地域へ移行する政策が取られたことから、路上にアルコール依存症

や薬物依存症, 慢性的な精神疾患をもつ人々の増加, さらには東ヨーロッパ諸国からの移民の増大により, ホームレス問題が重要な社会課題となった. ロンドン市内のホームレスの国籍はEU48%であるのに対し, ロンドン以外の地域ではUK76%である (UK Homelessness,2019) . 野宿者に限れば, 全体の 85%が男性で, 野宿者 11%は 55 歳以上である. 初めて野宿者となったのは 20 代前半と青年期の若者であったものがほとんどである. 野宿者の平均死亡年齢は 47 歳と一般 77 歳に比べて短命である.

英国のホームレスは “a shortage of affordable housing” (手頃な入手しやすい価格・家賃の住宅の不足) が主たる原因であり, その他の要因は家庭関係不和である. 特に家族ホームレスや若いホームレスではパートナーとの関係不和や親との関係不和が家を出てくる主な理由である. すなわち家出をして行くあてがなく, ホームレス状態になっている.

米国では, 1970 年代後半から 1980 年代初めにかけてニューヨークやシカゴ, ロサンゼルスなどの大都会の路上や公園, 駅で寝泊りするホームレスが急増した. それ以前にも住宅のない人もいたが, 彼らの多くは肉体労働者で仕事があれば格安の料金で宿泊できるホテル (Single Room Occupancy) に宿泊し, 仕事がなければ野宿をすることを余儀なくされる人たちで, これらの大半は単身の白人男性であった. しかし 80 年代に増加したホームレスの中には, 女性や子どもがいる母子世帯が増えて, 黒人やヒスパニックなどのマイノリティが半数以上を占めるようになった. 米国のホームレス急増は, 福祉政策の後退 (社会保障費の減少, 社会支援金の支給期間短縮等) と住宅政策の縮小 (公共住宅数の建設数の削減, 家賃補助の減少等) が基本的な原因と言われている (小玉ら, 2003).

米国におけるホームレスの特徴は, 70%は単身者, 30%は子供をもつ家族世帯である. 60%は男性で, 40%は女性である. 20.7%は 18 歳以下の子供たち, 9.7%は 18 歳以上 24 歳以下の青年層, 69.6%は 24 歳以上である (State of Homelessness,2020) . 米国のホームレスは精神疾患やアルコールや麻薬などの薬物乱用, 低賃金労働, 服役, 失業, 家庭内暴力, 貧困が複雑に絡みあっている. ホームレスのうち精神障害者が占める多さは, 1950 年代の精神医療を病院からコミュニティでの治療に移行したことに影響されている. 1990 年代以降は働いて収入があるにもかかわらず, 家賃高騰により英国同様に手頃な価格の住宅の不足からホームレスに陥っている家族も多い.

またホームレス率については, 住宅状況, 人口, 経済的特性などの要因が地域別のホームレス率の違いに関連していることが明らかになっている (Appelbaum,1989;, Quigley,1990) . さらに雇用機会, 公的医療, 食料確保の容易さなどがホームレス率の地理的分布に影響を与えていることが示されている (Suzuki,2008) . 性別にみたホームレス率は, 男性が多くホームレスの女性の 2 対 1 の割合で上回っている (Cohen,1999) . 米国と英国の研究では, 男性は女性よりも約 50%長く路上にホームレスでいる傾向があることが示されている (Crane & Warnes, 2000; Rossi,Wright,&Fisher.,1987;Cohen,Ramirez,Teresi,Gallagher&Sokolovsky,1997;Kutza & Kreigher

1991;Sterigiopoulos&Herrmann,2003). 年齢別にみたホームレス率では、慢性の高齢ホームレスと並んで高齢になって初めてホームレスになる高齢者がいることが明らかになっている(Crane,1993;O\_Connell,Summerfield,&Kellogg,1990;O\_Reilly-Flemming,1993).

英国や米国のホームレスの特徴は、単身男性、単身女性、家族、家族のいない青年で、1990年代以降は若者や子供をもつ家族が多く、失業と住宅供給のバランスが崩れたことによる現象である。

一方、日本のホームレスは中高年男性の失業との関連が特徴である。日本のホームレス出現には2つの見方がある。一つは1991年から1993年のバブル崩壊による失業一般からこれが現れているという見方で、誰でもホームレスになる可能性がある、というものである。これに対して、ホームレスを「寄せ場」労働者の特殊な失業＝野宿化に焦点を当ててとらえる見方がある。この二つの見方から岩田(2004)は日本のホームレスの特徴を最も長く従事した職業(最長職)経験と直前の住まいを組み合わせ3類型に分類した特定の類が「寄せ場」型であることを見出している。

「寄せ場」とは文字通りとらえれば「人々を寄せる場所」である。その「人々」とは日雇労働者である。日本の主な「寄せ場」は大阪の釜ヶ崎、東京の山谷、横浜の寿町、名古屋の笹島、川崎のハラッパ、広島のドン、福岡の築港である。「寄せ場」と「ドヤ街」という二つの表現があるが、同一のものではない。「ドヤ街」は、「ドヤ(簡易宿所)」という安い宿が集中する場所である。

釜ヶ崎、山谷、寿町は、「寄せ場(労働市場)」と「ドヤ(簡易宿所)街」という両機能が一緒になっているが、その他の寄せ場は労働市場であっても、ドヤ街ではない(トム,1999)。岩田は3類型を、①最長職安定・直前一般住宅又はその他＝安定型、②最長職安定・直前労働型住宅＝労働住宅型、③最年職不安定＝不安定型、と提示している(岩田, id)。この3類型とホームレスの年齢・学歴・職業歴を関連して、不安定型の人々が、低学歴で未婚の中高年者を端的に示していること、建設関連の不安定職に長年従事してきたことを示した。具体的には不安定型に属する人たちの多くが義務教育までの学歴で未婚のまま60歳近くまで飯場や簡易宿所、会社寮などを生活の拠点として働いてきたが、不況の一つの主要部分であった建設産業の仕事が縮小したこと、及びここに高齢であることが重なることによって失業し、野宿生活を余儀なくされてきたことを示している。岩田(2004)は、この特定の類が「寄せ場型」であるとす。もともと「寄せ場」労働者や日雇いのような不安定雇用者にとってホームレス＝野宿状態は、いわばその日常的な不安定の顕在化にすぎない。仕事のある日は屋根のある場所を確保できても、何日か失業すれば野宿をすることになる。彼らの多くは自分の家族を形成せず、単身で仕事をしてきたことで、失業や収入の低下などに抵抗する力を形成できなかった。不安定型が「寄せ場」型であることを示した(岩田, id)。

2021年の厚生労働省による全国調査から、公園、道路、河川等に起居している野宿生活者のうち55歳以上の占める割合は80.7%、路上生活期間10年以上の者は65歳以上では44.3%、未婚の者が61.2%、と多くが単身中高年男性で路上生活の固定・定着が特徴である。65歳以上の路上生活をするようになった理由の第1位は「倒産や失業」次いで「病氣やけが、高齢で仕事ができなくなったこと」である。これらの人たちが住居を失ったのは、単純に仕事を失ったからである。中高年層の路上生活者たちの存在については、生活の根元的な不安定性に規定され、常に「野宿」と背中合わせで生きることを強いられてきた都市下層の歴史的連続性から切り離せない(島, 1998)。笠井の指摘によれば、日本の「都市下層」の集約的存在形態とも言うべき「寄せ場」やその周辺にいた、日雇い労働にあぶれ野宿をしながら仕事を探していた労働者、そして高速道路の下や駅、公園をねぐらにし、ダンボールの仕切り、地見屋などで生き抜いていた「街頭生活者」がホームレスという呼び名になっているのである(笠井, 1995)。すなわち、日本のホームレスの特徴は単身中高年男性が大半を占め、失業が大きな影響をもつことである。さらに彼らの多くは単身中高年男性が多く集住する特定の地域で独特なコミュニティの中で生活をしている。日本のホームレスの高齢者の生活は、本研究課題の解明に適した事例である。

#### 4. ホームレスの発生要因

人々がホームレスになる要因は、マクロ経済や構造経済、政策条件に関するものなど社会構造的な要因(Avramov,1995;Greve,1991, Shalay&Rossi,1991)と、個人の能力、脆弱性、行動に関するものなど個人的な要因(Hech&Coyle,2001;Early,2005,Anderson,2007)であることに異論はない。また、その発生誘因になるのはソーシャルネットワークを欠いていたり、対応能力や社会的支援へアクセスする力がなかったりすることである(Crane&Warnes,2001; Hecht&Coyle,2001)。ホームレスは個人的な要因による結果であるとの見解が歴史的に長く普及してきた。その後、社会構造的な要因によることへ重点が移った。ホームレスに至る要因に社会構造的か個人的かの二項から議論される中、Crane & Warnes (2001)をはじめとする研究者は複合的な因子が相互に作用することを支持している(Susser,et.al.,1993; Cohen,1999; Crane & Warnes,2001)。ほとんどの理論家はホームレスの理論的原因には個人的要因と社会構造的な要因のどちらもかなりの割合で関与していると議論は一致しており、ホームレス要因に関する社会構造的な要因と個人的な要因双方の見解を支持する理論は“New orthodoxy”と呼ばれている(O’Flaherty,2004;Fitzpatrick,2005)。しかし、この議論はホームレスに関連する要因の一般的な考え方を扱っているため、因果関係の明確な概念化には至っていないと批判もされている(Fitzpatrick,2005)。Fitzpatrickは実証主義に対する批判であり、個人的要因も社会構造的な要因も客観的に証明するには複雑であるため困難であると批判的現実主義の観点からホームレスの要因を“New orthodoxy”理論枠組みで対処することは不適切であると批判している。

Fitzpatrick (2005) は“New orthodoxy”に対抗する理論として人々の行動が構造によって影響を受ける構造化理論を提唱している。また、理論的観点からホームレス研究のレビューを行った Pleace (2016)は、ホームレスの要因は記述的に示すことはできても実証的にそれらを証明することは困難をきたすことを指摘している。このようにホームレスの要因に関する理論には見解の相違が生じている。

さらに国ごとのホームレス要因の違いとしては、英国とドイツのホームレスに至る要因を両国のサーベイから比較した Busch&Fitzpatrick(2008)によれば、英国のホームレスに至る主たる要因は住宅費の高騰であり、社会構造的要因にあることを報告している。彼らは精神疾患や薬物乱用など個人的な脆弱さがホームレスになるリスクを高めることは否定していないが、費用負担の可能な範囲の住宅の不足、低所得者の住宅購入を困難にしている不動産市場、ホームレスになる危険性に晒されている人々が持続可能で手ごろな購入価格の住宅が不足していることが個人的要因より大きいことを指摘している。さらに Busch&Fitzpatrick(2008)は、英国の家族ホームレスに関する調査から直接的要因に家族崩壊を挙げている。具体的にはパートナーとの関係破綻や、成人した子供と親との関係破綻、16歳から17歳の若年層ホームレスの直接的要因は親や継親との関係崩壊であることを報告している (Pleace, Fitzpatrick, Johnsen, Quilgars, & Sanderson, 2008)。英国のホームレス発生には家族との関係崩壊がより大きな影響を与えていることが報告されていることからホームレスに至る要因には家族関係が大きく影響していることがわかる。

ドイツのホームレスに至る主たる要因は手ごろな値段の家賃住宅の不足と、社会住宅（公共機関の供給する住宅）の減少であり社会構造的要因にあることが合意されている(小玉ら, 2003)。ホームレスの多くが家賃滞納のために立ち退きを迫られ定住を失う引き金になっている。

英国の給付金制度は低所得世帯の家賃の最大 100%が国から家主に直接支払われる。そのため家賃滞納から生じるホームレスの発生がドイツを含む他の国よりも幾分少ない。しかし、英国では家賃滞納を理由に立ち退きを余儀なくされた世帯は、通常、「意図的ホームレス」とみなされ、法定統計から除外される。また、ドイツの法的統計には家庭内暴力の被害者でシェルターに保護されている人々は含まれておらず、関係崩壊が直接的要因ではないとは言えない。このようにホームレスの要因は、それぞれの国の制度や法的枠組みによって大きく形成され、直接比較することは困難であり、New orthodoxy 理論でも説明が難しい (Busch & Fitzpatrick, 2008)。

青年期や女性、ファミリーがホームレスに至る要因は、家庭内暴力などの家族不和、住宅費の高騰など、必ずしも失業が要因にはなっていない。高齢者がホームレスに至る要因は、上記に加えて、伴侶との離婚や家庭崩壊、配偶者の死、これまで親と暮らしてきた人々にとって親の死による支援の喪失、高齢になり病気や身体の不自由さから仕事ができなくなること

(Susser, et. al., 1993; Cohen, 1999), 高齢のため住んでいた住居から立ち退きを迫られることや金銭管理ができなくなり家賃滞納による立ち退き, 高齢のため住み替えが難しい住宅市場の存在が指摘されている (Crane & Warnes, 2006). 高齢者のホームレスに至る要因は, 加齢により脳や身体の機能低下, 病気や障害による健康の喪失, 高齢者特有のライフイベントによる影響を受けていることが特徴である. 高齢による身体面・社会面のこれらの要因があれば, 全ての高齢者がホームレスになるのではなく, その発生を誘引する要因は, ソーシャルネットワークの欠如, 対応能力の低さや社会的支援の弱さ, アルコール問題などの精神的不健康状態などが複雑に作用していると考えられている (Crane & Warnes, 2001; Hecht & Coyle, 2001).

日本のホームレスに至る要因について, 2007年, 2012年, 2016年, 2021年に行われた厚生労働省による調査からみると 2007年調査(複数回答)では, 「仕事が減った」(31.4%)が最も多く, 次いで「倒産・失業」(26.5%), 「病気・けが・高齢で仕事ができなくなった」(21.0%), 「人間関係がうまくいなくて, 仕事を辞めた」(15.0%), 「アパート等の家賃が払えなくなった」(12.9%)である. 2012年調査(複数回答)では, 「仕事が減った」(34.0%)が最も多く, 次いで「倒産・失業」(27.1%), 「病気・けが・高齢で仕事ができなくなった」(19.8%), 「アパート等の家賃が払えなくなった」(16.9%), 「人間関係がうまくいなくて, 仕事を辞めた」(15.4%)である. 2016年調査(複数回答)では, 「仕事が減った」(26.8%)と「倒産・失業」(26.1%)が多く, 次いで「人間関係がうまくいなくて, 仕事を辞めた」(17.1%)と「病気・けが・高齢で仕事ができなくなった」(16.9%), 「アパート等の家賃が払えなくなった」(11.0%)である. 2021年調査(複数回答)でも「仕事が減った」(24.5%)が最も多く, 次いで「倒産・失業」(22.9%), 「人間関係がうまくいなくて, 仕事を辞めた」(18.9%), 「病気・けが・高齢で仕事ができなくなった」(14.3%)である(表3).

上記の調査結果からホームレス要因別にみていくと, 仕事関連の要因が上位を占めていることから日本のホームレスに至る要因は失業が大きく影響していることがわかる. 失業に至る要因として人間関係を挙げているものが上位を占めている.

日雇労働者に象徴される不安定な雇用形態と, 飯場や社員寮, 簡易宿所などに象徴される不安定な居住形態に置かれた人々にとって, 仕事がないことは住居の喪失に直結しやすい. それに加えて, その過程において, 家族・親族, 知人・友人といった人間関係や, 社会保障制度を含む社会との関係も失ってきたことが要因となっていると指摘されている(山田, 2020, p. 223).

表3 ホームレス（路上生活化）要因

(複数回答)	2007年調査			2012年調査			2016年調査			2021年調査		
	人	回答 %	ケース %									
倒産・失業	539	16.1	26.6	362	15.8	27.1	369	17.5	26.1	260	14.4	22.9
仕事が減った	635	19.0	31.4	454	19.8	34.0	379	18	26.8	278	15.4	24.5
病気・けが・高齢で仕事ができなくなった	426	12.8	21.00	264	11.5	19.8	240	11.4	16.9	162	9.0	14.3
労働環境が劣悪なため、仕事を辞めた	101	3.0	5.0	81	3.5	6.1	71	3.4	5.0	62	3.4	5.5
人間関係がうまくいかなくて、仕事を辞めた	304	9.1	15.0	206	9	15.4	242	11.5	17.1	214	11.9	18.9
上記以外の理由で収入が減った	47	1.4	2.3	40	1.7	3	25	1.2	1.8	18	1.0	1.6
借金取立により家を出た	132	4.0	6.5	57	2.5	4.3	47	2.2	3.3	34	1.9	3.0
アパート等の家賃が払えなくなった	261	7.8	12.9	225	9.8	16.9	156	7.4	11.0	150	8.3	13.2
契約期間満了で宿舎を出た	48	1.4	2.4	42	1.8	3.1	25	1.2	1.8	31	1.7	2.7
ホテル代、ドヤ代が払えなくなった	104	3.1	5.1	64	2.8	4.8	60	2.8	4.2	60	3.3	5.3
差し押さえによって立ち退きさせられた	14	0.4	0.7	2	0.1	0.1	5	0.2	0.4	12	0.7	1.1
病院や施設などから出た後行き先がなかった	49	1.5	2.4	36	1.6	2.7	24	1.1	1.7	17	0.9	1.5
家庭環境悪化	151	4.5	7.5	96	4.2	7.2	105	5	7.4	90	5.0	7.9
飲酒、ギャンブル	137	4.1	6.8	102	4.5	7.6	126	6	8.9	78	4.3	6.9
その他	360	10.8	17.8	261	1.6	19.6	236	11.2	16.7	241	13.4	21.2
理由なし	33	1.0	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
有効回答数	3,341	100.0	165.1	2,292	100	171.8	2,110	100.0	149.0	1,803	100.0	158.9
有効回答者数	2,024	98.8		1,334	99.5		1,416	98.7		1,135	97.1	
無回答	25	1.2		7	0.5		19	1.3		34	2.9	
合計	2,049	100.0		1,341	100.0		1,435	100.0		1,169	100.0	

[-]は質問項目になかったもの

出典：厚生労働省（2007, 2012, 2016, 2021） 筆者作成

## 5. ホームレスの再発要因

ホームレスの再発要因については、生活実態、ソーシャルネットワークとホームレス発生との間の因果関係などの研究が進められている (Crane&Warnes,2002) . さらに再びホームレスに至る要因については、人間関係の希薄さ、生活上の問題を解決するためのサポートネットワークのなさといったソーシャルネットワークの脆弱さが指摘されているが (堤, 2006: 山田, 2020, p. 5) , それを実証的に説明することは難しい. 再びホームレスに至る要因を探る難しさは、脱却して移行した人たちをいかにして見つけ出すかという課題にぶつかる (Crane&Warnes,2002) . この課題を乗り越える研究の一つに Crane らの研究がある. Crane らは 5 年間にわたるイギリスの高齢者ホームレスを対象とした追跡調査を行った (Crane & Warnes, 2002) . その結果、多くのホームレスがホステル (NPO などが運営する居住施設、長期滞在が可能) で生活している間は、他の住人との付き合い以外に友達がいらない人が多く、ほとんどの人がテレビを見たり、お酒を飲んだり、散歩をしたりする以外にはほとんど何もしておらず、人間関係が希薄なこと、それを理由にホステルを自己退出してしまう例が多いことを報告している. また、ホステルからアパートなどへ定住したことで、社会的に孤立し、寂しさを感じる人もいる. 定住を果たした元ホームレス高齢者は、友人がおらず、近隣の人と話すこともほとんどなく、人間関係の希薄さから寂しさを訴えるが、デイセンターなど新たな社会的参加には拒否反応を示し、再びホームレスへ戻ってしまう例が多いことを明らかにしている. 自分が帰属するコミュニティの欠如と人間関係の希薄さが再発の要因であると報告している.

2016 年に行われた日本の調査では路上生活から自立をするための施設 (自立支援センター) を利用したもののうち、施設から退所してから路上生活に戻るまでの期間を見ると、「6 ヶ月未満」が 63.7%, そのうち「1 週間未満」が 21.6%, 「6 ヶ月 1 年未満」が 17.4%, 「1 年以上」が 18.9%とであった (厚生労働省, 2017). 年齢別にみると「45~54 歳以下」の者では「1 年以上」の割合が高く、「55~64 歳以下」の者では「1~3 ヶ月未満」の割合が高く、「60 歳以上」の者では「1 週間以内」の割合が高くなる傾向にある. ホームレス状態から脱した状態へ移行した人々が施設へ移転し、施設からアパート等へ移行したとしても多くが 6 ヶ月未満で路上へ戻っており、60 歳以上はその期間が 1 週間未満と他の年齢層に比べ短い. その理由として 60 歳以上は「期限到来による退所」や「自主退所、無断退所による」割合が他の年齢層に比べ、就労により退所をしていないことから、施設の入所期間内に福祉制度を利用し安定した住居への移動が果たせない限り、路上に戻る確率が高くなる. 一方、59 歳以下では「会社の寮、住み込み等による就労」や「就労してアパート確保」により施設を退所した者の割合が高い傾向にあるが、路上生活へ戻った理由については、「仕事の契約期間が満了したが、次の仕事が見つからなかった」が最も多く 32.1%, 次いで「周囲とのトラブルや仕事になじめない等により仕事をやめた」が 26.4%, 「生活の面で失敗があった」が 11.3%である. このような壁に向き合った際に、相談できる機関や人がいた場合、必ずしも路上生活へ戻らなくともよいケース、す

なわち未然に防ぐことができるケースも多いと考えられる。これらの実態からは日本におけるホームレスの自立支援には当事者の人間関係の希薄さとコミュニティの欠如が影響しているかどうかは不明である。

また、就労により施設を退所した後のアフターフォローは、施設によって異なり、統一したシステムは存在しないため、施設側の人材や資金面に左右される現状である(虹の連合, 2007)。

ホームレスの再発要因を探る研究は, Crane ら(2002)も述べているごとく, 蓄積されていると言いはし難い。今後各国において本格的な調査研究が期待されているが, ホームレス再発要因に関する研究の難しさは, 脱却して移行した人たちをいかにして見つけ出すかという問題がある。何らかの形で, 支援サービス機関やボランティア団体の支援を受けて脱した人々については, 追跡支援やフォロー体制が何らか施された記録が存在しているが, そのような機関とは無縁で個人的に解決し, 脱した人々については記録データがないことがほとんどである。そのため, 路上から脱し住居に移動してから何らかのコンタクトがない人は研究対象とはなりにくいという課題があり, どのような要素が再発防止を成功させるかについては未だに説明がされていない。

## 6. ホームレスへの対策

1990年代までのホームレス対策は, ホームレスに陥った人たちをホームレスから脱することを支援するための対処法が主流であった。その対処法としては, 緊急シェルターや一時的住居の提供などの住居支援, 生活所得や医療費補助などの福祉支援, 職業訓練や雇用機会の提供等の労働支援が中心であった。

米国は住宅・雇用・福祉に関わる包括的アプローチを施策に位置づけ (United States Interagency Council on Homeless, 2010) 取り組んできた。具体例として, 包括的アプローチによりファミリーホームレスへの短期家賃補助支援プログラムを利用したホームレスは, 雇用を獲得し住宅マーケットの家賃を支払うことができるようになったものが 46%を占め, プログラムの有効性があると評価された。しかしながら, この評価に対する課題として, 約半数は雇用を獲得しても定住化が果たせなかったことを挙げ, ホームレスの定住化を推進する方策を探することは難しいとの見解が示された (Meschede& Chaganti, 2015)。

この短期家賃補助支援プログラムのベースとなっているモデルは, 1990年代にアメリカの長期間路上生活をしていたホームレスを対象に開発された「ハウジングファースト (The Housing First model)」である。

路上生活から住居へ移行する前に, 食事配給や応急処置などのサービスを提供する緊急一時保護施設 (シェルター) へ, 一時保護施設から支援センターへとだんだんと独立した住居へ誘導するアプローチ「トリートメントファースト (The Treatment First model)」に対し, 「ハウジングファースト」はまずアパートなど快適な住居へ人々を移動させることに焦点を当て,

住居生活が維持していけるように当事者の個々のニーズに応じたサービスを提供するモデルである。

「ハウジングファースト」の効果は、長期間路上生活をしている人々、特に精神疾患・精神障害をもつ人に有効な策と高く評価されている (Meschede&Chaganti,2015) . カナダ, オーストラリア, フィンランドではホームレス対策に「ハウジングファースト」を取り入れているが, フランス, 日本は一部を試行的に行っている状況にあり, ホームレスにならないような予防措置としてのアプローチとしては適さないため, 予防において効果的な策を同時並行的に行うことが必要であるという課題もある (Busch,2010) .

様々なホームレス包括的対策を展開してきた中で, 住宅・雇用・福祉支援の対策では解決が難しいホームレス問題への対処に対する議論がなされ, 2000年代以降は, ホームレスに流入する以前, もしくは早期に介入することをホームレス施策の核とするホームレス予防に重点が移行した (岡本, 2012) . ホームレス予防対策には, 長期的で安価な住宅供給, 就労継続支援, 地域生活における経済支援などの外的支援があるが, これらの外的支援だけでは, 効果的な予防対策を実施することが困難であることが指摘されている (Dennis,Stephen,&Byrne, 2011) .

ホームレス予防対策には上記の外的支援に加え, 他者との人間関係や同じ境遇にある人同士のピアサポート, 地域生活の自己管理を促す精神的サポートなど内面的側面からの支援が必要であることが指摘されている (Amanda et. al., 2016) . しかしながら, ホームレス状態から脱した人たちの生活実態は, これまで行われた調査が少なく, 実態の把握が進んでおらず (鈴木, 2009) , ホームレス再発予防のための実践に有効とされる支援については試行錯誤の状況にあり, ホームレスに至ることを予防する支援策と再びホームレスに至る予防策が同じなのか, 異なるのかは未解明である。

ホームレス状態から脱した人たちへの再びホームレスに陥らないようにする予防対策として, 英国ではホームレス状態から定住化を果たした後に再びホームレスにならない予防施策として, 賃貸権維持チームの設立や, 公的給付に依存する生活から家具の修繕等のプログラムによる雇用への移行をはかる支援がある. 具体的には, 1) 芸術活動やワークショップを実施しホームレスに自信を持たせる支援, 2) 仕事や訓練機会提供を通して住宅の賃貸契約が維持されるよう支援, 3) 家具の修繕, ガーデニング, 運転免許取得等のプログラムを通して公的扶助に依存する生活から雇用へと移行していく支援, がある (中村, 中山, 岡本, 都留, 平川, 2004) .

ドイツでは自治体が滞納賃貸を肩代わりする措置をとる支援がある. 具体的には住宅獲得後のソーシャルワーク援助がある (中村ら, 2004) .

フランスでは社会参入宿泊施設から社会的レジデンス (住宅) , その後に社会住宅へ移行していくステップ型を予防施策としている (中村ら, 2004) .

日本のホームレス支援の要となる法「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法 (以下, 自立支援法) 」 (2003年施行) は, ホームレス向け特別対策として組み立てられている. 特徴

として地方自治体の実情に合わせて対策を講じることから、ホームレス支援は大都市圏に集中して行われる（渡辺, 2010:49）。

このホームレス支援が強く打ち出しているのは自立支援システムである。自立支援システムは、ホームレスの就労への努力を支える支援である。施策の中で、路上生活者対策事業は、自立支援事業、総合相談事業、緊急一時宿泊事業として位置づけられた（東京都, 2008）。

自立支援システムの中心となる自立支援センターにおいては、巡回相談から緊急一時保護、自立支援、地域生活継続支援まで一貫した事業を展開している。渡辺芳は、「自立支援センターは比較的短期間で安定雇用と就労自立を目指すため、比較的若い壮年層、労働経験、家庭があり、野宿歴の短い人に向く施策である」（同前：65）として、就労自立以外の支援を必要とする人を切り捨てることになると批判している。東京都の示す自立支援システムは、自己の生活すべてを自分の責任で統制すべし、という個人化のもつ自己責任の強調を踏まえている。

「ホームレスに対する支援システムを社会が用意する一方、ホームレス自身にも自立への意欲と自助努力が求められます。さまざまな状況が重なってホームレス状態に陥ったとしても、そこから脱却する仕組みを社会が用意する以上、その仕組みを活用して自立を回復していくのは本人の責任です。職業訓練を受けて技能を高めたり、就職後の定着をはかるのは困難なことではありますが、これは多くの人も同様に経験していることです」（東京都福祉局生活福祉部編 2001：37）。

特に日本のホームレス対策については就労を通じた自立支援であり、予防システムを組み込んだ支援は具体化されていないと、その問題点が指摘されており（渡辺, 2010）、年齢的な特徴を踏まえた予防支援についても着手がされていない。先行研究から高齢者ホームレスの支援については人間関係とコミュニティからのアプローチが重要であることが指摘されておりながら、ホームレス人口の多くを占める日本の高齢者ホームレスへの対策についてはこれらの観点からの評価がされていない。

ホームレス再発を防ぐ支援に関する研究は、路上から脱した時期に応じた介入が必要であることや（Igor, Matty & Nick, 2009; Dennis, et al., 2011）、再びホームレスに陥ることを予防する支援の介入時期と介入内容は住居に移動してからの時期ごとに異なること（Crane & Warnes, 2002）、当事者の主体性やセルフケアを促進するための支援者からの勇気付け、当事者の意思決定に伴走することであることが明らかになっている（Crane & Warnes, 2002; Crane, Joly & Manthope, 2016）。すなわち、再びホームレスに陥ることを予防する支援の鍵として、公的給付を受けていることに加え、支援者からの勇気づけや当事者の意志決定に伴奏があること、ホームレス状態から安定した住居へ移動した時期に応じたサポート、当事者の主体性やセルフ

ケアを促進するサポート,すなわち彼らをエンパワーメントする支援も必要である(Crane, Warnes,&Fu,2006;Warnes,Crane&Coward,2013;Abe,et. al.,2020).

Craneらの5年間にわたる高齢のホームレス当事者を対象とした追跡調査研究によれば,ホームレス状態からホームレスを脱した状態へ移行した人々の中には,年齢の上昇,疾病や障害の保有率の高まり,その他の要因により,移行後の生活が移行後の期間に伴い変化する傾向が示されている(Crane&Warnes,2002).これらの結果からも,再発を予防するためには,特に高齢者ホームレスはホームレスであると同時に身体・精神・認知的な老化を伴うvulnerableグループの人々でもあり,この二重性を踏まえた支援が特徴となっている.ホームレス状態から社会復帰を支援するアプローチについては,社会の中で再び「役割」や「人としての尊厳」「居場所」を回復することが功を成す(後藤,2013).後藤(2013)は,生活保護を受けてアパート等で生活しているホームレス脱却者へのインタビュー調査を通して路上生活からの実質的脱却には「居住や職業,社会制度による収入の確保とフォーマルな社会の構成員としての資格の回復」「日常生活における親密な人間関係の形成」「自尊感情の回復」の3つの側面の回復・形成が重要であると指摘している.ホームレスはホームレス状態に至るまでに社会的関係など様々なものをはぎ取られた結果,路上に放り出された路上(野宿)生活者が,アパートなど居宅へ移動できたからといって,全てが回復するわけではない(堤,2006).堤(id)は,元ホームレスの居宅移行後の生活支援をいかに行うかという「未解決」の重要課題が残されていることを指摘している.ホームレスになった者が避けられなかった社会環境の影響がホームレスになった原因として強かったとしても,一般世論は当事者の選択の結果であるとすることや,働く意欲がないなど個人の要因がその原因で自業自得の結果だと歪んだ理解をしやすいのである.この一般世論の認識は,ホームレスになった者の内部においても根強く組み込まれており,当事者自身がホームレスになった原因が自業自得であるとのリスクを己がかぶるべきであるとの見解をもつ可能性は否定できない.内尾(2012)が指摘するように,ホームレスに社会から優しさに満ちた哀れみの眼差しを向けられても,彼らが劣っている,彼らは社会の役に立たないとするバイアスを社会が持っている,彼らの尊厳に配慮した支援には結びつかない.言い換えると,ホームレス状態からの回復を効果的に持続的に支援するためには,彼らの備えている力や強みを歪みなく理解することが重要である.特に高齢者ホームレスにおいて特に求められているものは何かという視点が不足している.

## 7. ホームレス予防の理論的枠組み

ホームレス予防の取り組みを組織化するために用いられる枠組みは,予防を概念化するために公衆衛生パラダイムを援用してきた(Shin,Baumohl,Hopper,2001; Burt,Pearson,& Montgomery,2005).公衆衛生学で用いる予防には3つのレベル(一次予防,二次予防,三次予防)がある.

一次予防は新規に発症する事例を予防するという考えであり、特定の状況を獲得するリスクの低減に焦点を当てている。ホームレス予防においては、ホームレスに流入することを予防することがこの一次予防に該当する。一般集団または大部分の集団の中で未然に発生を予防するホームレス一次予防策としては、住宅供給、福祉的サービス供給である。住宅供給は、安価な住宅にアクセスしやすいこと、十分な供給量があることが相当する。福祉的サービス供給は、所得給付の利用、住宅手当、雇用の保護が相当する。

二次予防は、初期段階の状態に対処する、つまり発症に至る前に早期に治療をすることで対処しやすいという考えである。ホームレス予防においては、ホームレス状態への早期介入と対処が該当する。ホームレスになるリスクが高い人々に焦点を当てた介入の二次予防策は、施設ケアの経験を有している人々、住宅からの立ち退きを迫られている人々、家族等との関係が崩壊している人々への早期介入である。

三次予防は、一旦確立された特定の病状の進行を遅らせるか、またはその影響を緩和することを目的とし、リハビリテーション、社会復帰や再発防止である。ホームレス予防においては、ホームレス状態から脱した後の社会復帰や再発防止が該当する。既にホームレスにある人々、ホームレスを経験した人々に焦点を当てた介入の三次予防策は、再びホームレスになることを防ぐための「再定住」である。

ホームレス予防は上述の3相方法論が長らく支持されてきた。一方で、Abeらは保健・社会サービスの提供には、これらのサービス自体が、それを利用する個人の無力化を意図せず助長するリスクがあること、そのためそのリスクを低減するためには3相方法論に4次予防を加えること、4次予防のコンテンツとしてエンパワーメントを加えることを主張している(Abe, et al., 2020)。その理由としてホームレスの経験を持つ人々の多数が社会からの疎外感を抱えているため、サービス提供者と当事者の間には大きな力の差があることにより、当事者が本来有する力を発揮できないリスクがあること、このリスクに積極的に対処する方法として、第4次予防を取り入れるべきであるとする。さらに第4次予防に自分たち自身でエンパワーメントをしていくための空間を構築することを含めるべきであると提案している(Abe, et al., 2020; Gaetz & Dej, 2017)。

## 8. まとめ

ホームレスに関する研究の文献レビューから、ホームレスの入口予防すなわち1次予防と早期に介入する支援である2次予防の実態については、諸外国で多くの研究成果があることがわかった。しかし、脱却プロセスの実態、すなわち3次予防についての研究は、非常に少ない。

高齢者が若い層や壮年期のホームレスと同じように就労を中心とした回復プロセスなら、あえて日本のホームレス高齢者を対象にして研究を行う必要はない。しかし、高齢者の回復プ

ロセスは公的扶助や安定した住居提供, 加えて他者との人間関係の回復や同じような境遇にある人同志のつながりも必要である。

諸外国におけるホームレス人口は青年期や壮年期, ファミリー層が多く, 高齢者ホームレスの占める割合は少ない。日本ではホームレス人口の大半を単身中高年男性が占めている。さらに彼らの多くは単身中高年男性が多く集住する特定の地域で独特なコミュニティの中で生活をしている。高齢者ホームレスの特徴からは, 加齢により脳や身体の機能低下, 病気や障害による健康の喪失, 高齢者特有のライフイベントによる影響から人間関係や帰属するコミュニティが他の年代層を対象とした研究とは異なることが示されている。この章で行った文献レビューによると, 高齢者に焦点をあてその問題を検討する研究が少ないことがわかる。また人間関係やコミュニティといった社会的コンテキストの研究もまだ足りない。後藤 (2013) が日本のホームレスからの脱却に向けた居場所の役割を分析しているがもっと研究がされる必要がある。

本章で紹介した, 社会構造的問題としてホームレスをレビューしたアメリカやイギリスにおける, 住居, 孤立化, コミュニティについての文献は, 日本社会との比較する面での理解に有益であった。「コミュニティ」と欧米諸国で用いられる用語が日本でも使われているが, その意味は日本のコンテキストに沿っており, 必ずしも意味するものや使われ方が統一されていない。この用語は, 欧米諸国の社会文化背景に沿っており, 日本のホームレス事例に直接翻訳できるものではない。日本の高齢者ホームレスが路上生活から脱し生きていくために彼らの生活の実態を考えると, 人間関係は単に人と人とがつながるだけのものではなく, **Barker(2012)**が指摘しているように資源としての他者や社会的紐帯の価値を内包する質・内容を踏まえる必要がある。ホームレスのように家族や社会から一旦離れてしまった人が再び他者とつなぎ直すには, 形式的・表面的な者では意味がない。

路上生活中に生きるために築いてきた人間関係と, 路上生活から脱却し地域生活に移行した後に築く人間関係は異なっていることが考えられる。先行研究からの分析においても(後藤, 2013; 渡辺, 2010), 「再び路上に戻らないために元のつながりのあるホームレスの仲間とは関係を切っている」, 「新たな場所に帰属することで他所では得られない安心感をもてる」など, 変化する生活に必要な資源としての他者や社会的紐帯の価値を見出している。ホームレスの社会関係資本について, **Barker(2012)**は実践の観点からつながり (**connections**) と関係 (**relationship**) は同義ではないと断った上で, そのどちらにも3つの構成要素が含まれるとしている。それらは, ①集団との連絡, ②経済的・文化的・社会的な資本といった重要な資源へのアクセス, ③信頼, 互酬性の規範である。**Barker** は若年層ホームレスを例に, 支援者が被支援者と連絡をとり, 被支援者が支援者を信頼するならば, 自由に資源を使える支援者と連絡が取れることは社会関係資本を形成するのだという。すなわち, 信頼や互酬性の規範は社会関係資本として利用できる社会的関係の中核を成すものとも指摘している。後藤 (2013) が示すように,

社会的排除のプロセスに射程をし、ホームレス状態の脱却は段階を踏んで回復していく可能性もある。だが、他の先行研究からは、同じくホームレスだった人とのネットワークを構築している、あるいは自ら主体的に新たな人間関係をつくっていくといった行動は見えてこない。

本章の文献レビューはまた、日本と他の国の社会的相違も示した。日本では、アメリカやイギリスのような社会構造に組み込まれた人種問題、階級差別も深刻ではない。ホームレス状態にあった人たち、特に先進諸国の男性は失業を主要な社会的組織からの逸脱としてしまう個人的失敗として考えがちである。他方、南欧では、社会はそれほど個人主義的ではなく、労働市場から排除された人々は、家族が社会統合のメカニズムをもっているが故に、社会関係からの排除の影響を受けるわけでない（Bhalla&Lapeyre,[1999] 2004=2005）。例えば、イタリアでは多くの個人が経済的に貧困でありながらも、強い社会的な結びつきを維持しており、家族関係や友人とのネットワークに頼っている。中央アジアにおいても経済的苦境にある個人に対してインフォーマルな精神的・物質的支援を提供している。Bhalla&Lapeyre で指摘されているように発展途上国の非常に貧しい人々の間では、貧しくなればなるほど所得や社会保障を得るための社会的な結びつきの必要性が大きくなる。

これらの国では、貧困や極貧なために、人々はフォーマルな制度的メカニズムに代わるインフォーマルなそれを見つけようとする。すなわち経済的排除があるために、人々はやむをえず社会関係のネットワークをとおして、貧困や極貧への対応策を探し出そうとする。

一方、先進工業国では豊さと福祉システムが貧困者をカバーするために、家族といった社会制度と社会的支援のネットワークが衰退する原因となっている（Bhalla&Lapeyre,[1999] 2004=2005:113）。この極貧状態にある中で人々はやむをえずインフォーマルな関係を結ぶこととは、先行研究（後藤, 2013; 渡辺 ; 2010）が分析した日本のホームレス高齢者の野宿生活中の人間関係と類似点が見られる。さらに、路上生活中に得たインフォーマルな関係を活用し、福祉システムへアクセスできたことで路上生活を脱することができたホームレス高齢者たちは、福祉システムにより経済的にカバーされるが社会的支援のネットワークは衰退することとなる。

日本のホームレス高齢者は、路上から脱し住居に移行したまもない時期や、生活が軌道に乗り始め慣れた時期だけでなく、生活が安定した時期においても、単に支援団体や福祉システムからの支援を受ける人というだけでなく、知り合いとの弱いつながりやもっと強いつながりのある知人、友人を新たに作り、その人間関係と彼ら自身が参加するコミュニティから何かを得て再び路上へ戻ることを予防できているのではないか。弱い紐帯の関係から強い紐帯の関係へと発展させることで、役割の獲得など生活の張り生きがいに役立っているのではないだろうか。

日本のホームレス高齢者は家族や親族には頼れない状況にある分、家族のように親身になって受け入れてくれる人への信頼があることで、彼らは新たな人間関係をつくっていきけるように思われる。

## 9. 用語の定義

### (1) ホームレス

Home (ホーム) は自分が住む場所全般や生活の拠点となっている場所、家庭、故郷、帰る場所、心の拠り所を指す言葉である (ランダムハウス英和大辞典, 2010, p. 1281) . 英国で用いている Home (ホーム) は家の形を問わず自分が住む場所、安息の場所、くつろぎを与える生活の拠り所という意識が強い言葉である。このホームを失うという意味は単に House (ハウス) : 建物の家がないというのではなく、拠り所となる安息の場所がないということである。

一方で、ホームレスとは、野宿者を含む不安定な住まいに住む層全般を指す。欧米社会では、不安定就労者を含めてシェルターや友人宅に住む、不安定な住居形態しか持ち得ない人々をホームレス (Homeless) と呼び、日本では「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」(「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」) とし、路上生活<野宿状態>にある者に限定している。これは、米国の路上生活者と同義である。

ホームレスの定義は、国により定義が様々に異なり (OECD, 2020), 英国では、「ホームレス」は、物理的な住宅の不足と社会的帰属意識の喪失の両方を定義に含めている。米国では、決まった住居をもっていない人、公的民間のシェルター (福祉宿泊所、緊急一時宿泊施設等を含む) にいる人、人の住まなくなった建物や道路や公園や路地裏などに寝泊りしている人としている (U.S. Department of Housing and Urban Development, 2013) . いくつかの国では、日本のホームレスに最も近い言葉はシェルターや一時的宿泊施設ではない寝床 (公園・駅・道路等) で寝泊りする人を「Rough Sleepers (屋根なし野宿者)」と表現する。国際機関、政府、研究者または市民社会が採用するホームレスの定義は、言語、社会経済的条件、文化的規範により、その用語が使用される目的によって大きく異なる。しかし、ホームレスであることは、物理的居住所の奪取に言及するよりも豊かさの定義なしには完全には把握されていないことについて一般的に同意されている。

またホームレスの定義は、緊急避難所や一時的救護施設で「急場しのぎの場所」に眠っている人々のように、個人がどこに住んでいるか眠っているかの場所に基づいていることが多い。

場所に基づいた定義は明確である一方で、誰がホームレスであるかの認識を歪める傾向がある。国連経済社会省の統計部は、シェルターや宿舎のない人を「一次的なホームレス」と、通常安定した居住地を持たずかつ社会的つながりを喪失した人を「二次的なホームレス」と定義している (UN, 1996) . オーストラリアのホームレスは、何かに欠けていることを参照して

定義されており(図. 1), 社会的なつながりを失い社会的に排除されているという側面もある。単に野宿状態にあるものだけではない。

<p>最低住宅居住者 (Marginally housed) 「準ホームレス」 バス・トイレが共同等で居住している人々 (飯場や社員寮等)</p>
<p>第3類型 (Tertiary homelessness) 「ドヤ住居型ホームレス」 民間の簡易宿所等の一間で長期的に生活する人々 (どやのような居住形態で, 部屋の中にトイレ・バス, 台所がない)</p>
<p>第2類型 (Secondary homelessness) 「転々としているホームレス」 様々な形態の短期的避難場所 (友人や知人の家, 緊急避難場所, 保護施設, ドヤ, インターネットカフェ, サウナ, 一時的公設避難場所) を移動している人々</p>
<p>第1類型 (Primary homelessness) 「路上生活型ホームレス」 一般的な居住形態で生活していない人々 (路上, 自作の段ボールハウスや木材ハウス, 駅舎内, 橋の下, 公園)</p>

図1. Definition and Meaning :Contemporary Homelessness 筆者作成

本論文では日本のホームレスを対象とすることから「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」(第2条)に規定する「都市公園, 河川, 道路, 駅舎その他の施設を故なく起居の場所として日常生活を営んでいる者」を「ホームレス」と定義する。

## (2) ホームレスから脱した者

路上生活者の表現は東京都で用いられ, 日本全国で使われるようになった。主として行政が野宿者に対する呼称として用いている用語である(青木, 2000:101)。路上(野宿)生活だけでなく, 路上(生活)の方が多くなってからの生活も含んでいる。なお, 途中で施設や病院等に入所しても短期間であることや, 路上(野宿)生活とそれ以外の生活を比べて路上(野宿)生活の方が長期であれば路上生活者としている。この路上生活者に対し, 鈴木(2009:161)は脱路上生活者を「畳の上上がった人」と定義している。

国によりホームレスの定義が異なることから, 脱ホームレスを定義する共通のものはない。英国ではホームレスから脱した状態として「Resettlement」と表現し, 次のように定義している。

Resettlement is the move a homeless person makes from temporary housing or the streets into more permanent, often independent, accommodation. (Homeless organization UK, 2012)

路上生活から脱却するために生活扶助の適用がされることが大きく影響していることから、本論文では脱ホームレスを生活保護などの公的給付を受け、路上から病院や自立支援センターなどの施設で暮らす一時的な生活ではなく、簡易宿所等も含めた住居に継続的に住み続けて生活している者と定義する。

### (3) 「自立」と「自律」の違い

一般に「自立 (Independence)」とは、「他の援助や支配を受けずに自分の力で立つこと」「ひとりだち」(『広辞苑』)とされている。

「自立」は意思決定における自己決定権と自己管理遂行能力に裏打ちされた概念で、身体・心理・社会・経済の4次元でこれを捉えることが可能である。前述の4つを「道具的自立」とし、社会学においては「目的的自立」としての「人格的自立」を加えた「自立」概念が一般に使用されている。

社会学の分野ではこれまで「自立」は典型的な「自助的自立」、すなわち他者や制度に依存しない状態と認識されてきたが、生涯を通じて自助的自立が疾病や障害などにより脅かされることがあり、他者や制度への依存状態も、生活目標や思想信条、生活様式や行動の実際について、自己選択や自己決定の権利が可能な限り確保されていれば、「自立」と捉える(社会学辞典, 2010)。

福祉学の分野における「自立」の概念は、「自立」の定義をめぐる様々な検討から、3つの点が指摘されている。1つ目に、「自立」の概念は、自助や自律をも含む多義的な語として用いられていること、2つ目に、「自立」概念は、同じ福祉の学問分野であっても、その領域によって捉え方に違いがあること、3つ目に、「自立」概念は、時代や社会の流れにより新しい意味内容が提起され大きく変化することである(牧園, 2009)。

1980年代以降の新自由主義体制下にある社会では、とりわけ自助的自立と自己責任をめぐる風潮が顕著であり、相互依存性を考慮してした「自立」の概念の検討が必要だとされている(社会学辞典, 2010, p. 683)。

他方、「自律(Autonomy)」とは、「他からの支配や助力を受けず、自分の行動を自分の立てた規律に従って正しく規制すること」「自分の欲望や他者の命令に依存せず、自らの意思で客観的な道徳法則を立ててこれに従うこと」(『広辞苑』)とされている。

語源であるギリシャ語の *Autonomia* は「自らの法」という複合語であり、政治的な自由や自治・独立の意味を含んだ「自己統治」を意味していた。Kant は、人間の尊厳を、属性や身分といった伝統的・封建的な価値にではなく、自律によって導かれる道徳性をおくことによって、「理性による自己統治」としての「自律」を位置付けた。現代社会における「自律」には、自立の意味を含むとされる。

ホームレスとなった人たちが、支援や制度に依存しながら生活を立て直し、ホームレス状態から脱却していくための社会的援護の方向性を考えると、個別の自己の「自律」よりも、より広範で非意図的な相互関係も含む「自立」への影響・効果を明らかにする方が、多くの困窮状態におかれている人たちに資すると考える。

本論文においては、ホームレスとなった人たちが自己選択や自己決定の権利が可能な限り確保されている状態を、「自立」と捉えることとする。

#### (4) ソーシャルキャピタル（社会的資源）

ソーシャルキャピタルについては、数多くの定義や理解がある。しかし、本研究では、主に Bourdieu のソーシャルキャピタルの定義と分析によって枠づけられる。

Bourdieu は、ソーシャルキャピタルを「多かれ少なかれ制度化された相互の知人関係や認知関係の耐久性のあるネットワークの所有、言い換えれば集団への帰属と結びついた実際のあるいは潜在的な資源の集合体」(Bourdieu,1985:248) と定義している。彼の分析では、集団への参加と社会的絆を資源として動員することで得られる利点が検討された。こうしたネットワークを通じて、社会的主体は他の資源へのアクセスを獲得し、社会的資本を経済的資本（融資や雇用など）や文化的資本（結社・提携による情報・教育・地位へのアクセスなど）に転換することができるのである。本研究では主体間のつながりに焦点を当てることから Bourdieu の定義を本研究での定義として援用する。

「人間関係」や「人脈」という考え方は、ソーシャルキャピタルの現れであるが、同義ではない。他者との関係は、ソーシャルキャピタルの蓄積のための前提条件ではあるが、十分なものではない。むしろ、「ソーシャルキャピタルは、人物間の関係が、行動を促進するような形で変化するとき作られる」(Coleman,1990:304) のである。このように、ソーシャルキャピタルとなる関係もあれば、そうでない関係もある。

Bourdieu は、社会的主体が持つソーシャルキャピタルの量は、効果的に動員できる人脈の大きさと、つながりを持つそれぞれの人々が持つ資本（経済的資本、文化的資本、社会的資本）の量によって決まるとしている (Bourdieu,1986:249) 。したがって、ソーシャルキャピタルは、ネットワーク内の主体が保有する経済的・社会的・文化的資本と完全に独立したものでは決してない。社会的関係が資本として活用されるためには、信頼と相互扶助の規範が中心となる。Portes は、ソーシャルキャピタルは他者との相互義務の蓄積と関連しており、その中心は互惠性の規範であると述べている (Portes, 1998:7) 。他者との関係から利益や行動を得るためには、信頼、誠実、相互義務に依存する。Winter は、「社会的資本とは、特定の規範の内面化と伝達である」と述べている (Winter, 2000:9) 。ソーシャルキャピタルを構成する社会的関係やネットワークの質を支えているのは、互惠性や信頼といった力学や規範である。

ソーシャルキャピタルに関する研究では、一般的にそのポジティブな効果や結果が強調されている (Portes,1998:15) . しかし, 社会的関係における義務や期待, 制裁といった負の効果や有害な側面もあり, それを説明する必要がある (Putzel, 1997;Portes,1998;Stablein, 2011) .

ソーシャルキャピタルがポジティブなものでもネガティブなものでもないことは (Portes, 1998) , ホームレスの高齢者の社会性のダイナミクスを考察する際に見えてくる.

#### (5) 社会的排除

社会的排除 (social exclusion) の概念が登場する歴史的な背景として, 従来議論されてきた「貧困問題」が主に所得の面を焦点化するのに対し, 社会的排除は個人の帰属や参加といった側面からの逸脱状態を強調し, 問題にする (岩田, 2008 : 18-21). つまり, 所得の次元に限らず, 市民としての生活を営む上で直面する, 様々な次元における剥奪を問題とするのである. 特にフランスではホームレス (家なし sans-abris) は, 社会権やシティズンシップをも剥奪された社会的排除の極限状況と捉えられる (渡辺, 2010:85-86) .

また, 社会的排除はその状態や結果のみならず, 過程をも問題にする点で, 従来使用されてきた貧困概念とは異なる, 社会的排除と同様に多次元的である「剥奪」の概念は, 人が置かれている状態を指すものであり, その過程について含意しないのに対し, 社会的排除は結果だけでなく, 排除に至る過程にも着目する.

こうした社会的排除概念を用いることの理論的な利点として, 渡辺は, ①貧困の多元的側面を説明すること, 特に, 貧困の経済的次元だけではなく, ソーシャルネットワークからの排除によってもたらされる社会関係的次元, そして, シンボリックなレベルでの排除 (自己排除を含む) をも含んでいること, ②動的なプロセスとしての貧困状態の説明を行なっていることを挙げている (渡辺, 2010:86) .

加えて, 社会的排除の概念が貧困や剥奪といった既存の概念と比較して異なる点は, 排除の概念が併せ持つ「累進性」, 「相対性」, 「関係性」の3つに集約される (Bhalla&Lapeyre, [1999]2004=2005) . 「累進性」とは, ある一つの領域での排除が他の領域での排除を誘発する状況を指す. ある次元での排除が, 別の次元における排除を誘引し, 排除が累積していくことで, 極端な貧困と孤立がもたらされるとする. 例えば, 不安定な仕事と長期失業に伴う労働市場からの排除は, 家族や家族外のソーシャルネットワークの弱体化をももたらすというものである (Bhalla&Lapeyre, [1999]2004=2005:4) .

次に「相対性」とは, 社会的排除の基準やその度合いを測る尺度が, 社会やその発展段階に応じて異なることを指す. すなわち, 社会から排除されている状態がどういう状態であるかということが, 社会や時代によって変遷することを意味する.

「関係性」とは, 社会的紐帯が形成された「有機的連帯」の欠如を指す. 社会的排除が社会関係の中で形成される状態であることを強調される所以である. 家族関係や交友関係, コミュニ

ティにおける関係性は、既存の社会福祉体型で制度化されたサービスに劣らず、個人のアイデンティティと権利の保証において重要な役割を担う。自身の身体しか資源を持たない人は、自分自身のアイデンティティを形成・維持する場所としての親密圏やソーシャルネットワークからの排除を含んでいる。これは自己と社会との関わりの安定性を欠くということにもつながり、自己排除、自己尊厳を保てない状況へと連動する（渡辺, 2010）。

シルバーは、社会的排除の言説を次の 3 つに分類している。すなわち、①[連帯 *solidarity*]、②[特殊化 *specialization*]、③[独占 *monopoly*]の 3 類型である。①の連帯とは、フランスの共和主義思想に根ざしたもので、社会的排除を連帯に基づく人々の紐帯の断絶とみなしている。②の特殊化とは、アングロサクソン諸国で支配的な自由主義に深く根ざしている。ここから想定される「排除された人びと」の集団は、差別に苦しむ人びと、障害や高齢などを理由に労働能力を持たない人びとである。そして、もう一つの排除された集団は、十分な就労能力をもつ人びとの中で貧困に陥っている集団である。③の独占とは、ある社会的集団による別の社会的集団の社会的・経済的機会へのアクセスを制限・排除することで利益を独占することである。

本論文において、この排除における「関係性」に特に注目して議論を行う。

## (6) 社会的包摂

社会的排除に抗するための策として、社会的包摂やワークフェア（就労を前提とした福祉給付）が取り上げられた。

社会的包摂は社会的排除と対をなす形で誕生した概念「社会的包摂（*social inclusion*）」である。社会的排除と同様に決まった定義は存在しない。また、社会的排除のもつ「相対性」を考慮し、社会的包摂に関しても社会に包摂されている状態がどういう状態であるかという問いを議論し続けていく必要がある。

ルース＝レビタスは、社会的包摂についての異なった議論を分類し「福祉依存を排して労働市場への参加、労働参加を強めることで経済効率と社会的包摂を結び合わせる戦略が実際にとられている」という（Levitas, 1998）。岩田はこれを受けて、社会的包摂の中心は積極的労働参加を従来の福祉政策に付加することにあるとしている（岩田, 2008: 168）。

社会的包摂が議論される際には、政策や労働の側面が強調され、物質面の剥奪や排除に焦点が当てられている。しかし、岩田がいうところの多様な包摂への視点で考えていく必要性がある（岩田, 2008: 174）。社会的包摂の可能性として提示されるのは、経済的、政策的視点だけではない。社会的包摂においても「関係性」への着目は、重要な視点である（福原, 2007）。

「関係性」の行為の前提に、その人の社会における帰属の確認があり、この帰属が「自由と選択」の開放的関係の展開を支える（岩田, 2008: 175）。この帰属の確認があることで、個人との繋がりやコミュニティ同士の関係も、包摂の主体として構想することが可能になる。Putnam は、物質的資本や人的資本が個人の生産性を向上させる道具および訓練であるのと同様に、ソ

ーシャルネットワークおよびそこから生じる互酬性と信頼性の規範を社会関係資本 (Social Capital) と呼び、社会関係資本は人々の間の豊かな社会関係の基盤であり、個人や社会にとって望ましい帰結をもたらすと考えられている (Putnam,1993:14) .

日本で最初に社会的排除について取り上げた報告書は「社会的つながり」の再構築を社会福祉の目的の一つにあげ、制度が創り出す社会関係について触れている。そこでの問題提起は、社会的排除や孤立が著しいために、社会保障制度という連帯ネットワークの支援を受けられないことと、福祉国家の制度上の問題を取り上げている (厚生労働省, 2000) .

個人の社会への復帰を目指す戦略としての社会的包摂の試みは、地域においてそれが展開される具体的場面であり、地域福祉の推進によってその現実化を目指すこととされる。そこでのアプローチは、コミュニティの共同性を強めていくことによって実現する (渡辺, 2010) . 渡辺は具体的な戦略として、第一に、地域のもつネットワークを強化していくこと、第二に、地域ネットワークのなかに個人を取り込んで、地域のなかに統合・復帰させていくことという。

しかし、この「社会的包摂の試み」に関しては、多元的なシティズンシップ獲得＝承認の活動を通じて達成される有用性は認められるものの、その具体的な方向性は明示されていない。社会的包摂の試みの現実化をより一層明確なものとするためには、ホームレスは何から排除され、そして包摂されるのか、今一度詳細に見てみる必要がある。

#### (7) 高齢者

高齢者は社会の中で他の構成員に比べて年齢が高い一群の成員である。ただ、高齢者という年齢の定義は一定のものがない。

高齢者の線引きは曖昧かつ主観的な部分があることは否めないが、国連は 60 歳以上、WHO (World Health Organization) の定義では、65 歳以上の人のことを高齢者としている (WHO,1999) .

しかし、アフリカ等の開発途上国の老年人口調査に基づき 55 歳を老年人口の始まりとした。なぜなら、途上国では高齢者の定義を、新しい役割、以前の役割の喪失、社会への積極的な貢献ができないことにしていることとしているからである (WHO,2001) .

欧米諸国の多くは、定年退職を 60 歳から 65 歳と定めており、60 歳以上を老齢基礎年金対象としている。しかし、各国では高齢化の始まりは 40 歳代半ばから 70 歳代のどこかにあると考えられており、高齢者の定義は特に先進国の平均寿命が 80 歳以上に延長したことから、変化し続けている。

日本においては一般的に高齢者というと「65 歳以上」とされることが多いが、法律によって高齢者の定義は異なっている。医療制度における規定と高齢者雇用安定法における定義では高齢者の年齢区分が異なる。1982 年に制定された高齢者の医療の確保に関する法律では 65

歳以上 74 歳までを前期高齢者, 75 歳以上を後期高齢者と規定している (高齢者の医療に関する法律: 第 32 条, 第 50 条) .

一方, 1986 年に制定された高年齢者等の雇用の安定等に関する法律では「高齢者」とは 55 歳以上のものとしている (第 1 条) .

さらに高齢者の住居に関する法律である高齢者の居住の安定確保に関する法律では高齢者を 60 歳以上と定義している. これらの法律では年齢で「高齢者」を定義している.

一方, 福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律では, 心身の機能が低下し日常生活を営むのに支障のある老人と高齢者を定義し, 高齢者・障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律では高齢者を日常生活に身体の機能上の制限を受けるもの, その他日常生活又は社会生活に機能上の制限を受ける者としている. 長期優良住宅の普及の促進に関する法律では居住者の加齢による身体の機能の低下, 日常生活に身体の機能上の制限を受けるものを高齢者と定義している. これらの法律では年齢ではなく身体機能上の制限や機能低下をしているものを「高齢者」として定義している.

ホームレスの高齢者を何歳からに設定するかについては, 政策立案者, サービス提供者, 研究者の間でコンセンサスは得られていない.

ホームレスに関する研究で定義する高齢者は, 過酷な生活により一般人口より 10 歳から 20 歳老けて見えること, 平均余命が一般より短いことから, ホームレスの高齢者と定義する年齢基準は一般より低くするべきであると主張している (Crane & Warnes 2000; Cohen, 1999, Crane & Warnes, 2001).

先行研究では高齢のホームレスは予防可能な疾患や偶発的な傷害で死亡する可能性が高いことから一般の同年代に比べてその死亡率は高いことも明らかになっている (Hwang, 2000; Hwang, O'Connell, Lebow, Bierer, Orav, & Brennan, 2001).

過酷な路上生活等は, 急性及び慢性的な健康問題を悪化させ, その結果, 高齢のホームレスは, 安定した住居で生活している同年齢の人々よりも, 大きな健康上の問題に直面し, 急速に年老いているように見える. 例えば, 米国のフィラデルフィアの研究におけるホームレスの年齢調整死亡率は, フィラデルフィアの一般集団(Hibbs, Benne, Kiugman, Spencer, Macchia, Mellinger&Fife.,1994)の 3.5 倍であり, ニューヨークでは, 一般集団の 4 倍高かった (Barrow, Herman, Cordova, & Struening, 1999).カナダのトロントでは, 45 歳から 64 歳までの男性の死亡率は, 一般集団の男性の 2 倍であった (Hwang,et. al.,2001). これらの研究結果は, アメリカのホームレス対策にかかる費用が平均余命を約 20 歳減少させることになっているという結論を支持している (Wright, et.al.,1998).

Cohen(1999) は, 50 代のホームレスの多くが通常老齢に伴う慢性的な健康問題や障害を抱えており, 自分の人生は終わったと考えるため, 50 歳を高齢者ホームレスの基準値とするべきであると主張している. この基準値は, ホームレス研究者やサービス提供者には広く採用され

ているが (Stergiopoulos & Herrmann, 2003; Cohen, 2012; Greiner, Barken, Sussman, Rothwell & Lavpie, 2013), 公的機関には採用されていない。その理由として, 社会住宅や公的年金などの所得給付, さらには無料処方箋などの医療給付を受けるための慣習的な年齢制限に制約されているためである。たとえばイギリスでは高齢者ホームレスとして判定する際, 公的年金の受給年齢 (女性は 60 歳, 男性は 65 歳) を適用する傾向にある。米国でも高齢者向けの制度は高齢者住宅支援が 62 歳以上, 補助保障所得は 65 歳以上まで利用できない。

本論文では上記の議論と日本における 50 歳以上の転職入職率の低さ (厚生労働省, 令和 3 年雇用動向調査) から研究者の間でコンセンサスが得られている 50 歳以上の者を「高齢者ホームレス」と定義する。

#### (8) コミュニティ

コミュニティの定義は多様である。地理的定義によってコミュニティが理解されることが多いが, コミュニティとは本来, 人々の意識や心理をも含む概念である。すなわち家族や国家といった精度はきわめてわかりやすいのに対し, 境界線がはっきりしておらず, 通常用語法では近隣地域, 村, エスニック・グループ, 仕事や学問の世界などを包含している。

世界大百科辞典によれば, コミュニティとは, (1) 原始共同体, 村落共同体というように歴史学的概念として使われることが最も多いが, (2) 社会学的概念としても用いられる。

社会学辞典 (2010) によれば, 「コミュニティ」とは『人間がともに住み, ともに属することによって, おのずから他の地域と区別されるような社会的特徴が現れる。そのみでなく, そこに住む人々は人間生活全体にわたる関心を持ち, 従ってそこには共同体感情が生まれる』とある。

アメリカの社会学者マッキーヴァーにより, 社会類型の理論としてコミュニティ (共同体) とアソシエーション (結社体) の対置概念が提言されて以来, コミュニティは基本的な社会学概念となっていた。マッキーヴァーは社会構成を分析するために, 自然的契機 (血縁, 地縁) にもとづいて成立する利害関係的集団としてのアソシエーションを考え, コミュニティとアソシエーションが複雑に絡み合いそれぞれの関心が質的・量的に増大, 異質化しながら対立していることが現代社会の様相の一つをなすと説いた。すなわち, (1) 地域社会という生活の場であって, (2) 市民としての自主性と主体性と責任とを自覚した人々によって, (3) 共通の地域への帰属意識と共同の目標と自分なりの役割意識を持って, (4) 共通の行動がとられようとする態度の中に見出されるものである。とくに, (5) 生活環境を等しくし, かつその上昇によって生活を向上させようとする共通利害の方向で, 人々が一致して地域集団活動を展開するとき, そこにコミュニティの発現形態を見る。すなわち, コミュニティをコミュニティたらしめる規定要因は, 古くは (1) 地域的条件, 言い換えれば地域性, 範域性と, (2) 相互関連条件, 言い換えれば相互作用性, 共同性とである。

マッキーヴァーによれば、「コミュニティの基本的指標は人の社会的諸関係のすべてがその内部で見出されうるということである」。コミュニティの基礎は地域性と共同体感情であるとした。しかし時代の流れとともに、地域的条件と相互関連条件との調和は失われ、意図してこれを図らねば得られなくなった。そこで意図的にこれを図るために、(3) 生活環境的条件を想定し、共同でそれをつくり、それを育てていくことになり、今日のように開かれた社会では「コミュニティ」は構成員の心の中にある。つまり、(4) 成員の共属の感情、共通の認識、そして共同の行動がとれるだけの合意といった条件、すなわち態度性の中にあるとする。

マッキーヴァーにより提唱されたコミュニティの一つ、地理的背景をもつコミュニティは、居住地域としての「地域」から「国」ひいては「国際社会」をさすことすらある。そのような地理的背景によって整理される人間集団は、村落や都市などにおいて、共通の利害関係に基づいて人為的につくられる組織でもある。

共通の地理的背景をもつコミュニティとは対照的に、Warren は、社会制度型のコミュニティの定義を提唱したとされる(Warren,1963)。これは、公私にかかわらず、コミュニティ内部の縦の関係性とコミュニティ外部との横の関係性の両方について、権力闘争がいかにか繰り広げられているかに焦点を当てた定義である。さらに文化的あるいは歴史的背景のもと、独特のプロセスを経て形成されるコミュニティもある。例えば、アメリカにおける希望を失ったアフリカ系の人々が、独自にコミュニティを形成してきた。他にも、世代間の認識の相違に苦しんできたネイティブアメリカンが、新たな文化の再生を求めて運動を起こしたこともある。この2つの例に共通していることは、個人の意思決定が尊重され、エンパワメントが促進されることにより、ソーシャルネットワークが強化されたという。その他、共通の感情をもつ人々の出会いから誕生したコミュニティもある。例えば、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの出現により、新たなコミュニティが創出されている。共通の障害者団体、アルコール依存症本人の自助グループなどが代表的である。このようなコミュニティにはアイデンティティや関心を分かちあえるというメリットがあるが、ときとして社会的偏見の対象とされやすいという(助友, 2019:125-127)。

Taylor は、コミュニティの概念にみられる3つの主要な特徴を区分している(Taylor,1982:25-32)。1) 共通の信念と価値、2) 成員相互の直接的な関係と多面的な関係、3) 互酬性、すなわち社会的な善意や利他主義といった観念に基づく協力と分かち合いの諸形態、という3つの特徴である。個々のコミュニティは、その規模、動機づけ、ひいてはコミットメントや価値のあり方に応じて、上記の3つの特徴をそれぞれ異なる仕方で備えている。Taylor は「人びとが数多く存在し、しかも入れ替わっていくようなところでは、諸個人相互の関係が直接的で多面的になることはまれであろうし、互酬性も広い範囲に行きわたることができない」と大きなコミュニティよりも小さなコミュニティの方が信念へのコミットメント、個々の成員のあいだの関係、相互の善意において強くなるとしている(Taylor,1982:32)。

本論文ではホームレス高齢者同士が関係しあうことにより, 彼ら一人一人の中に「コミュニティ」を持つこととし, 共属の感情, 共通の認識, 共同の行動がとれるような態度がつけられ, 育てられていく関係の複合体を「コミュニティ」として定義する.

## 第3章 研究手法

第2章では、ホームレスの高齢者の特徴と、それに伴う脆弱性、また就労による自立支援という視点だけでなく、社会的コンテクストに関係があることを述べた。また、本事例研究に設定の基盤となる特徴を紹介し、この研究対象の人々が重要である理由、すなわち彼らが世界のホームレスのうちで増加の一途を辿る重要なグループであることを示した。

第3章は、研究手法について述べ、研究データとその資料についても説明する。資料は、ホームレス関連書籍、ホームレス支援報告書、アンケート調査とインタビューである。

### 第1節 研究手法

本研究は量的分析と質的分析の混合手法 (Mixed methods) を用いた (Creswell&Creswell, 2017)。Mixed methods を「混合研究」と訳しているものもあるが、本研究では量的と質的手法を併せて用いるものを「混合手法 (Mixed methods)」とする。本研究は、簡易宿所や福祉アパートに住むホームレスを経験した高齢者がどのような生活を辿っているのか調べ、そして高齢化する日本のホームレスの再発予防に活かせる経験を学ぶための探索的研究であり、ホームレスから脱して生活再建過程にある高齢者たちの事例研究である。山谷と釜ヶ崎の事例は、彼らの人間関係とコミュニティについて理解することを目的とした。登場人物は過酷な人生を送ってきた人が多く、日本全体のホームレス人物像を代表するのではない。しかし、それでもこれらの事例は日本のホームレス高齢者の未来を予測するのに役立つ。

まとめると、本研究の主な手法は既存研究調査資料データの質的内容分析と、アンケート調査資料の量的分析、インタビューの質的分析を用いた事例研究である。

### 第2節 データ資料

#### 既存研究調査資料

日本社会において集団の一員でいることはとても影響力を持つ。水内らは、日本のホームレスの路上生活から脱した後の生活過程にコミュニティ、地域の支援組織や社会資源による差が大きく影響していることを指摘した (水内, 渥美, 蓬菜, 2008)。筆者が元々この研究を行おうと興味を持ったのも、山谷地域でボランティア活動をしていたことがきっかけであった。既存研究資料は書籍や調査報告書でのインタビュー結果から収集した。既存書籍の収集方法は Cinii Books, Cinii Articles を用い「ホームレス」「野宿者」をキーワードとし、期間は限定せず検索した。Cinii Books は 11 件、Cinii Articles は 157 件の文献がみられた。それらの中から日本の中高年層ホームレスや中高年層野宿者でライフストーリーや詳細なインタビュー内容が記

述されていないもの、ホームレスからの脱却やその後の生活について言及がないものは除外し、3 件を対象とした。ホームレスから脱した人たちを対象に扱った文献は学術研究書を含めて非常に少ないため、ホームレス支援団体の報告書の中に高齢者生活保護受給者のうち元ホームレス者の事例が掲載されていた報告書 1 件を対象とした。

使用した書籍・報告書は以下のとおりである。

渡辺芳(2010). 自立の呪爆. 新泉社.

後藤広史(2013). ホームレス状態からの「脱却」に向けた支援. 明石書店.

特定非営利活動法人山友会 (2019) . 社会的きずなが希薄な独居生活者への居場所・生きがいづくり事業報告書. 平成 30 年度台東区協働事業提案制度実施事業.

白波瀬達也 (2010) . 教会に通う野宿者の意味世界, 青木秀男編「ホームレス・スタディーズ: 排除と包摂のリアリティ」. ミネルヴァ書房, 233-261.

渡辺(2010), 後藤(2013), 白波瀬(2010)の書籍は学術研究の成果であるが, 山友会(2019)は学術研究の成果ではない。後述の山友会のデータは, 報告書の中に数人の単身高齢者生活保護受給者の事例が掲載されており, 支援活動の実際の事例から情報を収集することができるため, 使用した。

単身高齢者で生活保護受給者を扱った文献が多いが, これはホームレスから脱する契機の大半が生活保護受給であるためである。ホームレスから脱した人たちを対象に扱った文献は学術研究書を含めて非常に少ない。そのためホームレスから脱した後の社会関係やコミュニティにおける高齢者の特徴を明らかにするためにも, まず, 50 代以上の単身者で, かつ生活保護受給者等で路上生活から脱した事例についてできるだけ情報を集めることとした。

### アンケート調査資料

厚生労働省ホームレス概数調査によると 2017 年のホームレス数は, 全体が 5,534 人, そのうち東京都 1,397 人, 大阪府 1,303 人 合計 2,700 人が目視されており, 全ホームレスの約半数が東京都と大阪府で占められている(厚生労働省, 2018)。大阪府の釜ヶ崎地域と東京都の台東区は, ホームレス支援団体が多く活動をしている。それらの支援活動のうち 2 団体を選択した。釜ヶ崎地域の A 団体は野宿生活者の支援活動を行う民間非営利団体である。山谷地域の B 団体は 1984 年に路上生活を送らざるを得ない状況にある人々や生活困窮状態にある人々が病気になっても治療を受けられない課題を解決するために, 無料診療所を開設したことが活動の始まりである。2002 年を目的に NPO 法人格を取得した民間非営利団体である。山谷地域と釜ヶ崎地域で活動するホームレス支援団体を介して対象者へ接触し, フェイスツーフェイスで 131 名への調査を実施した。アンケート調査には次のアプローチを用いた。まず, 山谷地域

と釜ヶ崎地域の支援団体が実施しているコミュニティ活動に参加し、自己紹介を行い、コミュニティ活動を観察した。すぐにアンケート調査は行わず、活動の合間に参加者と話をした。支援スタッフをはじめ参加している高齢者たちは自由に話をさせてくれた。特にプログラムに定期的に参加している高齢者たちはインタビューを受けることも少なくないようで、筆者のような外部のものがやってきて話をすることに慣れていたようで、自分達のことを知ってほしいと話を続ける者が多くいた。支援団体への出入りを複数回行った後、釜ヶ崎地域の A 団体が実施する高齢者特別清掃事業の参加者、夜間シェルターの利用者、社会的つながり事業の利用者、山谷地域の B 団体が運営する地域生活サポート相談室の利用者、ホームレスや元ホームレスを対象とする生きがい・居場所づくり事業参加者、路上生活等から脱した後の生活フォロー支援事業利用者へ直接筆者らが声をかけてアンケート調査への協力を同意が得られた人を対象とした。本調査は、研究代表者の所属する大学（承認番号：013, 2017）の倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

対象者の回答比率 10%、許容誤差 5%、信頼度 95%で算出したサンプルサイズの 132 を目標に A 団体代表、B 団体代表へ事前に調査について説明し、協力依頼をし、同意を得て対象者へのアプローチを行なった。調査員より対象者へ口頭で調査の目的・方法及び倫理的配慮について説明後、同意を得た者のうち釜ヶ崎地域 80 名、山谷地域 51 名、131 名からの回答を得た。そのうち、女性、50 歳以下の層、調査項目に未記入がある回答を除外した。最終的な分析対象者は 114 名であった。

調査は、調査員より構造化した質問紙を用いて聞き取りを実施した。この理由は、高齢者で文字を読みづらいことや、文字を書くことに負担がある人もいることから、質問紙にはカナルビを振り、調査者が質問を読み上げ、対象者の答えた回答を調査者が転記していく方法をとった。131 名というサンプル数は大きくはないが、先行研究でも 100 件程度の回答数を得た量的調査、あるいはインタビュー事例の数十件程度の調査しか見当たらなかったため、本調査の回答数は事例調査としては十分なサンプル数とすることができよう。本アンケートの分析結果は、第 5 章と第 6 章にて紹介する。

## インタビュー

筆者はインタビュー調査を行う前に、2002 年から山谷地域でいくつかの団体で参与観察を行なっている。ボランティア活動への参加を通じて、ホームレスを含めた様々な人たちと出会い、関係づくりを行なってきた。参与観察を通じて得られた知見は、本研究の基盤となっている。

インタビュー調査は、2017 年から 2018 年の 1 年間にわたって、山谷地域と釜ヶ崎地域でのボランティア活動や支援団体に集う高齢者に対して行なった。インタビュー調査に参加する人たちは、支援団体を通じてスノーボールサンプリングにより募った。研究者が研究対象者に

文書を用いて説明を行い、同意書への署名により同意を得た。同意の得られた対象者の都合の良い日時を伺い、プライバシーの確保される個室でインタビューガイドを用いて1時間程度の半構造化面接を行った。研究参加者の承諾を得て、インタビュー内容をメモした。本調査は、研究代表者の所属する大学（承認番号：013, 2017）の倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

筆者は路上から簡易宿所や福祉アパート等へ移行した高齢者7名、支援団体のスタッフ2名へインタビューした（巻末資料1, 2, 3参照）。路上から抜け出した高齢者はホームレスに至った経緯、ホームレス中の生活や支援活動との関わり、アパート等へ移行してからの生活や人間関係、参加している活動について説明してくれた。インタビューではアンケート調査では見えてこない話を語る。インタビューで語られ発見したことは、第5章と第6章に組み込んでいく。

### 第3節 データ分析

本研究のデータ分析には、様々な分析方法の混合手法を用いた。

#### 既存研究調査資料分析

既存研究調査資料分析には、内容分析(content analysis)を用いた。内容分析とは、文章・音声・映像などさまざまな質的データを分析するための方法であり、社会調査データの分析に適した方法である。内容分析では多くの場合、データをいくつかのカテゴリーに分類した上で、各カテゴリーのデータの個数を数え上げたりといった、計量的分析を行う。この方法論は1960年代までに確立したと言われている。内容分析は社会科学の理論・概念に加えて、心理学実験や市場調査のフィールドから優れた統計手法が持ち込まれ、実験参加者の回答分析やアンケートの自由回答分析といった調査の補助手段として応用されている。その際、分類基準作成が非常に困難で、その上、手数がかかる割に報いられる点が少なく、一時の思いつきでは意味がなく、誰でも簡単にできるものではないという難点があり、欧米に比べて日本では内容分析を用いた研究そのものが少ない傾向にある。このような難点はあるが、内容分析の利点は、一つのメッセージを社会学的な観点や精神分析的な観点からといったように、複数の観点から解釈・推論を行うことが可能なことである(樋口, 2014)。

内容分析の定義は1950年前後に一旦方法論がまとめられたものの、変遷を遂げ量的方法を用いることを前提としつつ、質的な分析・記述についても推奨している。特に Berelson は「①記述全体を文脈単位、②1内容を1項目として含むセンテンスを記録単位とし、③個々の記録単位を意味内容の類似性に基づき分類・命名する」と定義している。本研究で用いる文献資料は会話の記述であることから、客観的に分析するのに適していると考えられた Berelson の質

的内容分析を参考に分析を行った。分析対象文献・資料のインタビューのデータを精読して、50歳以上のホームレスのうちホームレス状況からの脱却者の紹介事例の中から、直接、ホームレス経験者が脱却に関する生活史を自ら語った口述データを抽出した。ホームレスを経験した中高年層の人間関係は、彼らを中心に複数の人とのつながりをもったひとつのまとまりとしてとらえることができる。そこで、ホームレスを経験した中高年層にとって関係があると認識できている人のことを人間関係と定義した。コミュニティの定義は多様であり地理的定義によってコミュニティが理解されることが多いが、コミュニティとは本来、人々の意識や心理をも含む概念である。ホームレス高齢者同士が関係しあうことにより、彼ら一人一人の中に「コミュニティ」をもつことから、共属の感情、共通の認識、共同の行動がとれるような態度がつけられ、育てられていく関係の複合体を「コミュニティ」として定義した。

まずはじめに、全ての事例からホームレス脱却につながったと思われる、野宿生活等から関わりのある人、出会い、支援をしてくれた人といった人間関係と、ホームレス脱却につながったと思われる地縁、職縁、参加するグループ、行きつけの場といったコミュニティに関する部分の抽出をした。データを繰り返し読み、人間関係とコミュニティに関する記載部分を記録単位として作成し、次に記録単位について比較的類似・近接した内容を探し、それらを的確に表す表現へ置き換えラベルをつけた。いかにしてこれらのラベルが再びホームレスになることを予防することに貢献する要素に適合するか、あるいはいかに再びホームレスになることを予防するかを理解に貢献するかについて決定するためにこれらのラベルを検討した。検討する際に用いた基準は、他者との関係は再びホームレスになることを予防するかを仮定するか、またコミュニティの存在は新しい洞察や解釈を提供するかである。このステップにおいて、ホームレスを経験した中高年層の行動や態度が社会の一員として復帰を阻むかについて考えた。結果としてデータを再読し、最初のラベルを再びホームレスになることを予防する要素となるか確かめながら、名前をつけ直した。このステップの結果でできたラベルは読み込んだデータを的確に反映していると決定した。既存研究調査資料分析の結果から得られた知見は次の第4章で紹介する。

## アンケート調査分析

回答全体の傾向を記述統計分析で把握し、路上から安定した住居に住む者（Homed群）とホームレス状態にある者（Homeless群）に分け、カイ二乗検定またはフィッシャーの正確確率検定を用いて、参加者レベルでカテゴリ独立変数（住んでいる地域など）の有意性を比較した。安定した住居の維持と人間関係との関係及びコミュニティを検討するために、二項ロジスティック回帰を用いて、安定した住居の維持と潜在的に関連する因子を評価した。

結果は95%信頼区間（CI）で推定オッズ比（OR）として解釈した。統計分析にはSPSS Statistics 25.0 Japanese for Windowsを使用し、有意水準は5%とした。

データの単純集計を用いて、ホームレス状態から現在の住居に移り、現在住んでいる居に  
いる期間により人間関係やコミュニティについて、期間別にその割合の傾向を算出した。アンケート調査分析の結果から得られた知見は第5章と第6章で紹介する。

## インタビューの分析

路上生活から脱した人たちの人間関係とコミュニティを探索するためにホームレスという社会事象 (social phenomenon) を経験する様を、主観的に理解する現象学のアプローチを用いた。

現象学は、意識に直接与えるもののみを、認識の確かな証拠として認める (榊原, 2017)。

現象学のアプローチとは、このような現象学を基礎とするものであり、因果関係を明らかにするものではなく、現象の本質を明らかに探究する記述的研究の方法である。

この方法は、医療保健で伝統的に踏襲されてきた実証主義に依拠しない。自然科学が立脚する実証主義に対して、構成主義があり、それに呼応する形で批判理論としての現象学のアプローチがある。批判理論における研究者は支援者の役割を果たす。その目的は、洞察を提示することにより、研究集団の変化を支援することである。社会問題が有する役割を研究の文脈で理解することが必要であり、批判理論の目的は不公平な扱いに光を当て、その方策の変化に影響するために利用できる。

分析方法は、現象学のアプローチの実践例として、荒川と神郡による5段階に分けられた分析のプロセスを参考にした (荒川・神郡, 1999)。

荒川と神郡の紹介する分析のプロセスを下記に示す。

- ① インタビューの面接記録全体を完全な形で読み、全体の意味を理解する
- ② 研究課題に直接関係する段落や文を抜き出す
- ③ 抜き出した部分から浮かび上がる意味を系統化する
- ④ それぞれの意味を、一般用語かテーマごとに分類する
- ⑤ ①～④までの分析段階を研究課題に沿って本質的な概念構成で文章化する

インタビュー調査分析の結果から得られた知見は第5章と第6章で紹介する。

## 第4章 ホームレス再発予防の要素

第3章では本研究のフィールドワークの手法について紹介した。本章では、既存文献で取り上げられているホームレスからの脱却後の生活に関する事例の内容分析結果の記述を行う。先行研究のレビューからホームレスから脱却した後の生活で社会に包摂されていくプロセスには、彼らの人間関係とコミュニティに帰属するきっかけが影響していることが推測された。ホームレスを脱却した対象たちの調査結果から、何かの活動や集う場に来るきっかけとして「知り合いに紹介された」とか、「支援団体のスタッフに勧められた」という理由を挙げるものが多い。このことは、路上生活中に知り合った同じ境遇にある人や、支援団体と直接接触するような機会を得ていたことが影響していると考えられた。

ここでは、既存の文献や調査報告書から抜き出した事例の内容分析の結果を紹介する。

### 第1節 ケースの概要

収集書籍及び報告書に記載されている各事例から、関わりのある人、出会い、受けた支援といった人間関係と、地縁、職縁、参加するグループ、行きつけの場といったコミュニティに関するキーワードを含む文章を抽出した。文章は前後の文脈が理解できるように、筆者が原文を修正し、まとめた。

ケース No. の出典元は以下のとおりである。

No. 1～2：渡辺芳(2010)．自立の呪爆．新泉社．

No. 3～11：後藤広史(2013)．ホームレス状態からの「脱却」に向けた支援．明石書店．

No. 12～14：特定非営利活動法人山友会（2019）．社会的きずなが希薄な独居生活者への居場所・生きがいをづくり事業報告書．平成30年度台東区協働事業提案制度実施事業．

No. 15～18：白波瀬達也（2010）．教会に通う野宿者の意味世界，青木秀男編「ホームレス・スタディーズ：排除と包摂のリアリティ」．ミネルヴァ書房，233-261．

収集したケースは18例である。ケースは山谷地域または釜ヶ崎地域で生活する人たちであった。全てのケースが男性であった。年齢は、50代7ケース、60代4ケース、70代7ケースだった。婚姻歴は、12ケースが婚姻歴あり離婚していた。未婚は1ケースで、不明は5ケースだった。野宿歴は、最小1週間、最長20年であった。再野宿歴ありは、3ケースだった。脱野宿のきっかけは、年金受給が2ケース、体調不良から生活保護受給が5ケース、入院をきっかけに生活保

護受給が4ケース, 支援者からの勧めで生活保護受給が3ケースであった. 公的社会保障の生活保護受給を機に野宿生活から脱するケースが多かった. 現在の住まいは, アパートが7ケース, 簡易宿所が9ケース, 野宿者のための宿泊施設が2ケースであった. 現在の生計手段は, 年金のみが2ケース, 年金とアルバイトが1ケース, 年金と生活保護が2ケース, 生活保護のみが8ケース, 生活保護と短期労働・アルバイトが2件, 非正規労働1ケース, アルバイトと副業が2ケースだった(表4). 野宿生活からの脱却の契機に体調不良や入院を契機に生活保護を受給していることがわかる.

表4 ホームレス状況からの脱却者の概要

著者	ケース No.	性別	年齢	婚姻歴	野宿歴	再野宿歴	脱野宿の契機	現在の住まい/生計手段
渡辺 (2010)	1	男性	60代	あり	1年	なし	年金受給	アパート/ 年金
	2	男性	60代	あり	8年	あり 再就職後失敗、収入安定 せず再路上へ	年金受給	アパート/ 年金
後藤 (2013)	3	男性	50代	あり	2年2ヶ月	なし	体調不良から生活保護受給	アパート/生活保護
	4	男性	50代	あり	9年	なし	体調不良から自立支援センター入 所、生活保護受給	簡易宿所/ 生活保護+短時間労働
	5	男性	50代	不明	3年4ヶ月	なし	支援者からの勧めで生活保護受給	簡易宿泊所/生活保護
	6	男性	60代	不明	6年	なし	入院をきっかけに生活保護受給	アパート/生活保護
	7	男性	70代	あり	20年	なし	入院をきっかけに生活保護受給	簡易宿泊所/生活保護
	8	男性	50代	あり	1年	なし	入院をきっかけに生活保護受給	簡易宿泊所/生活保護
	9	男性	70代	あり	6年	あり	体調不良のために生活保護受給	簡易宿泊所/生活保護
	10	男性	70代	あり	1年2ヶ月	なし	支援者の勧めで生活保護受給	アパート/年金+生活保護
山友会 (2019)	12	男性	60代	不明	不明	なし	体調不良から生活保護受給	簡易宿所/生活保護+短時間労働
	13	男性	70代	不明	不明	なし	体調不良から生活保護受給	簡易宿所/生活保護
	14	男性	70代	不明	不明	あり 施設に入所するが、食事内 容や金銭管理に不満	入院をきっかけに生活保護受給	簡易宿所/生活保護
白波瀬 (2010)	15	男性	50代	なし	4年	なし	入所をきっかけに住民票を設置、 就労	野宿者たちの宿泊施設/非正規労働
	16	男性	50代	あり	3年	なし	入所をきっかけに就労	野宿者たちの宿泊施設/高齢日雇労働 +アルバイト
	17	男性	50代	あり (内縁)	4年	なし	支援者の勧めをきっかけにアルバ イト就労	簡易宿所/アルバイト+アルミ缶回収
	18	男性	70代	あり	1週間	なし	支援者の勧めをきっかけにアルバ イト就労	アパート/年金+アルバイト

\*年齢は文献及び報告書データに記してある年齢または年代である.

## 第2節 人間関係

表5より、人間関係として同じく路上生活をしていた知り合いや仲間との関係のほか、支援団体のスタッフやボランティアとの関係、仕事を通じて知り合った人との関係があることがわかった。

表5 ホームレス状況/脱却後の人間関係

ケース No.	人間関係（関わりのある人, 出会い等）	ラベル
1:A氏	・野宿生活をしていた地域の社会福祉課の協力によって年金受給ができるようになった。 ・食事や情報を得るために支援団体と関わる	支援機関相談者 支援団体
2:B氏	・同じくホームレスしている人に荷物を預かってもらったり、隣近所の人たちに協力してもらい小屋を作った	ホームレス仲間
	・自分の年金をもとにして、テント仲間の食事の面倒をみていた	ホームレス仲間
	・自分も他のホームレスに助けられてきた	ホームレス仲間
	・支援団体との関わりがホームレスであったことをきっかけに生まれる	支援団体
3:C氏	・野宿生活で近くにいた野宿者と知り合いになり、協力して生活をしていた	ホームレス仲間
	・知り合いのついでで仕事に行ったりしていた。	ホームレス仲間
	・体調不良の際に支援団体で診てもらい生活保護を受給することを勧められる	支援団体
	・単独で福祉事務所に相談後、生活保護を受給するようになった	支援機関相談者
	・入院の際には支援団体のスタッフに助けってもらった	支援団体スタッフ
・路上生活に戻った際に支援団体のスタッフが探しに来てくれ再び生活保護を受けることができた	支援団体	
4:D氏	・公園で寝泊りしている時に全然知らない人と仲間になる	ホームレス仲間
	・仲間のついでで仕事を得る	ホームレス仲間
	・一緒に寝泊りしている人からの情報	ホームレス仲間
	・ボランティア団体の人に相談して自立支援センターへ入所	支援団体
5:E氏	・テント仲間と一緒に炊き出しを回っていた	ホームレス仲間
	・支援団体の相談に顔を出し、生活保護受給に至る	支援団体
	・同じく路上生活をしている人からボランティアの情報を得る	ホームレス仲間
6:F氏	・ボランティアでの人間関係に嫌気がさして、ボランティア団体を離れボランティア団体で知り合った人たちと一緒にテント生活を始める	ホームレス仲間
	・週に1回支援団体のアウトリーチが安否確認してくれていた	支援団体
	・アウトリーチのスタッフから支援を得て生活保護受給につながる	支援団体スタッフ
7:G氏	・テントから毎日支援団体に通い、路上生活しながら毎日仕事に通っていた	職場関係者
	・路上生活をしている人から支援団体のことを聞き利用するようになる	支援団体
	・近くの路上生活の人との交流は日常会話程度	ホームレス仲間
8:H氏	・路上生活者同士の知り合いができテント生活を始める	ホームレス仲間
	・通っていた労働福祉センターのスタッフに説得されて施設に入所	支援機関相談者
	・支援団体で知り合った人が一緒に作業をする仲間になった	支援団体
9:I氏	・路上生活で知り合った人と一緒にテント生活を始める	ホームレス仲間
	・支援団体のスタッフと行き合ったのがきっかけに時々支援団体に来るようになる	支援団体スタッフ 支援団体
10:J氏	・アウトリーチでシェルターに保護され、支援団体の支援を受けて生活保護受給に至る	支援団体
	・支援団体から社会保障保証書の再発行手続き支援や金銭管理を受ける	支援団体
	・飲みに行く友人や借金できる友達がいる	友人
	・支援団体から金銭・食料品等の支援を受けて生活が維持できている	支援団体
11:K氏	・路上生活をしていて知人に支援団体の情報をもらう	ホームレス仲間
	・支援団体のシェルターを経て生活保護受給、アパート生活に至る	支援団体
	・支援団体から社会保障保証書の再発行手続き支援や金銭管理を受ける	支援団体
	・身体の具合が悪い時、引きこもり状態になっていたが支援団体のスタッフが訪問してくれた	支援団体スタッフ
12:L氏	・支援団体の定期訪問や支援団体へ来ることにより、スタッフや同じ境遇にあるボランティアとのコミュニケーションがとれるようになる	支援団体スタッフ
	・支援団体の活動に参加するようになり、次第に支援団体のスタッフや支援団体の「場」で知り合った人へ自分から話しかけるようになる	ボランティア
13:M氏	・路上から脱した生活では近隣商店に買い物に出かける以外は部屋に閉じこもりがち	近隣商店
	・支援団体のスタッフやボランティアの定期訪問により関係ができていく	ボランティア 支援団体
14:N氏	・生活保護を受けてから一人で身の回りのことをするのは不自由であったため、介護サービスを利用	介護支援者
	・支援団体の定期訪問や通院同行の支援を受ける	支援団体
	・簡易宿所から失踪したが地域包括支援センターへ本人が連絡	支援機関相談者
15:O氏	・知り合った野宿生活者からの情報で支援団体を知る	支援団体
16:P氏	・知り合った野宿生活者からの情報で支援団体を知る	ホームレス仲間
17:Q氏	・野宿生活仲間からの情報で支援団体を知り食事や衣類の支援を受ける	ホームレス仲間
		支援団体
18:R氏	・様々な教会で食事や衣類を提供してもらう	ボランティア

ホームレスから脱却した方々の人間関係で多かったのは「支援団体」や「支援団体スタッフ」である。ホームレス高齢者の多くは路上生活をしていた時に関わりをもった「支援団体」や「(支援団体の) ボランティア」「支援団体で出会った人」と、支援団体との出会いが生活保護の受給につながり路上生活から脱却するきっかけになっている人が多かった。ホームレスから脱却した方々の多くは脱却後も路上生活中に知り合った支援団体へ関わりを続けていることがわかった。

山谷で路上生活をしていたD氏(ケース No. 4:50代)は生活保護を受給し簡易宿所へ移った後も支援団体に関わり続けている。

「(支援団体の近くの簡易宿所で生活開始後も) ほぼ毎日顔を出している。来やすいし、スタッフもわかっているし、今までの事情を知っているから。」(後藤, 2013, p. 178)

H氏(ケース No. 8:50代)は持病の鬱が悪化して自殺念慮が強くなった時に支援団体のスタッフに来てみた方がいいと言われちょっと来てみようかって思い来始めた。それから頻繁に来るようになった。

「毎日来てるうちに仲間が出来た。それ以外の友達っていうのは正直言っていない。ドヤ(簡易宿所)だとそういう人間関係できない」

ボランティア活動に参加することを支援団体のスタッフから勧められボランティアになるパターンが多かった。

F氏(ケース No. 6:60代)は路上から病院へ入院、退院後民間宿泊所に入所していたが、支援団体の支援を受けてアパートへ転宅。

「(担当のケースワーカーから) Fさんこれから先長いんだから何かやんなきゃ駄目だから、ボランティアとか(できるところ)ないかって言われた。ちょうど支援団体のスタッフから『よかったら(ボランティアを)やってくれないか』と言われボランティアをしている」(後藤, 2013, p. 181)

B氏(ケース No. 2:60代)は、テント村にいた仲間同士の付き合い関係を通じて、ボランティア団体と関わりを持った。路上生活の中で、支援団体と関わり脱却後もホームレス団体Zの会のスタッフとしてボランティア活動を行う。

「自分がホームレスをしていた、野宿者であったから、多少でもそういうふうに誰かの役に立てれば。そういう気持ちの人がやっているってことは、自分が経験していてわかっていると

思うの。ボランティアだけじゃなくて、何かやっていないと人間というのは、生きがいというか、それが自己満足でもあるし。ある面で言えば、ボランティアなんかは自己満足なんだよね、はっきり言うと。もうそれで、何とか役に立っていると、間接的でも、誰かが生き延びているわけでしょ。」(渡辺, 2010, p. 106)

支援団体に集う人たちは同じ境遇にある人ばかりでお互いの事情も話さなくても理解があるだけに、支援団体に気兼ねなく出入りできることがわかった。

F氏(ケース No. 6: 60代)「もともとが同じ境遇の方々ばかりなので、ある程度は事情がわかるし。(そういう)人と話しているだけでも(気持ち)ずいぶん違う」(後藤, 2013, p. 182)

D氏(ケース No. 4: 50代)「元ホームレスでもここだったら受け入れてもらえる。周りもみんなそう(元ホームレス状態にあった人)だし」(後藤, 2013, p. 178)

G氏(ケース No. 7: 70代)「やっぱり同じ境遇の人がたくさんいるっていうのは気兼ねなくいい」(後藤, 2013, p. 183)

またボランティア活動を通じて生活の張りや、知り合いが増えることで対話が増えること、役割を見出すこともできた例もある。

E氏(ケース No. 5: 50代)は支援団体のスタッフに自らお願いをして炊き出しのボランティアをするようになった。

「役割があるっていうのは生活の張りにもなりますしね。お疲れ様って言ってもらえればやっぱり気持ちいいし、それがあって知り合いになって話をする人も増えた」(後藤, 2013, p. 180)

A氏(ケース No. 2: 60代)は路上生活に戻らないための努力の一つとして知り合いを作る努力をしている。

「自分で友達を作らないと行けないのよ、いろいろな面で、どっかに参加して。それでつきあいがあれば、俺の場合はZの会の付き合い。そうするといろんな知り合いができる。そういう努力が足りない人がダメなのよ」(渡辺, 2010, p. 108)

E氏(ケース No. 7: 70代)は支援団体の近くの簡易宿所で生活している、ほぼ毎日支援団体に顔を出して、週に1回は炊き出しのボランティア活動をしている。

「(活動することは) 恩返しをしたいと言うことと, なんていうんだろう, 張りかな. 生活の. だって一日中ドヤ(簡易宿所のこと) にいて誰とも話さなかったら, ホームレス生活と変わらない. (支援団体に) 行けば受け入れてくれるし, いろんな人と話ができるし. そう言う意味でも貴重.」(後藤, 2013, p. 183)

コミュニケーションが苦手な F 氏(ケース No. 12:60 代) であるが支援団体の勧めでつながりづくりサポート事業に参加したことを契機に人間関係が広がった事例もある.

「F 氏は路上から簡易宿所に移行してからは他者との交流機会は少なく部屋に閉じこもりがちであった. 支援スタッフと関わった当初は自分から話すことはほとんどなかったが, スタッフの継続訪問やつながりサポート事業のボランティア(元路上生活者) とコミュニケーションをとる機会ができたことをきっかけに, 治療が中断していた白内障の手術を受け, 見えづらい状態だった目が見えるようになった. 支援団体のスタッフから居場所づくり事業の参加を勧められ, もの作りならできそうだと人形づくりや石鹸作りに参加. 参加しているうちに, 他の参加者にどうしたらもっと上手く作れるのかなど積極的に会話をするようになった.

自分から興味のある話などを支援団体のスタッフやボランティアに話しかけるような様子も見られるようになった. 目の状態が良くなったことで, 清掃など簡単な仕事をしたいと担当のケースワーカーへ自分から相談し, 朝の 4 時間マンション清掃の仕事に就くことができた.」

(山友会, 2019, p. 17)

その他「ホームレス仲間」といった同じ境遇にある人との関係があった. 男性は男性同士, 群れを好まない性質があると言われていたが, ホームレスネットワークは同質な集団で路上生活という空間的隔離に基づく同質的社会的ネットワークを有していることがわかった. 一般に, ホームレスは, 単独で生活する人が多いが, テントの近隣との付き合いや, ホームレス世界の中で生活する人もいる. そういったテント仲間同士やホームレス仲間同士の相互扶助関係は, 相互扶助を受ける側と施す側とが相互に絡み合い, 擬似家族的なつながりを形成することも珍しくない(渡辺, 2010, p. 187).

B 氏(ケース No. 2:60 代) は段ボール生活から施設に入所後, 一旦再就職するが収入が安定しなかったことから再びホームレス生活を送っている. A 氏は自分の年金をもとにして, テント仲間の食事の面倒を見ていた.

「ぷらぷら公園歩いたら, 知り合いがいてお互い近況を話していたら段ボール小屋作っているっていうから, 『しばらく荷物預けさせって』って, 荷物預かってもらって, その人が仕事行っている時はその小屋利用させてもらって. しばらくしたら『隣に小屋作っていいよ』っ

て、周りのみんなの強力で小屋作っちゃったの、その時の知り合いも、隣近所協力してくれたの」(渡辺, 2010, p. 181)

「みんなに助けてもらっているから、その代わり、年金が入ってからいろいろと買い物をし  
てきて、食事代は俺が出していた。全員のはできないから、自分と色んな人を入れて、多いと  
きは4,5人いたけど、あと2人分はやっていた」(渡辺, 2010, p. 187)

とはいえ路上生活では待っているだけでは食糧の確保から始まり寝場所の確保など、同じ  
く路上生活をしている人へ自分から接近しなければ情報が得られない。そのため多くのケー  
スが路上生活をしている人と何かしらの関係を持ちホームレス同士の交流をもっていた。

D氏(ケース No. 4:50代)は炊き出しを利用しながら全然知らない人と仲間になり、その  
人のついで、路上から定期的に仕事に通うようになる。また同じく知り合いになった人と段ボ  
ールを集めて収入を得ていた。この時に一緒に寝泊まりしていた人から支援団体のことを聞  
き、仕事の合間に支援団体に顔を出すようになり、ご飯を食べさせてもらったりしていた。(後  
藤, 2013, p. 179)

A氏(ケース No. 1:50代)も近くに寝ていた野宿の人と知り合いになって、協力して生活を  
するようになった。「向こうがなんかくれたり、こっちも多ければあげたり、そういう風にやっ  
ていた」(後藤, 2013, p. 172)

路上生活中の仲間同士の関係は、路上から脱却後は再発することを予防するために敢えて  
切ることを選択する人もいる。「再び路上に戻らないために元のつながりのあるホームレスの  
仲間とは関わらない(ケース No. 2)」、「路上生活をしていた人とはアパートに転宅してから  
会いたいとは思わない(ケース No. 6)」と路上中の人間関係を断つことを選択していた。

ホームレス生活から脱却したB氏(ケース No. 2:60代)はホームレス支援には関わってい  
るが、ホームレスとは直接関わらないようにしている。

「ホームレスのね、元のつながりをもって、とよく支援者が言っているでしょ、団体が。俺は  
ああいう気持ちは、それはアウトになる。酒に逃げたり、みんなで酒を飲んだりとか、博打に走  
って、それでまた路上に戻る人が多いわけ。だから、逆に言うと、ある面切らないと。自分が、自  
分の生活を守るという面で言ったら、そういうつきあいがない方がいい。あんまり元のホーム  
レス、というところに行かない方がいいんだよ。」(渡辺, 2010, p. 214)

F氏(ケース No. 6:60代)も同じく元のホームレス仲間とは会わない方がいいと言う。

「(路上生活を一緒にしていた人は) みなさん大体アパートに入っちゃった, 会いたいとは思わない」 (後藤, 2013, p. 181)

路上生活中, 家族・親族との関係は一切ないことがわかったが, 脱却後も家族・親族との関係は一切ないことがわかった. 脱却後の社会生活の維持, 地域での日常生活を支えるさまざまなつながりは乏しい. 一般的に想定される家族を通じたつきあいは, 難しい人が多く, ホームレス高齢者が脱却後に課題となるのは, いかに家族以外の人と人間関係を構築するのか, ということである.

B氏 (ケース No. 2: 60代) はアパート生活へ移行後も, 故郷へ墓参りなどには行かない.

「(墓参りなんか) 行かないよ. 今さら行っても始まらないし. 行かない, 顔を出せない, 当然. 社会生活というか, それを切った人間だから, 復帰するのはすごく難しい. 一度 (ホームレスに) なると戻りにくい. 普段の家族的なつきあいは, 一回 (ホームレス) をやったら難しいんだよ, 修復するのに. 家族がないから, 自分が. だって, 奥さん, 子どもいないから」 (渡辺, 2010, p. 211)

C氏 (ケース No. 3: 50代) も「田舎にも帰れないし」と実家には戻らない.

### 第3節 コミュニティ

表6より, 多くのケースにとって支援団体やボランティア団体は, 彼らが共属の感情を得るコミュニティとなっていたことがわかった.

O氏 (ケース No. 15: 50代), P氏 (ケース No. 16: 50代) は野宿をしているときから知人関係であったが, 彼らは支援団体に通うようになってから, 互いのことを深く知るようになり, 「路上コミュニティ」を再編する形で感情的な絆が形成されていった. 支援団体やボランティア団体に関わるようになったE氏 (ケース No. 17: 50代), G氏 (ケース No. 18: 70代) は親密な空間の中で所属するコミュニティに対して「大変な人たちのために自分も役に立ちたい」とシンパシーを強くしていた.

表6 ホームレス状況からの脱却者のコミュニティ

ケース No.	コミュニティ（地縁、職縁、参加するグループ、行きつけの場など）	ラベル
1：A氏	・ボランティア団体、支援団体	支援団体
	・週に3回はボランティア活動に参加している	ボランティア活動
	・若い頃、労働運動をやった経験があり、社会的な関心でボランティア活動に精力的に関わる	ボランティア活動
	・公園にいた時は仲間の仕事情報とか、健康情報とか、行政の情報とかそれなりのコミュニティがあった	ホームレス仲間
2：B氏	・知り合いのいる地域で段ボール生活を始める	知り合いのいる地域
	・再就職したが収入が安定せずに再びホームレス生活をするために、元いた地域のテント村に戻った	テント村
	・再び路上に戻らないために元のつながりのあるホームレスの仲間とは関わらない	元ホームレス仲間
3：C氏	・支援団体で炊き出しのボランティアを手伝ったりしている	ボランティア活動
	・同じような境遇の人がいるから（支援団体の）場へ出入りができる	支援団体
	・脱却後しばらくは暇つぶしで支援団体へ出入りするようになる	同じような境遇の人との交流
	・ボランティア団体が複数あることから支援団体に関わることによって生活がしやすくなる	支援団体
4：D氏	・支援団体へは毎日顔を出している	支援団体
	・事情を知っているスタッフや、元ホームレスがいる「場」なら受け入れてもらっている感がある	元ホームレス仲間のいる場
5：E氏	・簡易宿所が支援団体に近いこともありちょくちょく顔を出す	支援団体
	・自分から炊き出しのボランティアになることをお願いしてすることで生活の張りや知り合いが増えて話をする人も増える	ボランティア活動
6：F氏	・ケースワーカーや支援団体スタッフからの誘いでボランティア活動を週1回行うようになる	ボランティア活動
	・支援団体の「場」に来れば、気心知れている人と相談もでき、気分転換になる	支援団体の「場」
	・同じ境遇の人が多いため、ある程度事情がわかり、話をしているだけでも気持ちがずいぶん違う	同じような境遇の人との交流
	・支援団体の「場」は憩いの場所である	支援団体の「場」
7：G氏	・路上から脱却後も炊き出しのボランティアを継続して行っている	ボランティア活動
	・路上から脱却後、住んでいる簡易宿所が支援団体の近くにあることから毎日支援団体に顔を出している	支援団体
	・支援団体の「場」は受け入れてくれて、色々な人と話ができる場	支援団体の「場」
	・同じ境遇の人がたくさんいる「場」は気兼ねなくいい	同じような境遇の人との交流
8：H氏	・住み始めた簡易宿所が支援団体のすぐそばにあり、スタッフの勧めもあり頻繁に通い続けている	支援団体
	・支援団体は「自分の拠り所」	支援団体の「場」
9：I氏	・スタッフに活動を手伝ってほしいと言われ、毎日来所して衣類の整理や炊き出しを手伝っている	ボランティア活動
	・仕事、役割があると張りが出て、支援団体の「場」にいて生きがいを感じている	支援団体の「場」
10：J氏	・友人と飲みに行ったりする「場」や、ギャンブルする「場」がある	友人と交流する「場」
11：K氏	・ギャンブル（パチンコ）が趣味で年金が入るとパチンコに使っていた	ギャンブルの「場」
	・支援団体のスタッフからの誘いでボランティア活動を定期的に行うようになる	ボランティア活動
	・行くところがあり、何か役に立っていることができる「場」は居場所である	支援団体の「場」
	・週に3回訪問介護とデイサービスを利用しており、訪問介護が楽しみ	デイサービス
12：L氏	・支援団体のスタッフからの誘いで支援団体の行うイベントや「場」への参加をするようになる	支援団体
	・自分ができるようなことを見つけて自分から参加している	支援団体の「場」
13：M氏	・閉じこもりがちな生活ではあるが、定期的に来訪する支援者と部屋の片付けをするようになる	支援者との交流の機会
14：N氏	・介護サービスの人々や支援団体のスタッフ・ボランティアが部屋を訪問してくれたり、病院に一緒に付き添ってくれることが安心となっている	支援者との交流の機会
15：O氏	・野宿仲間に誘われて同じような野宿者と交わることができる場に週1回通う	野宿者と交流する集会の「場」
16：P氏	・野宿生活をしてきた知り合いから日曜礼拝に誘われて通うようになる	野宿者と交流する集会の「場」
17：Q氏	・野宿生活をしてきた知り合いに誘われて通ったきっかけから毎週集いの場に参加する	野宿者と交流する集会の「場」
	・野宿仲間と一緒に入信する	
18：R氏	・礼拝に参加したことがきっかけで継続的に集会に参加	野宿者と交流する集会の「場」
	・他の信者の信仰体験を聞くことにより入信	
	・教会のボランティア活動により所属意識が高まり他所では代替不可能な安心感を得ることになる	

支援団体が居場所として提供する「支援団体の場」や野宿者と交流する「場」、支援団体でのボランティア活動を通じた他者と交流する機会は、多くのケースにとって共同の行動がとれるような態度がつくられ、育てられていくコミュニティとなっていた。

路上から簡易宿所に移行し最初は支援団体に関わりがあまりなかった I 氏(ケース No. 9:70 代)は部屋にいてボケーツとしてテレビ見てそんなことをして過ごしていた。たまたま支援団体のスタッフと行き会ったのをきっかけにちよくちよく支援団体に来るようになった。

「スタッフに手伝ってくれと誘われ自ずといろいろと手伝うようになった。仕事というか、役割があると全然違う。ボーツとしているより身体動かしている方が張りがあるのでここに来ているとすごく生きがいを感じちゃっている」(後藤, 2013, p. 190)

また、ホームレス脱却後も同じような境遇の人との交流や元ホームレス仲間と一緒にいることで共属の感情や共通する認識を確認する機会となっていた。

G 氏(ケース No. 18:70 代)はボランティア活動をするようになってからボランティア団体への所属意識が高まり、それは他所では代替不可能な安心感へと変わっていった。(白波瀬, 2010, p. 249)

K 氏(ケース No. 11:70 代)は体調を崩し引きこもり状態になり一步も外に出ない時があったが、支援団体のスタッフからボランティアの誘いがあり、定期的にボランティアを行っていた。

「やっぱり家にいるよりも行くところがあって、何か役に立っているというのは違う。こういう活動をしていると自分の居場所ができて、必要とされている」(後藤, 2013, p. 194)

「支援団体の場」や野宿者と交流する「場」に出向くことが難しいケースは、支援者の来訪や福祉サービスを通じた交流により精神的に安定し、地域での生活を維持できるようになっていた。

路上生活から簡易宿所へ移った後の生活が足の踏み場がないほどゴミが溜まっていた M 氏(ケース No. 13:70 代)は近隣商店に買い物に出かける以外はほとんど部屋に閉じこもりがちな生活を送っていた。支援団体のスタッフが定期的に訪問し世間話を通して少しずつ関係が築かれていくにつれ、部屋の片付けをさせてくれるようになった。そのうち少しずつ本人も一緒に片付けを手伝うなど、部屋の環境を整えることへの意識が芽生えている様子が見られた。本人の表情にも明るさが見えるようになった。(山友会, 2019, p. 17)

退院後に簡易宿所に移行したN氏(ケースNo.14:70代)は、一人で買い物などの身の回りのことをするのは不自由とのことで、介護サービスの利用を支援団体から提供された。介護サービス支援者が定期訪問時に生活状況や健康状態への不安を聞いてくれ、受診の同行も受けながら関係が築かれていった。一旦は病気を気に病み遣書のような書き置きを残して失踪したが、数日後本人から地域保活支援センターに連絡があり戻ってきた。

本人は、介護サービス支援の人々や支援団体のスタッフ・ボランティアが部屋を訪ねてきてくれたり、病院と一緒に付き添ってくれるのが安心と話す。(山友会, 2019, p. 17)

#### 第4節 小考

文献に記述された高齢者ホームレスにおける路上生活中の人間関係からは、路上で生活をするために同じ路上生活者、支援団体のスタッフやボランティアとの関係を活用していることがわかった。この結果は、Crane&Warnes(2002)の調査結果を支持している。

高齢者ホームレスは、路上生活で知り合った同じ路上生活者や、知人のネットワークを活用したり、同じ境遇にある人との関係を持ち、そこから食料や仕事を得ていたり、何らかのサポートを受けていたりする。元々知り合いだったりするのではなく、生きるために自分から接近し関係を持つケースも多い。結果として、路上生活者同士での互酬関係が生まれ、協力して生活することにもなっているということがわかる。

脱ホームレス後の人間関係において、海外の先行研究では家族や親族、近所の人、友人との関係性の復活があることが報告されているが、日本の事例では家族・親族、友人といった関係に関する記載はなかった。

18件という限られた事例であったが、先行研究と同じ部分と異なる部分を具体的に把握することができた。

以下、ホームレスから脱却した人たちの人間関係とコミュニティについて3つの観点から考察をする。

##### ① 同質的社会的ネットワークを包有する人間関係

分析の対象となった高齢者ホームレスは、路上生活で知り合った同じ路上生活者や知人のネットワークを活用していた。また、同じ境遇にある人と人間関係を維持し、そこから食料や仕事を得るなど、何らかのサポートをギブアンドテイクする関係を有していた。彼ら同士は元々知り合いだったりするのではなく、生きるために自分から同質者へ接近し関係を持つケースが多かった。過酷な路上での生活をする中で、路上生活者同士での互酬関係が生まれ、協力して生活することにもつながっていたことがわかった。このように同質的社会的ネットワークの有効性については、Barker(2012)が指摘しているように資源としての他者や社会的紐帯の価値を内包する質・内容を踏まえる点である。ホームレスのように家族や社会から一旦離

れてしまった人が再び他者と関係をもつきっかけとして同じような境遇にある人たちとの関係が鍵となることが分析の結果から明らかになった。

一方で、路上から脱した後は同じように路上生活をしていた知り合いや元野宿仲間との関係は断つことをあえて選択するケースもいた。路上で過酷な生活をするためには同じような境遇にある人との接触は不可欠であるが、その中で意にそぐわない出来事や盗難や嫌がらせなどの被害を受けることもある。そのような人間関係からの逃避は安定した生活を営む上で必要とする人があることも忘れてはならない。個人個人で様々な事情を背負って路上生活に至っている高齢者たちが、路上生活での人間関係から離れ新たな人間関係を築くことを必要とする人もいることを支援者は自覚しておかなければならないことであろう。大事な課題の1つは、どのようにして、新しい生活環境で人間的つながりを保障し、人間関係をつくりあげることができるかということである。

## ② 帰属意識が持てるコミュニティ

路上生活で接点をもった支援団体とのつながりから、ボランティア活動に参加するケースが多かった。対象としたケースは高齢者ホームレス男性だけであったため女性との比較はできないが、参加する活動での作業を通じて男性は何かしらの役割をもっていた。先行研究（Crane&Warnes,2002）においては、路上から住居に移行した高齢者ホームレスが参加しているデイサービスやアクティビティに参加するのは女性の方が多く、男性は孤独に過ごすことが多いという結果であった。分析の対象事例では、元ホームレス同士でコミュニティを構築していくという結果であった。路上生活で彼らは互酬性のコミュニティをつくっていたが、路上から脱した後も人間的関係をつくる基盤のコミュニティをつくっていた。日本のホームレス高齢者は、単に支援団体や福祉システムからの支援を受ける人というだけでなく、もっと強いつながりの知人、友人、もしくは緩いつながりを新たに作り、そのネットワークの主体者となっていることが明らかになった。どのコミュニティに参加するかは彼ら自身が決定することであり、またコミュニティの参加を介して生きがいを見つけ、帰属意識を持つことを実現できるかどうかが大事な点である。日本社会では伝統的紐帯から解放された諸個人を核家族（性別役割分業家族）や職場（日本型経営システム）の中に再度埋め込むかたちで、帰属意識と相対的に安定した人間関係が維持されてきた（石田，2011）。現在のホームレス高齢者の多くは労働を通じて社会の中で役割を担い活動してきた。このことから、多くのホームレス高齢者は労働を介して帰属意識を維持してきたといえる。大谷によれば、日本男性の失業は、生きがいの消失、社会的ネットワークを構築する機会の喪失をも意味するという（大谷，2006）。分析の対象事例の高齢者たちは、誰かが何かしてくれるのを、何かが始まるのをただ受動的に否定的に待っているのではなく、自らが参加することを選択したコミュニティと一緒に何ができるのかを考え、自らがアクティブでポジティブな態度で新たな生活を維持していた。

### ③ 人間関係をきっかけに公的支援制度へつながる

路上生活をしている中で支援団体のスタッフとの接点ができ、スタッフからの勧めや支援を得て生活保護の受給ができるようになり、路上生活から脱していたケースが多かった。分析の対象事例は50代以上の高齢者の事例だったため若年層や50代以下の路上生活者との比較はできないが、高齢者は体調不良や入院をきっかけに生活保護受給を受けているケースが多かった。高齢者は健康面や年齢面で一般の労働市場では不利な立場であるため、就労により自立を目指すより福祉を得て自立することを受け入れざるを得ないのである。路上生活者という汚名を持つ個人には、自分だけの力で生活保護の申請を行うには相談する勇気と行動という点でハードルが高い。そのハードルを一緒に超える伴走者の存在は高齢者にとって大きなものである。

## 第5節 まとめ

本章は、人間関係とコミュニティの視点からホームレスから脱却した人々に関する事例の内容分析を行い、高齢者ホームレスが再びホームレスになることを予防することに貢献する要素について提示した。分析の結果、18の事例から多くのケースは「支援団体」や「支援団体スタッフ」が人間関係の中で大きな存在であった。また「ホームレス仲間」といった同じ境遇にある人との関係も大きな存在であった。

多くのケースにとって支援団体やボランティア団体との接点は、人間関係にあるだけでなく彼らが共属の感情を得るコミュニティへ参加するきっかけとなっていた。支援団体の提供する「場」や野宿者と交流する「場」、同じような境遇の人との交流は共同の行動がとれるような態度がつくられ、自らがアクティブでポジティブな態度に変わることができるコミュニティであった。

以上から、ホームレスから脱した人の生活で再びホームレスになることを予防する要素として、同質的社会的ネットワークを包有する人間関係、帰属意識が持てるコミュニティの存在が挙げられる。

本章の分析対象が生活する地域は、支援団体の存在や生活保護につながる支援を行う支援者の存在が大きく関与していた。先行研究によれば日本の1990年代の野宿者は、怠け者ではなく、経済構造の転換によって生み出された「社会の弱い部分」である。山谷地域や釜ヶ崎地域のホームレスは、野宿者ではなく、日雇い労働者が野宿した「野宿労働者」たちが高齢化したためである。山谷地域や釜ヶ崎は戦前からいわゆる下層労働者の街であって、日雇い労働運動の集中地域であった特殊性がある。それで建築の合理化、それから1990年代の不況ということが原因で野宿労働者になったことから、山谷や釜ヶ崎では野宿労働者という用語を使う(渡辺, 2010)。生活保護による脱路上生活のプロセスが、コミュニティ、地域により大きく異なるということ、支援サービスの進行度、脱野宿ステージで関わる支援組織やそれに伴う社会資

源のあり方, 公的セクターの機能の有無や姿勢の相違が地域差を生み出すと指摘している(水内, 渥美, 蓬菜, 2008) ことから分析対象となった地域はある種の特殊性があるとも言える.

次章では同じ日雇い労働者の街という共通性がある山谷と釜ヶ崎の地域による違いについても念頭にホームレスやホームレスから脱した人が多く在住する地域の人々に対して行った調査を分析し, 安定した住居を維持することに貢献する人間関係の実態とより詳細な内容について探索する.

## 第5章 安定した住居生活を維持する要素—人間関係

この章では、ホームレス再発の予防に貢献すると考えられる人間関係を検討するため、現在ホームレス状態にある人々と安定した住居生活にある人々の生活状況と人間関係について量的・質的に分析し、ホームレスからの脱却後に安定した住居を維持することに影響を与える人間関係の実態を検討する。

### 第1節 ホームレス高齢者の生活実態調査

調査は、2017年12月から2019年4月の5ヶ月で行われた。サンプリング方法は第3章すでに紹介した。

#### 調査質問項目

##### a) 基本的属性

基本的属性は、年齢、婚姻状況、現在の住居がある地域、現在の住まい、就業状況、主たる収入源とした。

婚姻状況については、未婚、既婚、離別または死別かを尋ねた。現在の住まいについては「現在、あなたはどのような場所に住んでいますか」を尋ね、回答選択肢は賃貸集合住宅（民間アパート）、賃貸集合住宅（公的アパート）、簡易宿泊所（ドヤ）、一時保護施設（シェルター）、カプセルホテル/サウナ、インターネットカフェ/漫画喫茶、持ち家、友人・知人の家、社会福祉施設（無料低額施設、自立支援施設）、路上とした。

就業状況については、「現在、あなたはどのような形態で仕事をしていますか」と尋ね、回答選択肢はフルタイム雇用（正規）、フルタイム雇用（非正規）、アルバイト・パート、臨時雇用・短期雇用、日雇い、希望する仕事がなく、仕事をしていない、希望しても仕事がない、病気や障害のため、仕事ができないとした。

主たる収入源については、「現在、あなたの収入は、どのような方法で得ていますか」と尋ね、回答選択肢は雇用の仕事による収入、年金による収入、親族による援助、社会保障（生活保護）による援助、自営・自由業による収入、収入はないとし複数選択可とした。

安定した住居を維持しているかを測定する指標として、現在住んでいる場所に住んでいる期間を定住している期間とし、何年と何ヶ月単位で尋ねた。

##### b) 人間関係

人間関係の項目は、ミッチェルの社会的関係を参考にした。

ミッチェル（Mitchell J.C）が提示した個人の組み込まれている社会的関係は、社会的ネットワークによって考察できる人間関係とした。ミッチェルは社会的ネットワークを分析的概念

として使用し、社会的関係を図式化することにより、体系的に人間の社会的関係を整理した。ミッチェルは、社会的ネットワークの性質を、原点 (anchorage)、密度 (density)、到着可能性 (reachability)、強度 (intensity)、頻度 (frequency)、範囲またはネットワークの大きさ (arrangement)などの概念によって整理した。ミッチェルによれば、原点とは焦点となる特定の個人であり、密度とは焦点となる個人が接触している人々が互いに接触している程度である。また、到着可能性とは、特定の個人が彼または彼女にとって重要である他者に到着できる程度である。そして、範囲またはネットワークの大きさとは、焦点となる個人が直接的かつ定期的接触をもっている人の数である (陳, 1989)。ミッチェルが整理した概念を用い、他者とのコミュニケーションの頻度や時間、内容について、客観的に数値で把握可能なものを用いて分析し、社会的関係の構造を明らかにしようとする方法や、個人の生活史を深く聞き取り、誰と、どのような内容の関係を、どのくらいの間隔で交わっているのかを、ナラティブに分析するような方法がある。前者の方法は、社会的関係の構造を数量的に分析することが可能であり、客観性と正確性はあるが、特定の人々がもつ社会的ネットワークの構造しか把握できない。後者の調査方法も、一人の調査者が一度にたくさんの対象のヒストリーを聞き取ることは困難であり、多数の高齢者ホームレスの社会的ネットワークについて把握することは、時間と人手が大量にかかる。

人は複数の社会的ネットワークに参加して、直接接触している人だけでなく間接的に接触している人を通じて情報や機会の獲得が可能となり、利益を獲ることができるのである。しかしながら、これらの調査方法はそれぞれ限界があり、同質な集団、階層などに帰属している社会的ネットワークだけでなく、異質な集団、階層などに帰属している人々の中で結ばれる社会的ネットワークについては把握ができない。実際の社会的ネットワークの活用を考えてみても、知り合いの知り合いといったつながりで信頼関係を築き、就労や住居を紹介してもらったりすることもある。客観性と正確性も大切ではあるが、支援を受けてホームレスから脱した人びともいるが、自力で脱した人たちもいることから、全体を把握することは難しい。そこで、本論文では質問紙調査を行い、ホームレスから脱し回復していく過程にある高齢者ホームレスの社会的ネットワークについて、彼ら自身に回答してもらう方法で、正確性と一般化は担保できないとしても、リアリティの高いデータを収集できると考えた。ホームレス高齢者の人間関係の特徴については、本来は全ての関係について尋ねるべきであるが、質問数が多くなり、ホームレス高齢者には負担となり回答してもらえなくなる可能性を考え、狭い範囲での人間関係とした。ホームレスを経験した高齢者の人間関係は、彼を中心に複数の人とのつながりをもったひとつのまとまりとしてとらえることができる。人間関係のイメージは人によって異なるため、ホームレスを経験した高齢者にとって関係があると認識できている人の集合を問う内容に設定した。

人間関係の内容については、「心配なことを相談する人や組織を選んでください」と尋ね回答選択肢は同居していない親族, 近隣の友人, 遠くにいる友人, 近くにいる知り合い・知人, 遠くにいる知り合い・知人, 仕事の関係者, NPO などの支援団体, 行政, 相談したい人や組織はない, その他とした。特定の個人が彼にとって重要である他者に到着できる人の存在を問う質問として「特定の誰かと密な関係がありますか」「継続的にコミュニケーションをとる相手がありますか」と尋ね, 回答選択肢は, はい, いいえとした。

密度として, OECD の報告書で, 家族以外の社会的接触の頻度を他者との接触頻度の指標に用いている。一方, 日本政府は, 人との会話の頻度, 困った時に頼れる人の有無, 地域のつながりを感じる人の割合, 親しい友人の有無といった複数の指標を用いている (内閣府, 2012)。

本調査で用いる密度として OECD や内閣府の項目を参考に, 他者との接触頻度から「あなたは日常的に会話する人とどのくらい接触していますか」「あなたは家族や親戚とどのくらい接触していますか」「あなたは友人とどのくらい接触していますか」「あなたは近所の人や地域の人とどのくらい接触していますか」と尋ね, 回答選択肢は「毎日」「週に1回」「月に2回」「月に1回」「月に2回以上」「3ヶ月に1回」「半年に1回」「まったくない」までの7件法で回答を得るように設定した。

## 分析方法

回答者は調査した日にどこに寝泊まりをしていると答えていた。一時保護施設, カプセルホテル/サウナ, 友人・知人の家, 社会福祉施設, 路上に住む人たちを **Homeless** 群とし, 賃貸集合住宅, 簡易宿泊所, 持ち家に住む人たちを **Homed** 群とした。**Homeless** 群に分類した理由は, 一時保護施設と回答した者が利用は日替わりであり, 定員に達した場合には一時保護施設は使えないため路上と行き来していると回答したこと, カプセルホテル/サウナや友人・知人の家, 福祉施設を住まいと回答した人はそこに定住しているのではなく, 一時的に寝泊まりをしており路上と行き来していると回答したからである。**Homed** 群に分類した理由は現在住んでいる場所に定住していると回答したからである。

就業の有無は「正規」「非正規」「アルバイト・パート」「臨時雇用」「日雇い」を「就業あり」に, 「希望する仕事がなく仕事をしていない」「希望しても仕事がない」「病気や障害のため仕事ができない」を「就業なし」に分類した。

他者との接触頻度については, 「毎日」「週に1回」「月に2回」「月に1回」を「多い」とし, 「3ヶ月に1回」「半年に1回」「まったくない」を「少ない」と判断し, 2群に分けて検討した。

全体, 山谷, 釜ヶ崎の分布, 平均および標準偏差としてデータの記述的分析を行った。安定した住居に住む者 (**Homed** 群) とホームレス状態にある者 (**Homeless** 群) の2群に分け, カイ二乗検定またはフィッシャーの正確確率検定を用いて, 参加者レベルでカテゴリー独立変数

(住んでいる地域など) の有意性を比較した。安定した住居の維持と人間との関係を検討するために、二項ロジスティック回帰を用いて、安定した住居の維持と潜在的に関連する因子を評価した。

結果は 95%信頼区間 (CI) で推定オッズ比 (OR) として解釈した。

統計分析には SPSS Statistics 25.0 Japanese for Windows を使用し、有意水準は 5%とした。

### 倫理的配慮

本調査は著者の所属する機関の研究倫理審査の承認を得て実施した (the Ethics Committee of the Sophia University, Japan :013,2017)。

### 結果

#### (1) 全体の回答状況

調査票回収数 131 件、このうち調査項目に未記入がある回答とこの調査対象は 50 歳以上の者を高齢者ホームレスと定義しているため 50 歳代以下を除外した。そのため、有効回答数は 114 件であった。114 件というサンプル数は、政府やその委託を受けた団体が実施する調査より少ないが、個人が行うホームレスを対象としたアンケート調査としては比較的多い方である。特に、高齢者ホームレスに特化した調査としては、国内では多いデータ数の方であると思われる。

以下、エリア毎、Homed 群・Homeless 群に分けた結果を述べる。

#### 1) エリア毎の基本属性

##### ① 性別, 年齢

回答者の性別は、全て男性であった。回答者の平均年齢は 67.94 歳、50 歳代 13 人 (10.2%)、60 歳代 56 人 (44.1%)、70 歳代 43 人 (33.9%)、80 歳代 3 人 (2.4%) と中高年層が大半であった。山谷エリアの平均年齢は、67.34 歳、釜ヶ崎エリアの平均年齢は 68.27 歳であった (表 7-1)。

表 7-1 年齢・婚姻状況・現在の住居に住んでいる期間

エリア		年齢	婚姻状況	現在の居住期間
釜ヶ崎	平均値	68.27	2.37	102.589
	度数	73	73	73
	標準偏差	6.803	.677	135.4993
山谷	平均値	67.34	2.32	41.646
	度数	41	41	41
	標準偏差	7.459	.521	47.7536
合計	平均値	67.94	2.35	80.671
	度数	114	114	114
	標準偏差	7.027	.624	115.6226

## ② 婚姻状況

配偶者の有無は、血縁関係のある親族以外が一番近い家族関係であることからこの設問を設けた。

回答分布は表 7-2 のとおりである。婚姻状況については、未婚のものが、53.5%と高い。

山谷エリアは、未婚者が 66.7%と高く、釜ヶ崎エリアは、離別または死別の者が 44.3%と以前は伴侶を有していた割合が高かった。

表 7-2 婚姻状況

	全体		山谷		釜ヶ崎	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
既婚	9	7.9	1	4.2	8	10.1
未婚	54	53.5	25	66.7	29	45.6
離別または死別	49	38.6	14	29.2	35	44.3
合計	112	100	40	100.0	72	100.0

## ③ 現在の住まい

現在の住まいは、簡易宿所 33.3%が最も多く、次いで一時保護施設 28.1%が順に多い。

山谷エリアは、簡易宿所 65.9%が最も多く、次いで民間アパート 19.5%、釜ヶ崎エリアは、一時保護施設 43.8%が最も多く、次いで民間アパート 30.1%が順に多い（表 7-3）。

山谷エリアと釜ヶ崎エリアの違いの大きな要因は、自治体による生活保護運用の仕方が関係する。生活保護をどこで受給できるか否かの判断は、自治体によって異なり、山谷地域では、簡易宿所での保護適用が認めているが、釜ヶ崎では認めていない。そのため簡易宿所を福祉転用アパートとして経営スタイルを変更した釜ヶ崎では、多くの生活保護受給者が元簡易宿所であったアパートに住んでいる。このような差が山谷エリアと釜ヶ崎エリアの生活保護を受けて住む場所に影響していると考えられる。また、釜ヶ崎エリアの自立支援施設を利用している2名は一時的避難所として自立支援施設を使用しており、出たり入ったりを繰り返しているとのことである。

表 7-3 現在の住まい

現在の住居	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
民間アパート	22	30.1%	8	19.5%	30	26.3%
公的アパート	2	2.7%	2	4.9%	4	3.5%
簡易宿所	11	15.1%	27	65.9%	38	33.3%
一時保護施設	32	43.8%	0	0.0%	32	28.1%
カプセルホテル・サウナ	0	0.0%	1	2.4%	1	0.9%
持ち家	2	2.7%	0	0.0%	2	1.8%
友人・知人の家	2	2.7%	3	7.3%	5	4.4%
自立支援施設	2	2.7%	0	0.0%	2	1.8%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

#### ④ 現在の住まいに住んでいる期間

現在の住まいに住んでいる期間の平均期間は、6年7ヶ月（最短0.5ヶ月、最長60年）である。山谷エリアの平均期間は、3年4ヶ月（最短0.5ヶ月、最長15年）、釜ヶ崎エリアの平均期間は、8年5ヶ月（最短2ヶ月、最長60年）である（表7-1）。山谷エリアと釜ヶ崎エリアの平均期間は2倍以上の差がある。この差の要因は、釜ヶ崎エリアの回答者が住んでいる場所の約半数が一時保護施設（シェルター）であることから、長年仕事を得るためにシェルターと路上との行き来をしながら釜ヶ崎エリアに住んできた人が多く含まれていると考えられる。

#### ⑤ 現在の就労状況

回答者が就労している状況は、表7-4のとおりである。現在の就労状況は、何かしらの仕事に従事している者は、48.3%であるが、就労形態はパートや日雇い等、非正規雇用である。無職の者は51.7%である。山谷エリアは、病気や障害のため仕事ができない割合61.0%と健康面の理由で無職が最も多く、釜ヶ崎エリアは、日雇い労働が38.4%と多く、アルバイトなど何かしら

仕事に従事しているものが多い傾向であった。この違いは、釜ヶ崎エリアは日雇労働ができる日は簡易宿所に住み、労働ができない日はシェルターに寝泊りする、路上とシェルターを行ったり来たりする層がいることが影響していると考えられる。

表 7-4 現在の就労状況

現在の就労状況	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
フルタイム非正規雇用	1	1.4%	0	0.0%	1	0.9%
アルバイト・パート	15	20.5%	4	9.8%	19	16.7%
短期雇用・臨時雇用	6	8.2%	0	0.0%	6	5.3%
日雇い	28	38.4%	1	2.4%	29	25.4%
希望する仕事がない	7	9.6%	5	12.2%	12	10.5%
希望しても仕事がない	3	4.1%	6	14.6%	9	7.9%
病気や障害のため仕事ができない	13	17.8%	25	61.0%	38	33.3%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

#### ⑥ 現在の収入源

現在の主な収入源は、生活保護 46.5%が最も多く、次いで雇用の仕事による収入 35.1%であった。山谷エリアは、生活保護 80.5%と社会保障を受けている割合が多い傾向が、釜ヶ崎エリアは、雇用の仕事による収入が 52.1%と社会保障を受けているものより働いている者の割合が多い傾向であった（表 7-5-1, 7-5-2, 7-5-3）。この結果は、釜ヶ崎エリアで調査に協力下さった方が現在もシェルターに住んでいる、すなわち生活保護を受給せずに労働による収入で暮らしている人が多いことと関係している。

また、山谷エリアは生活保護と年金で生活している割合が 3 割ほどであるが釜ヶ崎エリアは雇用収集と年金で生活している割合が 2 割弱いる。

表 7-5-1 現在の主とする収入源

現在の収入源	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
雇用収入	38	52.1%	2	4.9%	40	35.1%
年金	10	13.7%	5	12.2%	15	13.2%
生活保護	20	27.4%	33	80.5%	53	46.5%
自由業収入	4	5.5%	1	2.4%	5	4.4%
収入なし	1	1.4%	0	0.0%	1	0.9%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

表 7-5-2 現在の主とする収入源の内訳

現在の収入源	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
雇用収入	27	35.7	2	2.9	29	23.2
雇用収入+自由業による収入	1	1.4	0	0	1	0.9
雇用収入+年金	10	14.3	0	0	10	9.8
自由業による収入	4	5.7	0	0	4	4.5
収入なし	1	1.4	0	0	1	2.7
生保+雇用収入	3	4.1	3	7.3	6	5.2
生保+年金	4	5.6	12	29.3	16	14.3
生保のみ	13	17.8	18	43.9	31	32.1
年金のみ	10	13.6	5	10.2	15	13.4
合計	73	100	41	100	114	100

表 7-5-3 生活保護受給の割合

生活保護受給の有無	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
生保	20	27.3	33	80.5	53	48.2
非生保	53	72.6	8	19.5	61	53.5
合計	73	100	41	100	114	100

## 2) エリア毎の人間関係

### ① 現在の心配なこと, 将来への心配なこと, 心配なことを相談する先

現在及び将来への心配なことは, 特にないと答える割合が多かったが, 体調の悪さや未治療の疾患等に関する健康面への心配が両エリアとも多かった (表 7-6-1, 7-6-2)。

現在心配なこととして経済的なことは釜ヶ崎エリアの方が多傾向にあるが, これは現在日雇労働など何らかの仕事で生活していることを反映していると考えられる。

表 7-6-1 現在の心配なこと

現在の心配ごと	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
経済的なこと（収入面、金銭管理等）	15	20.5%	7	17.1%	22	19.3%
住居（住み続けられるか、引越等）	8	11.0%	4	9.8%	12	10.5%
仕事（求職、転職等）	1	1.4%	1	2.4%	2	1.8%
近隣との関係	2	2.7%	0	0.0%	2	1.8%
健康（体調が悪い、未治療の疾患等）	21	28.8%	11	26.8%	32	28.1%
特にない	26	35.6%	18	43.9%	44	38.6%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

表 7-6-2 将来の心配なこと

将来への心配なこと	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
経済的なこと（医療費・介護費等）	14	19.2%	4	9.8%	18	15.8%
買い物	0	0.0%	2	4.9%	2	1.8%
仕事（高齢で働けない、解雇等）	1	1.4%	3	7.3%	4	3.5%
健康・介護	25	34.2%	11	26.8%	36	31.6%
相談先	0	0.0%	2	4.9%	2	1.8%
住居	6	8.2%	5	12.2%	11	9.6%
特にない	22	30.1%	12	29.3%	34	29.8%
その他（頼れる人がいない等）	5	6.8%	2	4.9%	7	6.1%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

心配なことを相談する人や組織は、NPO など支援団体が 36.2%と最も多く、次いで相談したい人や組織はないが 21.3%であった（表 7-6-3）。

山谷エリアの回答者は、NPO など支援団体が 53.2%と最も多く、友人や知人を挙げているものは少ない傾向にある。

釜ヶ崎エリアの回答者は、NPO など支援団体 23.6%、相談したい人や組織はないが 25.0%と多く、相談したくないと考えているのか、相談する人や組織の情報を有していないのかは不明である。しかしながら、釜ヶ崎エリアの回答者は同居していない親族、近隣の友人が 11.3%、近くにいる知り合い・知人が 11.3%である。釜ヶ崎エリアは、仕事や路上生活との行き来をしている人の割合が山谷エリアの対象者に比べ多いことから、仕事をしている人たちは支援団体以外に同じように生活している身近な人とのネットワークを有している傾向があることも考えられる。

表 7-6-3 心配なことを相談する人や組織

心配ごとを相談する相手（複数回答）	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
同居していない親族	9	11.3%	2	4.3%	11	8.7%
近隣の友人	9	11.3%	3	6.4%	12	9.4%
遠くにいる友人	3	3.8%	1	2.1%	4	3.1%
近くにいる知り合い・知人	9	11.3%	4	8.5%	13	10.2%
遠くにいる知り合い・知人	1	1.3%	2	4.3%	3	2.4%
支援団体	21	26.3%	25	53.2%	46	36.2%
行政	5	6.3%	3	6.4%	8	6.3%
相談したい人や組織はない	20	25.0%	7	14.9%	27	21.3%
その他（寺の住職等）	3	3.8%	0	0.0%	3	2.4%
合計	80	100.0%	47	100.0%	127	100.0%

## ② 他者との関係の状況

誰かと密な関係がないと答えたものは、67.7%であった。山谷エリアは、68.4%、釜ヶ崎エリアは65.8%で、同様の傾向であった（表 7-6-4）。誰かと交流する機会はあるながらも密な関係をもつほどではない人が多い傾向であることがわかった。

継続的にコミュニケーションをとる相手がいると答えたものは、65.8%であった。山谷エリアは73.2%、釜ヶ崎エリアは61.6%と、釜ヶ崎エリアの方がやや低い傾向にある（表 4-6-5）。しかしながら、密な関係までは有しておらずとも、継続的にコミュニケーションをとる相手がいることはわかった。

表 7-6-4 特定の誰かと密な関係

特定の誰かと密な関係があるか？	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
ある	25	34.2%	13	31.7%	38	33.3%
ない	48	65.8%	28	68.3%	76	66.7%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

表 7-6-5 継続的にコミュニケーションをとる相手

継続的にコミュニケーションをとる相手がいるか？	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
ある	45	61.6%	30	73.2%	75	65.8%
ない	28	38.4%	11	26.8%	39	34.2%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

### ③ 他者と接触する頻度

社会的交流の種類と頻度を問うために、「日常的に会話する人と接触する頻度」、「家族・親族と接触する頻度」、「友人と接触する頻度」、「近所の人や地域の人と接触する頻度」、「他者と交流する場に参加する頻度」の質問を設けた。

日常的に会話する人と接触する頻度の結果は表 7-7-1 である。

日常的に会話する人と接触する頻度は、毎日ある人が 66.7%、週 1 回以上ある人が 14.9%、全くない人が 16.7%であった。

山谷エリアでは、毎日ある人が 48.8%、週に 1 回以上が 17.1%、全くない人が 29.3%であった。釜ヶ崎エリアでは、毎日ある人が 76.7%、週 1 回以上が 13.7%、全くない人は 9.6%であった。

山谷エリアの方が、日常的に会話する人と接触する機会が全くない人の割合が高かった。この差は釜ヶ崎エリアの方が就労している割合や一時保護施設にいる人が多かったことが影響しているのではないかと考える。

表 7-7-1 日常的に会話する人と接触する頻度

日常的に会話する人と接触する頻度	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	56	76.7%	20	48.8%	76	66.7%
週に1回以上	10	13.7%	7	17.1%	17	14.9%
月2回以上	0	0.0%	2	4.9%	2	1.8%
全くない	7	9.6%	12	29.3%	19	16.7%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

家族・親戚と接触する頻度の結果は表 7-7-2 である。

家族・親戚と接触する頻度は、全くない人が 83.3%、半年に 1 回程度が 8.8%で家族や親族とほとんど接触がない人が多かった。

山谷エリアは、全くない人が 85.4%、半年に 1 回程度が 7.3%であった。釜ヶ崎エリアは、全くない人が 82.2%、半年に 1 回程度が 9.6%であった。

何年接触していないかは質問内容に入れていないため、家族や親族との関係が全くないかどうかまではわからないが、関係が少ないことがわかった。

この結果は、海外の若年層ホームレスの先行研究では、家族との関係が続いている傾向が高かったことと異なるものであった。

表 7-7-2 家族・親族と接触する頻度

家族・親族と接触する頻度	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	1	1.4%	1	2.4%	2	1.8%
週1回以上	2	2.7%	0	0.0%	2	1.8%
月2回以上	0	0.0%	1	2.4%	1	0.9%
月1回程度	1	1.4%	0	0.0%	1	0.9%
3ヶ月に1回程度	2	2.7%	1	2.4%	3	2.6%
6ヶ月に1回程度	7	9.6%	3	7.3%	10	8.8%
全くない	60	82.2%	35	85.4%	95	83.3%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

友人と接触する頻度の結果は表 7-7-3 である。

友人と接触する頻度は、毎日ある人が 36.8%、週に1回以上が 21.9%、全くない人が 30.7%であった。山谷エリアでは、毎日ある人が 22.0%、週に1回以上が 22.0%、月2回以上が 14.6%、全くない人が 39.0%であった。

釜ヶ崎エリアでは、毎日ある人が 45.2%、週に1回以上が 21.9%、全くない人が 26.0%であった。釜ヶ崎エリアの方が、友人と接触する頻度が高い傾向にあった。釜ヶ崎エリアの方が仕事を通じた友人関係や路上生活をしている人同士の関係を有していることや、元々釜ヶ崎で長年暮らしてきたことも影響していることが考えられる。

表 7-7-3 友人と接触する頻度

友人と接触する頻度	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	33	45.2%	9	22.0%	42	36.8%
週1回以上	16	21.9%	9	22.0%	25	21.9%
月2回以上	1	1.4%	6	14.6%	7	6.1%
月1回程度	3	4.1%	0	0.0%	3	2.6%
6ヶ月に1回程度	1	1.4%	1	2.4%	2	1.8%
全くない	19	26.0%	16	39.0%	35	30.7%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

近所の人や地域の人と接触する頻度の結果は表 7-7-4 である。

近所の人や地域の人と接触する頻度は、毎日ある人が 39.5%、週1回以上が 12.3%、全くない人が 44.7%であった。

山谷エリアでは、毎日ある人が 29.3%、週に1回以上が 14.6%、全くない人が 51.2%であった。釜ヶ崎エリアでは、毎日ある人が 45.2%、週に1回以上が 11.0%、全くない人が 41.1%であった。

釜ヶ崎エリアの方が、山谷エリアに比べて近所の人や地域の人と接触する頻度が高い傾向にあった。この差は、釜ヶ崎エリアに居住している期間が長いことや東西文化の違いも影響しているのではないかと考えられる。

表 7-7-4 近所の人や地域の人と接触する頻度

近所の人や地域の人と接触する頻度	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	33	45.2%	12	29.3%	45	39.5%
週1回以上	8	11.0%	6	14.6%	14	12.3%
月2回以上	1	1.4%	2	4.9%	3	2.6%
6ヶ月に1回程度	1	1.4%	0	0.0%	1	0.9%
全くない	30	41.1%	21	51.2%	51	44.7%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

(2) 安定した住居生活にある者とホームレス状態にある者の回答

安定した住居生活にある者とホームレス状態にある者とでは、仕事以外の人間関係や、地域のボランティア活動やイベント活動への参加を通じた人間関係に差異がある可能性が予測される。そこで、回答者を Homed 群と Homeless 群に分けて、個人的属性、人間関係の状況、について差異があるかどうかを確認した。

1) Homed 群と Homeless 群別の基本的属性

対象者 117 名のうち、は Homed 群 46.4%、Homeless 群は 53.6%を占めた。平均年齢は Homed 群 69.6±7.72 歳、Homeless 群 66.5±6.09 歳と生保受給者の方がやや高齢であった (表 8-1)。

現在のエリアに住んでいる期間は、Homed 群の平均年数は 6 年 5 ヶ月と生保非受給者の 8 年 2 ヶ月に比べ短い傾向にあった (表 8-1)。この差は、生活保護を受給することになってから現在の住まいに移り住んだ人がいることが影響していると考えられる。

表 8-1 年齢・住んでいる期間

ホームレス	年齢	現在の住居地に住んでいる期間 (ヶ月)
homed	平均値	78.97
	度数	74.00
	標準偏差	123.72
homeless	平均値	99.80
	度数	40.00
	標準偏差	115.95
合計	平均値	86.28
	度数	114.00
	標準偏差	120.95

現在の住まいは、簡易宿所が 33.3%で最も多く、次いで一時保護施設が 28.1%であり多かった。Homed 群は簡易宿所が 51.4%で最も多く、次いで民間アパートが 40.5%であった。Homeless 群は、一時保護施設が 80.0%で最も多く、次いで社会福祉施設 (一時的な宿泊施設) が 12.5%であった。社会福祉施設 (一時的な宿泊施設) を住まいにしている人たちはそこに定住しているのではなく、路上と一時的に福祉施設を行き来していると回答していた。

Homed 群は、アパートや簡易宿所など安定した住居に住んでいる傾向が高かった。一方、Homeless 群は、一時保護施設やインターネットカフェなど不安定な住居に住んでいる傾向が高かった (表 8-2)。

表 8-2 現在の住居

		homed	homeless	合計
民間アパート	度数	30	0	30
	%	40.5%	0.0%	26.3%
公的アパート	度数	4	0	4
	%	5.4%	0.0%	3.5%
簡易宿所	度数	38	0	38
	%	51.4%	0.0%	33.3%
一時保護施設（シェルター）	度数	0	32	32
	%	0.0%	80.0%	28.1%
インターネットカフェ・漫画喫茶	度数	0	1	1
	%	0.0%	2.5%	0.9%
持ち家	度数	2	0	2
	%	2.7%	0.0%	1.8%
社会福祉施設（自立支援施設）	度数	0	5	5
	%	0.0%	12.5%	4.4%
路上	度数	0	2	2
	%	0.0%	5.0%	1.8%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

現在の就労状況については、Homed 群は生活保護による援護が 63.5%と最も多く、次いで雇用の仕事による収入が 23.0% であった。Homeless 群は雇用の仕事による収入が 57.5%、年金による収入 17.5%と何かしら収入があるが、住居を有するほどの余裕がないことがわかった。（表 8-3）。

表 8-3 現在の就労状況

		homed	homeless	合計
雇用の仕事による収入	度数	17	23	40
	%	23.0%	57.5%	35.1%
年金による収入	度数	9	7	16
	%	12.2%	17.5%	14.0%
生活保護による援護	度数	47	5	52
	%	63.5%	12.5%	45.6%
自営・自由業による収入	度数	1	4	5
	%	1.4%	10.0%	4.4%
収入はない	度数	0	1	1
	%	0.0%	2.5%	0.9%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

## 2) 他者との関係の状況

### 相談する人の存在

相談事を相談したい相手や組織がないと答えたものは、Homed 群 16.2%、Homeless 群 37.5%で、Homeless 群の方が高い割合で相談先を有していない（表 8-4-1）。Homed 群の相談する人や組織で最も多かったのは、NPO などの支援団体であった。

表 8-4-1 相談する相手・組織

		homed	homeless	合計
同居していない親族	度数	9	2	11
	%	12.2%	5.0%	9.6%
近隣の友人	度数	8	3	11
	%	10.8%	7.5%	9.6%
近隣にいない友人	度数	1	3	4
	%	1.4%	7.5%	3.5%
近くにいる知り合い・知人	度数	6	4	10
	%	8.1%	10.0%	8.8%
仕事の関係者	度数	3	0	3
	%	4.1%	0.0%	2.6%
NPOなど支援団体・スタッフ	度数	32	8	40
	%	43.2%	20.0%	35.1%
行政・担当ケースワーカー	度数	2	3	5
	%	2.7%	7.5%	4.4%
相談したい人や組織はない	度数	12	15	27
	%	16.2%	37.5%	23.7%
その他	度数	1	2	3
	%	1.4%	5.0%	2.6%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

### 他者との関係

関係親密な関係にある相手がいると答えたものは、Homed 群 43.2%、Homeless 群 15.0%で、Homeless 群の方が高い割合で親密な関係にある相手を有している。どのような相手かまでは問うていないため、相手がどのような人かは不明である。

継続的にコミュニケーションをとる相手がいると答えたものは、Homed 群 74.3%、Homeless 群 50.0%と、Homed 群の方が継続的にコミュニケーションをとる相手を有する傾向にある（表 8-4-2）。Homed 群は自由に出入りする場や他者と交流する場を有する割合が Homeless 群に比べ高く、親密な関係にある相手や継続的にコミュニケーションをとる相手がいる割合が多いことがわかった。

表 8-4-2 親密な関係にある特定の相手

		homed	homeless	合計
あり	度数	32	6	38
	%	43.2%	15.0%	33.3%
なし	度数	42	34	76
	%	56.8%	85.0%	66.7%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 8-4-3 継続的にコミュニケーションをとる相手

		homed	homeless	合計
あり	度数	55	20	75
	%	74.3%	50.0%	65.8%
なし	度数	19	20	39
	%	25.7%	50.0%	34.2%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

### 他者と接触する頻度

他者と日常的会話をする割合は Homed 群、Homeless 群ともに毎日もしくは週 1 回以上あるものが 8 割であった(表 8-5-1)。

家族・親族と接触する頻度は Homed 群、Homeless 群ともに全くない割合が 77.0%、95.0%と多かった(表 8-5-2)。

友人と接触する頻度は、毎日もしくは週 1 回以上あるものが Homed 群 66.7%、Homeless 群 62.5%であった(表 8-5-3)。

近隣の人や地域の人と接触する頻度は、Homed 群は毎日もしくは週 1 回以上の割合が 56.8%であるのに対し、Homeless 群は全くない割合が 55.5%であった(表 8-7-4)。

表 8-5-1 日常的に会話する人と接触する頻度

		homed	homeless	合計
毎日	度数	50	26	76
	%	67.6%	65.0%	66.7%
週 1 回以上	度数	11	6	17
	%	14.9%	15.0%	14.9%
月 2 回以上	度数	1	1	2
	%	1.4%	2.5%	1.8%
全くない	度数	12	7	19
	%	16.2%	17.5%	16.7%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 8-5-2 家族・親族と接触する頻度

		homed	homeless	合計
毎日	度数	2	0	2
	%	2.7%	0.0%	1.8%
週1回以上	度数	0	2	2
	%	0.0%	5.0%	1.8%
月2回以上	度数	1	0	1
	%	1.4%	0.0%	0.9%
月1回以上	度数	1	0	1
	%	1.4%	0.0%	0.9%
3か月に1回程度	度数	3	0	3
	%	4.1%	0.0%	2.6%
半年に1回程度	度数	10	0	10
	%	13.5%	0.0%	8.8%
全くない	度数	57	38	95
	%	77.0%	95.0%	83.3%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 8-5-3 友人と接触する頻度

		homed	homeless	合計
毎日	度数	20	22	42
	%	27.0%	55.0%	36.8%
週1回以上	度数	22	3	25
	%	29.7%	7.5%	21.9%
月2回以上	度数	6	1	7
	%	8.1%	2.5%	6.1%
月1回以上	度数	2	1	3
	%	2.7%	2.5%	2.6%
半年に1回程度	度数	2	0	2
	%	2.7%	0.0%	1.8%
全くない	度数	22	13	35
	%	29.7%	32.5%	30.7%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 8-5-4 近所の人や地域の人と接触する頻度

		homed	homeless	合計
毎日	度数	29	16	45
	%	39.2%	40.0%	39.5%
週1回以上	度数	13	1	14
	%	17.6%	2.5%	12.3%
月2回以上	度数	3	0	3
	%	4.1%	0.0%	2.6%
半年に1回程度	度数	0	1	1
	%	0.0%	2.5%	0.9%
全くない	度数	29	22	51
	%	39.2%	55.0%	44.7%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

### (3) ホームレスを抑制する要素

表 9 は、基本属性を安定した住居で生活している群 (Homed 群) と不安定な住居で生活している群 (Homeless 群) で関連を分析した。山谷地域の参加者の方が、安定した住居で生活していた。

Homed 群の方がより高齢 ( $p=0.046$ ) であり、仕事についている人は少なかった ( $p<.001$ )。また、より多くの人々が社会福祉を受けていた ( $p<.001$ )。

表 10 は、人間関係に関する項目について安定した住居の有り無し群で関連を検討した。

Homed 群の方が、困った時に相談できる人を有しており ( $p=0.011$ )、密接な関係を持つ相手がおおり ( $p=0.003$ )、継続的にコミュニケーションをとる相手を有していた ( $p=0.009$ )。

表 11 は、安定した住居生活に関連する因子を二項ロジスティック回帰分析により分析した。従属変数として「ホームレス」、共変量として、「住んでいる地域」、「年齢」、「婚姻状況」、「就労」、「生活保護」、「困った時に相談できる相手」、「日々他者と会話する頻度」、「家族・親族と接触する頻度」、「友人・知人と接触する頻度」、「近所・地域の人と接触する頻度」、「親密な関係にある人」、「継続的なコミュニケーションがある人」を選択した。全ての変数をモデルの影響を含めるために変数減少法を選んで解析した。

全ての共変量をモデルに含めた場合のパラメータ推定値、有意確率、 $\text{Exp}(\beta)$ などを表 11 に示した。地域釜ヶ崎はパラメータ推定値が正であり、地域釜ヶ崎はホームレスを増やす方向に働いている。また、年齢がより高齢、就労、生活保護の受給、困った時に相談できる相手、親密な関係にある人の存在、継続的にコミュニケーションをとる相手、日常的に会話する頻度が多い、近所・地域の人と接触する頻度が多いことは、係数が負になっているのでホームレスを抑制する方向に働いている。これらの共変量のうち、5%有意水準で有意差が見られたのは、地域釜ヶ崎 ( $OR=10.469, P=0.005$ )、親密な関係にある人の存在であった ( $OR=0.142, P=0.010$ )。

さらに、表 12 は変数減少法によるパラメータの推定値を示した。ステップ 1 からステップ 9 までステップごとに有意確率の小さい変数を 1 つずつ減じて行った結果、最後に地域釜ヶ崎、生活保護の受給、親密な関係にある人の存在が変数として残った。生活保護の受給、親密な関係にある人の存在はパラメータ推定値が負であり、生活保護の受給の有意確率  $P=0.005$ 、親密な関係にある人の存在の有意確率  $P=0.004$  でこの係数は有意に 0 ではないことを示している。また、生活保護受給の  $\text{Exp}(\beta)=0.204$  であり、この値が生活保護受給群におけるホームレスにある率と不受給群におけるホームレスにある率のオッズ比を示しており、95%信頼区間は 0.068 から 0.614 であり、有意に 1 より小さいことが示されている。親密な関係にある人の存在の  $\text{Exp}(\beta)=0.201$  であり、95%信頼区間は 0.066 から 0.607 であり、有意に 1 より小さいことが示されている。したがって、生活保護受給、親密な関係にある人の存在は、ホームレスを抑制することが示唆された。

表 9 Homed 群と Homeless 群の基本属性 (N=117)

	Homed	Homeless	P value
	(n=80)	(n=47)	
	n(%)	n(%)	
地域			
山谷	37(32.5)	4(3.5)	<.001*
釜ヶ崎	37(32.5)	36(31.6)	
年齢 (Median)			
50-66	27(23.7)	21(18.4)	0.098
67-84	47(37.0)	19(15.0)	
婚姻状況			
既婚	7(6.1)	2(1.8)	0.545
未婚	34(29.8)	22(19.3)	
離婚・死別	33(28.9)	16(14.0)	
就労状況			
就労	26(22.8)	29(25.4)	<.001
未就労	48(42.1)	11(9.6)	
生活保護			
受給	47(41.2)	6(5.3)	<.001*
未受給	27(23.7)	34(29.8)	

A chi-square test was performed.

\*Fisher's exact test was performed

表 10 Homed 群と Homeless 群の人間関係

	Homed (n=80)	Homeless (n=47)	P value
	n(%)	n(%)	
相談できる人の有無			
あり	62 (54.4)	25 (23.7)	0.011
なし	12 (10.5)	15 (13.2)	
親密な関係の相手			
あり	32 (28.1)	6 (5.3)	0.003*
なし	42 (36.8)	34 (29.8)	
継続的にコミュニケーションをとる相手			
あり	55 (48.2)	20 (17.5)	0.009
なし	19 (16.7)	20 (17.5)	
他者と日常的な会話をする機会			
多い	62 (54.4)	33 (28.9)	0.861
少ない	12 (10.5)	7 (6.1)	
家族と接触する機会			
多い	3 (2.6)	2 (1.8)	0.814
少ない	71 (62.3)	38 (33.3)	
友人・知人と接触する機会			
多い	48 (42.1)	26 (22.8)	0.988
少ない	26 (22.8)	14 (12.3)	
近所の人と接触する機会			
多い	29 (25.4)	23 (20.2)	0.061
少ない	45 (39.5)	17 (14.9)	

A chi-square test was performed.

\*Fisher's exact test was performed

表 11 基本属性と人間関係の 2 項ロジスティック回帰分析の結果

変数	B	OR (95% CI)	P value
地域(ref. 山谷)			
釜ヶ崎	2.348	10.469 (2.036-53.82)	0.005
年齢(ref. 50-66歳)			
67-84歳	-0.497	0.609 (0.184-2.012)	0.416
婚姻状況			
未婚	0.327	1.387 (0.586-3.286)	0.457
就労状況 (ref. 未就労)			
就労	-0.46	0.615 (0.105-3.783)	0.615
生活保護利用状況( ref. 未受給)			
受給	-1.709	0.181 (0.026-0.958)	0.087
困った時に相談できる相手 (ref.なし)			
あり	-0.779	0.459 (0.122-1.729)	0.250
親密な関係にある人の存在 (ref.なし)			
あり	-1.949	0.142 (0.032-0.629)	0.010
継続的にコミュニケーションをとる相手 (ref.なし)			
あり	-0.165	0.848 (0.202-3.565)	0.822
日常的に会話する頻度 (ref.少ない)			
多い	-0.818	0.441 (0.063-3.081)	0.409
家族・親族と接触する頻度 (ref.少ない)			
多い	0.321	1.379 (0.114-16.648)	0.800
友人・知人と接触する頻度 (ref.少ない)			
多い	0.533	1.703 (0.454-6.389)	0.430
近所・地域の人と接触する頻度 (ref.少ない)			
多い	-0.508	0.602 (0.153-2.367)	0.467

B, 回帰係数; OR, オッズ比 ; CI, 95%信頼区間

表 12 基本属性と人間関係の 2 項ロジスティック回帰ステップ分析の結果

ステップ	変数	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp (B)	EXP (B) の 95% 信頼区間		
								下限	上限	
ステップ 1 <sup>a</sup>	地域	2.348	0.835	7.904	1	0.005	10.469	2.036	53.822	
	年齢	-0.497	0.610	0.663	1	0.416	0.609	0.184	2.012	
	婚姻状況	0.327	0.440	0.554	1	0.457	1.387	0.586	3.286	
	就労	-0.460	0.913	0.253	1	0.615	0.632	0.105	3.783	
	生活保護	-1.709	0.999	2.927	1	0.087	0.181	0.026	1.283	
	相談できる相手	-0.779	0.677	1.325	1	0.250	0.459	0.122	1.729	
	日常的に会話	-0.818	0.992	0.681	1	0.409	0.441	0.063	3.081	
	家族との接触	0.321	1.271	0.064	1	0.800	1.379	0.114	16.648	
	友達との接触	0.533	0.674	0.624	1	0.430	1.703	0.454	6.389	
	近所の人との接触	-0.508	0.699	0.529	1	0.467	0.602	0.153	2.367	
	親密な関係の相手	-1.949	0.758	6.610	1	0.010	0.142	0.032	0.629	
	継続的なコミュニケーションの相手	-0.165	0.733	0.051	1	0.822	0.848	0.202	3.565	
定数	-2.899	1.738	2.784	1	0.095	0.055				
ステップ 2 <sup>a</sup>	地域	2.361	0.835	7.988	1	0.005	10.600	2.062	54.489	
	年齢	-0.482	0.606	0.633	1	0.426	0.618	0.188	2.025	
	婚姻状況	0.327	0.440	0.551	1	0.458	1.386	0.585	3.284	
	就労	-0.457	0.914	0.250	1	0.617	0.633	0.105	3.802	
	生活保護	-1.721	0.997	2.978	1	0.084	0.179	0.025	1.263	
	相談できる相手	-0.768	0.674	1.298	1	0.255	0.464	0.124	1.739	
	日常的に会話	-0.832	0.988	0.709	1	0.400	0.435	0.063	3.017	
	家族との接触	0.332	1.271	0.068	1	0.794	1.393	0.115	16.816	
	友達との接触	0.516	0.669	0.595	1	0.440	1.675	0.452	6.214	
	近所の人との接触	-0.528	0.694	0.579	1	0.447	0.590	0.151	2.297	
	親密な関係の相手	-1.978	0.747	7.010	1	0.008	0.138	0.032	0.598	
	定数	-2.942	1.733	2.883	1	0.089	0.053			
ステップ 3 <sup>a</sup>	地域	2.334	0.826	7.980	1	0.005	10.315	2.043	52.079	
	年齢	-0.487	0.604	0.648	1	0.421	0.615	0.188	2.009	
	婚姻状況	0.326	0.440	0.551	1	0.458	1.386	0.585	3.280	
	就労	-0.484	0.910	0.283	1	0.595	0.616	0.103	3.669	
	生活保護	-1.759	0.989	3.160	1	0.075	0.172	0.025	1.198	
	相談できる相手	-0.772	0.674	1.311	1	0.252	0.462	0.123	1.733	
	日常的に会話	-0.775	0.966	0.644	1	0.422	0.461	0.069	3.059	
	友達との接触	0.486	0.657	0.546	1	0.460	1.625	0.448	5.892	
	近所の人との接触	-0.470	0.656	0.513	1	0.474	0.625	0.173	2.262	
	親密な関係の相手	-1.973	0.745	7.005	1	0.008	0.139	0.032	0.599	
	定数	-2.863	1.701	2.831	1	0.092	0.057			
	ステップ 4 <sup>a</sup>	地域	2.165	0.769	7.935	1	0.005	8.714	1.932	39.302
年齢		-0.519	0.572	0.822	1	0.365	0.595	0.194	1.827	
婚姻状況		0.415	0.419	0.982	1	0.322	1.515	0.666	3.445	
就労		-1.635	0.689	5.624	1	0.018	0.195	0.050	0.753	
生活保護		-0.638	0.654	0.953	1	0.329	0.528	0.147	1.902	
相談できる相手		-0.884	0.922	0.919	1	0.338	0.413	0.068	2.518	
日常的に会話		0.522	0.645	0.656	1	0.418	1.686	0.476	5.968	
近所の人との接触		-0.412	0.612	0.453	1	0.501	0.662	0.199	2.199	
親密な関係の相手		-1.915	0.709	7.287	1	0.007	0.147	0.037	0.592	
定数		-3.189	1.620	3.872	1	0.049	0.041			
ステップ 5 <sup>a</sup>		地域	2.170	0.767	8.012	1	0.005	8.756	1.949	39.335
		年齢	-0.652	0.537	1.472	1	0.225	0.521	0.182	1.493
	婚姻状況	0.471	0.413	1.302	1	0.254	1.602	0.713	3.600	
	生活保護	-1.619	0.689	5.523	1	0.019	0.198	0.051	0.764	
	相談できる相手	-0.732	0.639	1.313	1	0.252	0.481	0.137	1.683	
	日常的に会話	-1.045	0.889	1.381	1	0.240	0.352	0.062	2.010	
	友達との接触	0.465	0.637	0.533	1	0.465	1.592	0.457	5.553	
	親密な関係の相手	-1.988	0.698	8.118	1	0.004	0.137	0.035	0.538	
	定数	-3.212	1.614	3.958	1	0.047	0.040			

a. ステップ 1: 投入された変数 地域, 年齢, 婚姻状況, 就労, 生活保護, 相談できる相手, 日常的に会話する相手との接触, 家族との接触, 友達との接触, 近所の人との接触, 親密な関係の相手, 継続的なコミュニケーションの相手,

表 12 基本属性と人間関係の 2 項ロジスティック回帰ステップ分析の結果 (つづき)

ステップ 6 <sup>a</sup>	地域	2.105	0.761	7.645	1	0.006	8.205	1.846	36.475
	年齢	-0.644	0.535	1.446	1	0.229	0.525	0.184	1.500
	婚姻状況	0.520	0.407	1.635	1	0.201	1.682	0.758	3.735
	生活保護	-1.727	0.675	6.553	1	0.010	0.178	0.047	0.667
	相談できる相手	-0.693	0.636	1.189	1	0.276	0.500	0.144	1.738
	日常的に会話	-0.807	0.839	0.927	1	0.336	0.446	0.086	2.308
	親密な関係の相手	-1.886	0.682	7.646	1	0.006	0.152	0.040	0.577
	定数	-3.164	1.608	3.871	1	0.049	0.042		
ステップ 7 <sup>a</sup>	地域	1.806	0.674	7.184	1	0.007	6.087	1.625	22.801
	年齢	-0.614	0.532	1.328	1	0.249	0.541	0.191	1.537
	婚姻状況	0.518	0.405	1.641	1	0.200	1.679	0.760	3.710
	生活保護	-1.696	0.662	6.564	1	0.010	0.183	0.050	0.671
	相談できる相手	-0.825	0.628	1.723	1	0.189	0.438	0.128	1.502
	親密な関係の相手	-1.852	0.670	7.644	1	0.006	0.157	0.042	0.583
	定数	-3.158	1.595	3.919	1	0.048	0.043		
	ステップ 8 <sup>a</sup>	地域	1.688	0.653	6.673	1	0.010	5.408	1.503
婚姻状況		0.491	0.396	1.541	1	0.214	1.634	0.753	3.548
生活保護		-1.767	0.589	8.991	1	0.003	0.171	0.054	0.542
親密な関係の相手		-1.754	0.588	8.907	1	0.003	0.173	0.055	0.548
定数		-3.581	1.476	5.883	1	0.015	0.028		
ステップ 9 <sup>a</sup>	地域	1.733	0.651	7.081	1	0.008	5.658	1.579	20.276
	生活保護	-1.589	0.562	8.006	1	0.005	0.204	0.068	0.614
	親密な関係の相手	-1.606	0.564	8.098	1	0.004	0.201	0.066	0.607
	定数	-2.603	1.238	4.423	1	0.035	0.074		

ロジスティック回帰分析の結果、生活保護受給、親密な関係にある人の存在は、ホームレスを抑制することが示唆された。

第4章の結果でも、路上生活をしている中で支援団体のスタッフとの接点ができ、スタッフからの勧めや支援を得て生活保護の受給ができるようになり、路上から安定した住居へ移行する大きなきっかけとして生活保護の受給があった。よって路上から安定した住居へ移行する初期の時期に生活保護を受給することは路上から脱することに資する要素として大きいことが考えられる。しかしながら、路上から移動した住まいの地域は必ずしも慣れ親しんだ地域でない人もいることから、路上生活中の人間関係が切れてしまう人もいる。そのような中で、困ったことを相談できる支援団体や行政の生活保護ケースワーカーを介してコミュニティに関わるきっかけをもつ人も多い。

このような状況から、親密な関係性のような人間関係については、即日的に構築できるような関係ではなく時間の経過も影響することが予測される。生活保護を受給し安定した住居生活をしている人々のみに絞って、現在の住居に住んでいる期間により人間関係に何らかの違いがあるのかどうかを、次節以降でみていく。

## 第2節 安定した住居へ移行した時期別の高齢者の生活

日本における脱路上（野宿）生活の経路は大きく分けて2つのパターンがある。①中間施設を利用して一定期間滞在後、一般住宅生活に移行する。②中間施設を利用せず、直接一般住宅生活に移行するパターンである。

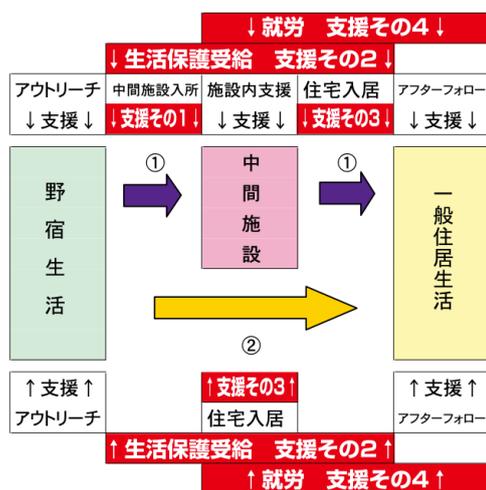


図2：脱野宿パターン

出典：もう一つのホームレス全国調査（2016）

図2の支援その1は中間施設に入所するにあたり、「一人で」「公的な巡回相談（アウトリーチ）によって」「NPOの支援を得て」という3通りの入所経緯が存在している。

支援その2は生活保護受給にあたり一人で相談申請する場合はごく僅かであり、NPOなどの支援者や友人等と一緒に福祉事務所へ相談しており、他者の力を借りて受給に至っている。

支援その3は住宅入居するにあたって自分自身が全てやれる場合は少なく、多くがNPOのスタッフや以前利用したことがある施設のスタッフが支援している。

支援その4はハローワークを通じて仕事を探していたり、友人知人からの口コミ、支援団体からの情報を受けて就労している。

路上（野宿）状態を脱して安定した居所を確保する過程において、上記の調査の結果では3人に2人が何らかの施設を経由している。そして一般住居生活でアフターフォローを受け体制にはなっている。しかしながら、就労により施設を退所した後のアフターフォローは、施設によって異なり、統一したシステムは存在しないため、施設側の人材や資金面に左右される現状である（虹の連合,2007）。

ホームレス高齢者は何らかの公的支援を受けて安定した住居生活へと移行する。しかしながら、アフターフォローについては支援を行う機関や地域により違いがある。以上の観点から、日本のホームレス高齢者は路上生活から安定した住居生活に移行した後も健康面や金銭管理などでその時期により困難さが生じると考えられる。

第1節でホームレス群よりもホーム群の方が生活保護を受け、人間関係が活発であることを示した。予測に必要な説明変数を除いた結果から、ホームレスを抑制する要素として、親密な関係にある人の存在が抽出された。これらの傾向が安定した住居へ移行したステージ全てに共通していることかどうかを把握するために、第1節で使用したデータのうち、現在もホームレスをしている層を除き、54人の生活保護を受けているホーム群のデータを用いて、安定した住居へ移行したステージ別の生活状況と人間関係の傾向を見る。さらに量的な傾向だけでは把握できない詳細の生活状況と人間関係についてはインタビューデータから質的に分析していただくことによりホームレス状態から安定した住居へ移行し生活する人たちの住んでいる時期により社会生活を維持する上で効果的な人間関係を説明することを試みる。

Craneらは脱ホームレスの時期をストリートから住居に移った後の期間（6ヶ月後,1年,1年5ヶ月,2年,5年）と年数単位で区切り、支援の効果を追跡した。その結果、移行後の生活が年齢、疾病や障害の保有率、その他の要因により、移行期間に伴い変化する傾向があることを提示した（Crane&Warnes,2002;Crane,et.al.,2016）。

後藤（2013）は、社会的排除のプロセスに射程をし、ホームレス状態の脱却を3段階に分け段階を踏んで回復していくとしている。第1段階として、住居や収入の確保を経由しフォーマルな社会の構成員としての資格の回復、第2段階において第1段階を踏んだ後に日常生活における親密な人間関係が形成され、第3段階において第2段階で形成された人間関係によっ

て「共感」「信頼」「承認」といった自尊感情の回復が実現されることになる（後藤, 2013:17-18）。

瀬田らは、脱ホームレス後の居住継続に至るステージを「自立支援施設」「居宅移行」「居宅安定」と分類し、脱却過程に応じた支援があることで、脱落を防止できる可能性があることを提示した（瀬田, 土肥, 2011）。

上記の先行研究から、ホームレス状態から移行プロセスのステージについては、統一した枠組みは存在していない。

そこで本論文では、ホームレスから安定した住居へ移行した段階を、先行研究（Crane, et. al., 2016; 瀬田, 土肥, 2011）を参考に以下の3つのステージに分け、名称を独自に命名することとした。

①脱ホームレスから6ヶ月までの時期

「路上から安全に住む場所へ移ってまもない時期」

②6ヶ月以降24ヶ月までの時期

「安全に住む場所での生活に慣れはじめた時期」

④ 24ヶ月以降の時期

「安全に住む場所での安定した生活維持期」

量的な分析は第1節のデータの単純集計を用いてステージ別にその割合の傾向を算出した。以下の結果の表では、路上から安全に住む場所へ移ってまもない時期を[脱ホームレス初期]、安全に住む場所での生活に慣れはじめた時期を[生活慣れ期]、安全に住む場所での安定した生活維持期を[生活維持期]と表記した。

### ステージ別の心配なことと相談先

期間毎に現在心配していることの違いをみると、脱ホームレス初期では健康が最のことを心配している割合が多いが、生活慣れ期に減り、生活維持期に増えていることがわかる。経済的な心配は、生活慣れ期に最も多い割合であるが、生活維持期になると減っている。生活維持期には心配なことが特になく割合が最も多い（表 13-1-1）。

脱ホームレス期は路上から住居へ移行して間もない時期であり、健康面の問題で生活保護を受給することになるが、生活保護の受給により医療も受けることができるようになり、健康面の心配は専門家へ相談することで減少しているのではないかと考えられる。

表 13-1-1 ステージ別の現在の心配なこと

現在の心配なこと	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
経済的なこと	1	12.5%	7	43.8%	1	3.3%	9	16.7%
健康	3	37.5%	3	18.8%	12	40.0%	18	33.3%
住居	1	12.5%	1	6.3%	2	6.7%	4	7.4%
特になし	3	37.5%	5	31.3%	15	50.0%	23	42.6%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

次に期間毎に心配なことを相談する人や機関に変化があるかをみてみると、脱ホームレス時期、生活慣れ期、生活維持期に相談する人や機関は支援団体が最も割合が多い。特にホームレスから脱して間もない時期は支援団体が主な相談先であることがわかる。生活慣れ期、生活維持期とその地域に住んでいる時期が長くなると相談先が広がる傾向がある（表 13-1-2）。

表 13-1-2 ステージ別の心配なことを相談する人・機関

心配なことを相談する人・機関 (複数回答)	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
同居していない親族	1	12.5%	1	6.3%	2	6.7%	4	6.5%
近くにいる知り合い・知人	1	12.5%	2	12.5%	3	10.0%	6	9.7%
近隣の友人	0	0.0%	1	6.3%	2	6.7%	3	4.8%
行政	1	12.5%	3	18.8%	2	6.7%	6	9.7%
仕事関係者	0	0.0%	0	0.0%	1	3.3%	1	1.6%
支援団体	6	75.0%	9	56.3%	19	63.3%	34	54.8%
相談したい人や組織はない	1	12.5%	3	18.8%	4	13.3%	8	12.9%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	62	100.0%

### ステージ別の他者との接触

これまでの分析から他者と接触する頻度については、安定した住居生活にある人はホームレス状態の人に比べ、日常的会話をする人と接触する頻度や友人や地域の人と交流する頻度が比較的多い傾向にあることがわかった。交流の場に参加する頻度は、生保受給者は多いと回答した割合が高かった。これらの回答傾向は、ステージ毎に大きな変化はないかもしれないが、地域に住んでいる期間が長くなることに関係するかもしれない。

日常的に会話する人との接触頻度については、生活慣れ期や生活維持期の方が毎日接触している割合や週に1回以上接触している割合が脱ホームレス初期に比べ高くなっている。6割以上の人が毎日誰かと会話している（表 13-5-1）。

表 13-2-1 ステージ別の日常的に会話する人との接触頻度

日常的に会話する人との接触頻度	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	3	37.5%	11	68.8%	19	63.3%	33	61.1%
週1回以上	2	25.0%	1	6.3%	7	23.3%	10	18.5%
月2回以上	0	0.0%	1	6.3%	0	0.0%	1	1.9%
全くない	3	37.5%	3	18.8%	4	13.3%	10	18.5%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

家族・親戚と接触する頻度は、脱ホームレス初期も生活維持期でも8割以上の人が全くない。この傾向は生活が安定してきても変化をしていない(表 13-5-2)。

表 13-2-2 ステージ別の家族・親戚と接触する頻度

家族・親戚と接触する頻度	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	0	0.0%	0	0.0%	1	3.3%	1	1.9%
3ヶ月1回程度	0	0.0%	1	6.3%	0	0.0%	1	1.9%
半年1回程度	1	12.5%	1	6.3%	3	10.0%	5	9.3%
全くない	7	87.5%	14	87.5%	26	86.7%	47	87.0%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

友人との接触は、脱ホームレス初期は50%余りのものが毎日又は週1回以上接触している。生活慣れ期、生活維持期になると毎日接触する頻度が増えていることがわかる(表 13-5-3)。一方で全くないと回答している割合は、脱ホームレス初期や生活慣れ期では50%以上いる。生活維持期になると30%あまりに少なくなっている。脱ホームレス期は路上生活や仕事を通じた友人関係を有している人もいれば、全く関係を断ち切り友人と接触することがないのではないかと。しかし生活維持期になると地域活動に参加する割合が大きいことから、地域活動の参加を通して新たに得た友人との接触ができた人も少なくないのではないかと考える。

表 13-2-3 ステージ別の友人と接触する頻度

友人と接触する頻度	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	2	25.0%	3	18.8%	7	23.3%	12	22.2%
週1回以上	3	37.5%	2	12.5%	9	30.0%	14	25.9%
月2回以上	1	12.5%	3	18.8%	3	10.0%	7	13.0%
月1回以上	1	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
半年1回程度	0	0.0%	0	0.0%	1	3.3%	1	1.9%
全くない	1	12.5%	8	50.0%	10	33.3%	19	35.2%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

同様に近所の人や地域の人との接触も、脱ホームレス初期は50%のものが全くないと回答している。生活慣れ期、生活維持期になると毎日接触する頻度が増えていることがわかる(表 13-5-4)。全くないと回答している割合も、脱ホームレス初期や生活慣れ期では50%以上いる。生活維持期になると30%あまりに少なくなっている。脱ホームレス期は新しい環境に慣れるま

では近所の人や地域の人と接触する機会が少ないが、徐々に地域生活に定着することにより近所の人や地域の人と交流する頻度が増えてくるのではないかと考える。

表 13-2-4 ステージ別の近所の人や地域の人と接触する頻度

近所の人や地域の人と接触する頻度	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	1	12.5%	5	31.3%	14	46.7%	20	37.0%
週1回以上	3	37.5%	2	12.5%	4	13.3%	9	16.7%
月2回以上	0	0.0%	0	0.0%	2	6.7%	2	3.7%
全くない	4	50.0%	9	56.3%	10	33.3%	23	42.6%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

一方で脱ホームレス初期は特定の誰かと密な関係がある人が100%であるが、生活慣れ期、生活維持期になると密な関係がない人の割合が大きくなる（表 13-6-5）。

継続的にコミュニケーションをとる相手を有している割合は脱ホームレス初期、生活慣れ期、生活維持期に移行するにつれ高くなっている（表 13-6-6）。これは他者との接触頻度が脱ホームレス初期に比べ、生活慣れ期、生活維持期は高くなる傾向と同じである。

表 13-3 ステージ別の特定の誰かと密な関係

特定の誰かと密な関係はあるか？	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
はい	8	100%	4	25.0%	13	43.3%	25	46.3%
いいえ	0	0	12	75.0%	17	56.7%	29	53.7%
合計	8	100%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

表 13-4 ステージ別の継続的にコミュニケーションをとる相手

継続的にコミュニケーションをとる相手はいるか？	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
はい	5	62.5%	11	68.8%	22	73.3%	38	70.4%
いいえ	3	37.5%	5	31.3%	8	26.7%	16	29.6%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

ホームレスから脱した初期に比べ、生活に慣れた時期や生活維持期は友人、近所の人や地域の人と接触する頻度が多くなっていた。

なぜ路上生活をしてきた高齢者は安定した住居生活での時期毎に他者との関わりが変化するのか。また高齢者同士の間関係はどのように構築されていくのか、その様相は、質問紙調査からは不明であった。この点を深めるために、ホームレスを経験した高齢者と支援団体のスタッフからのインタビュー調査の結果を用いて詳細に分析を行う。

### 第3節 質的調査によるホームレス高齢者の人間関係

この節では、第1節、第2節で行った定量分析で明らかになった人間関係の深い部分をみるために、元ホームレス高齢者に対するインタビュー調査を行い、路上生活を脱した後どのような人間関係を有しているのか、またその人間関係によってどのようなことを経験しているのかを分析する<sup>5</sup>。

質問紙調査では脱ホームレス初期、生活に慣れてきた時期、生活を維持している時期による人間関係についてはある程度の変化が起こることは確認できたものの、彼らの人間関係のもつ意味については確認できなかった。インタビューによってこれらの点を明らかにしたい。

#### (1) インタビュー内容

インタビューガイドの内容は、1) どんな人と繋がっていると感じるか、2) 受け入れてもらっていると感じる人、3) どのようなつながりが生活する上で役に立っているか、である。

#### (2) インタビュー協力者の概要

インタビュー調査に協力いただいた者の概要は表14の通りである。インタビュー調査内容の概要は、巻末資料に添付している。インタビュー対象者の年齢は、60歳代4名、70歳代2名、80歳代1名である。家族構成は、全員独居であり、婚姻歴は7名は独身、1名が離婚歴ありかつ子供有りであった。経済基盤は、全員が生活保護の受給で生活を維持している。住居形態は、3名は簡易宿所、4名はアパートであり、3畳から4畳のワンルームで台所・洗面所・トイレは共用で生活している。

---

<sup>5</sup> ID01 から 07 までのインタビュー調査は、平成 27 年度科学技術研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 15K03971「高齢生活困窮者の社会的つながりを高めるサポートモデルの開発」 研究代表者：岡本菜穂子）による研究成果の一部である。

表 14 インタビュー協力者の概要

ID	対象者	生活・住居環境
01	#Nさん 男性, 60歳代 独身・単身 脱却してからの年数：約15年	地域：山谷地域 収入：年金と生活保護 住居：簡易宿所 間取り：3畳 施設設備：共同トイレ・共同洗面・共同浴室・共同炊事場
02	#Yさん 男性, 60歳代 独身・単身 脱却してからの年数：約4ヶ月	地域：釜ヶ崎地域 収入：年金と生活保護 住居：アパート 間取り：4畳半 施設設備：共同トイレ・共同洗面・共同浴室・共同炊事場
03	#Oさん 男性, 60歳代 独身・単身 脱却してからの年数：約4年	地域：釜ヶ崎地域 収入：生活保護 住居：アパート 間取り：3畳半+4畳 施設設備：共同トイレ・共同洗面
04	#Tさん 男性, 70歳代 独身・単身 脱却してからの年数：約3年	地域：釜ヶ崎地域 収入：生活保護 住居：アパート 間取り：4畳 施設設備：共同トイレ・共同洗面・共同浴室
05	#Sさん 男性, 80歳代 独身・単身 脱却してからの年数：約15年	地域：釜ヶ崎地域 収入：恩給+生活保護 住居：アパート 間取り：4畳 施設設備：共同トイレ・共同洗面・共同浴室
06	#Bさん 男性, 70歳代 独身・単身 脱却してからの年数：約2年	地域：山谷地域 収入：生活保護 住居：簡易宿所 間取り：3畳 施設設備：共同トイレ・共同洗面・共同浴室
07	#Kさん 男性, 70歳代 既婚（離婚）・単身 脱却してからの年数：約7年	地域：釜ヶ崎地域 収入：生活保護 住居：簡易宿所 間取り：3畳 施設設備：共同トイレ・共同洗面・共同浴室

### (3) 結果

インタビュー協力者の発言は『』及び斜字体で示す. 表 14 中の ID 番号は, # で示す.

#### 一人で孤独に過ごす

インタビュー協力者はホームレスから安定した居住へ移動しても一人で孤独に過ごすことを経験していた.

路上生活をしながら日雇い労働に出かける機会が多かった B さん (ケース No. 6:70 代) は体調を崩したことをきっかけに路上から生活保護を受け簡易宿所に移行した. 最初は簡易宿所から出て行く場所もなく支援団体とも関わりがあまりなかった f さんは時間を持て余し, 簡易宿所で過ごすことに苦痛を感じている.

『生保 (生活保護) をもらうようになって, やることがないから時間潰すのが大変で, ほとんど毎日ここ (集いの場) に来ている. 部屋には寝に帰るぐらい, 部屋にいても何もやることのないもの (#6)』と語っているように, 自分の部屋では何もやることができなく一人の時間をどう過ごしたらいいか, やることのない時間を過ごすことを課題に挙げる.

路上生活から簡易宿所で生活して長い期間経っている N さん (ケース No. 1:60 代) は毎早朝, 朝市で自分の店を出している. a さんは朝市後に長年支援団体の場に通い続けている.

『あそこ (集いの場) に行っている以外は, 他に行くところといってもスーパーや近くの商店ぐらい. あそこ (集いの場) から戻った後や, あそこ (集いの場) が閉まっている時は, 朝市に行っている時間以外は部屋でテレビ見て一歩も外に出ない (#1)』というように部屋では孤独に過ごす状況が語られた.

#### 親族との連帯欠如

インタビュー協力者は, ホームレスに至るまでに親族との連帯欠如を経験していた.

生活保護を受けて簡易宿所での生活を始めた K さん (ケース No. 7:70 代) はホームレスの状況に至る間に家族や親族との関係が切れ音信不通の状態であったが, 簡易宿所での生活が続く過程で脆弱ではあるが家族との繋がりが復活していることを語った.

『自分には姉がいるんだけど, 小学生 3 年の時に両親なくなってそれぞれ養子でもらわれていったの. 姉の養親さんは琴の師匠さんで, 姉も琴の師匠になっている. 以前は, 金ないと送ってくれたこともあったけど, 今はないね. 時々, 姉からは電話がかかってくる. 自分は離

婚して別れた妻との間に子供が二人おって、その子供らとも全然連絡取ってなかったんだけど、一人が亡くなったって自分の従兄から連絡が来て知った(#7)』

また、唯一の家族である姉との関係が切れていなかった T さん（ケース No. 4:70 代）は路上生活中は行き来ができなかったが、アパート生活を送る中で行き来ができた。しかしながら d さん、親族も共に身体面の衰えが進むに伴い、共助としては脆弱な関係性にあることを語った。

『姉がいて、3 ヶ月に1回ぐらいお互い行き来している。自分も姉のところに行ったりして家の修理なんか手伝ってやったりね。姉も以前はよく来てくれて、部屋の畳とか入れ替えしてくれたり、お金工面してくれたけど、今はだいぶ歳いっちゃって。最近はなかなかね、会えないね。( #4 ) 』

### 日常的な他者との接触の欠しさ

インタビュー協力者はホームレスから安定した居住へ移動した後は住んでいる場所での日常的な他者との接触の欠しさに向かいあっていた。

路上からアパートに移行して間もない Y さん（ケース No. 2:60 代）はギャンブルで再び路上生活に戻った経験があるため、ギャンブルと酒で付き合っていた人たちとは誰とも繋がっていないことを語った。

『今住んでいるアパートでは隣の部屋の人と会えば挨拶するぐらいで他の人とは付き合いが一切ない。昔、ギャンブルと酒で付き合っていた人とは今は誰とも繋がっていない。お金がある時は皆、寄ってくるけどお金なくなれば知らんぷり、所詮そんな繋がりだよ。( #2 ) 』

生活保護受給をきっかけに路上からアパートへ移り住み4年が経過している O さん（ケース No. 3:60 代）も同じアパート（簡易宿所を改修して福祉アパートに変更）で暮らす住民との接触はほとんどないことを語った。

『アパートは共同トイレだけど、トイレに行く際に廊下やトイレを掃除する人とは話をすることもあるが、住んでいる人とはほとんど会わないし、まれに会ったとしても話はしない。( #3 ) 』

T さん（ケース No. 4:70 代）は4年間同じアパートに暮らすと同じく同じアパートの住人との接点はほとんどないことを語った。

『アパートには共同トイレと浴室があるが、たまに知っている人とすれ違えば挨拶ぐらいすることがあるが、特別に親しい人はいない。(＃4)』

15年同じアパートに暮らすSさん(ケースNo.5:80代)も隣人や同じアパートの住人との関わりは一切ないこと、日常的に近隣との接触のなさや、集いの場で会話する人とはその場以外では接触しないことを語った。

『アパートにいる人とは行き来はなくして一切つきあいもない。毎月の家賃を親方に渡すときに親方に会うぐらい。自炊や買い物は自分でして食事しているし、してもらえるような人はおらんし、ここ(集いの場)に来るときに話すひとたちともここ(集いの場)だけの友達で、外に出てまで付き合うひとはおらん(＃5)』

Yさん(ケースNo.2:60代)は行きつけの飲み屋での人付き合いはその場しのぎの付き合いと割り切っていることも語った。

『行きつけの飲み屋も1日行かなかっただけで、他の客や店主がどうしたか気にしてくれるけど、その場しのぎの付き合いでしかないね(＃2)』

### 信頼を寄せられる人の存在

インタビュー協力者はホームレスから安定した居住へ移動した後で集いの場への参加を通じて信頼を寄せられる人の存在を得ていた。

長い期間支援団体に通い続けているNさん(ケースNo.1:60代)はそのスタッフのことを「心のよりどころとなる人がいる」と語った。

『ここ(集いの場)のスタッフがいつも(自分のことを)気にかけてくれて、親身になって身体の具体のこととか聞いてくれる。スタッフが自分のことを気遣ってくれるから、ここは自分の拠り所だよ(＃1)』

ホームレスを経験した人たちの多くが親族と縁が切れているものが多い反面、困った時に頼ることができる存在をもつ人もいる。

路上からアパートに移行して数ヶ月のYさん(ケースNo.2:60代)は困っていた時に相談に乗ってくれたスタッフの存在について語った。

『自分は親とも兄弟とも一切縁が切れているし、アパートの部屋の隣の人とは会えば挨拶するぐらいで他の人とは付き合いは一切ない。どうしていいか途方に暮れていた時に相談に乗

ってくれた人たちがここ（集いの場）にはいる。頼りになるのはせいぜいここ（集いの場）のスタッフぐらいかな（#2）』

### 継続的なコミュニケーション

インタビュー協力者は、簡易宿所やアパートで孤独な時間を過ごす。支援団体の集いの場に継続的に関わることや、自分の行きつけの場所ができることで継続的なコミュニケーションを獲得していた。

Nさん（ケース No. 1:60代）、Yさん（ケース No. 2:60代）は言葉を交わさなくとも同じ空間で誰かと過ごし続けていることにより、居心地の良さを感じる非言語的關係を有していると語った。

『ここ（集いの場）にいれば、いろいろな人が声をかけてくれるじゃない。話してなくてもなんとなくここに座っているだけで、気持ちが落ち着くんだよね。（#1）』

『ただ無言で飲んでいてもいいところが気に入っており、行きつけの飲み屋は居心地がいいんだよね（#2）』

また支援団体が開催するプログラムに参加するKさん（ケース No. 7:70代）は、互いの事情を思いやったコミュニケーションがあると語った。

『ここに来る人たちって、自分みたいに何かしらの事情を抱えているんだよね。だからお互いに話を聞いて、共にいる時間で、みんなと繋がっている気になる。そんなみんなが楽しんでいるのが楽しい（#7）』

支援団体で1日の大半を過ごすBさん（ケース No. 6:70代）もコミュニケーションを継続的にとる同じような境遇の人たちについて語った。

『ここに来る人たちは自分と同じような境遇の人が多いいんだよね。自分から話しかけることは少ないんだけど、冗談を言ったり、体のことを心配してもらったり、気にしてもらえる人が何人かいるんだよね。（#6）』

Nさん（ケース No. 1:60代）は支援団体で知り合った仲の良い人が3人ほどおり、普段aさんのことをよく観察していた1人がaさんの歩いている様子の異変に気づき、支援団体のスタッフへ伝えてくれたお陰で大事に至らずに済んだことがあった。

『ここで普段一緒に過ごしてよく会話していた人が自分の歩く姿がなんかおかしいって、スタッフに言ってくれて、支援団体の医師がすぐに診察してくれ入院ができたから、軽い脳梗塞だったんだけどすぐに救急搬送して病院で処置をしてもらえたから麻痺も残らずに今ここに変わらずにいられる。(＃1)』

### 他者を通じた新しい人との交流

Sさん(ケースNo.5:80代)はつながりのある人を通じて、新しい場へ出入りするようになりそこで新しい人との交流をもつことができたと言った。

『ここ(集いの場)に来ていた講師の人が良い人で、人形劇やらないかって誘ってくれたからやってみようかなと思えて、それからここ以外の場にも参加するようになった(＃5)』

動くことが好きなBさん(ケースNo.6:70代)は支援団体で知り合った人から掃除を手伝って欲しいと言われたのをきっかけに、掃除を手伝うようになった。掃除仲間から生きがいつくりプロジェクトに参加しないかと誘われ参加するようになった。

『支援団体に昼ごはんだけ食べにきて食べ終わればすぐに簡易宿所に戻っていたが、ここ(集いの場)に来ていた人が色々と話かけてくれて、掃除手伝ってくれないかって誘ってくれたからやってみようかなと思えて、それからその人が生きがいつくりプロジェクトにも参加しないかって誘ってくれて。(＃6)』

高齢のSさんは体調の悪さを抱えながらも集いの場に通うことで多様な人とつながりを持っていてることを語った。

『膝がわるくなってから以前みたいに歩けなくなって、時々イライラしている。以前の自分だったら破れかぶれでどうにでもなれって感じだったけど、今はここ(集いの場)に来ればみんなで歌を歌ったり、催しものやったり、気が晴れるし、色々な人との付き合いができるようになった(＃5)』

### 気心の知れた人との心のつながり

Yさん(ケースNo.2:60代)は体調を崩した時にアパートまで心配で訪ねてくれる人の存在を、Kさん(ケースNo.7:70代)は本気で叱ってもらえる人との出会いを通じて気心の知れた人への信頼を語った。

『ここに来る何人かのうち、2人とは気が合う。半年ぐらいここに来れない時があったんだけど、その2人が心配してアパートまで見に来てくれて、体が悪いのかと心配してくれてたのが、すごく嬉しかったね (#2) 』

『ここに来て、言葉づかいとか変わった。前はすぐに「アホ」とか「バカ」って人に言ってたんだけど、みんなからそんな言葉使ったらダメじゃないって言われるうちに、だんだんそういう言葉を使わなくなった (#7) 』

Tさん(ケース No. 4:70代)は、以前親身になって相談に乗ってもらったスタッフのことを、Bさん(ケース No. 6:70代)は困った時に助けてもらえる存在を困った時に助けを求められる安心感があり気心の知れた人との心のつながりがあると感じていることを語った。

『今は故郷に戻ってしまったけど、若いスタッフが本当によく面倒を見てくれて。親身になって相談に乗ってくれた (#4) 』

『前々からスタッフから生活保護受けてテント生活やめるように言われていたんだけど、なかなかきっかけがなくて。自分も体力そろそろ限界かなって思った時に相談したら、すぐに一緒に福祉に相談へ行ってくれた。本当に困った時に助けてもらえた (#6) 』

#### (4) まとめ

元ホームレス高齢者へのインタビュー分析から路上生活を脱した後に高齢者ホームレスは移行した住居では隣人との交流はほとんどなく、ホームレスに至るまでに親族との連帯は欠如しており孤独に暮らしていた。しかし、行きつけの場や集う場に出向くことで継続的なコミュニケーションをもつ人との交流や、機会を獲得していた。また、1点の交流から、複数の交流へとつながる機会を実現し、交流する人との関係性を拡大していた。

そして、困った時に相談できる人との関わりを通じて信頼を寄せられる人の存在を見つけ、気心の知れた人との心のつながりを感じていた。

#### 第4節 小考

本章では、日本の多くのホームレスが居住する山谷および釜ヶ崎地域の住民間の人間関係を分析し、安定した住居を維持することに貢献する人間関係について検討した。本章の結果は、ホームレスからの脱却後に安定した住居を維持することを考える上で貴重なデータを提供すると考えられる。山谷地域に暮らす人たちが釜ヶ崎地域に暮らす人たちに比べホームレス状態が抑制されている傾向があった。しかしながら、山谷と釜ヶ崎の参加者とホームレ

ス状態にある人には人数の偏り（バイヤス）があり、ホームレス状態に地域の影響が真にあるとは言えない。

住んでいる地域を省き分析した結果、ホームレス状態にある群よりも安定した住居にある群の方が生活保護を受け、より多くの地域社会活動に参加し、より多くの親密な関係にある人の存在があり、継続的にコミュニケーションをとり、日常会話や隣人・地域社会のメンバーと交流する機会が多いことを示した。ロジスティック回帰分析の結果から、ホームレス状態を抑制する人間関係として、親密な関係にある人の存在があることを示した。

安定した住居にある群の64.8%は失業しているが、地域に継続して住んでいることがわかった。継続を支持する要素として、地域社会活動に参加すること、近所の人たちと交流する機会があること、親密な関係にある人がいることである。一方、ホームレス状態にある群の人たちは、仕事を通じて交流はしているものの、地域社会とのつながりが少なく、身近に相談できる人がいない割合が高かった。日本社会では、ほとんどの男性は労働を通じて役割を果たすことによって社会で活動してきたため(堀江, 渥美, 水内, 2015), 男性のホームレス集団における他者との人間関係に労働を介したつながりが影響を及ぼしていると考えられる。

ホームレス対策には、長期的で安価な住宅供給, 雇用継続支援, 地域生活への経済的支援などの目に見える支援が重要である。しかし、こうした支援だけでなく、目に見えない当事者の内部的側面からの支援が必要なことは既存研究で指摘されている点である。インタビュー調査から困った時に相談できる人との関わりがあり、信頼を寄せられる人の存在を見つけたこと、気心の知れた人との心のつながりを感じていたことといった内面的側面からの支援が再び路上生活に戻ることに歯止めをかけていた。

生活保護を受けることが、安定した住宅に住むことにつながっていたケースが多かった。今回の調査は、50歳以上の高年齢層のため、若者や50歳以下の路上生活者とは比較できない。

しかし、インタビュー調査の協力者の多くは病気や障害のため仕事ができない状態であり、4章の結果と同じように病気による体調不良や入院をきっかけに生活保護を受けていた。

生活保護を受け簡易宿所やアパート生活を続けている人たちは、路上生活前や路上生活中の人間関係を切って新しい人間関係を構築していた。Yさん(ケース No. 2:60代)は酒やギャンブルで再び路上生活に戻った経験があったが『昔、ギャンブルと酒で付き合っていた人とは今は誰とも繋がっていない。お金がある時は皆、寄ってくるけどお金なくなれば知らんぷり、所詮そんな繋がりだよ。』と語っていたが、敢えて路上生活中の関係を断ち、再び路上生活になることを自ら予防することにもなっていた。言い換えれば、路上生活中の関係を断つことができない人は再発をしているのか。この点については第7章で考察する。

これまでの研究では、失業者は自分の生活に失望を感じており、しばらく経っても新しい状況に適応できないこと、また、失業者は否定的な感情を持つ割合が高く、肯定的な感情に満たされる割合が低いことが示されている(Lucas, Clark, Georgellis,&Diener, 2004)。本研究の対象

者のホームレスから脱した高齢者の中には、失業のままでもあっても簡易宿所やアパートに移動して、継続的なコミュニケーションをもつ人との交流や、機会を獲得し、路上生活中の人間関係とは異なる人間関係に触れ、また本気で叱ってもらえる人との出会いを通じた新しい人間関係から K さんのように「お互いに話を聞いて、共にいる時間で、みんなと繋がっている気になる」といった肯定的な感情を持つ人たちもいた。

以上の考察から、安定した住居を維持することと関連がある要因の一つに人間関係はあることを示した。具体的な人間関係の様相から第 4 章と同様に、同じ境遇にある人との関係、困った時に相談できる人との関係、信頼を寄せられる人との関係、気心の知れた人との関係はホームレス再発を予防することにポジティブに影響を与えた。一方で、路上生活をしていた時の知り合いや、元野宿仲間との関係は再発を予防することにネガティブに影響を与える。

次章では上記のような関係を築く上でどのようなコミュニティが存在しているのか、安定した住居を維持することに貢献するコミュニティの姿とその詳細な内容について探索する。

## 第6章 安定した住居生活を維持する要素—コミュニティ

この章では、ホームレス再発の予防に貢献すると考えられるコミュニティを検討するため、現在ホームレス状態にある人々と安定した住居生活にある人々の生活状況とコミュニティについて量的・質的に分析し、ホームレスからの脱却後に安定した住居を維持することに影響を与えるコミュニティの様相を探索する。

第4章で紹介した野宿者の事例において彼らの有するネットワークは同質な集団で、空間的隔離に基づく同質的人間関係を有している例が複数みられた。また、支援団体やボランティアと接点を持つこと契機となり、自らも支援団体活動に関わるケースが多かった。

ホームレス状態にある人々と安定した住居生活にある人々のコミュニティの様相について、次節以降でみていく。

### 第1節 ホームレス高齢者の生活状況とコミュニティ

ホームレス高齢者の生活実態調査のデータを用い、第5章と同様の方法で山谷地域と釜ヶ崎地域別、Homed 群と Homeless 群に分けて分析を行った。

#### 調査質問項目

コミュニティに関する質問項目は地域で参加している活動の有無、参加する/参加しない理由を問う設問も設定した。地域活動への参加に限らず、他者と交流する機会や場がどのくらいあるかを問うための設問として自由に参加できる場、他者との関係の質も伴う場があるかを問うために他者と交流を楽しめる活動の場を設問とした。参加している場を含めて自分自身の存在を確認する場があるかを問うために自分の力を発揮する場を設問とした。回答選択肢は「あり」「なし」で回答を設定した。

他者と交流する機会や場へ接触する頻度は「あなたは交流する場にどのくらい接触していますか」と尋ね、回答選択肢は「毎日」「週に1回」「月に2回」「月に1回」「月に2回以上」「3ヶ月に1回」「半年に1回」「まったくない」までの7件法で回答を得るように設定した。

#### エリア毎のコミュニティ

##### ① 地域と関わる活動

現在、地域で参加している活動があるかどうかを調べた結果が表 15-1-1 である。

地域のボランティア活動や地域のイベントなど地域活動参加者は、44.8%である。

活動に参加していない、参加したくないと回答した者は、55.2%である。

山谷エリアは、地域の活動に参加している割合が多い傾向が、釜ヶ崎エリアは、少ない傾向がある。両エリアともに参加したくないと回答している割合は1割弱程度であるが、参加していない割合が釜ヶ崎エリアの方が高い傾向にある。この傾向の違いは、釜ヶ崎エリアの方が仕事をしている割合が高かったことから、仕事のため地域のボランティア活動やイベントなどに参加する時間や情報が得られないためではないかと考えられる。

表 15-1-1 地域活動の参加状況

地域活動の参加状況	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
ボランティア活動（清掃・炊き出し等）	17	23.3	15	36.6	32	28.1
娯楽施設活動（囲碁・将棋・カラオケ等）	10	13.7	5	12.2	15	13.2
デイケア・デイサービス	0	0	2	4.9	2	1.8
イベント活動（お祭り等）	2	2.7	0	0	2	1.8
参加していない	37	50.1	15	36.6	52	45.6
参加したくない	7	9.6	4	9.8	11	9.6
合計	73	100	41	100	114	100

活動に参加するきっかけは団体のスタッフに紹介された割合が43.8%と最も多く、次いで知り合いや友人に勧められたが35.4%、興味がある・面白そうだったが15.8%と多かった。

山谷エリアで活動に参加するきっかけは、知り合いや友人に勧められたが最も多く、次いで団体のスタッフに紹介されたからであった。釜ヶ崎エリアは、団体のスタッフに紹介されたが最も多く、ついで知り合いや友人に勧められたから、興味がある・面白そうだったからであった（表 15-1-2）。山谷エリアも釜ヶ崎エリアも誰かの勧めで参加している傾向が高いが、地域活動の情報を聞いたりして自分なりの興味や関心で参加している人たちもいることがわかった。

表 15-1-2 地域活動に参加するきっかけ

地域活動に参加するきっかけ	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
知り合いや友人の勧め	8	27.6%	9	47.4%	17	35.4%
興味がある・面白そうだった	5	17.2%	3	15.8%	8	16.7%
時間を持って余っていた	1	3.4%	0	0.0%	1	2.1%
支援団体等から紹介された	14	48.3%	7	36.8%	21	43.8%
その他	1	3.4%	0	0.0%	1	2.1%
合計	29	100.0%	19	100.0%	48	100.0%

地域活動に参加している人が活動に参加し続けている理由は、知り合いや友人が参加しているから 33.3%と最も多く、次いで参加すると楽しいからが 23.5%であった。

山谷エリアは、知り合いや友人が参加しているからが最も多く、次いで自分が誰かの役に立てると思えるからであった。釜ヶ崎エリアは、知り合いや友人が参加しているからと、参加すると楽しいからが最も多かった。次いで、自分の役割があるからであった(表 15-1-3)。少数ではあるが山谷エリアの回答者、釜ヶ崎エリアの回答者ともに時間潰しを理由に挙げていた。

両エリアともに誘ってくれた知り合いや友人と一緒に参加していることや、同じような境遇にある人たちがいる場所に集う安心感も参加を続ける理由になっていることが考えられる。

表 15-1-3 地域活動への参加を続ける理由（複数回答）

地域活動への参加を続ける理由	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
知り合いや友人が参加している	9	31.0%	8	36.4%	17	33.3%
参加すると楽しい	9	31.0%	3	13.6%	12	23.5%
やりがいや生きがいになる	2	6.9%	2	9.1%	4	7.8%
自分の役割がある	5	17.2%	1	4.5%	6	11.8%
自分が誰かの役に立つと思える	1	3.4%	4	18.2%	5	9.8%
周囲の人とコミュニケーションがある	1	3.4%	1	4.5%	2	3.9%
特にない	0	0.0%	1	4.5%	1	2.0%
時間潰し	2	6.9%	2	9.1%	4	7.8%
合計	29	100.0%	22	100.0%	51	100.0%

一方、地域活動に参加していない、もしくは参加したくない人の理由は、「特にない」 36.5%と最も多く、次いでその他（情報を知らない・時間がない等）が 17.5%であった。

山谷エリアの回答者は、「特にない」に次いで知り合いや友人がいない、健康の理由からであった。釜ヶ崎エリアの回答者は、「特にない」に次いでその他（時間がない等）、知り合いや友人がいないからであった(表 15-1-4)。参加するにあたって知り合いや友人がいることは参加しやすさにつながるということがわかった。

表 15-1-4 地域活動に参加していない・したくない理由

地域活動に参加していない・したくない理由	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
場所が遠い・場所が不便	4	9.1%	1	5.3%	5	7.9%
活動の場までの交通費が負担	4	9.1%	0	0.0%	4	6.3%
健康面（病気、怪我など）	3	6.8%	3	15.8%	6	9.5%
知り合いや友人がいない	5	11.4%	5	26.3%	10	15.9%
自分の役割がない	2	4.5%	0	0.0%	2	3.2%
居心地が悪い	1	2.3%	1	5.3%	2	3.2%
特になし	15	34.1%	8	42.1%	23	36.5%
その他（時間がない等）	10	22.7%	1	5.3%	11	17.5%
合計	44	100.0%	19	100.0%	63	100.0%

② 他者との交流する機会

自由に参加できる場があると答えたものは 68.4%, 山谷エリアは 75.6%, 釜ヶ崎エリアは 64.4 %であった（表 15-2-1）. 自分にとって自由に参加できる場は様々あることが考えられるが, 多くの人は参加する場を有していることがわかった.

表 15-2-1 自由に参加できる場

自由に参加できる場があるか？	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
ある	47	64.4%	31	75.6%	78	68.4%
ない	26	35.6%	10	24.4%	36	31.6%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

他者と交流を楽しめる活動の場があると答えたものは 55.3%であった. 山谷エリアは 68.3%, 釜ヶ崎エリアは 47.9%と釜ヶ崎エリアの方が低い傾向にあった（表 15-2-2）.

この傾向は, 自由に参加できる場を有していてもそこでは必ずしも他者と交流を楽しめているわけではないことがわかる. また, 釜ヶ崎エリアの人は地域活動に参加する割合が低いことから交流を楽しめる活動の場がないと答えた人が多かったと考えられる.

表 15-2-2 他者と交流を楽しめる場

他者と交流を楽しめる活動の場があるか？	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
ある	35	47.9%	28	68.3%	63	55.3%
ない	38	52.1%	13	31.7%	51	44.7%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

自分の力を発揮する場があると答えたものは、42.9%であった（表 15-2-3）。

山谷エリアは 36.5%, 釜ヶ崎エリアは 46.5%と、山谷エリアの方が低い傾向にあった。この差の要因として、釜ヶ崎エリアの対象者は仕事をしている割合が山谷エリアに比べ高く、仕事の場で自分の力を発揮できていると認識している人がいるためではないかと考えられる。

表 15-2-3 自分の力を発揮する場

自分の力を発揮する場があるか？	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
ある	34	46.5%	15	36.5%	49	42.9%
ない	39	53.4%	26	63.4%	65	57.1%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

交流の場へ参加する頻度の結果は表 15-3 である。

交流の場に参加する頻度は、毎日ある人が 33.3%, 週に 1 回以上が 21.9%, 全くない人が 39.8%であった。

山谷エリアでは、毎日ある人が 41.5%, 週 1 回以上の人が 26.8%, 全くない人が 19.5%であった。釜ヶ崎エリアでは、毎日ある人が 28.8%, 週 1 回以上が 19.2%, 全くない人が 35.6%であった。

山谷エリアの方が、釜ヶ崎エリアに比べて交流の場へ参加する頻度が高い傾向であった。これは、地域活動に参加している割合が山谷エリアの方が高いことと連動している結果である。

表 15-3 交流の場へ参加する頻度

交流の場へ参加する頻度	釜ヶ崎		山谷		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	21	28.8%	17	41.5%	38	33.3%
週1回以上	14	19.2%	11	26.8%	25	21.9%
月2回以上	1	1.4%	3	7.3%	4	3.5%
月1回程度	3	4.1%	1	2.4%	4	3.5%
3ヶ月に1回程度	2	2.7%	1	2.4%	3	2.6%
6ヶ月に1回程度	6	8.2%	0	0.0%	6	5.3%
全くない	26	35.6%	8	19.5%	34	29.8%
合計	73	100.0%	41	100.0%	114	100.0%

## Homед 群と Homeless 群のコミュニティ

### ① 地域と関わる活動

地域社会活動参加がありと回答したものは、Homед 群は 55.4%であったが、Homeless 群は 25.0%と参加割合が低かった(表 16-1-1)。

活動に参加するきっかけは、Homед 群は支援団体から紹介されていた人が 26.8%、Homeless 群は知り合いや友人の勧めが 12.5%と多かった(表 16-1-2)。

表 16-1-1 地域活動の参加状況

		homed	homeless	合計
地域のボランティア活動	度数	25	7	32
	%	33.8%	17.5%	28.1%
地域の娯楽施設でのレクリエーション活動	度数	12	3	15
	%	16.2%	7.5%	13.2%
地域のデイケアやデイサービス活動	度数	2	0	2
	%	2.7%	0.0%	1.8%
地域のイベント活動(お祭りなど)	度数	2	0	2
	%	2.7%	0.0%	1.8%
活動に参加していない	度数	25	27	52
	%	33.8%	67.5%	45.6%
参加したくない	度数	8	3	11
	%	10.8%	7.5%	9.6%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 16-1-2 地域活動に参加するきっかけ

		homed	homeless	合計
知り合いや友人に勧められたから	度数	12	5	17
	%	16.9%	12.5%	15.3%
興味がある、面白そうだったから	度数	6	2	8
	%	8.5%	5.0%	7.2%
時間を持て余していたから	度数	1	0	1
	%	1.4%	0.0%	0.9%
団体のスタッフに紹介されたから	度数	19	2	21
	%	26.8%	5.0%	18.9%
その他	度数	0	1	1
	%	0.0%	2.5%	0.9%
未参加	度数	33	30	63
	%	46.5%	75.0%	56.8%
合計	度数	71	40	111
	%	100.0%	100.0%	100.0%

地域活動に参加しているものが参加し続ける理由は、Homed 群、Homeless 群ともに知り合いや友人が参加していることを一番多く挙げている（表 16-1-3）。Homed 群は参加すると楽しいことや、自分が誰かの役に立つと思えるからを挙げている一方で、その他として少数であるが時間潰しを理由に挙げている。Homeless 群は参加すると楽しいことや、自分の役割があることを挙げている。

活動に参加している中で知り合いや友人ができたためか、それとも以前から知っていた人や友人が参加しているかまではわからない。

表 16-1-3 地域活動を続ける理由

		homed	homeless	合計
知り合いや友人が参加しているから	度数	14	3	17
	%	18.9%	7.5%	14.9%
参加すると楽しいから	度数	9	3	12
	%	12.2%	7.5%	10.5%
やりがいや、生きがいになるから	度数	3	1	4
	%	4.1%	2.5%	3.5%
自分の役割があるから	度数	5	1	6
	%	6.8%	2.5%	5.3%
自分が誰かの役にたつと思えるから	度数	3	2	5
	%	4.1%	5.0%	4.4%
周囲の人とのコミュニケーションがあるから	度数	2	0	2
	%	2.7%	0.0%	1.8%
孤独感を感じているから	度数	1	0	1
	%	1.4%	0.0%	0.9%
その他	度数	4	0	4
	%	5.4%	0.0%	3.5%
参加していない	度数	33	30	63
	%	44.6%	75.0%	55.3%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

一方、地域活動に参加していない人たちが挙げている理由の中で最も多いのは、Homed 群、Homeless 群ともに特に理由がないと回答している。その他の理由として、Homed 群は場所の遠さや不便さ、知り合いや友人がいないこと、交通費などの経済的負担を挙げている。Homeless 群は、知り合いや友人がいない、健康上の理由を挙げている（表 16-1-4）。地域活動に参加するためには知り合いや友人の存在も影響していることがわかった。

表 16-1-4 地域活動に参加していない・したくない理由

		homed	homeless	合計
場所が遠い、場所が不便である	度数	4	1	5
	%	5.4%	2.5%	4.4%
活動の場までの交通費など経済的負担が大きい	度数	3	1	4
	%	4.1%	2.5%	3.5%
健康上の理由	度数	2	4	6
	%	2.7%	10.0%	5.3%
知り合いや友人がいないから	度数	4	6	10
	%	5.4%	15.0%	8.8%
自分の役割がないから	度数	0	2	2
	%	0.0%	5.0%	1.8%
居心地が悪いから	度数	1	1	2
	%	1.4%	2.5%	1.8%
特にない	度数	14	9	23
	%	18.9%	22.5%	20.2%
その他	度数	5	6	11
	%	6.8%	15.0%	9.6%
	総和の %	4.4%	5.3%	9.6%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

② 他者と交流する機会

他者との交流する場について、自由に参加できる場があると答えたものは Homed 群 78.4%, Homeless 群 50.0%であった（表 16-2-1）。

他者と交流を楽しめる場があると答えたものは Homed 群 64.9%, Homeless 群 37.5%であった（表 16-2-2）。Homed 群が自由に参加する場や、交流を楽しめる場を有している傾向があることがわかった。

自分の力を発揮する場があると答えたものは Homed 群 50.0%, 生保非受給者 37.5%と自分の力によって満足感を得ている場をもつものは半数程度であることがわかった（表 16-2-3）。

表 16-2-1 自由に参加できる場

		homed	homeless	合計
あり	度数	58	20	78
	%	78.4%	50.0%	68.4%
なし	度数	16	20	36
	%	21.6%	50.0%	31.6%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 16-2-2 他者と交流を楽しめる場

		homed	homeless	合計
あり	度数	48	15	63
	%	64.9%	37.5%	55.3%
なし	度数	26	25	51
	%	35.1%	62.5%	44.7%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

表 16-2-3 自分の力を発揮する場

		homed	homeless	合計
あり	度数	37	15	52
	%	50.0%	37.5%	45.6%
なし	度数	37	24	61
	%	50.0%	60.0%	53.5%
回答なし	度数	0	1	1
	%	0.0%	2.5%	0.9%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

交流の場に参加する頻度は、毎日または週1回以上あると答えたものは Homed 群 64.9%, Homeless 群 37.5%であった。全くないと答えたものは Homed 群 20.3%, Homeless 群 47.5%であった（表 16-3）。

表 16-3 交流の場へ参加する頻度

		homed	homeless	合計
毎日	度数	27	11	38
	%	36.5%	27.5%	33.3%
週1回以上	度数	21	4	25
	%	28.4%	10.0%	21.9%
月2回以上	度数	3	1	4
	%	4.1%	2.5%	3.5%
月1回以上	度数	3	1	4
	%	4.1%	2.5%	3.5%
3か月に1回程度	度数	2	1	3
	%	2.7%	2.5%	2.6%
半年に1回程度	度数	3	3	6
	%	4.1%	7.5%	5.3%
全くない	度数	15	19	34
	%	20.3%	47.5%	29.8%
合計	度数	74	40	114
	%	100.0%	100.0%	100.0%

## 第2節 安定した住居へ移行した時期別の高齢者のコミュニティ

### ステージ毎の地域活動への参加

ステージ毎に地域活動へ参加している状況が変化するかをみると、ボランティア活動や地域のイベント活動に参加する割合が増えていることがわかる。また参加していない、参加したくない割合が減っている（表 17-1-1）。

住んでいる期間が長くなるにつれて、住んでいる地域に慣れることや、顔見知りの人も増えるため活動に参加しやすくなることも考えられる。

参加するきっかけが変化するかをみると、団体スタッフからの紹介が最も多く、生活維持期では半数以上の人々が団体スタッフとの関係から地域活動につながっていることがわかる（表 17-1-2）。

表 17-1-1 ステージ別の地域活動参加状況

地域活動の参加状況	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
ボランティア活動	1	12.5%	9	56.3%	11	36.7%	21	38.9%
地域の娯楽施設	3	37.5%	0	0.0%	9	30.0%	12	22.2%
デイケア・デイサービス	0	0.0%	0	0.0%	2	6.7%	2	3.7%
地域のイベント活動	0	0.0%	1	6.3%	1	3.3%	2	3.7%
参加していない	3	37.5%	5	31.3%	6	20.0%	14	25.9%
参加したくない	1	12.5%	1	6.3%	1	3.3%	3	5.6%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

表 17-1-2 ステージ別の地域活動に参加するきっかけ

地域活動参加のきっかけ	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
知り合いや友人に勧められた	1	25.0%	1	11.1%	6	26.1%	8	22.2%
興味がある・面白そう	0	0.0%	2	22.2%	4	17.4%	6	16.7%
団体スタッフからの紹介	1	25.0%	6	66.7%	12	52.2%	19	52.8%
時間を持て余していた	2	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	5.6%
その他	0	0.0%	0	0.0%	1	4.3%	1	2.8%
合計	4	100.0%	9	100.0%	23	100.0%	36	100.0%

次に地域活動を続ける理由の違いをステージ毎にみると、生活維持期では知り合いや友人が参加していることや、参加すると楽しいが多い（表 17-1-3）。地域活動に参加を続ける期間が長くなれば、知り合いや友人が増え、そのため参加していることが楽しくなるからではないかと考えられる。

表 17-1-3 ステージ別の地域活動の参加を続ける理由

地域活動の参加を続ける理由	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
知り合いや友人が参加している	2	50.0%	2	20.0%	7	30.4%	11	29.7%
参加すると楽しい	1	25.0%	1	10.0%	5	21.7%	7	18.9%
やりがいや生きがいになる	0	0.0%	2	20.0%	2	8.7%	4	10.8%
自分の役割がある	0	0.0%	0	0.0%	3	13.0%	3	8.1%
誰かの役に立つと思える	0	0.0%	3	30.0%	2	8.7%	5	13.5%
周囲の人とのコミュニケーション	0	0.0%	0	0.0%	2	8.7%	2	5.4%
孤独感を感じている	0	0.0%	1	10.0%	0	0.0%	1	2.7%
その他	1	25.0%	1	10.0%	2	8.7%	4	10.8%
合計	4	100.0%	10	100.0%	23	100.0%	37	100.0%

### ステージ別の他者と交流する場に参加する頻度と機会

交流の場に参加する頻度は全体として毎日 48.1%, 週に 1 回以上 27.8%と定期的に交流する場に参加している。脱ホームレス初期は毎日 50.0%, 週に 1 回以上 37.5%と高い割合で交流の場に参加している。生活慣れ時期, 生活維持期では毎日, 週に 1 回以上の頻度で交流の場に参加しているが, 一方で全くない人も増えている(表 17-2-1)。

脱ホームレス初期や生活慣れ期では自由に参加できる場所がある人の割合が 60%あまりであるが, 生活維持期には自由に参加できる場所がある割合は 90%に上がっている(表 17-2-2)。

脱ホームレス初期の他者と交流を楽しめる場がある人の割合も 60%あまりであるが, 生活慣れ期, 生活維持期になると楽しめる場を有している人が多いことがわかる(表 17-2-3)。

表 17-2-1 ステージ別の交流の場に参加する頻度

交流の場に参加する頻度	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
毎日	4	50.0%	8	50.0%	14	46.7%	26	48.1%
週 1 回以上	3	37.5%	3	18.8%	9	30.0%	15	27.8%
月 1 回以上	0	0.0%	0	0.0%	2	6.7%	2	3.7%
月 2 回以上	0	0.0%	2	12.5%	0	0.0%	2	3.7%
3 ヶ月 1 回程度	1	12.5%	0	0.0%	1	3.3%	2	3.7%
全くない	0	0.0%	3	18.8%	4	13.3%	7	13.0%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

表 17-2-2 ステージ別の自由に参加できる場所

自由に参加できる場所はあるか?	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
はい	5	62.5%	11	68.8%	27	90.0%	43	79.6%
いいえ	3	37.5%	5	31.3%	3	10.0%	11	20.4%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

表 17-2-3 ステージ別の他者と交流を楽しめる場

他者と交流を楽しめる場はあるか？	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
はい	2	25.0%	12	75.0%	24	80.0%	38	70.4%
いいえ	6	75.0%	4	25.0%	6	20.0%	16	29.6%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

脱ホームレス初期の自分の力を発揮する場がある人は 10%あまりであるが、生活慣れ期、生活維持期になると 50%に上がっている(表 17-2-4)。力を発揮する場がないと回答している割合も同等にあることから、自由に出入りをする場や楽しめる場はあるが、自分の力を発揮できる場にはなっていないことがわかる。

表 17-2-4 ステージ別の自分の力を発揮する場

自分の力を発揮する場はあるか？	脱ホームレス初期		生活慣れ期		生活維持期		全体	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
はい	1	12.5%	8	50.0%	15	50.0%	24	44.4%
いいえ	7	87.5%	8	50.0%	15	50.0%	30	55.6%
合計	8	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	54	100.0%

ホームレスから脱した初期に比べ、生活に慣れた時期や生活維持期は地域活動の場、自由に出入りできる場や他者と交流を楽しめる場を有するものが多くなっていった。生活保護の受給を始めた初期は、住居での生活に慣れるまでに身体的精神的な余裕ができるまでにある一定の時間を要することが考えられる。そのような余裕ができ始めた次に、ようやく次のステップへと移行すると考えられる。生活に慣れてきた時期や生活を維持する時期には、生活の質を担保する張りや生きがいを見つけることができるコミュニティが再発を予防するために必要になると考えられる。

なぜ路上生活をしていた高齢者は安定した住居生活での時期毎にコミュニティへの関わりが変化するのか。また高齢者同士のコミュニティの様相は、質問紙調査からは不明であった。この不明点を明らかにするために、ホームレスを経験した高齢者と支援団体のスタッフからのインタビュー調査の結果を用いて分析を行う。

### 第3節 質的調査によるホームレス高齢者のコミュニティ

この節では、第1節、第2節で行った定量分析で明らかになったコミュニティの深い部分をみるために、第5章で紹介した元ホームレス高齢者に対するインタビュー調査と、支援団体のスタッフへのインタビュー調査から、路上生活を脱した後にどのようなコミュニティに属しているのか、またそのコミュニティからどのようなことを経験しているのかを分析する。

質問紙調査では脱ホームレス初期、生活に慣れてきた時期、生活を維持している時期によるコミュニティへの関わりについてはある程度の変化が起こることは確認できたものの、彼らに関わるコミュニティのもつ意味については確認できなかった。インタビュー結果からこれらの点を明らかにしたい。

#### (1) インタビュー内容

インタビューガイドの内容は、1) 訪れやすい場所、2) 誰かと繋がっていると感じる場所や場面、3) 受け入れてもらっていると感じる場所、4) どのようなつながりが生活する上で役に立っているか、である。

#### (2) インタビュー対象者の概要

元ホームレスへのインタビュー調査協力者の概要は第5章の表14の通りである。

支援団体のスタッフへのインタビュー調査協力者は釜ヶ崎支援機構が運営する社会的つながり事業の非常勤職員田中さん（仮名）、山谷地域でホームレス支援団体のスタッフをしている山本さん（仮名）である。

インタビュー協力者の発言は『』及び斜字体で示す。

### 社会的役割の喪失

仕事を通じて社会的役割を持っていた元ホームレスのインタビュー協力者の多くは、高齢になり仕事を通じた自分の役割を発揮する場の消失を経験していた。

Sさん（ケースNo.5:80代）は60歳ぐらいから年齢のために日雇いの仕事などに就けなくなり、5年間ほど路上で生活をしていた。炊き出しなどをする支援団体の勧めでeさんは生活保護を受けることになり、65歳から生活保護を受けてアパート生活をしている。

『生活保護を受けることができて仕事がないのはどうしようもない（情けない） (#5) 』

Kさん（ケース No. 7:70代）は65歳まで派遣労働の仕事をして会社の寮にいたが65歳で解雇され、行く場所がなくなり西成にたどり着いた。路上生活はほんの短い期間のみ経験。自ら役所へ生活保護の相談をしてアパート生活に移行できた人である。

『住み込みで5年ぐらい働いていたところは、辛い仕事だったけど65歳まで働いた。けど、歳やからって突然解雇されたから、住んでいたところ出ないといけなくなって。65歳じゃ、他の仕事も見つからんし、自分はどうしたらいいのか途方に暮れてしまった。自分は長年配管の仕事していた経験があったけど、60歳以上になるとどこも使ってくれなくなる。会社辞めるときに、会社の人にどうしたらいいか聞いたら、西成に行けばどうにかしてもらえるからって。西成なら生保（生活保護）もらえるから行けって言われて、それで西成に来た。日雇いの仕事も減ってきて自分も歳とって、体がだんだん辛くなってきたから、65歳になって生保（生活保護）受けるようになった。生保（生活保護）受けながら、今はドヤ（簡易宿所）にいられるから、寝るところと食べるのは困らないけど、仕事していないとやることないから生きているのがつまらなくてね。自分は何かして体を動かしたい方だから、何もすることないと辛いんだよね（#7）』

支援団体のスタッフ田中さんは事業の運営を通して単身生活保護受給高齢者の相談業務や、支援業務にあたるのがその主な仕事内容である。田中さんはこの業務を通して釜ヶ崎で生きている元ホームレス高齢者の暮らしぶりから、Kさんのような人たちがなぜ釜ヶ崎（西成区）に集まってくるのかその理由を語っている。

『西成区は経済的に困窮している人も集まる場所だから、他府県から転入してくる人も多い。釜ヶ崎は、最後のセーフティーネットを受けられる場として日本の寄せ場機能のまち。他の自治体では現地生活保護が難しいから、とりあえず釜ヶ崎までの交通費とか渡されて釜ヶ崎へ行くよう言われてくる人が多い。（田中）』

さらに田中さんは社会的役割を失った男性の特徴を以下のように語った。

『男性は、過去に仕事をやってきた自信はあるけれど、特に日雇いをして来た人たちは肉体が資本だったことで肉体が健康だった時には仕事を通じて社会的役割を發揮できていた。しかし仕事を通じて生きてきた人は、仕事がない中でどう生きていくかわからない人が多い。（田中）』

## 自由に出入りできる場の確保

元ホームレスのインタビュー協力者は支援団体の集いの場やボランティア活動に参加すること、行きつけの飲み屋を見つけることにより、自分なりに自由に出入りできる場を有していた。

元ホームレスのインタビュー協力者は集いの場へ誰から言われて行くのではなく、毎日自由に出歩いて行ける場の存在やそこで交流する仲間が存在があるについて語っている。

Oさん（ケース No. 3:60代）は路上からアパート暮らしを住み始めたばかりの頃、担当のケースワーカーに支援団体が開催する集いの場を紹介されたことをきっかけに通うようになり4年経つ。その他、Oさんは健康のために毎日1時間ぐらい近くのショッピングモールを散歩することを日課にしている。

『自分は好きなプログラムがある日だけ、ここ（集いの場）に来てる。以前はカフェに参加していたけど、2時間立ちっぱなしでみんなで料理作るけど、料理のボリュームが多すぎてやめた。俳句や詩の時間がある日もあって、自分一人だけ作品だけを作るのではなくて他のひとと一緒に詩をつなぎ合わせて作るのが楽しいから参加している。美術の時間は、3年ぐらい通ってたけど上達しないからやめた。映画会は、宮本武蔵の上映があるときだけ見に来てる。ここは自分の好きなプログラムだけ参加すればいいから、気にいったプログラムがある時に来ている。来れば誰かと話したり楽しいし、ここは来ても来なくてもいいから、自分が来たい時に来る（#3）』

Tさん（ケース No. 4:70代）もケースワーカーからの紹介で集いの場に来ることになり、来ても来なくてもいいから来たい時に来ていると語る。また、行きつけの飲み屋があり自由に出入りする場を複数確保していた。

『集いの場はアパートから歩いて近かったから参加するようになったんだよね。みんなで食べたい献立を決めて作ってみんなで食べる、同じ釜の飯を食うプログラムが気に入っている。それ以外に行きつけのカラオケ居酒屋があって、歌を歌うのが好きだから、ビール1本で歌を歌えるのが気に入って通っている。動くのが好きだから近くのショッピングモールに1人で散歩に行くのが日課なんだ（#4）』

支援団体のスタッフ田中さんは男性の束縛されず自由に出入りできる場の特徴について語った。

『女性はデイサービスや憩いの場とか、公の場所に行くけど、男性は目に見える場所でなくても行き場を持っている人もいる。例えば、自販機の前とか、パチンコ屋の中とか、飲み屋や公園とか、個人的な場所で縛られない関係を好む。（田中さん）』

支援団体が持つ場をハブとして自分の行き場を一つだけでなく複数持つことを目指しながら活動していると支援団体のスタッフ田中さんは語った。

『この場も入学したら卒業があるわけで、たとえこの場がなくなっても、どこか他の場につながっていることを目指している。いろいろなところにつながってもらいたい。地域に複数の居場所を持つことを目指している。（田中）』

Bさん（ケース No. 6:70代）は行動が拘束されない自由な場があることで安心して過ごすことができると語った。

『最初は(集いの場に参加するのは)気乗りしなかったけど、屋上で畑やっていると聞いた。自分は土いじるのが好きだから、それならやってもいいなって思って、参加するようになったの。テントで暮らしているときもテントの前にプランターとかで花とかトマトとか育てていたから、植物があるのってホッとするんだよね。誰から、何かしろって言われなし、好きな植物を植えられからいいね（#6）』

### 相互に交流が楽しめる活動の機会

元ホームレスのインタビュー協力者は集いの場への参加を通じて相互に交流が楽しめる活動の機会を得ていた。相互に交流が楽しめる活動に参加するか否かの選択は自分の意思で決められる主体性の尊重についてOさん（ケース No. 3:60代）は語った。

『ここ（集いの場）は生保（生活保護）を受けることになった時に入れたアパートの裏でたまにここ（集いの場）の看板を見て興味を持った。それで福祉のワーカーに聞いたら、ボランティアで入れるからって紹介された。ここ（集いの場）は自分の好きなプログラムだけ参加すればいいから、気に入ったプログラムのある日に来ている。自分は日中のプログラムでは俳句と詩の会に参加している（#3）』

Kさん（ケース No. 7:70代）は参加しやすい雰囲気があり、また自分のやりたいと思えるプログラムがあることで、参加を継続できていると語った。

『ここ（集いの場）のメンバーは、アットホームな感じで気心の置ける人たちだから、活動をエンジョイしている。みんなで練習して紙芝居と朗読をどんな内容にするかメンバーの皆で考えて、プログラムを考える。メンバーになって丸5年経つかな（#7）』

支援団体のスタッフ田中さんは相互に交流ができる場に元ホームレス高齢男性がなぜ参加し続けているかの理由について語った。

『この場に来る人のほとんどが、自分がやったことがすぐ目に見えるとわかれば、集まってくる。行くところがあって、やることがあるために、メンバーの一員であると思えるらしい。だからゴミ拾いや、掃除のイベントには一番人が集まる。来ている人はお互い話しをすることは少ないけど、今日もいてくれたんかって気持ちをお互い持っている様子がある。（田中さん）』というように例え会話をしなくとも、お互いを気にかけて承認してもらえているコミュニティが参加を続ける誘引となっている。

一方で、集いの場やボランティア活動に参加しない人も多くいることを支援団体のスタッフは語っている。

山谷地域でホームレス支援団体のスタッフをしている山本さん（仮名）は、これまで多くの路上生活者の相談に乗り路上から脱するサポートをしてきた。生活保護を受け簡易宿所などに移行できたにもかかわらず、再び路上へ戻っていく人たちに関わってきたことから路上生活から脱却する難しさを語った。

『生活保護を受けて簡易宿所で生活をしていても、このような集まりには来たがらない人も多い。かといって簡易宿所にいてもやることがないから・・・パチンコとかギャンブルするしか時間潰す術がない。（山本さん）』

同様の内容を釜ヶ崎で支援団体のスタッフをしている田中さんも語った。

『生活保護で生きていくことは命の担保をしてもらえるし、簡易宿所だと見守りもしてくれる、でもやることはないから、一日中テレビ見ている生活の人が多い。（田中さん）』

田中さんが述べているように路上生活から脱し簡易宿所やアパート生活に移行したとしても、やることがなく時間を持て余している人が多いことがわかる。

『男性は仕事をやっている時間がほとんど毎日を占めているから、仕事で時間を取られていたのに、急に仕事なくなるとやる事がなくなる。趣味を見つけましょうと言われてもどうしていいかわからなくなる。この場に来る人の中にも仕事やれると思って来たのにやる事が無いって、来なくなる人がいる。仕事を通じて生きて来た人は、仕事がない中でどう人と付き合っているのかわからない。だからお金には困らなくなったとしても、莫大な時間を過ごすことが大変。男性は仕事を取り上げたら、何も残るものがない。(田中さん)』

## 社会における自分の役割の獲得

多くの元ホームレスのインタビュー協力者は一旦社会的役割を喪失していたが、集いの場やボランティア活動に参加することにより、自分の役割を獲得していた。

Tさん(ケースNo.4:70代)、Sさん(ケースNo.5:80代)は、遠方まで公演に行き自分が誰かのために何かをやることができることがある点を語った。

『年に何回か、メンバーと公演に出かけて子供達や一般の人たちに自分たちの公演を見せることができる。仮設住宅とかへ公演に行くと被災した人に喜んでもらえて、自分も誰かのためにできると思えるようになった(#4)』

『紙芝居人形劇を見せるために東日本大震災の被災者のところへ公演に行くと、誰かのために自分が何かをやれるというのが幸せと感じる(#5)』

さらに、Bさん(ケースNo.6:70代)は社会の中で誰かの役に立てていると感じる機会を得て、喜びを感じていることを語った。

『植物育てるのは失敗もあるけど、収穫もできるでしょ。収穫した野菜をみんなに喜んで食べてもらえるし、自分の作ったものを食べてもらえるのが嬉しい(#6)』

一方で、山谷地域でホームレス支援団体のスタッフをしている山本さん(仮名)は路上から施設等へ移行したとしてもそこでの役割や居心地の良さがないと再び路上に戻ってしまう事例から支援の難しさを語った。

『・・・Iさんは路上生活していた時に足を怪我してそのまま放置していた。糖尿病持ちで怪我の部分が腐っちゃって路上から病院へ救急搬送され切断されちゃった。病院も長くはられないから退院後は再び路上生活して切断部位がまた腐っちゃって・・・このクリニック

で診察して消毒してもらおうけど路上生活じゃ良くならない。なんとか説得して生活保護を受けてケア付きの宿泊施設に入ったけど、いなくなっちゃった。夜回りしている時に川沿いの通路で見かけて声かけたけど、路上の方がいいって。どうしてかわからないけど、炊き出しの食事をもらえるし、そこには路上で生活している人が10人ほどいるから仲間がいるのかもしれない。(山本さん)』

また生活保護を受け自立支援施設に入所したが、どうすれば生活保護を切って路上生活に戻れるかを相談する人への対応で困る事例もある。

『Sさんは、以前に生活保護を受けてアパート生活をしていましたが、金銭管理が自分でできなくなり、家賃が払えなく路上生活していた。年金は月に6万ほどあるためアパートの家賃は払えないが、路上でも食べることは困らなかった。時々日雇の仕事もあったから路上から仕事にも行っていた。だんだん日雇の仕事ももらえなくなり、以前の生活保護のケースワーカーに相談したところアパートではなく自立支援施設に入るなら生活保護を受給できると言われた。自立支援施設にいても何もやることない。自立支援施設だから若い人たちは仕事を探して昼間は誰もいなくなる。自分は仕事もなく、部屋に閉じこもって誰とも話すこともない、やることもない。寝食には困らなくとも、こんな生活なら生きている価値がない。ここにいるより路上生活の方がまだましである。どうしたら生活保護を切って路上に戻れるのか知りたいと。(山本さん)』

釜ヶ崎地域でホームレス支援団体のスタッフをしている田中さん(仮名)も行き場がない高齢者男性の課題を語っている。

『デイサービスは介護予防や介護が必要な人が通える場としてたくさんできているけど、体は元気でもやることがない、行くところがない人たちの行き場がない。老人の憩いの家は、元々長年西成に住み続けている人たちが集う場になっているから、他所から移ってきてここに住むようになった元気な人たちが集う場がない。男性は公園など、隠れた場所で全く一人でなく2-3人で個人的に集うことや、家に引きこもっている。集団やグループは苦手な人が多い。だからこそ、自分が必要と思える場を作って行くことが大切であり、役割があったら、お金ではなく、やったことを認めてもらえることを求めている。作業をする時は、周りから意識されて、目に見えない繋がりができている。作業をやっていることで、やることのない時間をなくすことができる。やることのない時の時間の使い方が課題。今この場にくる人たち、釜ヶ崎に集まる人たちは昭和的な価値観を持っている。男らしさに縛られている人が多い。(田中さん)』

### (3) まとめ

インタビュー調査から釜ヶ崎や山谷の街でのホームレス高齢者の暮らしは、非常に孤独な時間を過ごさなければならないものであることがわかった。釜ヶ崎でも山谷でも互いに名前を知らない者同士の深い付き合いは抑制されている場合が多い。インタビュー協力者が語った中からでも、酒とギャンブルの付き合いで、余計なことに巻き込まれたくないためあまり深く関わらないことと、これまでの人生の経験で、他者との距離の取り方を習得してきている。個人の性格にもよるがその場限りの関係だけで終わる人たちも多い。生活保護を受給できることで命はつながるが、人が人として生きていく上でのつながりや関わりが生まれるまでには至らない人も多い。孤独をうむ男性という性がホームレスから脱した後の高齢者の暮らしに与える影響は大きいことがわかった。

Y氏は体調を壊し生活保護を受け施設入所ができたことで路上生活から脱したが、そこでの生活で寝食は得られても居心地の悪さの方が勝り、再路上することになっていた。路上生活の過酷さから体調不良となり、入院をきっかけに生活保護を受けることができアパート生活に移行した。アパート生活をしてきた時の状況はよくわからないが、ギャンブルに生活保護費を使い家賃が払えなくなり路上生活に戻ったため生活保護廃止となった。狭いアパートの部屋で一人きりの時間を潰すことの苦痛は計り知れないものがある。その苦痛を和らげる、忘れるためにアルコールやギャンブルにのめり込むことは生活する環境がもたらしている結果かもしれない。Y氏の例は氷山の一角でしかないが、路上から脱し寝る場所や食べることに困らない生活を送ることができたとしても、それ以上に孤独のもたらず環境には耐えがたいものがあることがわかる。まさに孤独との闘いが待ち構えているのである。

インタビュー調査の結果からは、路上生活中に同じように路上生活をしている仲間や支援団体とのコミュニティを有していたことはわかったが、特定のグループに参加したりするもしくはひとまとまりであるコミュニティに属していたかどうかはわからなかった。しかし、路上生活から脱し住居に移行後、ある程度生活が安定してくると支援団体の集いの場や、行きつけの場を中心にした自分のコミュニティに属していることが、共通してみられた。

同じような境遇の人たちがいることや、自分で好きなことを選ぶことができる自己決定が尊重される場だからコミュニティに継続的に参加をしていた。特に何か話をしなければならぬのではなく、話をしなくとも目に見えないつながりがあり、気の合う人と空間を共にすることの居心地良さがあると、インタビュー協力者たちは語っていた。

Y氏のように自分が誰かのために何かをやることができることがあると思えることや、B氏のように社会の中で誰かの役に立てていると感じる機会を得て喜びを感じることもあり、周囲から承認されていると感じることが帰属するコミュニティにあることがわかった。

本調査のインタビュ協力者の有するコミュニティをみると、たとえばN氏は路上生活の頃から朝市に参加しており、路上から脱した生活になっても朝市というコミュニティに関

わり続けている。お金のためではなく朝市に来る人との対話が楽しみで参加しており、支援団  
体で気のあった人を朝市の手伝いに加わってもらうような関係性の広がりもみられた。

T氏, S氏, K氏は路上生活中にコミュニティを有していたというより、路上生活から脱し  
簡易宿所やアパートへ移行後に関わりはじめたコミュニティを介して、他のコミュニティの  
一員としても活躍している。たまたまT氏, S氏, K氏の中の一人が他のコミュニティに出入  
りするようになりその他の仲間を引っ張って行ったという経緯がある。

このような自分の有するコミュニティの広がりや、インタビューした他の3人には見られ  
なかったが、行きつけの居酒屋や日課で出かける場をそれぞれ有していた。

#### 第4節 小考

ホームレスから脱した初期に比べ、生活に慣れた時期や生活維持期は地域活動の場、自由に  
出入りできる場や他者と交流を楽しめる場を有するものが多くなっていた。また、同質性の人  
たちとのコミュニティに属することにより、社会における自身の役割を見出していることは  
わかった。

先行研究において、高齢男性は高齢女性に比べより孤立しやすいことが報告されており（黒  
岩, 2010; 高橋, 2012）、その要因の一つとして仕事の喪失がある。本調査の失業経験のある単  
身男性の高齢者は、仕事がないことにより社会的孤立を体験しており、先行研究と同様の結果  
であった。また、大規模災害後においても住み慣れた住宅や仕事を失ったことにより、男性は  
女性に比べより社会的孤立に対して脆弱であることが研究で明らかになっている（大谷 2006,  
Okamoto et.al., 2015）。被災者の多くは住み慣れた住宅や仕事を失ったことにより、社会参加を  
する機会に乏しく、そのため生きる目的や生きがいの喪失に伴う精神的課題が問題となった  
ことも報告されている（Okamoto et.al., 2015）。しかしながら、何かしらのきっかけで集う場へ  
の出入りやプログラムへの参加により、新たな社会的つながりを見出し、孤立からの脱出を可  
能にしていることが報告されている。都市部に住む高齢男性に対して、地域での活動・交流の  
場への参加促進を図ることが孤立予防には有効であることが報告されている（江尻, 河合, 藤  
原, 井原, 平野, 小島, 大淵, 2018）ことから、特に男性高齢者の社会的孤立を予防するためには、  
交流の場へどのように参加を促すかが鍵である。ボランティア活動やイベントに参加するき  
っかけは、団体スタッフからの紹介が最も多く、生活維持期では半数以上の人々が団体スタッフ  
との関係から地域活動につながっていた。インタビュー協力者たちも、失業し、病気や障害が  
あり高齢であることから生活保護という社会保障を受けて生活する中で孤立予防のために支  
援団体やケースワーカーなどからの紹介や勧めで交流の場へとつながっていた。

ホームレスから脱した初期に比べ、生活に慣れた時期や生活維持期はボランティア活動や  
地域のイベント活動に参加する割合が増えていた。また参加していない、参加したくない割合

も減っていた。インタビュー協力者の多くが、隣人や同じアパートの住人との関わりはほとんどなく、接触のなさが目立った。しかし、地域活動に続けて参加をしているうちに知り合いもでき、知り合いから紹介されて他の地域活動や団体へつながり他者と接触する機会が増えていた。

インタビュー協力者の中には、過去の人付き合いを絶ち日常的な友人との接触を持たない人もいた。一方で、コミュニティに属する間に体のことなどを気にしてもらえる人や、本気で叱ってもらえる人との出会いを得ていた。

生活保護の受給を始めた初期は、孤独と闘う苦痛があることがインタビュー調査から明らかになった。生活に慣れてきた時期や生活を維持する時期には、自らが参加するコミュニティに出会い、生活の質を担保する張りや生きがいを見つけることができるコミュニティを有していること、ホームレスから脱却した人々がコミュニティへコミットしていくプロセスには拠り所となる同質的社会的ネットワークの存在や、気心の知れた人との深いつながりも重要な要素であることがわかった。

インタビュー協力者の男性高齢者は路上生活中にコミュニティを有するほどではないが、助け合う仲間や支えてくれる支援団体の存在があった。そのような存在により路上生活中は孤独になることはなかった。一方で、路上生活から脱し住居に移行後、それまで暮らしていたエリアから離れ、生活保護を受給したことを契機に山谷地域や釜ヶ崎地域に来た人たちには孤独が待ち受けていることがわかった。ある程度生活が安定してくると、同じような境遇にある人たちが集う場や自由に出入りする場があることで、帰属意識が形成され孤独から脱することができていた。そこに至るためには自らコミュニティを探し繋がっていったというよりは、仲介する支援団体や人の存在が大きかった。

ボランティア活動に参加するきっかけに支援団体や支援者の存在は大きいですが、活動に参加するきっかけや活動を続ける理由に時間潰しと語った人もいた。インタビュー協力者からの聞き取りでも路上生活から脱し簡易宿所やアパート生活に移行したとしても、やることなく時間を持て余していると訴える人が多かった。持て余す時間の使いどころとしてギャンブルやアルコールが手っ取り早く存在する。路上生活から脱した後にギャンブルやアルコールが原因で再び路上生活に戻ることもあるが、高齢男性のホームレス再発を誘因する原因の一つとして持て余す時間が考えられる。この原因を他のホームレス高齢者に適用できるかどうかは、他の地域やさらに多くの事例研究を行い検証する必要がある。

ホームレス再発の予防に貢献すると考えられるコミュニティを検討した結果、自己決定が尊重され、主体者になることができるコミュニティ、帰属意識が形成されるコミュニティ、同質的社会的ネットワークを包摂するコミュニティが再発を予防することにポジティブに影響していた。一方で、集いの場やボランティア活動に参加しない人やしたくない人も多くいること

から, 持て余す時間をギャンブルなどで費やす術しかない人々は再発しやすいとも考えられる.

## 第7章 総括

この章では、本研究によって得られた新たな知見の確認と、先行研究との比較による考察を行う。さらに本研究の結果から、ソーシャルキャピタルという概念的枠組みを用い、主体間のつながりがホームレスから脱した高齢者の再発予防に資するかを考察し、さらなる研究上の問いかけを挙げる。

### 1. 再発予防に資する人間関係

#### (1) 本研究の分析からわかったこと

本研究の目的の1つ目は、日本のホームレスの高齢者における再発予防の実現に寄与する人間関係の解明である。

4件の既存文献・報告書からホームレスから脱却した人々に関する事例を対象とし、18事例の人間関係の視点からの内容分析を行った。

内容分析の結果から、彼らの有する同質的社会的ネットワークを包有する人間関係は再びホームレスになることを予防する可能性があることが考えられた。さらにホームレス状態から安定した住居生活に至った人々の生活状況と人間関係について量的・質的に分析を行った。その結果、誰かと親密な関係があることがホームレス状態を抑制する可能性があることがわかった。また、路上生活中に親密な関係を有するほどではないが、助け合う仲間や支えてくれる支援団体の存在があった。路上生活から脱した初期は特に路上生活中に知り合った仲間の存在がなくなり、孤独との闘いがあることがわかった。同じ境遇にある人との関係、困った時に相談できる人との関係、信頼を寄せられる人との関係、気心の知れた人との関係はホームレス再発を予防することにポジティブに働くことがわかった。一方で、路上生活をしていた時の知り合いや、元野宿仲間との関係は再発を予防することにネガティブに影響することがわかった。

#### (2) 先行研究との比較

ホームレスが路上から脱した後における人間関係の範囲や内容については、Crane&Warnesによるイギリスの高齢者ホームレスを対象として研究が参考になる。Crane&Warnesの報告では多くのホームレス経験者は何年間も親族と接触していなかった。結婚生活の破綻や家庭内のもめごとで関係が切れた人もいれば、それらの問題がきっかけでホームレスを始めた人もいた。さらに路上から脱して6ヶ月間は3割程度の人が路上生活をしているホームレスと関係を継続しているが、24ヶ月後は2割ほどに減少していることを報告している。定住し新しい仲間との活動が確立すると、以前のホームレス仲間との関係が無くなっていた。ホステル(NPOなどが運営する居住施設、長期滞在が可能)で生活している間は、他の住人との付き合

い以外に友達がいらない人が多く、ほとんどの人がテレビを見たり、お酒を飲んだり、散歩をしたりする以外にはほとんど何もしていないことが報告されている。多くのホームレスはホテルからアパートなどへ定住した後に新しい友人を作ったり、家族とのつながりを新たに持つことをしており、ソーシャルネットワークを確立することが定住を維持することに強く関連していることが示されている。一方で、他の人たちと一緒に住まなくなることで孤立し、寂しさを感じる人もいる(Crane&Warnes,2002)。また、定住をして24ヶ月以上経過した元ホームレス高齢者の3分の1は、友人がおらず、近隣の人と話こともほとんどなく、寂しさを訴えるが、デイセンターや新たな友達作りは拒否することを示している。本研究の結果も、ホームがある群の64.8%は失業者であるが地域に住んでいる期間が長くなることを説明する要素として、社会的活動に参加していること、近所の人・地域の人と交流する機会があることであった。一方、ホームレス状態にある群では、仕事を通じた交流は有しているが、地域でつながりをもつ頻度は少なく、相談する人を身近に有していない割合が高かった。

Barker による若者を対象とした研究では「機能不全の家族であっても家族の元に戻る、または関係を持ち続けたいと希望している」と若い世代のホームレスは家族との強いつながりを維持していることを報告している(Barker,2012)。若者はホームレスになる直前は家族と共に家にいたが、家族機能不全や家庭内のもめごとをきっかけに家出をし、ホームレスに至っている場合が多い。そのため、若者のホームレスは高齢者ホームレスとは異なる家族との関係性や友人との関係を持っている。本研究の対象者のホームレス高齢者は家族・親族との関係がほとんどない人がほとんどであったが、家族・親族ではない人との親密な関係があることにより路上から脱し安定した生活を維持することに成功しているという結果であった。

## 2. 再発予防に資するコミュニティ

### (1) 本研究の分析からわかったこと

本研究の目的の2つ目は、目的の二つ目は、日本のホームレスの高齢者における再発予防に寄与するコミュニティの解明である。

4件の既存文献・報告書からホームレスから脱却した人々に関する事例を対象とし、18事例のコミュニティの視点からの内容分析を行った。

結果から、帰属意識が形成されるコミュニティは再びホームレスになることを予防する可能性があることが考えられた。さらにホームレス状態から安定した住居生活に至った人々の生活状況とコミュニティについて量的・質的に分析を行った。その結果、自らが参加するコミュニティに出会い、生活の質を担保する張りや生きがいを見つけることができるコミュニティを有していることが明らかになった。交流を楽しめる場というのは、高齢男性に興味や関心が持たれやすい内容だけでなく、これまでに体験したことのない内容に参加したことで興味の幅が広がることがわかった。プログラムに参加するかどうかを自分で決めて行動をする

ことを後押しするのは「何かやれることがある」ということがわかった。ホームレス生活から脱して間もない時期には、特に目に見える形で何かに参加できる機会が重要であることがわかった。ゴミ拾いや掃除などやる前とやった後の違いが目に見えるような活動は、行動につながりやすいことがわかった。

路上生活から脱し住居に移行後、ある程度生活が安定してくると、同じような境遇にある人たちが集う場に参加することで、参加するコミュニティで帰属意識が形成され居心地の良さを感じていた。そこに至るためには自らコミュニティを探し繋がっていったというよりは、仲介する支援団体や人の存在が大きかった。ホームレスから脱却した人々がコミュニティへコミットしていくプロセスには拠り所となる同質的社会的ネットワークの存在や、気心の知れた人との深いつながりも重要な要素であることがわかった。

ホームレス再発の予防に貢献すると考えられるコミュニティを検討した結果、自己決定が尊重され、主体者になることができるコミュニティ、帰属意識が形成されるコミュニティ、同質的社会的ネットワークを包摂するコミュニティは再発を予防することにポジティブに影響することがわかった。一方で、持て余す時間をギャンブルなどで費やす術しかない人々は再発しやすいとも考えられた。

インタビュー対象者の中には路上生活の頃から帰属する場へ、路上から脱した生活後も継続して関わり続けている。その理由として支援団体のように信頼できる存在や、体のことを気遣ってくれる仲間ができたことが挙げられた。

山谷地域や釜ヶ崎地域というコミュニティは、気心の知れた仲間を自分の帰属する場へと加わってもらような関係性の広がり存在しており、彼らは単に1箇所の「コミュニティ」につながるだけでなく、1箇所のコミュニティをきっかけに多点とつながることができるようになっていた。山谷地域や釜ヶ崎地域は、元ホームレスが地域とつながる拠点（HUB）としても存在していた。また彼らが帰属するコミュニティは物理的なコミュニティとしての機能だけでなく、人と人との関係し合い新たな関係へと組み入れていく包摂的なコミュニティとして機能していることもわかった。そこでは他者とコミュニケーションをもつ機会になるだけでなく、自分を承認してもらう場にもなっていた。

路上生活から脱し住居に移行後はある程度生活が安定してくると、行きつけの飲み屋や時間が潰せる場所へ自由に参加し続けるうちに、次第に無言でも一緒にいるだけで安心する仲間ができ、支援団体が提供する場とは違う居心地の良いコミュニティを有していた。これらのことから、路上から住む場所へ移行した高齢者ホームレスがコミュニティにつながることで、多様な関係が形成されていく。彼らのコミュニティは孤独の呪縛から解放することに役立ち、再発を予防することにポジティブに影響すると考えられる。しかし一方で、路上から住む場所へ移行した高齢者ホームレスがコミュニティに包摂されることの難しさも感じた。「生活の立て直し」といっても、これまでに蓄積されてきた人生経験や過去の辛い経験などから全

ての高齢者ホームレスが解放されるわけではない。そもそも高齢者ホームレスが路上生活に戻ることを望む場合もある。例えば、本調査で取り上げた路上生活から脱した高齢者が、路上生活には仲間がいるからいいと再び路上へと戻っていった。こういった、既存の関係を維持しようとする力と新しい関係へコミットしようとする力が対立する形で、どのようなコミュニティが必要なのか、難しい問題であるが、今後の検討課題としたい。

## (2) 先行研究との比較

ホームレスが路上から脱した後におけるコミュニティへの統合については、Hopper & Barrow(2003)によるアメリカのニューヨークホームレスを対象とした研究で、支援付き住宅や自立支援施設ではなくアパートなど、普通の住宅に入ることは地域社会への統合に向けた重要な第一歩であること。アパート生活は、施設の強制的な社会的接触にも、路上生活や避難所でのアノミーにもさらされなく安心して暮らすことができることになるからこそ、路上生活から脱した人が地域生活の豊かさにアクセスできるようにするための様々な創造的な方法を開発することが、支援をする側に必要であることを提言している。

コミュニティへの統合は、他の人々との真の深い関係の中でのみ追求されるべきであり、コミュニティを構成するメンバーの一人一人が趣味や興味を持って集まり、交流し、追求するために支援団体がその空間を提供することで、組織的な活動に対する制約を緩和する可能性があることを指摘している。本研究の結果から、ホームレスから脱却した人々がコミュニティへコミットしていくプロセスには拠り所となる人の存在や、気心の知れた人との真の深い人間関係が再発を予防する要素になると言える。

レジデンシャルホームに住む高齢者たちのほとんどが、路上生活から脱して期間を経ても近所の店に少し出歩く以外は外出せず、テレビを見たり、お酒を飲んで過ごすだけにとどまっている。それに比べ、アパートやシェアハウスに移行した高齢者たちは、活動的な傾向を示し、散歩や友人宅を訪ねたり、地域の図書館や高齢者クラブに通ったりしていた(Crane & Warnes, 2002)。また、日中の体を動かす作業や仕事は高齢者の士気と関連があり、無職で退屈を訴える高齢者は、抑うつ、孤独、不安定感、及び住居に不満を訴える傾向が高かった。何か作業や仕事があることが、高齢者の精神的健康の向上と「行動」につながりやすいことを示しており、本調査の結果と同様の結果であった。再定住したホームレスの人々にとって「意味のある」活動の重要性がこれまでも多くのホームレス支援組織は認識してきており、イギリスをはじめとする欧米では様々な活動的プロジェクトが展開されている。日本においては欧米に比べホームレス支援の中心が住居と仕事を優先に展開されてきたことから、再定住後の活動を提供する機会はまだ限られている。しかし、イギリスと同様に意味のある行動が得られることにより精神的健康へとつながることを示すことができた。

高齢者は若い人に比べ、それまでの人生で様々な経験をして人間関係を失ってきたことや、自立した社会人として長い人生を送ってきた経験もある。「他人に迷惑をかけずに生きていく」ことの根幹には、自分の生きてきた人生への自負が影響しているのではないかと考えられる。

### 3. ホームレス再発予防に資するソーシャルキャピタル

本論文が着目した高齢者ホームレスたちは、同じ境遇にある者への接近と現場の光景や言説との交渉を通じてコミュニティを形成し、あるいは高齢や病気・障害による労働市場からの制約とそれに代替える社会的な意味を持つ労働や新たな人間関係を確保しながら、自己の変革を自明の基準とする自立の感覚で生活を再形成していた。たとえ家族や親族との連帯が欠如していても新たな人間関係をつくるきっかけとなる場や環境を通じて築かれた人間関係を有していること、それを生み出すようなコミュニティの存在が再発を予防することに貢献しているということである。ソーシャルキャピタル概念をふまえ、高齢者ホームレスの路上等からの脱出経験と定住生活する地域の年齢的特性をめぐる解釈活動に焦点化した本論文の関心からすれば、彼らが主体者となれる空間と場がコミュニティ化し、コミュニティの主体となるための新たな関係性や行動に馴染む過程が必要であった。彼らが保持している人間関係に注目すれば、社会的資本（Social Capital）の構成要素に結びつく。社会的資本は様々に論じられているが、Putnam(2000)によれば、社会的資本においてはネットワークそれ自体が重要な構成要素となっている。さらに、Harpham(2008)は社会関係資本ソーシャル・キャピタルの構成要素を整理した。Harphamによると、社会的資本は主観的な信頼感などの認知的要素と客観的なネットワークの構造的要素があるという。構造的要素は、社会参加やネットワークなど客観的に観察可能なもので、政治や教育場のつながりであるフォーマルな関係性と、家族や友人とのつながりであるインフォーマルな関係性である。Harphamの社会的資本の要素である地域活動や政治参加、友人との付き合いなどは社会参加活動の頻度や場の数で構成される。本調査の結果である「自由に出入りできる場」「相互に交流が楽しめる活動の機会」「継続的なコミュニケーション」は、Harphamが指摘した構造的要素と重なる。

Harphamによる認知的要素とは、他者への信頼や互酬性など主観的な感覚によって捉えられるものである。本研究の結果の「信頼を寄せられる人の存在」は、Harphamが指摘した認知的要素と重なる。安心をもたらす地域社会の構築にとっても認知的要素の「信頼」は欠かせない。家族や親族のようにインフォーマルなつながりが薄い人たちが、地域で安心して生活を継続していくためには「信頼」を醸成するための「参加」が重要である。

Putnam(2000)が問題視するのは、社会参加の欠如が、社会活動からの根深い阻害の兆候をきたし、人々が協働の成果から利益を得られなくなることである。社会関係資本は、個人にとって本来的な利己心と競争心を克服するための、相互利益のメカニズムを提供するものとされている（Putnam,1993）。相葉, 太刀川, 仲嶺, 高橋, 野口, 高橋, 田宮（2017）は社会関係資本を

「他者とのネットワークとそれに関わる肯定的な認知・感情」と定義した。相葉ら（2017）によれば、ネットワークとは構造的なつながりや結びつきの中で、認知・感情はネットワークに対してどう感じているか（自分にとって必要か、満足できているかなど）やネットワークの形成から生まれる信頼感や安心感などが含まれる。信頼関係の欠如や人間関係の分断は、ソーシャルキャピタルの他の構成要素が存在する場合でも、他者が高齢者にとって何らかの支援になることを阻むことがある。インタビュー協力者たちは、他の多くの高齢者ホームレスと同様に、家族や親族からの信頼と互惠・承認の規範の欠如によって、何の支援も受けることができなかった。信頼、互惠、承認の規範は、ソーシャル・キャピタルとして機能するあらゆる関係において極めて重要な要素である。ホームレスの高齢者の生活と人間関係を見ると、資源や支援へのアクセスを得るためだけではなく、人として生きていくために関係を持つことにあることが明らかであった。ソーシャルキャピタルという概念を用いて、人と人とのつながりの現象的な重要性を見失わないようにすることが重要である。ソーシャルキャピタルの概念をホームレスから脱した高齢者の生活に適用することで、多くの重要な問題が浮かび上がってくる。ホームレスを経験している高齢者は、家族という規範的な絆が存在しない。高齢者ホームレスに関する質的な洞察は、社会的絆をソーシャルキャピタルとして分析する際に、社会的関係に関連する規範、価値、実践、言い換えれば関係の質を考慮することの重要性を浮き彫りにしている。本インタビュー調査の協力者は、困った時に助けてもらえる存在は困った時に助けを求められる安心感になっていることが確認できた。認知・感情面で正の影響をソーシャルネットワークから受けることは、心身の健康への主要な経路であることに強く影響する（Berkman, Glass, Brissette Seeman, 2000）。このことから、本インタビュー調査の結果で得られた人間関係による認知・感情面の肯定的な影響は、孤独を感じていた人々に間接的に肯定的な影響を与え、身体的精神的な健康をもたらすことになったのではないかと考えられる（Peggy, 2011）。

本インタビュー調査の結果で得られた「社会における自分の役割の獲得」は、Peggy(2011)の個人が自分の社会的役割を自己定義的（自己アイデンティティ）として受け入れることにより、生活の中で目的と意味を見出し、不安や絶望から守るということに類似している。Deborah(2006)は Putnam が家族や地域といった伝統的な社会的つながりを特権化しており、新しい社会的関係性とそれを支える新しいアイデンティティを軽視していることを指摘している。緩やかで外部に開かれた結びつきをもつことは、社会的資本を支える新しいアイデンティティとなる可能性がある。ソーシャルキャピタルの要素は、高齢者の社会的つながりを評価するための手段となる。しかし、これらの構成要素は、伝統的なつながりだけでなく、仲間やサービス、などとのあらゆる社会的つながりに関係している。ソーシャルキャピタルのこれらの構成要素は、「セーフティネット」とのギャップを特定するのに役立つ。すべての社会的関係が確実に支援につながるとは限らない。さらに、社会的ネットワークの中には苦悩の種となり、

疎外感を強めてしまうものもある。サービス提供者と彼らが共に働く人々のためにこのことを明確にすることは、現実的な関係とソーシャルキャピタルを発展させ維持するのに役立つだろう。従って、サービス提供者は、支援を受ける人がその人の生活の中でサポートを得られるのは誰か、社会的つながりのポジティブな面とネガティブな面をどう扱うか、支援サービスだけでなくコミュニティの人々など幅広いソーシャルキャピタルと他の社会的つながりを築くことを促進するよう支援することが必要であろう。ソーシャルワーカーや政策立案者は、高齢者が既存の社会的関係を維持・管理、より広範な社会的ネットワークを作り出せるよう支援するかが今後の課題である。

以上から、本研究で紹介したソーシャルキャピタルは、社会的関係の範囲や性質を検討するための手段を提供するものである。しかし、孤立や孤独を抱えるホームレスの高齢者にとって、主体者となりうる仲間としての人々の重要性と価値を見失わないようにすることが重要である。今後の研究では、ホームレスの高齢者の社会生活の複雑な性質を探り、これらの関係のポジティブな面とネガティブな面に注意を払い、ホームレスの高齢者が他の多くの人間と同じように自分の人生に他人を求めていることを認識する必要がある。

#### 4. コミュニティへのコミットメント

彼らが帰属するコミュニティにコミットしていく過程には、活動は自らの経験を成立させる他者への〈接近〉、つまり彼らが「ここ」という表現で創造し、共有する「場」の生成過程でもあった。彼らは仕事と生活を年齢的な条件や環境に規定されながらも、彼ら自身の経験と認識が意味をもつ「場」、つまり自らがコミュニティの担い手と位置づきうるコンテクストを形成していたのである。このような理解を、開発援助分野において「参加型」研究と実践の提案を行った第一人者であるロバート＝チェンバースの意図した「主体者」から検討したい。

国際開発援助の分野において、「参加型」の普及に多大な影響を与えたロバート＝チェンバースは、インド、バングラデシュなどの南アジアや、ケニアやウガンダなどの東アフリカでの開発に長く携わった研究者であり、彼の著書の邦訳「参加型開発と国際協力 変わるのは私たち」（原題 *Whose Really Counts?*.Chamber,2000）では「誰のリアリティが必要か」「発想の転換が必要である」そして、「変わらなければならないのは、我々である」ことを問うている。国際開発援助の現場で強調されてきた参加型開発で向き合う外部者＝支援者の姿勢が変わらなければ、当事者の主体性と自主性は改善されないことを指摘してきた。彼が提唱している主体的参加型農村調査法（Participatory Rural Appraisal:PRA）は地域住民が自らの生活の知識や気状況を共有し、高め、分析し、さらに計画し、行動し、監視し、評価することを可能にすることを重視しており（Chamber,2000:249）、そのアプローチを行うことにより地域住民たちがどう行動するのかの優先順位を決めたり、その行動を決定しコントロールできるようになる。

本論文の高齢者ホームレスたちのコミュニティは外部者の都合のよい解釈で形成したものではなく、彼らがコミュニティをつくりだしていること、チェンバースが述べているように参加する人がそれぞれに参加が何を意味するのか、どのように表現するのが最もよいのかを見出していた (Chamber,2007:250) .すなわち当事者であり支援者でもある高齢者ホームレスは、コミュニティの主体者であり、自らが行動することにより安定した住居を維持することに繋がっていた。

## 5. 本研究の知への貢献

本研究では、単身高齢男性の孤独と、家族との関係が欠如した事例のケーススタディとして人間関係とコミュニティについて分析した。高齢者ホームレスがホームレスから脱却した後の生活を理解するためには地域的な環境や社会関係がやはり重要であった。非正規雇用の拡大は失業者を醸成したし、仕事と生活をめぐる展望は働く層のみならず高齢者も含めた就労機会や人口動態に関する地理的な特質であった。それゆえ、老化のように身体的・精神的な高齢者の特徴のみならず、彼らの意識と生活を規定する地域の諸条件を踏まえることが必須である。

しかし、ホームレスになった経験は年齢的な特質や地域の諸条件に一方向的に規定されるわけではない。彼らは種々の人生経験を通じて、自身の経験を有意味化するコンテクストを形成している。彼らの語る世界は男性特有の労働文化のテクストであったし、年齢をめぐる制約は労働市場に代わる働く場としてのコミュニティを形成する契機となっていた。

ホームレスの就労による自立は一般論として重要な問題であり、それゆえ条件不利な高齢者ホームレスという対象設定には意義がある。しかし、本論文のホームレスから脱した高齢者のリアリティは、青木 (2010) が指摘した「排除と包摂—現代社会の忌まわしき編成原理—」を相対化する。彼らのリアリティは、彼らがコミットするコミュニティに必要な労働規範や生活展望に同質性を見出しうる「近接」を無視しては了解されえないものである。ここから示唆されるのは、年齢的な諸条件のもとでの再定住化が及ぼす生活再建への影響の複雑さを、多様なホームレス高齢者に固有の経験として理解されつつも、彼らが暮らす地域のコミュニティに包摂される過程であることに焦点を当てる必要がある。

そのための分析対象として、ホームレス高齢者が有する人間関係やコミュニティがホームレスから脱した後の生活を維持していくことにかかわっている側面を強調しておきたい。2000年代半ば以降、高齢者のウェルビーイングを維持・向上させるソーシャルキャピタルが注目を集め、交流の機会や居場所機能の観点から高齢者が有するネットワークの意義と限界が論じられた (Putnam, 2006) .しかし、それらの議論は高齢者が有する社会関係を機能主義的に観察するあまり、ネットワークに含まれる情報や言説、またはネットワークそれ自体をめぐる高齢者自身の解釈を捨象していた (Okamoto et. al.,2015) .本研究は、当事者がそうした解

積をもとに自身の生活や生き方を内省することで、新たな人間関係形成をめぐるコミュニティに属しているということを紹介し、当事者自らが自身を受容し変遷していく側面を描いた。その描写は、彼らが一市民としての存在するコンテクストに、適合的な行動実践やアプローチ、それらが結びついたコミュニティ形成を達成する実践であった。同時に自らをコミュニティの担い手として位置づける実践でもあった。

この側面に着目すれば、本研究のホームレスから脱した高齢者たちにとって移行後の生活は包摂で経験される社会過程であり、同時に包摂を生み出す社会の実践でもある。これらの実践への着目を社会的包摂と呼ぶなら、本研究上の目標は、ホームレスから脱したプロセスで人間関係やコミュニティが再発予防とどのように関係するかでとらえることであった。ソーシャルキャピタルの要素である主体間のつながりは老年社会科学に、オルタナティブな主題を提起する。それは、ホームレス高齢者がホームレスから脱するプロセスにおいて、年齢的に所与とみられた環境や条件を有意味にコンテクスト化し、コミュニティに関与しながら自己を取り戻していくとする社会的包摂の過程を探求することである。ここでの指針のひとつは、諸個人が市民として社会参加ができない場合、それは市民としてのあるべき自由が実質的に欠如している、市民として持つべき権利が実質的に保証されていないということを、現象とともに記述することである。それにより、様々な地域でホームレス高齢者が真にホームレス状態から脱することを阻む枠組みの構築に迫ることができるだろう。

## おわりに 研究への貢献と今後の課題

これまでのホームレスに関する研究は、ホームレスになる前の予防や、ホームレス状態になった早期に介入し長期化を防ぐ予防に関するものがほとんどである。しかし、ホームレスから脱した者に着目した研究は、研究方法上の課題もあり、ホームレス研究においてはあまり蓄積がない。本研究は、高齢者ホームレス再発予防の要素を社会的関係とコミュニティの側面から整理するとともに、社会的関係が安定した生活を維持する上で重要であることを示したことで、ホームレスの再発を予防する鍵をある程度明確にすることができたと考えている。

第二に、ホームレス支援に関する研究は、主に欧米諸国の福祉国家での議論が多い。福祉システムが整備されている国の中での議論が、日本を含む福祉国家途上にある国々に当てはめられるかを明らかにした研究は少なく、特に当事者の社会関係やコミュニティに着目して実証的に明らかにした研究はほとんどなかった。本研究で明らかにした再発予防の鍵は、今後経済成長を果たす福祉国家途上にある国々で具体的な支援のあり方を考える上で重要な点であると考えている。

本研究で取り上げたホームレスの人間関係やコミュニティは、ホームレスのみならず貧困地域の生活改善の問題や、被災地での生活再建の問題に対しても有効であると考えられる。本研究では、日本の高齢者ホームレスの住居移行の事例をみることによって、社会的関係の変化やコミュニティの意味を明確に把握することが可能となり、発見することができたことは一つの成果と言えるのではないだろうか。

特に、本研究を通じて、彼らの人間関係と彼らを包摂するコミュニティの役割が明らかになったと思う。また、人間関係やコミュニティが移行後のステージ毎に変化することから、たとえ高齢者であったとしても可逆性を持つことが考えられる。日本の寄せ場はコミュニティとしての役割のみならず、とりわけ歴史的な地域の存在であること、社会福祉資源の拠点 (HUB) としての機能を有することから、高齢者のみならず社会的弱者が承認を得られる重要な存在であると考えられる。

最後に、本研究のいくつかの制限と残された課題について述べる。

第一に、東京・大阪の特定の地域で調査に協力した者のみを対象とした横断的調査であり、協力施設の特性を反映している可能性が高く、ホームレス人口全体を代表する結果とはいえない。脱ホームレスに対する質問紙調査では、対象とした地域が東京都と大阪府の支援団体やボランティア団体と接点がある人に対して実施したため、支援団体が少ない地域や支援団体と接点がない人を含んでいないことである。また、就労自立や自力でホームレスから脱した層の事例が不足している。そのため、高齢者ホームレス全体に対して包括的に把握を行っているとは言い難い。支援団体の乏しい地域や支援団体と接点がない人、就労自立や自力でホームレ

スから脱した人を含むことができると、高齢者ホームレスが路上から脱した後の意味世界をよりよい理解を得ることができるであろう。

第二の限界はホームレスから脱した者のサンプルの小ささから、データがホームレスを経験した高齢者の代表とは言えないことである。特に路上から簡易宿所やアパートに移行して間もない人への接触は、特に制限があった。山谷地域の路上から移行後間もない調査協力者は、生活保護受給者の社会的つながりを促すモデル事業に参加する人たちであり、研究者らが1軒1軒訪問をして聞き取りを行ったため、サンプルサイズが非常に小さい結果となった。釜ヶ崎地域の路上から移行後間もない調査協力者も生きがいつくり事業に参加している人たちであり、その事業を利用していない人たちへはアクセスができなかった。山谷と釜ヶ崎には様々な支援団体があり、全てを網羅することには制限があるが、今後の調査ではサンプルサイズを増やす努力が必要である。また、指定地域以外の地域に住むホームレスを含めるためには、さらなる調査が必要である。

しかしながら、ホームレスから脱した生活における再発を予防することに寄与する要因を検討する助けとはなかった。本事例から浮かび上がった結果として家族と連帯がなくとも新たな人間関係をつくるきっかけとなる場や環境が再発予防にはポジティブに影響するということである。もちろん本研究の結果で提示した内容は一つの仮説にすぎない。ただ、量的調査と質的調査の参加者が同一人物であり、両方のデータを結合させているため、ここで提示した仮説はある程度信頼性が高いものと思われる。

第三の限界は本調査で取り上げた山谷と釜ヶ崎の地域の住民は、地域そのものに特徴があり、ホームレス支援団体が多い地域の地域特性や年齢の影響を受けているかどうかを判断することはできない。地域社会が有している社会資源や住民の気質が影響していることも考えられる。その点については、地域文化からの影響をどのくらい受けているのかについて、他の地域との比較や、他の年齢層の人との比較調査が必要である。今後、同一地域および周辺地域の若年者との比較調査も必要である。

第四の限界は、ホームレスから脱した高齢者に対するインタビュー調査では、ホームレスに再び戻った人への事例が不足している。そのため、ホームレス生活へと戻ることを後押しするのはどんなことが影響しているのか、ホームレス生活から脱し安定した生活を続けている人との違いは何があるのか、何が高齢者を路上生活へと引き寄せるのかを明らかにしていくことが課題である。

第五の限界は、事例で取り上げた高齢者ホームレスの特徴をみると、ほとんどの人が家族関係から切り離された高齢の単身男性で、日雇い労働や不安定な労働の経験が長く、未婚というタイプであった。地域活動を活発に行うホームレス高齢者の特徴をみると、健康面の不調を経験していながらも元気で余力を感じた。地域活動を行う元ホームレス高齢者と行わない高齢

者との間に、どのような差異があるのか、「地域に包摂されていく高齢者」と「地域から排除されたままの高齢者」の質的な差異を検討する必要があると考えられる。

最後に、本研究の調査では簡易宿泊施設に住む人をホームレスではないとしたが、サンプルには日雇い労働や年金だけで簡易宿泊施設と路上を行き来している短期的なホームレス状態にある人が混在している可能性は否定できない。調査一時点での居住状況に基づいているため、過去のホームレスの経験は不明であった。

上記の残された課題の他にも、本研究の調査過程において、同じ人間としての立ち位置を有していたかの反省を行うことも課題である。彼らと私、対象者と研究者＝調査者の関係性からリアルなデータに何らかの影響を与えていないかを熟考することが必要である。これらの課題を受け、ホームレス高齢者の社会的関係と安定した住宅の維持を縦断的に検証するなどさらなる研究が必要である。

## 引用文献一覧

### 1. 外国語文献

- Abe, O., Dej, E., & Parsons, C. (2020). Evolving an evidence-based model for homelessness prevention. *Health Soc Care Community*, 28, 1754-1763. <https://doi.org/10.1111/hsc.13000>
- Amanda, G., Tamara, S., Rachel B., Valerie, B.G., & David, R. (2016). 'Growing Old' in Shelters and 'On the Street': Experiences of Older Homeless People. *Gerontological Social Work*, 59(6), 458-477.
- Anderson, I. (2007). Tackling street homelessness in Scotland: The evolution and impact of the Rough Sleepers Initiative. *Journal of Social Issues*, 63, 625-642.
- Appelbaum, R.P., Dolny, M., Dreier, P., & Gilderbloom, J.I. (1991). Scapegoating Rental Control: Masking the Causes of Homelessness. *Journal of the American Planning Association*, 57, 153-164.
- Barker, J.D. (2012). Social capital, homeless young people and the family. *Journal of Youth Studies*, 16, 730-743.
- Barrow, S. M., Hermann, D. B., Cordova, P., & Struening, E. L. (1999). Mortality among homeless Shelter residents in New York City. *American Journal of Public Health*, 89(4), 529-534.
- Berkman, L. F., Glass, T., Brisette, I., & Seeman, T.E. (2000). From Social integration to health: Durkheim in the new millennium. *Social Science & Medicine*, 51(6), 843-857.
- Bhalla, A.S., Lapeyre, F. ([1999]2004). *Poverty and Exclusion in a Global World*, 2<sup>nd</sup> ed., London, Macmillan Press. (=福原宏幸・中村健吾監訳, グローバル化と社会的排除—貧困と社会問題への新しいアプローチ, 昭和堂).
- Brown, R.T., Goodman, L., Guzman, D., Tieu, L., Ponath, C., & Kushel, M.B. (2016). Pathways to Homelessness among Older Homeless Adults: Results from the HOPE HOME Study. *PLoS ONE*, 11(5), 1-17.
- Burt, M.R., Pearson, C., & Montgomery, A.E. (2005). *Strategies for preventing homelessness*. Washington, DC: US Department of Housing and Urban Development.
- Bourdieu, P. (1985). The social space and the genesis of groups. *Theory and Society*, 12 (6), 723-744.
- Bourdieu, P. (1986). Forms of capital. In: J.G. Richardson, ed. *Handbook of theory and research for sociology of education*. New York: Greenwood Press, 241-258.
- Busch-Geertsema, Volker (2010): *The Finish National Programme to Reduce Long-Term Homelessness*. Discussion Paper. Bremen, Germany: GISS – Association for Innovative Research and Social Planning.
- Busch, V., Fitzpatrick, S. (2008). Effective Homelessness Prevention? Explaining Reductions in Homelessness in Germany and England. *European Journal of Homelessness*, Vol.2, 69-95.
- Chamberlain, C., & Mackenzie, D. (2006). Homeless careers: A framework for intervention. *Australian Social Work*, 59(2), 198-212.
- Cohen, C.I., Ramirez, M., Teresi, J., Gallagher, M., & Sokolovsky, J. (1997). Predictors of becoming redomiciled among older homeless women. *Gerontologist*, 37(1), 67-74.

- Cohen, C. I. (1999). Aging and homelessness. *The Gerontologist*, 39(1), 5-14.
- Cohen, N.H.(2012). Aging and Homelessness in New York City. Ravazzin Center on Aging, Fordham University, 1-78.
- Coleman, J.(1990).Foundations of social theory. Cambridge: Harvard University Press.
- Crane, M.(1993). Elderly homeless people sleeping on the streets in Inner London: an exploratory study. London: Age Concern Institute of Gerontology, King's College.
- Crane, M.(1996). The situation of older homeless. Review in *Clinical Gerontology People*, 6(4), 389-398.
- Crane, M., & Warnes, A.M.(2000). Evictions and Prolonged Homelessness. *Housing Studies*, 15(5), 757-773.
- Crane, M., & Warnes, A.M.(2001). Older People and Homelessness: Prevalence and Causes. *Topics in Geriatrics Rehabilitation*, 16, 1-14.
- Crane, M., & Warnes, A. M. (2001). Primary health care services for single people: Defects and opportunities. *Family Practice - An International Journal*, 18(3), 272-276.
- Crane, M., & Warnes, A.M. (2002). Resettling Older Homeless People: a longitudinal study of outcomes. BBR Solution Ltd.
- Crane,M.,Warnes,A.M.,& Fu,R.(2006).Developing Homelessness prevention practice: Combining research evidence and professional knowledge. *Health & Social Care in the Community*, 14(2),156-166. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2524.2006.00607.x>
- Crane, M., Joly, L., & Manthorpe, J. (2016). Rebuilding Lives-Formerly homeless people's experiences of independent living and their longer-term outcomes-the social care workforce research unit, London.
- Creswell, J.W., & Creswell, J.D.(2017).Research design: Qualitative, quantitative, and mixed methods approaches(5<sup>th</sup> ed).SAGE.
- Deborah Chambers.(2006),New Social Ties: Contemporary Connection in a Fragmented Society(Palgrave Macmillan, Basingstoke). (辻大介・久保田裕之・東園子・藤田智博訳『友情化する社会：断片化のなかの新たな＜つながり＞』岩波書店)
- Dragana, Avramov(1995), Homelessness in the European Union-Social and Legal Context of Housing Exclusion in the 1990s Brussels, FEANTSA.
- Deci, E. L., Eghrari, H., Patrick, B. C., & Leone, D. R. (1994). Facilitating internalization: The self-determination theory perspective. *Journal of Personality*, 62, 119-142.
- Dennis P. C. Stephen, & M. Byrne, T. (2011). A prevention -centered approach to homelessness assistance: a paradigm shift? *Housing Policy Debate*, 21(2), 295-315.
- Duchesne, A. T., & Rothwell, D. W. (2016). What leads to homeless shelter re-entry? An exploration of the psychosocial, health, contextual and demographic factors. *Canadian Journal of Public Health*, 107(1), e94-e99.
- Early, D.W. (2005). An Empirical Investigation of the Determinants of Street Homeless. *Housing*

- Economics*, 14(1), 27-47.
- Fitzpatrick, S. (2005). Explaining Homelessness: a Critical Realist Perspective. *Housing, Theory and Society*, 22(1), 1-17.
- Gaetz, S., & Dej, E. (2017). *A new direction: A framework for homelessness prevention*. Toronto: Canadian Observatory on Homelessness Press.
- Greiner, A., Barken, R., Sussman, T., Rothwell, D., & Lavoie, J.P.(2013). Literature Review: Aging and Homelessness. A Report on Aging and Homelessness, Gibrea Centre for Studies in Aging.
- Greve, J.(1991). Homelessness in Britain. York: Joseph Rowntree Foundation.
- Harpham, T.(2008). The measurement of community social capital through surveys. In: Kawachi I, Subramanian SV, Kim D, editors. *Social Capital and Health*. New York: Springer.51-62.
- Hayashi, M.(2014). Urban poverty and regulation, new spaces and old: Japan and the US in comparison, *Environment and planning* , 46, 1203-1225.
- Hecht, L., & Coyle, B. (2001). Elderly homeless: A comparison of older and younger adult emergency shelter seekers. *American Behavioral Scientist*, 45(1), 66-79.
- Hibbs, J. R., Benne, L., Kiugman, L., Spencer, R., Macchia, I., Mellinger, A. K. ,& Fife, D.K.(1994). Mortality in a cohort of homeless adults in Philadelphia. *The New England Journal of Medicine*, 331(5), 304-309.
- Homeless organization UK(2012) , Resettlement From Homelessness Services, <https://www.homeless.org.uk/sites/default/files/site-attachments/Resettlement%20guidance.pdf> (Retrieved 2021-2-10).
- Hopper, K., & Barrow, S.M.(2003).Two Genealogies of Supported Housing and Their Implications for Outcome Assessment. *Psychiatric Services*, 54(1), 50-54.
- Hoffman, L., & Coffey, B. (2008). Dignity and indignation : How people experiencing homelessness view services and providers. *The Social Science*, 45, 207-222.
- Hwang, S.W(2000). Mortality Among Men Using Homeless Shelter in Toronto, Ontario. *Journal of American Medical Association*, 283(16), 2152-2157.
- Hwang, S.W., O'Connell, J.J., Lebow, J.M., Bierer, M.F, Orav, E.J., & Brennan, T.A.(2001). Health Care Utilization Among Homeless Adults Prior to Death. *Journal of Health Care for the Poor and Underserved*, 12(1), 50-58.
- Igor, R.L., Matty, A.W., & Niek, S.K. (2009). Pathways into homelessness: recently homeless adults' problems and service use before and after becoming homeless in Amsterdam. *BMC Public Health*, 9(3), 1-9.
- Levitas, R. (1998). *The Inclusive Society?: Social Exclusion and New Labour*, London, Macmillan Press.

- Lucas, R. E., Clark, A. E., Georgellis, Y., & Diener, E. Unemployment alters the set-point for life satisfaction. *Psychological Science*, 2004;15(1): 8-13.
- Meschede, T., Chaganti, S. (2015). "Home for Now: A Mixed-Methods Evaluation of a Short-Term Housing Support Program for Homeless Families." *Evaluation and Program Planning*, 52, 85-95.
- National Alliance to End Homelessness, State of Homelessness:2020 Edition.  
<https://endhomelessness.org/homelessness-in-america/homelessness-statistics/state-of-homelessness-2020/> (cited March 26,2021).
- OECD (2005). Society at a Glance: OECD Social Indicators, OECD, Paris.
- OECD(2015), Labour Force Statistics.
- Office for National Statistics , Homelessness:2005 to 2018,2019.  
<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/housing/articles/ukhomelessness/2005to2018>  
(cited March 26,2021).
- OECD, Better data and policies to fight homelessness in the OECD, Policy Brief on Affordable Housing, Paris, 2020; <http://oe.cd/homelessness-2020>. (cited May 20,2021)
- O’Flaherty, B. (2004) .Wrong Person and Wrong Place: For Homelessness, the Conjunction is what Matters. *Journal of Housing Economics*, 13(1) , 1-15.
- O’Connell, J, Summerfield, J, & Russell, Kellogg F.(1990). The homeless elderly.  
In: Brickner, P, Scharer, L, Conanan, B, Savarese, M, Scanlan, B eds. Under the safety net: the health and social welfare of the homeless in the United States. New York: WW Norton, 151–168.
- O’Reilly-Fleming, T.(1993). Down and out in Canada: homeless Canadians. Toronto: Canadian Scholars' Press.
- Okamoto, N., Greiner ,C., & Godfred, P.(2015). Lesson and Learned from Older People in Case of Great East Japan Earthquake and Tsunami of 2011. *Procedia Engineering* , 107, 133-139.
- Okamoto, N., Greiner, C.(2019). Ibasho and Social Network for Older Homelessness. American Association for Advancement of Science annual Meeting 2019.
- Peggy A Toits (2011). Mechanisms linking social ties and support to physical and mental health. *J health and social behavior*, 52(2), 145-161.
- Pleace, N., Fitzpatrick, S., Johnsen, S., Quilgars, D., Sanderson, D.(2008). Statutory Homelessness in England: The Experience of Families and 16-17 Year Old’s. London : Communities and Local Government.
- Pleace, N. (2016). Researching homelessness in Europe: Theoretical perspectives. *European Journal of Homelessness*, 19-44.
- Portes, A.(1998). Social capital: its origins and applications in modern sociology. *Annual review of sociology*, 24, 1-24.

- Putnam R.(1993).The prosperous community: Social Capital and public life. *American Prospect*, 13, 35-42.
- Putnam R.(2000). *Bowling Alone*. New York, Simon& Schuster.
- Putzel, J.(1997). Accounting for the ‘Dark Side’ of social capital: reading Robert Putnam on democracy. *Journal of international development*, 9 (7), 939-949.
- Quigley, J.M. (1990). Does Rent Control Cause Homelessness? Taking the Claim Seriously. *Journal of Policy Analysis and Management*, 9, 88-93.
- Rebecca, T.B., Goodman, L., David, G., Lina, T., & Claudia, P. (2016). Pathways to Homelessness among Older Homeless Adults: Results from the HOPE, HOME study, *PLoS One*, 11(5), 1-17.
- Robert Chamber (2000). 参加型開発と国際協力—変わるのはわたしたち—. 野田直人,白鳥清志監訳.明石書店.
- Robert Chamber (2007).開発の思想と行動「責任ある豊かさ」のために. 野田直人監訳.明石書店.
- Shlay, A. B., & Rossi, P.H. (1991). Social Science Research and Contemporary Studies of Homelessness. *Annual Review of Sociology*, 18, 129-160.
- Shinn, M., Baumohl, J., & Hopper, K. (2001). The prevention of homelessness revisited. *Analyses of Social Issues and Public Policy (ASAP)*, 1(1), 95–127.
- Stablein, T. (2011). Helping friends and the homeless milieu: social capital and the utility ofstreet peers. *Journal of contemporary ethnography*, 40 (3), 290-317.
- Stergiopoulos, V., & Herrmann, N.(2003).Old and Homeless: A Review and Survey of Older Adults Who Use Shelter in Urban Setting. *Can J Psychiatry*, 48(6), 374-380.
- Susser, E., Moore, R., & Link, B. (1993). Risk Factors for Homelessness. *American Journal of Epidemiology*, 15, 546-556.
- Tatjana, M., Sara, & Chaganti. (2015) . Home for Now: A Mixed-Methods Evaluation of a Short-Term Housing Support Program for Homeless Families. *Evaluation and Program Planning*, 52, 85-95.
- Taylor, M. (1982). *Community, Anarchy and Liberty*. Cambridge: Cambridge University Press.
- United States Interagency Council on Homelessness. (2010). United States Interagency Council on Homelessness: Historical Overview.
- U.S. Department of Housing and Urban Development. *Sequestration impact on homeless assistance grants programs*. 2013 Available at: <https://www.onecpd.info/news/sequestration-impact-on-homeless-assistance-grants-programs/>
- United Nations.(1996). United Nations Conference on Human Settlements.
- UN-Habitat.(2005). *Financing Urban Shelter-Global Report on Human Settlements 2005*.
- Warnes, A.M., Crane,M. (2010). The Causes of Homelessness Among Older People in England. *Housing Studies*, 21(3), 401-421.

- Warnes, A.M., Crane, M., SE, Coward.(2013). Factors that influence the outcomes of single homeless people's rehousing. *Housing Studies*, 28(5), 782-798.
- Warren, R. (1963). *The Community in America*. Chicago, Rand McNally.
- WHO (1999). *Men, aging and Health*,  
[https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/66941/WHO\\_NMH\\_NPH\\_01/2/pdf](https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/66941/WHO_NMH_NPH_01/2/pdf) (Retrieved 2020-1-15)
- WHO (2001). Indicators for Minimum Data Set Project on Ageing: A Critical Review in Sub-Saharan Africa,[https://www.who.int/healthinfo/survey/ageing\\_mds\\_report\\_en\\_daressalaam.pdf](https://www.who.int/healthinfo/survey/ageing_mds_report_en_daressalaam.pdf) (Retrieved 2020-1-15)
- Winter, I.C.(2000).Towards a theorized understanding of family life and social capital. Working Paper . 21. Australian Institute of Family Studies.
- Wright, J.D., Rubin, B.A. , Devine, J.A. (1998). *Bedside the Golden Door: Policy, Politics and the Homeless*. Aldine de Gruyter: New York.

## 2. 日本語文献

- 相葉美幸, 太刀川弘和, 仲嶺真, 高橋晶, 野口晴子, 高橋秀人, 田宮菜奈子 (2017) . 中高年者縦断調査を用いたソーシャル・キャピタル指標の作成と妥当性・信頼性の検討. *日本公衛誌*, 64 (7) , 371-383.
- 青木秀男 (2000) . 現代日本の都市下層一寄せ場と野宿者と外国人労働者一. 明石書店.
- 荒川千秋, 神郡博 (1999) . 看護相談場面のカウンセリング効果に関する研究. *富山医科薬科大学看護学雑誌*, 第2号, 134.
- 江尻愛美, 河合恒, 藤原佳典, 井原一成, 平野浩彦, 小島基永, 大淵修一(2018). 都市高齢者における社会的孤立の予測要因：前向きコホート研究, *日本公衛誌*, 第 65 卷第 3 号, 125-133.
- エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ (平成30) . ホームレスの実態を踏まえた生活困窮者自立支援制度における一時生活支援事業に関する調査研究. 平成29年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金社会福祉支援事業報告書.
- 福原宏幸 (2007) . 社会的排除/包摂論の現在と展望, 福原宏幸編「社会的排除/包摂と社会政策」, 法律文化社, 21-33.
- 後藤広史(2013). ホームレス状態からの「脱却」に向けた支援. 明石書店.
- 原口剛 (2010) . 寄せ場「釜ヶ崎」の生産過程にみる空間の政治, 青木秀男編「ホームレス・スタディーズ：排除と包摂のリアリティ」. ミネルヴァ書房, 63-94.
- 樋口耕一 (2014) . 社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.
- ひと花プロジェクト連合体 (2015) . ひと花プロジェクト事業報告書, 2014 年度西成区単身高

- 齢者生活保護受給者の社会的つながり事業.
- ひと花プロジェクト連合体 (2016) . ひと花プロジェクト事業報告書, 2015 年度西成区単身高齢者生活保護受給者の社会的つながり事業.
- 堀江尚子, 渥美公秀, 水内俊雄 (2015) . ホームレス支援の関係性の継続と崩壊—入所施設のアフターケアでのアクションリサーチおよび支援関係の理論的考究—. *実験社会心理学研究*, 55(1), 1-17.
- 本間啓一郎 (1993) . 釜ヶ崎小史試論, 釜ヶ崎資料センター編「釜ヶ崎—歴史と現在」, 三一書房, 24-67.
- 石田光規 (2011) . 孤立の社会学—無縁社会の処方箋—, 勁草書房.
- 岩田正美 (2000) . ホームレス/現代社会/福祉国家—「生きていく場所」をめぐって, 明石書店.
- 岩田正美 (2004) . 誰がホームレスになっているのか?, *日本労働研究*, 528, 49-58.
- 岩田正美 (2008) . 社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属—, 有斐閣.
- 城北労働・福祉センター(2019). 城北労働・福祉センター事業案内.
- 釜ヶ崎支援機構 (2016) . みんなで取り組む仕事づくり・居場所づくり, 社会的つながり活性化仕事・居場所づくり事業報告書. 平成 27 年度福祉医療機構社会福祉振興助成事業.
- 笠井和明 (1995) . いわゆる「ホームレス」問題とは—東京・新宿からの発信, 寄せ場No. 8, 日本寄せ場学会.
- 金光淳 (2018) . 社会ネットワーク論, *京都マネジメント・レビュー*, 32, 138-142.
- 黒岩亮子(2010). 都市高齢者の「孤立」と地域福祉の課題, *貧困研究*, 4, 88-97.
- 厚生労働省 (2000) . 「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書.
- 厚生労働省 (2007) . ホームレスの実態に関する全国調査.
- 厚生労働省 (2012) . 平成24年「ホームレスの実態に関する全国調査検討会」報告書.
- 厚生労働省 (2012) . ホームレスの実態に関する全国調査.
- 厚生労働省 (2013) . 「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」に基づくホームレスの自立支援施策.
- 厚生労働省 (2016) . ホームレスの実態に関する全国調査.
- 厚生労働省 (2017) . ホームレスの実態に関する全国調査.
- 厚生労働省 (2018) . ホームレスの実態に関する全国調査.
- 厚生労働省 (2021) . ホームレスの実態に関する全国調査.
- 高齢者の医療に関する法律, 第32条, 第50条.
- 小玉徹, 中村健吾, 都留民子, 平川茂 (編) (2003) . 欧米のホームレス問題—実態と政策 (上) . 法律文化社.

- 水内俊雄・渥美清・蓬莱梨乃（2008）．二つの全国調査を通じてみたホームレス脱野宿支援施策の地域差, *季刊 Shelter-less*, 34, 135-164.
- 森岡清志（1979）．社会的ネットワーク論—関係性の構造化と対自化—, *社会学評論*, 30（1）, 119-35.
- 内閣府（2012）．高齢社会白書平成23年度版.
- 中村健吾, 中山徹, 岡本祥浩, 都留民子, 平川茂（編）（2004）．欧米のホームレス問題 支援の実例（下）．法律文化社.
- 西田心平（2001）．寄せ場のストリートライフ—釜ヶ崎における単身労働者の生活世界—, *立命館産業社会論集*, 37(2), 115-141.
- 虹の連合（2007）．もう一つの全国ホームレス調査. 大阪就労福祉居住問題調査研究会.
- 日本型CAN研究会（2009）．あいりん地域の構造把握基礎調査報告書—あいりん地域 現状と未来を見通すために—.
- 日本社会学会社会学辞典刊行委員会編（2010）．社会学辞典. 丸善.
- 大谷順子（2006）．事例研究の革新的方法—阪神大震災被災高齢者の五年と高齢化社会の未来像—, 九州大学出版会.
- 岡本祥浩（2012）．日本でホームレス予防策が提起できない要因に関する考察, *総合政策論叢*, 3, 35-50.
- 岡本菜穂子, グライナー智恵子（2018）．生活困窮単身高齢者の社会的紐帯の脆弱性. 第33回日本国際保健医療学会.
- ランダムハウス英和大辞典（2010）．第2版, 小学館, 1281.
- ロバート・D・パットナム, 柴内康文訳（2006）．孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生. 柏書房.
- 榊原哲也（2017）．現象学と現象学的研究, 西村ユミ・榊原哲也編「ケアの実践とは何か：現象学からの質的研究アプローチ」, ナカニシヤ出版, 1-21.
- 山友会（2019）．社会的きずなが希薄な独居生活者への居場所・生きがいつくり事業報告書, 台東区協働事業提案制度平成30年度実施事業.
- 島和博（1998）．「寄せ場」から見た野宿生活者問題, *大阪市立大学文学部紀要*, 50巻, 第9分冊, 1-37.
- 白波瀬達也（2010）．「福祉の街」へと変わりゆく釜ヶ崎, 青木秀男編「ホームレス・スタディーズ：排除と包摂のリアリティ」, ミネルヴァ書房, 164-165.
- 白波瀬達也（2010）．教会に通う野宿者の意味世界, 青木秀男編「ホームレス・スタディーズ：排除と包摂のリアリティ」, ミネルヴァ書房, 233-261.
- 白波瀬達也（2017）．貧困と地域, あいりん地区から見る高齢化と孤立死, 中公新書.

- 助友裕子 (2019) . 集団レベルの理論・モデル. 日本健康教育学会編「健康行動理論による研究と実践」, 医学書院, 125-160.
- 鈴木亘 (2009) . 脱路上生活者の就労継続期間の分析. 季刊・社会保障研究, 45(2), 161-169.
- 世界大百科辞典 改訂新版 (2014) . 平凡社
- 瀬田裕, 土肥真人 (2011). ホームレス支援における効果的な社会的資源の投下に関する研究-川崎市におけるデータベースの構築と中間施設・支援事業の再構築について-. doi-lab. 東京工業大学修士論文.
- 高橋信行(2012). ひとり暮らし高齢者の社会的孤立-地方都市, 過疎地域, 離島における実態, 地域総合研究, 40(1), 1-17.
- 陳立行 (1989) . 社会的ネットワークの理論的再検討, 年報筑波社会学, 100-117.
- 堤圭史郎 (2006) . 「善意」に支えられた「ホームレス支援」, 大阪市立大学社会学研究会, 7, 35-50.
- 東京都福祉局生活福祉部編 (2001) . 東京のホームレス自立への新たなシステムの構築に向けて.
- 東京都福祉保健局 (2008) . ホームレスの自立支援等に関する東京都実施計画 (第2次) .
- 東京都福祉保健局 (2014) . ホームレスの自立支援等に関する東京都実施計画 (第3次) .
- 戸田真紀(2010). ホームレス脱却メカニズム解明のためのモデル構築を目指して-オーストラリアからの事例からの分析-, アジア文化研究, 36, 105-139.
- トム・ギル (1999) . 大都市のマージナルな男たちの比較研究: 日本の「寄せ場」, アメリカのスキッド・ロウ, 人間・文化・心: 京都文教大学人間学部研究報告, 第2集, 37-52.
- トム・ギル (2005) . 日本のホームレスの事情とそれに関する行政対策-地域別・国際的な比較研究, kaken, 明治学院大学.
- 内尾太一 (2012) . 東日本大震災と被災者の尊厳に関する公共人類学的研究: 宮城県の仮設住宅における教育支援の実践現場から. 日本文化人類学会研究大会発表要旨集. 56.
- 渡辺芳 (2008) . ホームレス/野宿者をめぐる行政支援-「山谷対策」から「ホームレス対策」へ-, 東洋大学大学院紀要, 45, 37-57.
- 渡辺芳 (2010) . 自立の呪縛-ホームレス支援の社会学-, 新泉社.
- 山北輝裕 (2010) . 野宿者と支援者の協同-「見守り」の懊悩の超克に向けて. ミネルヴァ書房, 262-284.
- 山田壮志郎編 (2020) . ホームレス経験者が地域で定着できる条件は何か-パネル調査からみた生活困窮者支援の課題-, ミネルヴァ書房.

## 参考文献一覧

### 1. 外国語文献

- Bender, K., Thompson, S.J., McManus, H., Lantry, J., Flynn, P.M.(2007). Capacity for survival: Exploring strengths of homeless street youth. *Child and Youth Care Forum*, 36, 25–42.
- Begun, S., Bender, K.A., Brown, S.M., Barman, A.A., Ferguson, K.(2016). Social Connectedness, Self-Efficacy, and Mental Health Outcomes Among Homeless Youth: Prioritizing Approaches to Service Provision in a Time of Limited Agency Resources. *Journals Sage*, 50(7), 989-1014.
- Black, K., Dobbs, D., Young, T.L.(2012). Aging in Community: Mobilizing a New Paradigm of Older Adults as a Core Social Resource, *Journal of Applied Gerontology*, 34(2), 1-25.
- Deci, E.L., Ryan, M. (2000). The “What” and “Why” of Goal Pursuits: Human Needs and the Self-Determination of Behavior. *Psychological Inquiry*, 11(4), 227-268.
- Deci, E. L., Koestner, R., Ryan, R. M. (1999). A meta-analytic review of experiments examining the effects of extrinsic rewards on intrinsic motivation. *Psychological Bulletin*, 125, 627-668.
- De Winter, M., Noom, M. (2003). Someone who treats you as an ordinary human being... Homeless youth examine the quality of professional care. *British Journal of Social Work*, 33, 325–338.
- Inglehart, R., Welzel, C. (2005). *Modernization, Cultural Change, and Democracy: The Human Development Sequence*, Cambridge University Press.
- Iwasaki, M., Otani, T., Sunaga, R., Miyazaki, H., Xiao, L., Wang, N., Sasazawa, Y., Suzuki, S. (2002). Social networks and mortality based on the Komo-Ise cohort study in Japan. *International Journal of Epidemiology*, 31, 1208-1218.
- Joseph E. Stiglitz, Amartya Sen, Jean-Paul Fitoussi ‘Mis-measuring Our Lives :Why GDP Doesn’t Add Up “The Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress, 2010 New York: The New Press, 福島清彦訳「暮らしの質を測る—経済成長率を超える幸福度指標の提案—」金融財政事情研究会, 2012.
- Li, Y., Suzuki, S., Wakimoto, Y., Hayashi, K., Koyama, H.(2019). Household Income and Mortality Risk Related to Different Sociodemographic Characteristics of Japanese Men from a Cohort Study. *Japanese Journal of Health and Human Ecology*, 85(3), 108-120.
- Lynn, M., Julie, D., Laura, C. (2007). Living on the Margins. *Journal of Gerontological Social Work*, 49(2), 19-46.
- Manon, K., Sandra, B., William, Veld., Wilma, V., Judith, W. (2017). Self-determination in relation to quality of life in homeless young adults: Direct and indirect effects through psychological distress and social support. *The Journal of Positive Psychology*, 12(2), 130-140.
- Ohio, T., Miki, K. (2011). Area-Level Income Inequality and Individual Happiness: Evidence from Japan. *J Happiness Stud*, 12, 633-649.

- Rossi, P.H., Wright, J.D., Fisher, G.A. (1987). The urban Homeless: Estimating Composition and Size. *Science*, 235, 1336-1341.
- Rutenfrans, M.S., Van, T.R., Schalk. (2019). How to Enhance Social Participation and Well-Being in (Formerly) Homeless Clients: A Structural Equation Modelling Approach. *Social Indicators Research*, 145, 329-348.
- Ryan, M., Patrick, H., Deci, E.L., Williams, G.C. (2008). Facilitating health behavior change and its maintenance: Interventions based on self-determination theory. *European Health Psychologist*, 10, 2-5.
- Ryan, M., Deci, E.L. (2000). Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Tatjana, M., Sara, Chaganti. (2015). Home for Now: A Mixed-Methods Evaluation of a Short-Term Housing Support Program for Homeless Families. *Evaluation and Program Planning*, 52, 85-95.
- Thompson, S. J., Pollio, D. E., Eyrych, K., Bradbury, E., North, C. S. (2004). Successfully exiting homelessness: Experiences of formerly homeless mentally ill individuals. *Evaluation and Program Planning*, 27, 423-431.
- Townsend, P. (1963). *The Family Life of People: An Inquiry in East London*, Pelican Book. (=タウンゼント, P. (1974) 山室周平監訳, 居宅老人の生活と親族網: 戦後東ロンドンにおける実証的研究, 河内出版.)
- Uchida, Y., Norasakkunkit, V., Kitayama, S. (2004). Cultural Constructions of Happiness: theory and empirical evidence. *Journal of Happiness Studies*, 5(3), 223-239.
- Winter, M., Noom, M. (2003). Someone who Treats you as an Ordinary Human Being... Homeless Youth Examine the Quality of Professional Care. *British Journal of Social Work*, 33, 325-337.

## 2. 日本語文献

- 生田武志 (2007). ルポ 最底辺-不安定就労と野宿. 精興社.
- エドワード・ファウラー, 川島めぐみ訳. 山谷ブルース. 新潮社.
- 原田謙 (2012). 社会階層パーソナル・ネットワーク, 医療と社会, 22 (1), 57-68.
- 風樹茂 (2013). 東京ドヤ街盛衰記 日本の象徴・山谷で生きる. 中公新書ラクレ.
- 本田徹 (2014). 人は必ず老いる. その時誰がケアするのか. 角川学芸出版.
- 角野善司 (1994). 人生に対する満足尺度 The Satisfaction with Life Scale [SWLS] 日本語版制作の試み. *日本心理学会第 58 回大会発表論文集*, 192.
- 河合克義 (2009). 大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立, 法律文化社.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2007). 日本の社会保障制度における社会的包摂 (ソーシャル・インクルージョン) 効果の研究報告書.

- 前田豊・仲修平・石田淳(2013). 地位比較対象の直接的測定を試み—準拠集団に関するインターネット調査結果の分析(1), *大阪経大論集*, 64(2), 161-183.
- 宮下忠子(1979). 山谷日記<ある医療相談員の記録>. 人間の科学社.
- 中村健吾(2007). 社会理論からみた「排除」—フランスにおける議論を中心に—, 福原宏幸編「社会的排除/包摂と社会政策」, 法律文化社, 40-73:51.
- 西田奈保子, 福田純, 村上薫(2011). 八王子市中高年世代アンケート調査からみた「より豊かな高齢社会」—生きがい・幸せ・地域とのつながりを中心に—, まちづくり研究はちおうじ, 第7号, 八王子市都市政策研究所.
- 西村貴直(2013). 貧困をどのように捉えるか—H. ガンズの貧困論—. 春風社.
- 大崎裕子(2017). ソーシャル・キャピタルは主観的ウェル・ビーイングにおける経済的豊かの限界を補完するか: 満足と信頼の分析. *理論と方法*, 32(1), 35-48.
- 大山史郎(2000). 山谷崖っぷち日記. TBS ブリタニカ.
- 斎藤民・近藤克則・村田千代栄(2015). 高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差: JAGES プロジェクトから. *日本公衆衛生雑誌*, 62(10), 596-608.
- ささしまサポートセンター(2016). News Letter. 第13号, 10-12.
- 鹿又伸夫(2014). 婚姻状況・家族形態と貧困リスク, *家族社会学研究*, 26(2), 89-101.
- 志賀信夫(2016). 貧困理論の再検討—相対的貧困から社会的排除へ—. 法律文化社.
- 白波瀬佐和子(2010). 生き方の不平等. 岩波新書.
- 関水徹平・藤原宏美(2013). 独身・無職者のリアル—果てしない孤独—, 扶桑社.
- 塚田努(2008). だから山谷はやめられねえ「僕」が日雇い労働者だった180日. 中央精版印刷株式会社.
- 戸田典樹(2016). 日韓比較研究からみる新たな中間的就労の可能性—「新しい生活支援体制」の検証から—, *社会政策学会誌「社会政策」*, 8(2), 135-147.
- 富樫ひとみ(2007). 高齢者の社会関係に関する文献的考察—社会関係の構造的性質の検討—. *立命館産業社会論集*, 42(4), 165-183.
- 内田由紀子・萩原裕二(2012). 文化的幸福観—文化心理学的知見と将来への展望—. *心理学評論*, 55(1), 26-42.
- 湯浅誠(2008). 反貧困—「すべり台社会」からの脱出. 岩波新書.
- 山崎喜比古・戸ヶ里泰典(2017). 健康生成力 SOC と人生・社会—全国代表サンプル調査と分析, 有信堂.

## 巻末資料

1. 質問紙調査票
2. 対象者へのインタビュー事例
3. 社会的つながり事業のスタッフからの語り

アンケートへの協力をお願い

つぎ しつもん あ ばんごう  
次の質問について、当てはまる番号に○をつけてください。  
( )内には具体的な内容をご記入ください。

げんざい ばしょ す  
設問1. 現在,あなたは、どのような場所に住んでいますか

1. 賃貸集合住宅(民間アパート)<sup>みんかん</sup>
2. 賃貸集合住宅(公的アパート)<sup>こうてき</sup>
3. 簡易宿泊所(ドヤ)<sup>かんいしゆくはくじょ</sup>
4. 一時保護施設(シェルター)<sup>いちじほ ごしせつ</sup>
5. カプセルホテル, サウナ
6. インターネットカフェ, 漫画喫茶<sup>まんがきっさ</sup>
7. 持ち家<sup>もちいえ</sup>
8. 友人・知人の家<sup>ゆうじん ちじん いえ</sup>
9. 社会福祉施設(無料低額施設, 自立支援施設)<sup>しゃかいふくししせつ むりょうていがくしせつ じりつしえんしせつ</sup>
10. その他 ( )<sup>た</sup>

げんざい しごと けいたい しごと  
設問2. 現在,あなたは、どのような仕事の形態で、仕事をしていますか

1. フルタイム雇用(正規)<sup>こよう せいき</sup>
2. フルタイム雇用(非正規)<sup>ひせいき</sup>
3. アルバイト・パート
4. 臨時雇用・短期雇用<sup>りんじこよう たんきこよう</sup>
5. 日雇い<sup>ひやと</sup>
6. 希望する仕事がなく, 仕事をしていない<sup>きぼう しごと</sup>
7. 希望しても仕事がない<sup>きぼう しごと</sup>
8. 病気や障害のため, 仕事ができない<sup>びょうき しょうがい しごと</sup>

設問3. 現在,あなたの収入は,どのような方法で得ていますか

1. 雇用の仕事による収入
2. 年金による収入
3. 親族による援助
4. 社会保障(生活保護)による援助
5. 自営・自由業による収入
6. 収入はない

設問4. 現在,あなたが参加している地域での活動について,最も当てはまるものを1つ選んでください

1.	地域のボランティア活動(掃除,見守り,炊き出しなど)	→ 設問. 5, 6 へ
2.	地域の娯楽施設でのレクリエーション活動 (囲碁,将棋,カラオケなど)	
3.	地域のデイケアやデイサービス活動	
4.	地域のイベント活動(お祭りなど)	
5.	活動に参加していない	→ 設問. 7 へ
6.	参加したくない	

設問5. 地域の活動に参加したきっかけについて,最も当てはまるものを1つ選んでください (設問4で 1, 2, 3, 4を選んだ方)

1. 知り合いや友人に勧められたから
2. 興味がある,面白そうだったから
3. 時間を持て余していたから
4. 団体のスタッフに紹介されたから
5. 特にない
6. その他( )

設問6. 地域の活動に参加している理由について、最も当てはまるものを1つ選んでください（設問4で 1, 2, 3, 4を選んだ方）

1. 知り合いや友人が参加しているから
2. 参加すると楽しいから
3. やりがいや、生きがいになるから
4. 自分の役割があるから
5. 自分が誰かの役に立つと思えるから
6. 周囲の人とのコミュニケーションがあるから
7. 孤独感を感じているから
8. 特にない
9. その他( )

設問7. あなたが地域の活動で参加していない・したくない理由について、最も当てはまるものを1つ選んでください

1. 場所が遠い、場所が不便である
2. 活動の場までの交通費など経済的負担が大きい
3. 健康の理由(病気をした、怪我をしたなど)
4. 知り合いや友人がいないから
5. 自分の役割がないから
6. 居心地が悪いから
7. 特にない
8. その他( )

設問8. あなたの生活上の現在の不安について、最も当てはまるものを1つ選んでください

1. 経済的なこと(収入をどう得るか、社会保障を受け続けられるか、金銭管理 など)
2. 住居のこと(今の住まいに居続けることができるのか、引越したい など)
3. 仕事のこと(希望する仕事が見つからない、転職をしたい など)
4. 近隣との関係
5. 健康のこと(治療を受ける場所がない、体調が悪い など)
6. 知り合い・知人との関係
7. 特にない

設問9. 不安な時に相談する人,あるいは組織を選んでください  
(いくつでも可)

1. 同居していない親族(親,兄弟,姉妹,叔父,叔母 など)
2. 近隣の友人
3. 遠くにいる友人
4. 近くにいる知り合い・知人
5. 遠くにいる知り合い・知人
6. 仕事の関係者(同僚,上司,社長 など)
7. NPO など支援団体(スタッフ,ボランティア など)
8. 行政(福祉事務所,高齢者担当者,ケースワーカー など)
9. 相談したい人や組織はない
10. その他 ( )

設問10. 日常生活について,将来の不安で,最も当てはまるものを1つ選んで  
ください

1. 経済的なこと(医療費,介護費などの社会保障を受け続けられるか,金銭管理 など)
2. 買い物のこと(日常的な買い物ができなくなりそう,近くに商店がない など)
3. 仕事のこと(高齢で働けなくなる,解雇される など)
4. 近隣との関係
5. 健康面や介護のこと
6. 相談先(困った時に相談する人がいない,頼れる人がいるかどうか など)
7. 住まい(今の住まいに住めるか,介護が必要になっても今のところで暮らせるか など)
8. 特にない
9. その他( )

設問11. 他者との交流する頻度について,各項目で当てはまる番号に○をつけてください

		毎日	週1回以上	月2回以上	月1回程度	3ヶ月に1回程度	半年に1回程度	全くない
1.	日常的に会話する人と接触する頻度							
2.	家族・親戚と接触する頻度							
3.	友人と接触する頻度							
4.	近所の人や地域の人と接触する頻度							
5.	交流の場へ参加する頻度							

設問12. 他者と交流する場について,各項目で当てはまる番号に○をつけてください

1.	自由に参加できる場はありますか	1. はい	2. いいえ
2.	特定の誰かと密な関係がありますか	1. はい	2. いいえ
3.	継続的にコミュニケーションをとる相手がありますか	1. はい	2. いいえ
4.	他者と交流を楽しめる活動の場はありますか	1. はい	2. いいえ
5.	自分の力を発揮する場はありますか	1. はい	2. いいえ

設問13. 各項目であなたのお感じになっていることについて近いものの番号に○をつけてください

		思 う	ま あ 思 う	あ ま り 思 わ な い	思 わ な い
1.	参加する場があると人間関係が広がると思う	1	2	3	4
2.	社会の中に自分の役割があると思う	1	2	3	4
3.	誰かと感情的に結びついていると思う	1	2	3	4
4.	お金以外に大切なものがあると思う	1	2	3	4
5.	他人から必要とされていると思う	1	2	3	4
6.	自分には心の拠り所やものがあると思う	1	2	3	4

最後にあなたのことについて、お聞きします

- ◆ あなたの性別は 1 男性 2 女性
- ◆ あなたの年齢は ( ) 歳
- ◆ あなたの婚姻状況 1 既婚 2 未婚 3 離別または死別
- ◆ 現在の住居にあなたが住んでいる期間 ( ) ヶ月 ( ) 年

ご協力を、ありがとうございました

## 巻末資料2 対象者へのインタビュー事例

事例1 (#1) 山谷地域 Nさん 60歳代 脱却してからの年数：約15年

### <生活歴とホームレス状態に至った経緯>

Nさんはホームレスになる直前は家電の量販店で正社員として働いていた。リストラに遭い、それまで住んでいた会社の寮を退出しなければならなく、最初はシティホテルを転々としながら就職活動をしたが、非正規社員の仕事が見つかっては日々の食事などを賄うだけで精一杯でアパートを借りる資金はなく、サウナやインターネットカフェで寝泊りし、仕事に行っていた。任期付雇用の仕事ばかりで、再就職が思うようにならず、所持金もなくなり路上で生活をするようになった。ホームレス生活をしながら日雇いの仕事をし、そのうちに仲間ができて、食べ物を分けてもらったり、朝市（山谷や釜ヶ崎ではドロボウ市と呼ばれているが、昔は日雇い労働者が仕事に使う道具を売り買いしたり、雑貨などを売るゴザが出ていて、早朝4頃に店を出し午前8時には店を撤去する）を手伝ったりして、食べることにはそれほど苦労はしなかったそうで、居心地は良かったという。

### <路上生活から脱するきっかけと活用した社会的ネットワーク>

Nさんが支援団体に来るきっかけは、ホームレス生活していた時に仲間がおいしいお茶が飲めるところがあると教えてくれたことで、なんとなく行ってみようというのである。その頃はときどき行って、お茶を飲んでお昼ご飯を食べるぐらいだった。身体の具合が調子良くない時は、労働福祉センターのクリニックで無料で診察を診てもらい薬をもらったりしていたが、腰が痛くなり、センターのクリニックの医師に大きな病院ですぐに診てもらうことを勧められ、病院を紹介してしてもらい通院した。腰が痛くて働きたくても働けなくなり、労働福祉センターのスタッフが福祉事務所に一緒に掛け合ってくれて生活保護が受けられるようになった。生活保護を受けることになり、簡易宿所での生活をするようになる。現在生活をしている簡易宿所は、2軒目であるが、今の簡易宿所には約11年ほど住んでいる。宿泊所にいる人の中でもNさんは結構長くいる方で、帳場さんが良く面倒を見てくれるためにNさんには居心地がいいという。

### <脱却後の生活における社会的ネットワーク>

現在の簡易宿所には大勢の人が宿泊しているが、同じように長くいる宿泊者とは廊下で会えば、あいさつぐらいは交わす程度である。隣の部屋にいる人とだけは、顔を合わせればよく話をするという。

Nさんは10年以上、山谷地域の公園前道路で開かれる朝市で店を出している。朝の4時半から7時ぐらいまで月曜日以外は毎日、土日もやっている。支援団体で知り合った気の合う人たちがよく店番を手伝ってくれている。中でも仲の良い人が3人ほどいて、そのうちの一人が自分の後ろ姿を見て「なんか今日は歩き方がおかしいよ」と、支援団体のスタッフに相談することを勧めてくれたお陰で、支援団体の医師がすぐに診察をしてくれ、病院へ救急車で運んでくれた。救急車には支援団体の看護師も同伴してくれ、すぐに入院をすることができた。脳の右側に小さな梗塞があるのが見つかり、すぐに病院で処置してもらえたお陰で後遺症もほとんどなくてすんだそうである。インタビューは、たまたまNさんが一時退院中で支援団体に顔を見せに来ていたところで話をしてくれた。明日は入院先に戻らなければならないが、入院先ではベッドに寝ているだけでやることないからつまらなくてしょうがないとこぼす。支援団体にいると、いろいろな人が声をかけてくれ、話してなくてもなんとなくみんなのいるところに座っているだけで、気持ちが落ち着くそうである。

支援団体のスタッフがいつも生活のことなどを気にかけてくれたり、親身になって身体のもも聞いてくれて、スタッフが診療所での診察やマッサージを受けることを勧めてくれるという。

Nさんがやっている朝市には場所を仕切っているヤクザさんがいるらしいが、そのヤクザさんは面倒見が良くて、Nさんを随分と可愛がってくれるという。1ヶ月に3000円の場所代が取られるが、タバコとか食事とかをもらったりすることもあるそうである。Nさんは朝市での売り上げはあまり気にしていないようで、儲けるために店をやっている訳ではないという。朝市の売り上げは、せいぜいタバコ代や食事代ぐらいのちょっとした小銭稼ぎ程度だけという。Nさんが朝市で店をやっている理由は、買いにきている人とのやりとりが楽しいから続けているという。Nさんは前に入院していたときに、店をたたんだらしいが、仕切り屋のヤクザさんをお願いをして店を再開させてもらっていた。朝市では新入りはなかなか店が出せないとのことである。仕切り屋のヤクザさんは、今回の脳梗塞で入院したことをほかにお店をやっている人から聞いたらしく、わざわざ見舞いにもきてくれたという。そのヤクザさんは、Nさんを一緒に酒飲み連れて行ってくれたり、ご馳走してくれるだけでなく、困ったときに何かと相談に乗ってくれる人であるという。Nさんは家族や親せきと縁が切れているため相談できる肉親もなく、困った時に相談できるのは支援団体のスタッフやヤクザさんだけだという。

Nさんは生活保護を受けるようになってからほとんど毎日、支援団体に来ているという。気にしているのはオープンな雰囲気であることで、Nさんにとって支援団体は憩いの場だという。支援団体以外でNさんが行くところは近くのスーパーと、すぐ近くの食料が売っている商店1軒、それ以外は100円ショップぐらいだという。支援団体から簡易宿所に戻った後や、支援団体がお休みの日は、朝市にいつている時間以外は、簡易宿所の部屋でテレビを見ているぐらいで一歩も外には出ないという。Nさんは人混みが苦手な人で、誰かと一緒に出かけるのも好

きではないという.そのため電車やバスなどの公共機関に乗るもことも苦手なため,病院へ通院する時はタクシーを使うそうである.お金はかかるがそのほうが気が楽という.

事例2 (#2) 釜ヶ崎地域 Yさん 60歳代 脱却してからの年数：約4ヶ月

<生活歴とホームレス状態に至った経緯>

釜ヶ崎はYさんが長年仕事をしながら暮らしてきたところであるという。ギャンブルには学生の時に麻雀にはまり、それから競輪、競馬、競艇と稼いだお金はギャンブルと酒に費やしていたそうである。酒で肝臓悪くしたことがきっかけで釜ヶ崎の労働福祉センターの診療所にかかり、そこで紹介状をもらい病院に入院したが、退院してから生活保護により施設保護をされた。しかしながら、その施設はYさんにとっては居心地が悪く、自主退所をして生活保護を切った生活をしてきた。しばらくは日雇いの仕事をして日払いの金がある時は簡易宿所に泊まり、仕事がない時は野宿生活をしてきた。年々、日雇いの仕事に就けないことが多くなり、路上生活をしていることが多くなったそうである。

<路上生活から脱するきっかけと活用した社会的ネットワーク>

Yさんは常時路上生活をしてきたのではないが、仕事のない時は路上で寝起きする日々を送っていた。体調を悪くし入院をきっかけに生活保護を受給し、施設入所をしたが自己退所をして再び日雇労働をしながら路上生活を送っていた。路上生活をしている時に知り合った支援団体のスタッフに歳のため仕事にありつけないことを相談したところ、その団体が間に入り生活保護を受けることを条件にアパートへ入所できることになった。釜ヶ崎では簡易宿所では生活保護適用がされないことを知っていたYさんは、手持ち金がない中で一般のアパートに住むことができない状況ではあったが、それまでの社会的関係を活用して、アパート生活で生活保護受給する生活を得たそうである。

しばらく生活保護を受けながらガードマンのアルバイトをしてアパート生活を維持していたが、再びギャンブルに手を出し、生活保護を切られて路上生活に戻ったそうである。路上生活をする中で再び体調を崩し労働福祉センターの紹介で入院。退院後は一時保護施設で2年間内職をして手持ち金を貯め、それを元手にアパートを借りて生活保護を再度受給できることとなった。今のアパートは、ガードマンのアルバイトをしていた時の仲間が紹介してくれた物件で、安心して住んでいるという。

<脱却後の生活における社会的ネットワーク>

今住んでいるアパートでは隣の部屋の人とは会えば挨拶するぐらいで他の人とは付き合いは一切ないという。Yさんは生活保護のケースワーカーから、釜ヶ崎の支援団体が運営している単身高齢生活保護受給者の社会的つながり事業を紹介されて参加するようになった。Yさんの日課は、午前には自分の興味があるワークショップだけに参加して後は来ている人たちと談話しながら過ごすという。午後は囲碁ができる高齢者地域センターで囲碁仲間と夕方

まである。その後は、行きつけの飲み屋（居酒屋）で常連客と飲んで過ごすそうである。Yさんはアルコール依存症も抱えており、飲まない時間を長くするためにも社会的つながり事業に毎日来ることと囲碁で時間を潰しているという。アルコールのことを考えなくてもすむような空間にいると夕方まで飲まないでいられるという。Yさんは社会的つながり事業に参加するようになり、それまで触れたことがなかった文化活動にも興味が広がったそうである。現在は劇団の一員で演劇の練習をしたり、俳句を詠んだりすることが好きで積極的に俳句プログラムに参加をしているそうである。Yさんは元々体を動かすのが好きなため、街の清掃作業や畑作業などにも参加をしているという。釜ヶ崎の児童支援団体の子供たちと夏祭りに参加するのが楽しみだという。

一方で、昔からの付き合いについては、今はギャンブルと酒で付き合い合っていた人たちなど誰とも繋がっていないという。その代わりに、社会的つながり事業に来ている人の中で2名ほど気が合う人がいるそうであり、Yさんが腰痛でしばらく社会的つながり事業に行かない時期があったが、心配してアパートまで仲間が様子を見にきてくれたのがすごく嬉しかったと語る。

親とも兄弟とも一切縁が切れて、頼りになるのは社会的つながり事業を運営するスタッフだとも語る。

行きつけの飲み屋は以前、よく行っていた居酒屋で従業員だった人が新しく始めた飲み屋で、毎日3時間ぐらい過ごすそうである。居心地の良さは、その居酒屋の店主が地域の子供たちに食事を食べに来ていいよと子ども食堂を開いており、子どもなら無料でご飯が食べられることに親密感を感じるそうである。行きつけの居酒屋は、料金がやすいことだけでなく、余計なことを言わないから気楽でいられるという。いつも常連ばかりがいる店で、ちょっと飲み癖の悪い人は店主が入るのを断るほどだという。店主は飲んだら暴れたりするお客がいると周りの常連客が困るのを知っているからと説明する。Yさんはただ無言で飲んでいてもいいところが気に入っており、居心地がいいと語る。その店はYさんが1日いかなかっただけで、店主や他の客が気にしてくれるそうであるが、Yさんはその場しのぎの付き合いと割り切っている。

事例3 (#3) 釜ヶ崎地域 Oさん 60歳代 脱却してからの年数：約4年

<生活歴とホームレス状態に至った経緯>

Oさんは（児童）施設で育った。Oさんのことを産んだ親のことは知らないという。（児童）施設の前に捨てられていたらしいそうである。Oさんは中学校を卒業するまでは施設にいたが、中学校を卒業して集団就職するために、施設の仲間と6名で大阪へ出てきた。6名はそれぞれ鉄工所や、町工場に就職した。Oさんは自転車も乗れなかったのに、自転車で物を運ばされる仕事をしていた。Oさんは自転車に乗るのが嫌いだったが、仕方なく6か月ほどそこで働いた。16歳の時に、一緒に出てきた施設の仲間が大阪の西成に行けば、現金で仕事ができるとOさんは聞き西成に来た。西成で紹介された仕事は、船からクレーンで降ろされたスクラップをトラックに積み込む仕事で、24時間働いては交代勤務する仕事をOさんは1年ぐらい続けた。その時に悪道、今でいう不良グループとOさんは知り合った。知り合った不良グループと一緒にOさんは恐喝、窃盗をやり、警察に逮捕されて3回鑑別所に入った。17歳の時にOさんは長野の少年鑑別所に1年2ヶ月いて、出所したのは18歳半ばだった。それから再び大阪の悪道のグループに入って、悪い事をし続けている時に暴力団山口組の組員と知り合った。山口組の組員と4人で飲みに行き飲み屋で喧嘩になった時に、相手を殴り殺して金を奪った。それでOさんは再び警察に逮捕されて、大阪の拘置所に入った。大阪の拘置所にいる時に20歳を迎え、未成年者ではなくなったため裁判を受け5年の刑が確定した。4年間、刑務所で真面目に刑期を務めた。刑期を務めている時に、鉄工工場で24時間無期懲役の人たちと一緒に働いた。刑務所で液せん工場やプレス工場での仕事を覚えて刑期を務め上げた。刑務所を出所後、Oさんは行く場所がなく、結局西成に戻ってきた。西成で先に無期懲役で出所した人と再会してOさんは仕事に誘われた。紹介された仕事は橋桁を作ることだった。Oさんは24歳か25歳だった。橋桁の会社の社長がOさんを可愛がってくれたこともあり、社長とは気が合い、橋桁を作る仕事を長い期間続けたそうである。社長が白手帳も作ってくれて、日雇いの仕事だったが1ヶ月仕事をしたら2-3日は休みという感じで、58歳ぐらいまで同じ会社にいた。Oさんは白手帳のおかげで300万円ぐらい貯まったという。しかし、時代とともに業者同士の談合ができなくなり、赤字ばかりの現場で、その会社が倒産したことで、下請けの会社も倒産した。下請けの会社には会社が倒産したことを黙っているようにとOさんは社長に言われて、300万円だけもらって夜逃げしたという。白手帳を持っていたから300万円ぐらいもらえたそうである。再び、Oさんは西成に戻って半年ぐらい、白手帳の金で暮らしていた。現金日払いの仕事を探しても60歳前だと使ってもらえなくて、西成区の特別清掃の仕事をしてきた。5日に1回、清掃の仕事が回ってくるが、その清掃の仕事だけでは暮らせないので、アルミ缶や鉄クズを拾って、野宿とシェルターで寝泊りしていた。

<路上生活から脱するきっかけと活用した社会的ネットワーク>

○さんは安い酒を飲んでいたせいと言っているが、肝臓を悪くして、西成区労働センターで薬をもらっていたけどセンターのクリニックから病院を紹介されて肝炎で半年ほど入院した。退院後も身体のアちこちが悪くなり、西成区の特別清掃の仕事やアルミ缶拾いをして暮らしていたが、体がきつくなり、○さんは特別清掃のスタッフに相談したところ、生活保護を受けられるよう福祉事務所に掛け合ってくれ、65歳の時に生活保護を受けられるようになった。○さんは生活保護受給をきっかけにアパートへ入り路上生活から脱することができた。

<脱却後の生活における社会的ネットワーク>

○さんが住んでいるアパートは共同トイレのため、トイレに行く際に廊下やトイレを掃除する人とは話をすることもあるが、住んでいる人とはほとんど会わず、話もしないとそうである。アパートにはシャワーがないため、コインランドリーがある近くのコインシャワーに3日に1回ほどシャワーを浴びに行くそうである。アパートの部屋にはクーラーもあり、4畳半と3畳の部屋で結構広く快適であるそうである。

アパート暮らしをすることになった時に○さんは、住み始めたアパートの裏に単身高齢生活保護受給者の社会的つながり事業の場所ができ、垂れ幕がかかっていたことからなんとなくかと思いを抱いていた。ちょうど福祉事務所のケースワーカーが単身高齢生活保護受給者の社会的つながり事業のことを紹介してくれ、社会的つながり事業に参加するようになった。○さんは社会的つながり事業には好きなプログラムだけ参加すればいいため、気に入ったプログラムのある日に来るだけであるが、通うようになってから4年目になるという。○さんが参加している日中のプログラムは、俳句と詩の会だそうである。

特に○さんが気に入っているプログラムは、公園の草刈りや畑で作業をすることだという。単身高齢生活保護受給者の社会的つながり事業以外に出入りしている場所は、西成区にある「ココルーム」という支援団体の場所だという。「ココルーム」で習字を教えている先生が、単身高齢生活保護受給者の社会的つながり事業にも来ており、○さんの話をよく聞いてくれるそうである。○さんは内弁慶で、自分から話をするのが苦手だったそうであるが、人に話を聞いてもらい、自分の話をするとうれしい気分になることから○さんも自分からよく話をするようになったという。

普段の○さんの生活は、やることがない時はアパートの部屋でテレビを見て過ごすこともあるが、囲碁が好きなため西成の老人クラブに行って昼から夕方5時までは囲碁をして過ごすそうである。老人クラブには20名ぐらいの囲碁常連が来ていることから、○さんと同じぐらいのレベルの人と対戦ができて楽しいという。○さんは健康のために毎日、1時間ぐらい歩くことを日課にしている。近くのショッピングモールに行き、ショッピングモールの中を歩いているそうである。半年に1回ぐらいの頻度で、生活保護担当のケースワーカーに会うという。

朝と夕方の2回だけ食事をするため、Oさんは近くのスーパーに買い物に自転車で行くという。

事例4 (#4) 釜ヶ崎地域 Tさん 70歳代 脱却してからの年数：約3年

<生活歴とホームレス状態に至った経緯>

Tさんは若い頃から神戸の川崎重工、三菱重工、日立造船のエンジンを設計するエンジニアとして働いてきた。詳細は話したくないとのことで、高齢になり仕事ができなくなり、釜ヶ崎に来たそうである。時々日雇の仕事をしたがシェルターや路上生活を送っていた。

<路上生活から脱するきっかけと活用した社会的ネットワーク>

シェルターや路上で寝泊りしていた時に、Tさんは出入りしていた支援団体のスタッフにボランティアをしないかと声を掛けられ、しばらく有償で食事の配膳ボランティアをした。5万円ほどお金が貯まったところで、権利書が不要の現在住んでいるアパートを支援団体のスタッフから紹介してもらった。その後に道路の端でタバコを吸っていた時にバイクにはねられる交通事故に逢う。交通事故が原因で右目の視力を失った。交通事故で病院に運ばれた際に生活保護の適用を受けることになった。

<脱却後の生活における社会的ネットワーク>

片目の視力を失い生活面で不自由さを有することになったTさんは、アパートの管理人から民生委員を紹介された。民生委員から介護を受けることを勧められ書類を西成区の福祉事務所へ持って行き、掃除や布団干しなどの支援を受けるために介護ヘルパーが週に1回ほど来ることになったそうである。

福祉事務所のケースワーカーが単身高齢生活保護受給者の社会的つながり事業のことを紹介してくれ、アパートから歩いて3分ほどの近いところであったため参加するようになった。社会的つながり事業のスタッフがよく面倒を見てくれ居心地が良かったという。

社会的つながり事業でTさんが気に入っているプログラムは、ひと花カフェという週に1回昼食を作って食べることだという。料理を作る日は200円かかるらしいが、みんなで食べたい献立を決めて作って食べることが気に入っている理由という。その他にはひと花笑劇団という活動にも参加している。ひと花笑劇団と紙芝居の団員をしているそうで、子供達や一般の人たちに見てもらうために練習を重ねているとのことである。これまでに芝居を見せに宮城県までメンバーと一緒に行って来たそうである。社会的つながり事業では特に親しくしている人はいないそうだが、適当に話す人はいるという。お互い顔は知っているが、名前は知らない人が多いという。Tさんは社会的つながり事業に来ても来なくてもいいから、来たい時に来るそうである。社会的つながり事業以外に出入りしている場所は、行きつけのカラオケ居酒屋という。カラオケ居酒屋で歌を歌うのが好きで、ビール1本で歌を歌えるのが気に入っているという。Tさんの日課は、歩くことだという。Tさんはじっとしているより動くことが好きなた

め、近くのショッピングモールは毎日散歩に行くそうで、時には緑の多い場所を3時間ぐらい歩くこともあるという。

釜ヶ崎に住んで7年ほど経つそうであるが、現在のアパートの住み心地はまあまあという。

住んでいる部屋には冷暖房があり、米は炊飯器で炊いて、おかずはキムチやカンズメの魚を食べているという。アパートには共同トイレと浴室があるが、たまに知っている人とすれ違えば挨拶ぐらいはする人がいるが、特別に親しい人はいないという。Tさんには姉がおり、3ヶ月に1回ほどの頻度で行き来がある。以前は姉がアパートまで頻繁に来てくれ、畳の入れ替えまでしてくれたが、お互い高齢になり、行き来が減っているという。

事例5 (#5) 釜ヶ崎地域 Sさん 80歳代 脱却してからの年数：約15年

<生活歴とホームレス状態に至った経緯>

Sさんの生まれは、大阪の阿倍野区という。生まれてすぐに、母親と兄妹が後夜祭に行く途中で全員電車の脱線事故で亡くなったそうである。Sさんはその時に腸チフスで入院していたため、命が助かったそうである。Sさんは幼くその記憶があまりないという。一番上の兄は戦争に行き、フィリピンで戦死したという。Sさんの父親は町工場を経営しており、工場を切り盛りしなければならず、Sさんの面倒は見れないため、愛媛の親父方の祖母に小学生になるまで育ててられたという。その時は戦争中で、大阪が危なくなっていたこともあり、愛媛に疎開させる為もあったそうである。小学1年生の時に、父親の元へ戻ったが、父親は再婚しており新しい継母と義理の妹がいたそうである。Sさんは今でいういじめを継母から受けていたため、とにかく実家の居心地が悪く、早く家を出たかったという。家の前に畑や田んぼがあり、畑仕事は全てSさんだけがしていたそうである。継母の連れ子は家のことは一切手伝えることはなかったが、Sさんは学校から帰ると家のことばかりさせられていたという。高校2年生の時に、家のことをやるのが嫌になり、継母からのいじめにも耐えられなくなり家出をした。家出をしたがすぐに警察に保護され、家に戻されたが、家に戻っても同じことの繰り返しだったそうである。その後も何度か家出をして、高校を卒業する時に実家から遠いところに行きたい一心で東京の段ボール会社に就職した。就職した先では長く続かず、いろいろなアルバイトの仕事を点々としていた。その後1年ぐらいで大阪の家呼び戻され、大阪では電気を梱包する段ボール印刷会社に就職。2年ぐらい勤めたが、継母と継子と喧嘩をして22歳の頃に再び家出をした。Sさんは、歌を歌うことが好きで歌謡学校に行くために東京へ上京した。歌謡学校でもいい目には合わなかったという。先生に使い走りさせられ、嫌になり歌謡学校には行かなくなった。仕事もなくブラブラしていた時に、亡くなった母親の従姉妹が東京にいたため、その従姉妹の家に居候をさせてもらいアルバイトをして生活をしていた。その従兄弟はとても良い方だったそうだが、亡くなったがために居る場所がなくなった。それから住む所がなく、途方に暮れていた時に自衛隊募集を知り、自衛隊へ入隊した。自衛隊は22歳から25歳までの3年間所属し、除隊後は会社の事務員など仕事を転々として東京で過ごした。42歳頃に若い女性と知り合い、結婚を許してもらうために大阪の実家へ戻ったが反対された。その若い女性を親御さんが探していると連絡を受け、東京へ一緒に戻ったところ、その女性の父親はヤクザで「誰の娘、嫁にするとほざいとるのか」と銃口を鼻に突きつけられて、死ぬ思いをしたという。逃げ出したが、すぐにヤクザに捕まり袋だたきにされたため、大阪へ逃げた。その若い女性とも別れ、再び東京へ上京し転々と仕事をして過ごした。知り合いから大阪なら仕事があると聞き、釜ヶ崎へ来た。釜ヶ崎でようやくそうしたらなんとその女の子もついて来たんだわ。その女の子と別れて、また東京に戻って点々としたわ。親戚もおらんかったし、大阪に行ったら仕事してあるって聞いて、西成に来てようやくSさんの気に入った仕事が見つかり、仕事らしい仕事ができたといい。Sさんは日雇で

土方や飯場で食事を調理する仕事をしたそうである。Sさんは料理をするのが好きだったため、炊事場の仕事は気に入っていたという。60歳ぐらいから年齢のために日雇の仕事などに就けなくなり、5年間ほど路上で生活をしていた。

#### <路上生活から脱するきっかけと活用した社会的ネットワーク>

炊き出しなどをとする支援団体の勧めでSさんは生活保護を受けることになり、65歳から生活保護を受けてアパートでの生活をしている。生活保護を受けることができても仕事がないのはどうしようもないと呟く。しかし生活保護を受けるようになり、ようやく落ち着いた感じで生活をしているという。

#### <脱却後の生活における社会的ネットワーク>

アパートにいてもやることがないことを福祉事務所のケースワーカーに言ったところ、単身高齢生活保護受給者の社会的つながり事業のことを紹介してくれSさんが面白いと思うプログラムがあることから参加するようになった。社会的つながり事業のSさんがお気に入りのプログラムは、皆の前で歌うレクリエーションや皆と歌うプログラムだという。社会的つながり事業に来たことをきっかけに、紙芝居の人形劇や他の支援団体「ココルーム」へも行くようになったという。社会的つながり事業に来ていたボランティアが良い人柄で、人形劇をやらないかと誘ってくれ、Sさんは紙芝居人形劇の団員にもなった。Sさんは東日本大震災後の子供や被災者を元気付けるための運動に参加し、宮城県まで他の団員と一緒に紙芝居をやりに行っているという。社会的つながり事業では習字や絵画もできることで、Sさんは色々勉強になるという。

Sさんは動くことが好きであるが、自転車にぶつかり膝を怪我してからは週に1回リハビリのためにデイサービスに通う。膝が悪くなったことで以前のように歩けなくなったことで、イライラすることもあるという。以前のようなSさんだったらイライラした時に破れかぶれになっていたというが、今は社会的つながり事業に来ればみんなで歌を歌ったり、催事をやったりして人との付き合いができるようになったという。いまは社会的つながり事業の場所に来れば、来ている人と一緒に作業をやって、人並みにひと付き合いができるようになったという。

紙芝居人形劇のマネージャーが、公演で四国に行ったときにわざわざ愛媛のSさんを育ててくれた祖母の土地まで車で行って来れ、わざわざ立ち寄って来れたことが嬉しかったという。紙芝居人形劇や、社会的つながり事業でいろいろな人と付き合えるようになって、Sさんは自分が人並みになったという。紙芝居人形劇を見せるために東日本大震災の被災者のところへ公演に行くと、誰かのために自分が何かをやれるというのが幸せだという。これまでSさんは生きるか死ぬかの生活するのがやっとこのことであつたことから、余計に他人から助けてもらえたことだけでなく、自分も誰かを助けることができると思えたという。

Sさんは40歳頃に今のような生活をしていれば、もっと違う人生があったかもしれないという。当時は稼いだ給料は酒とギャンブルとタバコで全て使い果たして、借金をするほどではない全部使い尽くしていた生活だったという。現在は酒もタバコもやめ、せいぜい喫茶店に行くぐらいという。毎朝3時には目が覚めて起き、朝4時ぐらいから1時間ぐらいアパートの周囲を散歩してから、毎日社会的つながり事業の場所か、紙芝居人形劇の事務所に来ているという。住んでいるアパートにいる人とは行き来はなく一切つきあいもないそうである。毎月の家賃を家主に渡すときに家主に会うぐらいでアパートでは誰とも会わないという。Sさんの日課は自分で自炊もしており、買い物をして料理をすることという。身の回りのことをしてもらえよう人はいないという。社会的つながり事業に来るときに話をする人たちとはその場だけの友達で、外に出てまで付き合う人はいないという。Sさんは必要がないため携帯電話も持っていないという。

事例 6(#6) 山谷地域 Bさん 60歳代 脱却してからの年数：約2年

<生活歴とホームレス状態に至った経緯>

Bさんは15年以上、ホームレス生活をしてきた。最初の頃は新宿の公園や、上野の公園にもいたそうである。しかし、上野にいた当時はホームレス狩りという若い子供達がホームレスを襲う事件が多く、近くにいたホームレスの人が子供達に襲われたため、Bさんは怖くなり隅田川の河川敷に移ったという。当時は河川敷にびっしりホームレスのテントが立っていたことからテントとテントの隙間にBさんはテントを立てて住み始めたという。Bさんは知り合いの親方が日雇の仕事を紹介してくれていたため、日々の生活費を稼ぐことには困らなかったという。しかし、アパートで暮らすほどのお金は貯まらず、日雇いの仕事をしながらテント生活を続けていた。日雇いの仕事をしていれば、食べることには困らなかったという。そのため、日雇いの仕事があるときは特に困ることはなかったが、Bさんにも次第に日雇いの仕事が減ってきた。周りのテント暮らしの人にも同じように仕事がなくなっていた。それでも、Bさんは長く世話をしてくれていた親方から結構仕事をもらえたため、テントから仕事に行っていた。

<路上生活から脱するきっかけと活用した社会的ネットワーク>

支援団体のことはテントの仲間に教えてもらったことがきっかけで、仕事がない日は支援団体に昼食を食べに来ていた。支援団体に来たばかりの頃は、昼食を食べるとすぐにテントへ帰っていた。周囲のテントの人たちに仕事なくなるにつれてBさんが仕事に行っている間に、テントに盗みに入られることが増えてきた。いくら鍵を掛けても勝手にテントの中へ盗みに入られて困っていた。Bさんがいない間に盗みに入られるため、誰が犯人かはなんとなくわかっていても、その場にはいないから捕まえられなかった。ある日、とうとう仕事先から借りていた携帯電話が盗まれた。その時にはどうしたらいいか途方に暮れてしまい、支援団体に相談に来た。以前から支援団体のスタッフから生活保護を受けてテント生活をやめるようにBさんは言われていたが、まだ自分でなんとかできると考えて生活保護を受けることを拒否していた。しかし携帯電話が盗まれた一件や、Bさんも歳をとり、テント生活は体が辛くなってきていたためそろそろテント生活は限界かと思っていた。支援団体のスタッフに生活保護を受けたいことを相談したところ、スタッフが福祉事務所に一緒に行ってくれ手続きをするのを手伝ってくれた。生活保護を受けることになり、簡易宿所で生活を始めることができた。簡易宿所で生活をするようになり、テントにいたときのように誰かに物を盗まれる心配もなくなり安心して暮らしているという。

### <脱却後の生活における社会的ネットワーク>

生活保護を受けるようになり、仕事もなく簡易宿所にいてもやることがないため、Bさんは毎日支援団体に来ている。Bさんは支援団体に通うようになったしばらくのうち、昼食を食べればすぐに簡易宿所へ帰っていたが、支援団体に集う他の人から掃除を手伝って欲しいと言われたのがきっかけで食事をする場所などの掃除を手伝うようになった。そのうちにBさんは生きがいつくりプロジェクトに参加しないかと掃除仲間に誘われたという。最初は気乗りをしなかったそうであるが、屋上で畑をやっていると聞き、Bさんは土いじりが好きだったことから参加をするようになった。Bさんはテントで暮らしているときも、テントの前にプランターに花やトマトを植え育てていたそうである。Bさんにとって植物は、ホッとするものだという。Bさんは岩手県出身で実家が農家だったことから、幼い頃から土いじりをしており土いじりが好きだという。支援団体の屋上で好きなように作物を育てることができるのがBさんは嬉しいという。Bさんは誰から何かしろと言われることもなく、自分が好きな植物を植えて収穫もできることが楽しいという。作物は失敗もあるが、収穫できると皆が食べてくれるから嬉しいという。支援団体にいるのは、何かやることがないといづらいという。Bさんは動くことが好きで、いつも動いていたため、急に何にもやることがなくなってから腰が痛くなったそうである。仕事をしていたときは重い物を担いでも腰痛などなかったが、今は何もしていないのに腰が痛いという。腰痛のためにBさんは病院へ通院している。Bさんは今も時々行きつけの居酒屋の手伝いが足りない時に洗い場の手伝いをしたりしている。Bさんは何かをやっている方が自分にはいいという。支援団体の畑の世話をしたり、集まる人のためにDVDを借りに行って映像を流したり、何でもいいから自分にもできることがあると、支援団体にいてもいいかと思えるという。支援団体に来る同じような境遇の人たちとは、Bさんから話しかけることは少ないそうであるが、冗談を言ったり、体のことを心配してもらったり、気にしてもらえぬ人が何人かいるそうである。簡易宿所には寝に帰るぐらいで、簡易宿所の部屋では何もやることがないと呟く。

事例 7(#7) 釜ヶ崎地域 K さん 70 歳代 脱却してからの年数：約 7 年

<生活歴とホームレス状態に至った経緯>

K さんは沖縄で出生。K さんは 18 歳で飲食店を開業し、随分と儲けたという。19 歳で自分の家を建てたそうである。当時、沖縄は US\$ ドルを使用していたが、21 歳の時、持ち金 4000 ドルを持参して大阪万博を見に来たことをきっかけに、5 年間ほど東京で働いたという。持参した 4000 ドルは遊びと酒飲み、賭博で全て使い切ったという。26 歳の時に沖縄へ戻り、ラーメン屋を開業し、結婚して 2 人の子供を授かった。34 歳の時に離婚して、横浜へ来てからは 60 歳まで横浜にいた。配管屋の会社で、職人として 60 歳まで働いていたが、不景気になり会社経営が悪くなり、給料の遅配が 2 年間続いた。そのため K さんは住んでいたアパートの家賃が支払えなくなり、1 年間分の家賃を滞納した。60 歳の時に夜逃げをし、カプセルホテルに泊まりながら新聞の求人広告で大阪の住み込みの仕事を見つけたため大阪の我孫子に来たという。その会社は派遣会社だったそうで、K さんは運転免許を有していたことから派遣労働者を派遣先まで送る仕事をしていた。その会社は、所有車が 70 台ぐらいある大きな会社で、K さんは 3 年ぐらいそこで働いた。住み込み寮がある会社のため、仕事をしている間は寮に住むことができた。派遣の仕事は名前や歳を偽っても働ける仕事ばかりだったため、人手が足りない時には K さんも穴掘りや土砂運びの日雇労働もしたという。その会社には 65 歳まで働けたが、年齢が高いことから解雇されたそうである。65 歳となっては他の仕事も見つからず、K さんは会社を辞めれば住むところもなくなるため、どうしたらいいか途方に暮れたそうである。

<路上生活から脱するきっかけと活用した社会的ネットワーク>

経験のある配管業の仕事も 60 歳以上になると雇ってくれる会社もないことから、解雇される際に会社の人へこれからどうしたらいいかを聞いたところ、釜ヶ崎へ行けばどうかしてもらえると、生活保護を受けられると言われ、西成区役所へ相談に行った。生活保護を受けるにあたり住民票を移動させる必要があり、住民票が横浜に置いたままだったため、住む所の住所が決まってから生活保護を受給できるようになった。住民票を釜ヶ崎へ移した途端に、横浜にいた時に借りていた借金 300 万円の取立てが、毎日来るようになった。住んでいるアパートの番頭さんが、毎日催促状来ていると全館アナウンスをすることがすごく恥ずしかったという。困った K さんは、西成区役所へ相談し弁護士を紹介してもらえ、破産宣告の手続きをして借金の解消ができた。結局一文なしになり、いくら稼いでも最後は同じだと思ったという。

<脱却後の生活における社会的ネットワーク>

アパートで一人暮らしをしている K さんの出かける場所として、生活保護の担当ケースワーカーが単身高齢生活保護受給者の社会的つながり事業のことを紹介された。K さんは、いろいろなプログラムあり面白そうだなと思い参加するようになったという。参加し始めの頃は、K さんは体操、パントマイム、畑作業、ヨガ、哲学、文学など様々なプログラムに参加しており、K さんは中学卒業で勉強ができなかったことから、いろいろなプログラムに参加すると自分が知らないことを知れて楽しかったという。

今は好きなプログラムがある日だけ、社会的つながり事業の場所に来ている。以前は、ひと花カフェという食事を皆で作って食べるプログラムに参加していたが、2 時間立ちっぱなしなことと、料理のボリュームが多すぎて今はやめたという。俳句や詩の時間もあり、自分一人だけではなく他の人と一緒に詩をつなぎ合わせて作るのが楽しいから参加しているという。美術の時間は、3 年ぐらい参加したが上達しないためやめたそうである。ひと花映画館という月に 1 回の字上映会の時は、宮本武蔵の上映があるときだけ見に来ているそうである。

毎週木曜日は紙芝居人形劇の事務所へ朝から午後 2 時ぐらいまで行っているという。これまでに東北から講演の依頼があり、仲間と 10 回ぐらい東北へ公演に行ったという。そのほかに、小学校や大学から依頼があれば公演に行くそうである。

紙芝居人形劇のメンバーは社会的つながり事業に来ているメンバーと同じなため、アットホームな感じでメンバーは気心の置ける人たちで、K さんは楽しんでいるという。紙芝居人形劇は紙芝居を自分たちで作るそうで、K さんはメンバーになって 5 年目という。メンバーで練習をし、紙芝居と朗読をメンバーの皆で考えて、プログラムを考える。それを他の人たちに見てもらえることがすごく楽しいという。65 歳になり仕事がなくなり、生活保護を受けるようになってからようやく人間らしい生活が送れるようになったという。K さんは自営業をしている時は、金儲けが一番でいつも競争している感じにかられ、毎日何かに追われていた気がするという。当時は気が短かったが、今は気が長くなったという。

K さんは体を動かすのも好きで、3 年ぐらい公園の草刈りボランティアをしていたそうである。しかし、昨年 50 肩と腰痛がひどくなり、痛いと気分も悪いため病院への通院とアパートにいたことが多かったそうである。

K さんは他人とあまり話をするのが好きではなかった方だという。しかし、「今日の出会いを体験する」というサークルに入り、色々な人の話を聞くうちに K さん自身の話もできるようになったそうである。以前の K さんは他人と全然喋らなかつたため、誰かとおしゃべりしたことはなかったという。しかし、サークルに参加するうちにいつの間にかおしゃべりになっていったという。何十年かぶりに沖縄にいる従兄や幼友達に会う機会があった時に、「お前よくしゃべるようになったね」と言われるぐらい変わったという。

Kさんは、以前は毎日外で酒を飲んでいましたが、酔って夜道を歩いているとどこかで倒れてしまうことが怖くなり、今は酒をやめたそうである。タバコも金がないことから9年前にやめたという。

Kさんには姉がおり、少3の時に両親が死亡しそれぞれ別々の家へ養子に行き、姉の養親さんは琴の師匠さんで、姉も琴の師匠になっているそうである。時々、姉からKさんへ電話がかかってきたりするそうである。Kさん貧しい養家に引き取られたが、姉の方は金持ちの家にもらわれたことから不自由のない生活ができているという。

Kさんは、別れた妻との間に生まれた子供2人とは音信不通であったが、従兄を通じてその子供から連絡が来て、孫ができたと言われ写真を添えて報告してくれた。それをきっかけに沖縄へ孫に会いに行った。2人の子供のうち、一人は死んでいたが、もう一人の子供は結婚して幸せに暮らしているのを知り嬉しかったという。

社会的つながり事業の場所に来ている人たちは、何かしら事情を抱えているため、お互いに話を聞いて、共にいる時間にみんなで楽しんでいるのを見ていることがKさんは楽しいという。

Kさんは少ないお金でも楽しく生きられることを身にしみてわかったという。以前は、お金だけあれば幸せと思っていたが、今はお金だけじゃないと思えるという。

Kさんは釜ヶ崎に来て生活保護を受けるようになり、病院へも行けるようになった。検査をしたところ肝臓が悪く、高血圧を指摘され、生活改善をするように医師から指導を受けた。Kさんは野菜中心の生活に変えて、タバコもアルコールもやめたところ、肝臓の検査値もよくなり、血圧も正常値に戻ったという。野菜中心の食事ダイエットをしたことで、75kgあった体重も今は60kgぐらいで健康になったという。

Kさんは社会的つながり事業の場所に来るようになってから、言葉づかいが変わったという。以前は、すぐ「アホ」とか「バカ」と他人へ言ってたが、周囲の人から「そんな言葉を使ったらダメじゃないか」と注意され、だんだんそういう言葉を使う事が止められたという。

社会的つながり事業の場所には話しやすい人や、バカな事を言い合う人はいるが、そこに集まる人と自然に会話ができるようになったという。Kさんはこれまでの生活では、「お金、お金儲け」ばかりで、その場しのぎの生活だけだったという。そのため、女性とも簡単に別れてしまって、なんか上手くいかないとすぐ女性から逃げていたという。しかし、今はいる場所からどこにも逃げないと思えるという。

# 紙芝居演劇とは？どんな団体か？

自分の話を紙芝居にする・紙芝居劇をやっている団体で、朗読劇をやっている。もともとはこのメンバーではなく、他の人たちが長年やってきた団体で、だんだんメンバーが高齢化してメンバーが抜けるようになった。マネージャーをはじめ団体のメンバーは有志でやっていた。昔はイギリスまで公演に行っていたらしい。社会的つながり事業の場に紙芝居演劇の人たちが来て紙芝居をやってくれて、それを見た人の中の一人が興味を持って紙芝居演劇の門を叩いた。そうしたら元々いた人たちはだんだんいなくなっていて、ちょうど新しい人を入れようとしていた時だったから、社会的つながり事業に来ているメンバーが行くうちにどんどんメンバーも連れて行くようになって、次第に紙芝居演劇のメンバーになっていった。紙芝居演劇も噂で人が繋がるぐらいで、メンバーになるルートがない。

# 社会的つながり事業（ひとはなプロジェクト）とは？

この事業は単年度事業だから、ここに来る人にとってここが唯一の居場所となると、この場がなくなった場合、行き場がなくなる。だからこの場以外の地域の資源につながるように、ここに来るプログラムの講師の人たちを介して、他の場所、例えば「見送りの会」とか「釜ヶ崎芸術大学」とか、ゆるいつながりを持ってもらえるようにしている。社会的つながり事業の参加メンバーには、バックに行政がいて、生保の担当ケースワーカーからの紹介があることがまずはつながりがあるわけですけど、少しずつですけど、この社会的つながり事業に参加するメンバーが「紙芝居演劇」、「見送りの会」「釜ヶ崎芸術大学」「いきいき100歳体操」「子供のプレーパーク事業」につながっていている。この場も入学したら卒業があるわけで、たとえこの場がなくなっても、どこか他の場につながっていることを目指している。いろいろなところにつながってもらいたい。地域に複数の居場所を持つことを目指している。

# 社会的つながり事業に来ている人たちの特徴は？

この場に来る人たちは背伸びをしたり、見えを張ったりしない。稼働人数は40-50名ですけど、登録人数は140名ほどいる。稼働しているのは、ほとんどが男性で、女性は1名だけである。日中作業も屋外の作業が好きな人は、その作業があるときにだけ参加をするし、屋内での作業が好きな人はそれだけに参加する。イベントを楽しみにしている人が多い。参加しているのが大半男性だから、女性がボランティアで来たりするといいカッコをしたがる。女性がいると見栄を張る場面なんかもありますね。

この事業が始まった頃の大阪府は、高齢者対策に予算が多くついていたから、この事業をモデルにしていく方向性があった。しかし大阪府の政策が、高齢者より子供対策に予算を逆転してから、子供事業の方が高齢者事業より多く予算がつくようになった。廃校は、子供を育てていく場所の活用として、プレーパーク事業が展開されている。プレーパーク事業へ、ここの社会的つながり事業のメンバーで参加している人もいる。

西成区は経済的に困窮している人も集まる場所だから、他府県から転入してくる人も多い。釜ヶ崎は、最後のセーフティーネットを受けられる場として日本の寄せ場機能のまち。他の自治体では現地生活保護が難しいから、とりあえず釜ヶ崎までの交通費とか渡されて釜ヶ崎へ行くよう言われてくる人が多い。西成区は生活保護を申請すれば、とりあえず受理してくれる。西成区の生活保護ケースワーカーは、とりあえず生保をかけてくれる。働けるのに受給をする人もいるから、生活保護を継続して受けるかどうかのチェック機能は大変厳しい。

普通の地域はアパートなどの賃貸不動産を借りる際には、敷金・礼金があるけど、釜ヶ崎は敷金・礼金の手続きがなく、賃貸不動産を借りられることも、そういう人が集まりやすい場所になっている。簡易宿所も経営が成り立たないから、訳ありに対応してくれる。特に簡易宿所にいる人たちは家族がないから、管理人がグレーの対応までしてくれる。ハード面は3畳一間とひどいけど、ソフト面で色々面倒をみて対応してくれる。生活保護で生きていくことは命の担保をしてもらえ、簡易宿所だと見守りもしてくれる、でもやることはないから、一日中テレビ見ている生活の人が多い。

#### #釜ヶ崎の男性の社会性は？

デイサービスは介護予防や介護が必要な人が通える場としてたくさんできているけど、体は元気でもやることがない、行くところがない人たちの行き場がない。老人の憩いの家は、元々長年西成に住み続けている人たちが集う場になっているから、他所から移ってきてここに住むようになった元気な人たちが集う場がない。

ここの場に来る人のほとんどが、自分がやったことがすぐ目に見えるとわかれば、集まってくる。行くところがあって、やることがあるために、メンバーの一員であると思えるらしい。だからゴミ拾いや、掃除のイベントには一番人が集まる。

来ている人はお互い話しをすることは少ないけど、今日もいてくれたんかって気持ちをお互い持っている様子がある。

女性は一生できることを見つけやすい。例えば、細々とした家の雑用のことをする技術を知らず知らずのうちに身につけているから、一生それをやっても困らないし、定年があるわけでもない。女性は本当に一瞬で何かをやっている。しかし、男性は仕事をやっている時間がほとんど毎日占めているから、仕事で時間を取られていたのに、急に仕事がなくなるとやる

ことがなくなる。趣味を見つけましようと言われてもどうしていいかわからなくなる。男性は、過去に仕事をやって来た自信はあるけど、特に日雇いをして来た人たちは仕事をするのがコミュニケーションをとる手段だった。ここの場に来る人の中にも仕事やれると思って来たのにやることがないって、来なくなる人がいる。仕事を通じて生きて来た人は、仕事がない中でどう人と付き合いがいいのかがわからない。

だからお金には困らなくなったとしても、莫大な時間を過ごすことが大変。男性は仕事を切り上げたら、何も残るものがない。

女性に比べて男性は柔軟性に欠けるから、仕事の・作業的なことは好んでやる。かつての自分がやって来たことと作業が重なってれば、喜んでやっている。その人の生活史に合致していれば、やる気が出る。過去を捨てられない人が多いのが男性。

何に人生、時間を費やしているか、今の自分で居られるためには過去に縛られるのが男性。女性は、子育て、育児に時間を割いてきて生きているから、自分の時間ができると俄然元気になっちゃう。

これからは終就、雇用の時代から健康に働く時代になるのかもしれない。ここ、釜ヶ崎の人は本当に元気で、好き嫌いなく食べるものはなんでも食べる。それだけ生きる力は強い。

女性はデイサービスや憩いの場とか、公の場所に行くけど、男性は目に見える場所でなくても行き場を持っている人もいる。例えば、自販機の前とか、パチンコ屋の中とか、飲み屋や公園とか。個人的な場所で縛られない関係を好む。

男性は公園など、隠れた場所で全く一人でなく2-3人で個人的に集うことや、家に引きこもっている。集団やグループは苦手な人が多い。だからこそ、自分が必要と思える場を作って行くことが大切であり、役割があつたら、お金ではなく、やったことを認めてもらえることを求めている。作業をする時は、周りから意識されて、目に見えない繋がりができている。作業をやっていることで、やることがない時間をなくすことができる。やることがない時の時間の使い方が課題。今ここの場にくる人たち、釜ヶ崎に集まる人たちは昭和的な価値観を持っている。男らしさに縛られている人が多い。